

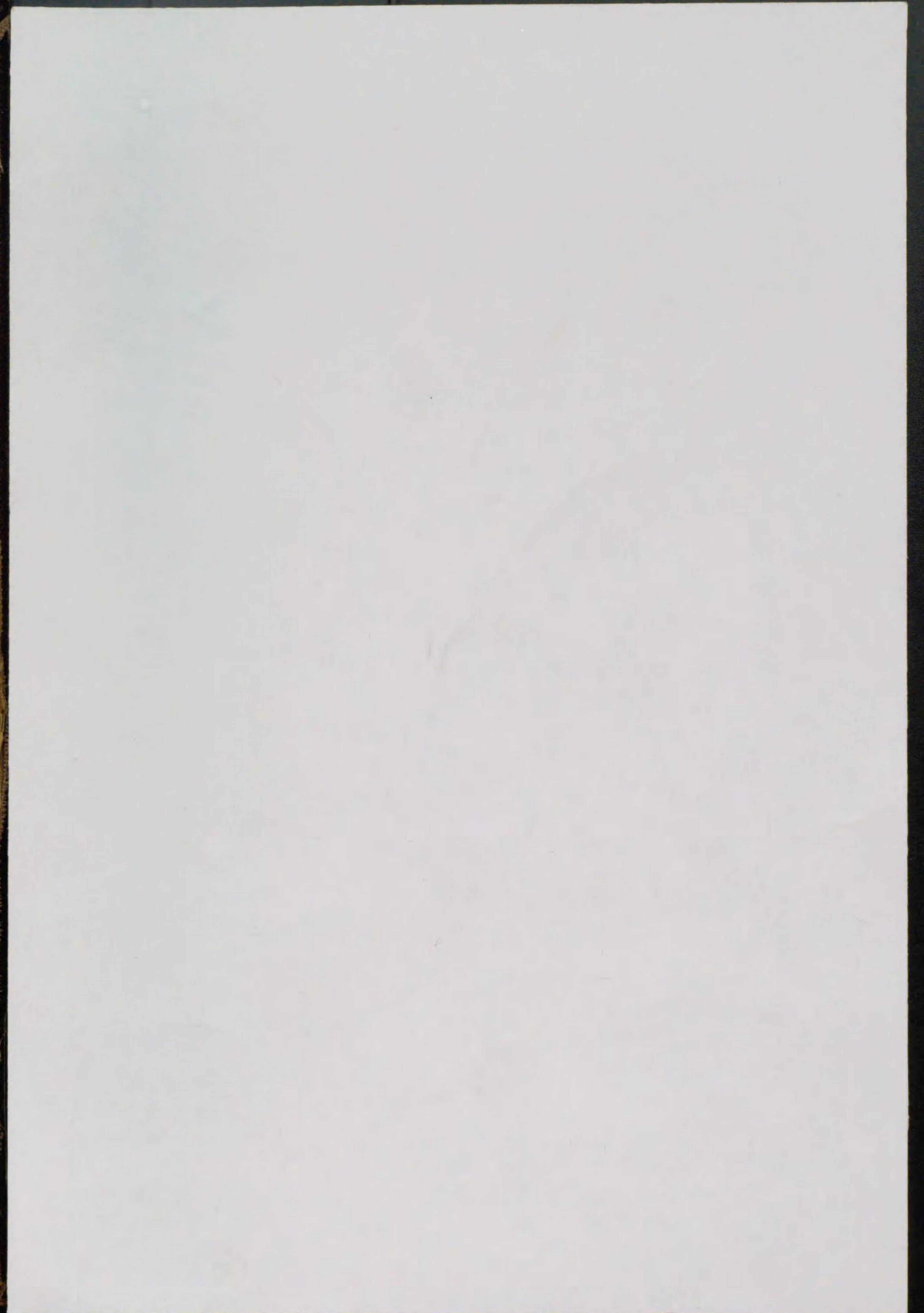
603-187



1200501531010

603

187





5.7.20



新選

佐藤春夫集





佐藤春夫集

5 460







新選

佐藤春夫集









603-187

漳州	二四七頁
F・O・U (一名「俺もさう思ふ」)	二六七頁
瀬沼氏の山羊	二九二頁
李鴻章	三一九頁
人間事	三二七頁
上々吉	三六九頁
百花村物語	四二〇頁
揚州十日記	四四二頁
老青年	四五九頁
「風流」論	四六七頁

佗しすぎる	一頁
厭世家の誕生日	三五頁
春の夜	四六頁
窓展く	六三頁
時計のいたづら	七一頁
指紋	八四頁
賣笑婦マリ	一二六頁
砧	一六二頁
秋立つ	一七三頁
旅びこ	一七八頁
霧社	二〇〇頁
厦門の印象	二二三頁
鷺江の月明	二三六頁



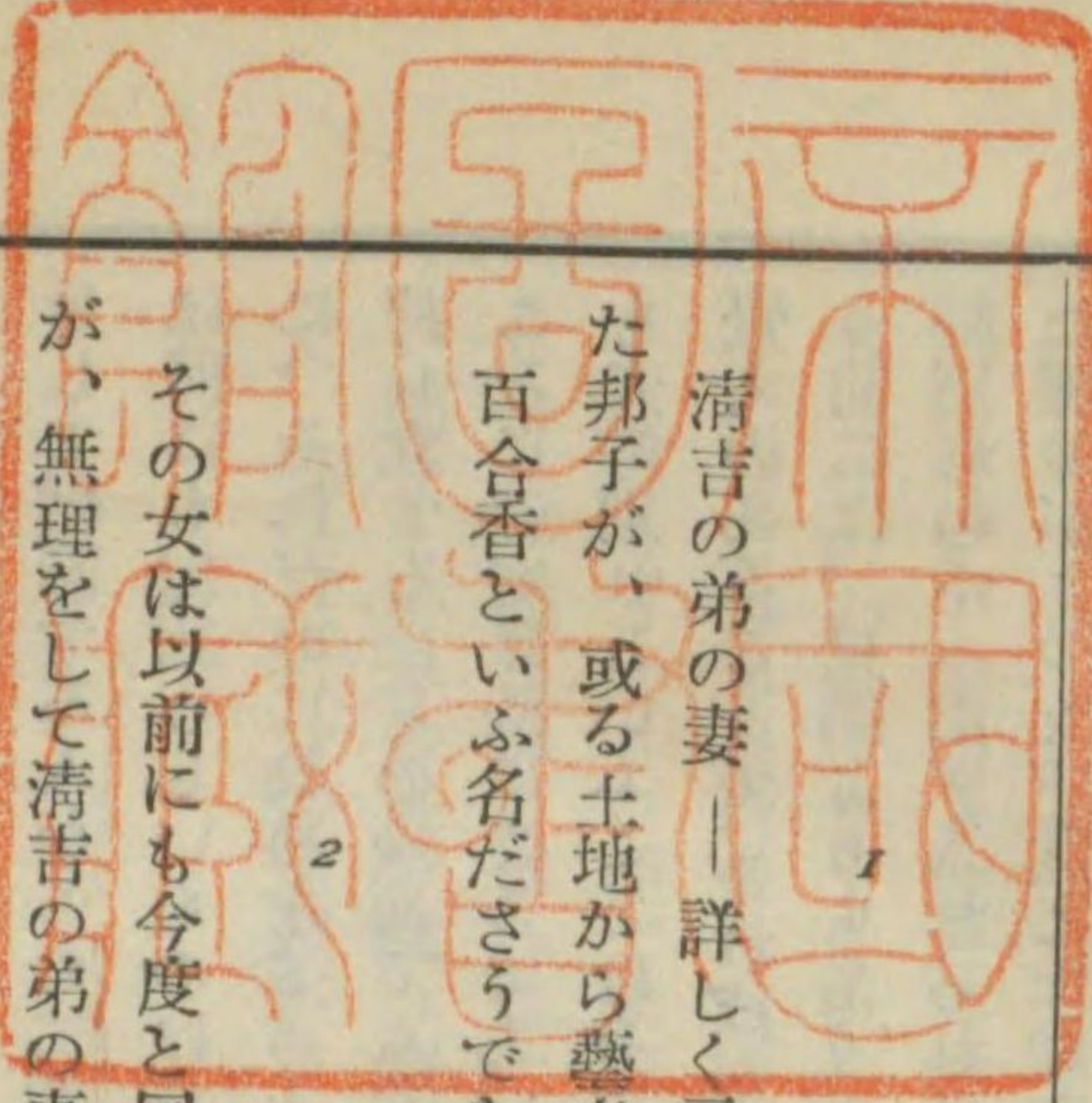
佗しすぎる

清吉の弟の妻——詳しく言へばついこの間までさうであつた邦子が、或る土地から藝者になつて出てゐる。百合香といふ名ださうである。

その女は以前にも今度と同じその土地で藝者であつたのだが、無理をして清吉の弟の妻になつた。たしか、その時はまだ十八ぐらゐであつたらう。それを五年程経つた今日、清吉の弟は見捨てた——と、どうもさう言はなければなるまい。相談づくで別れたのではあつたが、その場合に清吉の弟は別れようとする者にすつかりを打ち明けたのではなかつたらしい。そのやうにして妻と別れるとすぐ、外の女をつれて朝鮮へ渡つてしまつた。がらに無い仕事を思ひついたやうなことを言ひ出して、朝鮮へ行つたのもみんな今度の女の爲めであつたかも知れない。——さう邦子が澄江に言つたさうであ

る。清吉は澄江からさう聞いたが、女同士はいづれ手紙でもやりとりしたのであらう。

芳藏に女があつた？ さう聞いて見れば思ひ當る事も無くはない。けれども自分の弟に女があつてそのために女房を離縁したとは、清吉も知らずにゐた。——たとひ知つてゐたにしても、清吉も知らずにはしなかつたが、といふのは、彼等が夫婦別れをする時に、清吉は當時、一つ家に一緒に住んでゐながらも彼等のどちらからも相談をうけはしなかつた。いや然ういふより、相談されることを清吉の方で避けてゐたから彼等が相談をけなかつたのかも知れない。現に、邦子の方の人たちが芳藏に向つて「兄さんもそばにゐらつしやることだから一とほりは相談をして見なすつたら……」と言つたのに答へて芳藏は言つたさうだ「さうですね。だが兄貴の言ひ草はきまつてゐるのです。自分のことは自分だけで考へて自分の一等尤もと思ふことをするのだ。それより仕方がないぢやないか——と、さう口ぐせに言つてゐる人だから、今度だつて同じことを聞かされるだけで、てんで相手にはしませ



A large empty rectangular frame with vertical lines, possibly a placeholder for a table or a decorative element.



んよ」今になつて考へると芳藏は兄に相談しにいく事がある  
 のでそんなことを言つたのかも知れないが、それにしても芳  
 藏が清吉のことをさう言つたのは必ずしも嘘ではなかつた。  
 彼等には兄でありながら清吉は、目の前に出来てゐる事に就  
 て彼等のために何も言はなかつた。言へなかつた。さういふ  
 清吉になつてしまつてゐた。一たい物事に就て他人に述べる  
 やうな意見を持つてゐるためには自分自身しつかりした理想  
 を抱懐してゐる人か、でなければごく浅薄なものの見方で満  
 足して結論する人かこの二通りだけであるが、清吉はもう今  
 は何にも理想らしいものは持てなくなつてしまつてゐるくせ  
 に、それだのに物事をさう上面うへだけ見てはつきりした意見を  
 押し立てるほどの浅薄でもなかつた——少くとも男女關係の  
 ことに就ては殊にさうであつた。といふわけは、清吉自身で  
 も夫婦別れといふことは身に覚えのある、それも二度までも  
 覚えのあることで、そればかりではない、ついその一年半ばか  
 り前には、兄弟よりももう一層仲よくしてゐた或る友達ともの夫  
 婦別れの中へ引き入れられて行つて、そこでひどい目にあつ  
 た経験があつた。煮えた鉛を嘔まされるといふ言葉を、清吉  
 はこの事件の追想と同時によく思ひ出す。その結果は仲間か  
 ら物笑ひにはなるし、尾鱈をつけて傳へられるし、その友人  
 とはどつしてももう二度とはつき合へない氣持になるし、そ  
 れでゐてその細君の方の心持は忘れ難いし、全く何やかやと

ないといふ事は意見が心の中にわだかまつてゐないといふ事  
 とは少し違ふ。清吉は事もなげに別れようとしてゐる彼等弟  
 夫婦を見ながら、當人たちよりも自分の方が辛い思ひをして  
 ゐるのぢやないかとさへ思へた。清吉は根がそのやうな感傷  
 的な男であつた。さうして自分の感傷的なことに氣がつけば  
 つくほど、例の「他人の事は他人の事」といふ假面をしつか  
 り自分の心から外すまいと用心した。それにつけても自分自  
 身に覚えのある別離の心持、別れてしまつて久しい後の心持  
 といふやうなものが、弟達のこの事件によつて事新らしくひ  
 しひしと憶ひおこされた。さうして今の芳藏夫婦を見ての辛  
 い思ひといふのもやはり彼等のために催されるのではなく  
 て、唯ただ自分の追憶がさう感ずるのだからかと考へもし  
 た。

それにまた、清吉としては邦子をやはり自分の弟の妻にし  
 て置きたい氣持がどつさりあつた。邦子は清吉が別れたふた  
 りの妻をふたりともよく知つてゐたし、またついこの間の清  
 吉とその友人の細君との妙な行きがかり、一そう切なくなり  
 増さつて行つた戀の出来事をも目のあたりに知つてもゐた  
 し、それに妻を無くして芳藏の家へ住むやうになつてから、  
 邦子は、氣まぐれな清吉の癖の多い生活ぶりをももうおほよ  
 そ呑込んで來てゐたし、それだから邦子は實に込入つた清吉  
 のどんな話題にでも立入つた調子で對話出来るやうになつて

清吉はこの出来事に立ち入つたためにその二年ほどの間に、  
 作り事のやうなことに鏡で自分を見ると小びんには白髪が  
 出るし、口髭にさへそれが十二本も數へられた。——鏡にう  
 つした自分ばかりではない。心のなかをふり返つて見て、一  
 時はもうめちやくちやであつた心がやつと少しばかりは整頓  
 したらうと突きつめてゆくと、なるほど靜かにはなつたやう  
 である。しかしそれがいつのまにかそれこそごく消極的な、  
 獨善的な、個人主義的な、それも煮え切らないものになつて  
 ゐた。さうして彼の思想だけでは、しかし、他人の生活とい  
 ふものと自分の生活とを、忘れても混合させまいと努めるや  
 うになつてゐた。自分の心持でさへ考へつめれば解らなくな  
 るのにどうして他人の心持まで解るものか。そのためになら  
 ば命を捨ててもいいとまで思込みもしないで、うっかりした  
 ことを言へるものぢやない。ところで自分のためにも捨てら  
 れない命が、どうして他人のために捨てられるものか。最初  
 から最大の犠牲を覺悟しないで他人に同情を示すなどといふ  
 ことは間違ひのもとだ。犠牲などは眞平なことにしよう。だ  
 からたとひ目の前で他人——自分以外の人間が死なうが生き  
 ようがただ凝つと見てゐてやらう。とこんなふうな清吉は多  
 少意固な氣持で決心をした折からであつた。さういふ清吉  
 だつたから、弟の夫婦別れにも、早くからその空氣を感じて  
 ゐながらも一言も意見を言はなかつた。けれども意見を言は

ゐた。——すべての親愛といふものもつまりは永い話題をし  
 つくりと持合してゐる間柄といふことではないだらうか——  
 「あの時」「あの人」と手短かな一ことで、互に同じ幻影を  
 目の前に立たせることが出来る。更にはただ睫を動かしただ  
 けで複雑な氣持を知り合ふ。それが人間の親密である。：で  
 清吉には今になつて見ると親密な人といふものは殆ど無くな  
 つてゐた。もともと感傷的なくせに強がりでも、だものだから  
 他人に自分を明しにくい性質で、いつも唯ひとりかふたりか  
 の人に向つてより外には常に自分を匿してゐるさびしい清吉  
 であつた。それがこの七年の間にそれぞれの状態で妻を二人  
 までつぎつぎに、それにつづいては、毎日のやうに往き來し  
 てゐた唯一の親友とその親友の細君——これが清吉の戀人に  
 なつて來てゐたのであつたがそれだから、今度は親友と戀人  
 とふたり一度に失はなければならぬは、めになつた清吉にと  
 つて、もう、互に古い話題を持つてゐるといふ人は殆どな  
 くなつてしまつてゐた。さうして二十三四から三十までのこ  
 の六七年の月日が、清吉にとつてわけでも波瀾の多かつた時  
 であつて見れば、事毎に思ひ出はあつたし、また自分を匿す  
 清吉のまはりにはさまざまに人人からの誤解が絶えないにつ  
 けても、さまざまに折にふれて彼自身の生涯に就ての過ぎ去  
 つた話題の爲めにだつても、清吉は邦子を失ひたくはなかつ  
 た。さまざまに状態にあつた清吉を見て來ただけに、わり合



ひによく清吉を知つてゐる邦子であつた。親身の妹のやうになつてゐる邦子であつた。事實、清吉のところへ出入する人たちで、それほど個人的でない人のうちには邦子のことを清吉の本當の妹だと思込んでゐる人さへあつた。彼等の感情がそれほど圓滑で自然であつたからではなからうか。さうして邦子の方でも言つたことがある――

「わたしにはもう兄さんといふ人は、このごろはつきり呑み込めて来たわ。はじめのうちは氣むづかしやの冷淡な人だとばかりしか解らなかつたのに――。兄さんも損なたちね。」

「このごろはちつとも腹を立てないわね、兄さん。苦勞をしたので氣が鍊れたのか知ら。――だとすると、腹を立てないのは可哀想なわけよ。」

「何を！ 生意氣を言ふない。」

そんな對話をする彼等であつた。それを、弟がこの女を離別してしまへば、清吉は邦子を廣い浮世の人ごみのなかに見失つてしまはなければならぬのである。清吉が以前に親愛し合つた人たちが彼の以前の生活を半分わけにして、何處か彼には何の關係もないところへ運び去つたと同じやうに、邦子もやつぱり清吉の生活の或る部分を持つたまま清吉の眼界から遠く没し去らうとしてゐる。この氣持は人と別れたことのない人間には何とも説明のしようもないちよつとし

たしかし身に沁みる心持だ――今に芳藏にも邦子にもわかつて来るだらう。

清吉が、しかし、何と考へたところで邦子は清吉の妻ではない。そればかりか、清吉がそんな氣持、邦子に對するそんな好意をなまなかに抱いてゐるだけに、芳藏にむかつて意見を述べることは反つてやめたいやうな氣がする。――さういふ清吉でもあつた。清吉は翻つて芳藏の腹になつて見ることもした。すると芳藏の邦子を疎んずる心持も或る點ではわかからないでもなかつた。これとても肝腎な、芳藏には外に女があつたことを知らないでは何にもならなかつたが。ともかくも邦子にもよくないところはあつた。といふのはこの女はどるもひどく家事の下手な、下手なばかりではない投げやりなふしだらなので、そのために臺所などはまるで男世帯よりもつと荒涼としてゐた。邦子は不運な家に生れて、十三の時から兄のために藝者屋町へ賣られてそこで育つたのださうで、きちんとした家庭の生活といふものはどんなものだか見覺えたこともなかつたに違ひない。それだからそんな點で邦子をあまり責めても可哀さうではあるが、ともかくもその程度がだんだんと嵩じてくるので、清吉も黙つてそれを見てゐながらもむかし自分の最初の妻が、外に仕事を持つてゐたとは言ひ條、そんな風に流し元などがふしだらになつて来てそれから追々と夫婦仲が荒んで来たことなどを思ひ出しては絶

えずうすら寒い氣がすることがあつた程であつた。一たいにそんな事などはどうでもいい清吉でさへさう感ずる程なのだから、ごく世俗的できちんとした性格の芳藏になつて見ればそんな些細なことが相當に家のなかをいやにしてゐたかも知れない。事實、よく芳藏は日曜日で會社の休みの時など、舌打をしながら、そこらの小汚いものをつまみ上げたりして整理してゐるやうなことも度々あつた。それを見兼ねて清吉は邦子にも少しどうか家のなかをきれいにするやうに勧めたこともあつた。そんな機會の或る場合に邦子は言つた――

「でもあの人が（と芳藏のことを指して）どんな氣持だかわかりもしないのに、家のなかなどきちんとしたりしても張合ひも何もあつたものぢやないわ。わたしも、つまらないからもう投つ散らかしてあるんです」

そこで清吉が「なるほど、それも尤もさ。だが兩方でそんな工合じゃ一層いけなからう。それにあれだぜ、――家のなかをきちんとするとかしないとかいふのはそんな理窟より人のくせだよ」さう言つてから、彼は意味あり氣な笑ひ顔をして常談らしくつけ加へた「俺は、ひとりこんな女を見たことがあるがね、それや夫婦別れの話が持ち上ると、急に箆笥や行李を引き出して、別れようといふ亭主の着物やら襦袢やらほどき初めたのさ。さうして言ふにはね、きれいに置いて置いて上げなげや、いづれはほんの當座のうちだらうが不自由を

するだらうし、またあとの人に私がだらしない人間だつたと思はれてもいやですからね――つて、さう泣きながらほどきものをしてゐるのさ」

「もう解つてよ、兄さん。お京さんの話なんかもう澤山。いづれわたしたんかお京さんのやうなしをらしい眞似は出来さうもありませんよ。――馬鹿にしてゐるわ、兄さん。おのろけなんかおよしなさい……」

「何がおのろけだ。よその女房の話をさ」

「だからおよしなさいのさ。自分の女房でもありもしないくせに……」

「……………」

お京といふのは、清吉のついでこの間までの親友の細君で清吉には戀人である（といふべきか？あつたと言はなければならぬか）その女のことである。

清吉はいつものやうに見かけだけ元氣よく歩いてゐた。彼の頭のなかをいつものやうな追想やら感懷やらがごちやごちやと往來した。それらの或るものは額のなかをちらと閃き去つただけだつたが、或る者は彼の思案の表面へ忌々しく出沒



した。無論、考へなければならぬ題目は澤山あつたが考へて面白いやうな題目は一つもなかつた。さつき買った手袋はどれも最初から少し小さすぎたのを、店の奴が大丈夫ちやうどいいと言つて賣りつけたのだが、それがたえず氣になつてならない。どんよりとした十一月末の空は味氣なく寒かつたし、まだ早い夕闇のなかを列をなした街燈がそれぞれ一つづつ黄色い光のかたまりになつて中程にぼやけてゐた。で、それがどうといふわけも格別ないけれども何かにつけて全くさくさくする氣の滅入つて仕方のない日であつた。往還の人といふ人は歩いてゐる者も乗りものにある者も誰も彼も家庭の方へ急いでゐる——と少くも清吉にはさう見えた。

さうして清吉には急がうにも急ぐべき家路はない。

一たい清吉は、弟の家庭が解散してしまつてから後、或る知り合ひの家の二階へほんの當座のつもりで世話になつてゐたけれども、その知り合ひの家にあることは清吉には好ましくない豫覺は以前からあつた。けれども先方が勧めてくれる好意に對してちよつと辭り切れなかつたのである。といふのは清吉はこの知り合ひの家に對して今までに時折、五十とか百とかぐらゐの金を泣きつかれて貸したことが三四度あつた。それがどうも拂へるといふ見込みもないから、住むところが無いなら當分來てはどうか——二階が明いてゐるからといふ先方からの話であつた。清吉はもとより貸した金は拂つ

て貰へるものとは思つてゐなかつたが、先方が拂ひたい意志を持つてゐてそれが出来ないのを苦しく思つた上で、その心持の負擔を軽くするために宿なしになつてゐる清吉を世話しようといふ申入れに對してこれはどうも一時でも受けて置いた方がいいと思つた。また事實、清吉はそれほど住む場所に就て急に困つてゐたのもあつた。しかしその家へ來て見て清吉は、以前から腑に落ちない事に思つてゐたこの家の人たちが一層氣に入らない氣持がだんだんと増して來た。その二階へ住むやうになつてからも清吉は金のある時を見込まれると時をり彼等から金を借りられた。返す見込みとてもちよつと無さうに思へるのに、ちよつと一週間とか一ヶ月とか言つて金を借りられるのも、清吉にはもとより愉快ではなかつたが、それほどの困窮のなかへ他人を置いてくれようといふ親切が清吉には氣に入らなかつた。彼等がたとひ清吉に借金を申し込まないと假定したところが、氣持の上だけでも清吉にその困窮の空氣を感じさせるのだが、事實上でも清吉は金を借りられる事によつて自身も貧乏をした。三ヶ月に足らぬ間に、めて二百圓となにがしほども借りられたのでは遊んで食つてゐない清吉にとつては痛事であつた。清吉は無學論、その月々になにがしかの金は支拂ふつもりではあつた。しかし好意的に置いてゐることにしてかうして時々金を借りられるのはただ金の問題でなく不愉快であつた。清吉が自分を落し

て考へてもいいなら、この人たちは最初から時々清吉に金を借りるために清吉をここへ置いたのだといふかも知れない。けれどもその人たちと決してそんな腹の人ではなかつた。ただその日その日が苦しかつたのである。さうして親切なことも親切ではあつた。けれどもその人たちには清吉の氣こころは全くわからなかつたと見える。といふのは清吉は、寧ろ人からなまなかな親切をされるよりはそつとして置いてもらひたい性質であつた。ところが運の悪いことに清吉は、その家へ來ると殆んど直ぐその日からえたいの知れない皮膚病にかかつた。さうして一ヶ月半も思つた。そのうちに癒えるだらうと思つたものが、だんだんとひどくなつて來て、しまひには足の甲などに出來たものために立居さへ自由でなくなつた。どうしたつて同居してゐる人たちの手の親切を受けずにはゐられなかつた。その行届いた親切を清吉は感謝するとは無論感謝した。それでも一口に言ふとその人たちと清吉とはどうしても氣質が合はなかつたのだ。彼等の親切がどうも度を超えてゐるやうに清吉には感じられた——すべてが彼等の生活の様式に支配されることになつて、些細なことまで清吉の好みは無視された。たとへばあの事である——あんまり髪がおどろになつたから洗つてやらうといふ。おできのために両手ともつかへなくなつてゐる清吉にはそれはうれしいが、さて主人が細君に命じてやれ金だらひだとか永差だとか

そこへ敷く新聞紙とかシャボンとかタオルとか小さな手拭ももう一枚、雲垢とり香水だの櫛だの、もうかうなると清吉にはいけない。——大業にさういふものを持ち出される清吉には、この行届いた親切が一、そどうやらうるさかつた。それは決してわざとらしくは無いまでもあまり物物しすぎた。いつのころからかヴァカボンド魂を持つやうになつて身につける物の外は一切持ちたく無くなつてゐる清吉にくらべて、清吉を親切に取扱つてくれるこの家の人たちは例へばちよつとした旅行をするにもちやんと革紐でくるんだ毛布やらサツクのなかへ納つたコップやらを持つて歩きたいといふのがこの人たちのやり方であつた。ただちよつとした好みの違ひだけである。けれども妙なところで我がままな氣むづかしい清吉は、彼等の親切を有難いとは思ひながらもどうもそれを喜べなかつた。丁寧に、さうして式部官のやうに行き届いた煩縛で自分の頭が洗はれてゐるのを面倒に思ひながら、氣の合はないといふのは不思議なものだ、と清吉はつくづくと思つた。さうしてあの時——二年前に病氣をした時、お京の手でアルコールで背中を拭いてもらつた日のことを一瞬間たのしく思ひ浮べたあとで、そんな優しい手が自分からも永久に遠いところにあるのを清吉は身に沁みて感じてゐるが、やつとの思ひで頭を洗つて貰つてほつとしたと思つてゐると、一たん下へおりて行つた主人が再び二階へ上つて來



て、見るとその両方の手が愕いた人の手つきのやうに擴げられてあつたから、どうしたのだらうと思つてみると、彼は言つた――

「さあ、油をつけて差上げませう」その両方の掌にはもう油をつけて來てゐるのであつた。

「油ですか。僕はどうも油はいやなのだが……」

「いや、髪を洗つたあとぢや油をつけなければ衛生上悪いと言ひますよ」

衛生も何もそんなことはどうでもいい、が、さう言はれて嫌やな表情をしたものの清吉は、折角そのやうに用意して來てくれたものを、それも相手が好意づくである以上、清吉はもう決然と斷ることも出來なかつたし、相手はまた人の表情などに氣をつける人ぢやなかつたから、清吉はまだ濡れてゐる髪の上へねつとりと油を塗りつけられた。清吉は相手が二階から下りるのを待ち兼ねて新聞紙で自分の頭をくしゃくしゃにふいてしまひながら、そんなにまでいやなものを斷りきらなかつた自分を腹立しく感じると一緒に、一種妙なをかしさがかみ上げて來て、清吉は苦笑しながら心のなかで言つた――

「親切な人間といふものはたまらないな。人の生活の様式をすつかり自分の通りにしないぢやゐられないのだから。で、そのとほりにしないと腹を立てるのが俗人の親切だ……」

な氣もする。そんなケチなことまで考へさせられる。酔つばらふとふざけ方が嵩じて、目にあまるといふほどぢやないまでもどうも清吉の趣味に合はなくなつてくる。けれどもその同じ食卓にゐる清吉はいやな顔一つせず、出來ずにある。うっかりいやな顔でもして相手がそれに氣づいたら、それをただ趣味が犯されたからと思つてくれる相手ならいいが、ひとり者奴が嫉けてゐるな！とでもとられたのぢや自分が情けない――そんなふうにはまり氣な氣の差すへんな清吉であつた。それ故、清吉はそんな場合仕方がなければ「これも人生への御奉公だな」と思ひながら常談口の一つも一緒に言はせられる。さうして一緒に打興じてゐるものと相手に思はれてゐるとすれば、その莫迦莫迦しさはまるで四重五重だ。初にきつかりと斷ればよかつたものを、一時の氣の弱さから相手の好意を無にしかねて、うっかり、こんな氣の合はない人のなかへ厄介になつて來てしまつた自分が、清吉にはその頃から少しづつ腹立しくなつてゐた。だが、あの亭主の細君になつたわけぢやなし、あの細君の亭主になつたわけぢやなしさ。さう後悔するにはあたらな（さう清吉は自分自身の氣持を滑稽化しながら）人の女房がひどく氣に入るのももう懲り懲りしたが、あまり氣に入らないでも困りものだなあ。――ふいと、氣持を可笑味の方へ轉換することを覺えてゐる清吉であつた。さうして自分自身をなだめるためには苦

……その時の心のなかのひとりごとを、清吉は今歩きながらその時の光景と一緒にひよつくりと思ひ浮べた。さうしてその時の言葉のあとへつけ加へて考へた――それに親切を道徳にしてゐる人間は、自分だけ親切をすればいいことに人にも自分への親切を要求するのだから。だから比較的の金のある清吉が貧乏をしてゐる彼等に金を都合してやることも當然な道徳的な義務だと思ひ込んでゐるのかも知れない。でもなければあゝ度度、事もなげに金を貸せと言へたものぢやなからう。それや彼等の貧乏もわかつてはゐる。――よくある奴だけでも、若い夫婦で生活の方針も何も十分には立つてゐない人たちである。人事ぢやない、清吉ももう十年近く前に始めての女房を無理に持つた時が丁度それだつた。金の無いことの苦しいのは清吉にだつて思ひ當ることがある。だから貸せと言はれてみればどうにかしもするが、あの人たちのやり方は一たいどうだらう？ 不運つづきで思はしく行かない事情もよく聞かされるがそれにしても夫は毎晩、細君を相手に酒を飲んできやつきやつとふざけ合つてゐる。半年ほど前に新婚した夫婦で若夫婦とは言ふものの、もう清吉と同じ年ぐらゐる男に二十二三にもならうといふ女だ。新婚と言つても男は以前金があつたころには道樂をし盡したと言つてゐる人だ。そのふたりが人前も憚らずにふざけながらの晩酌もいいが、清吉にしてみればこの酒手を自分が出してゐるやう

笑を、さうして悲しい或はそのほかの眞剣な氣持を他人に表出する時には複雑な常談を。こんな方法で清吉は寧ろ快活な人のやうに、或る時は不眞面目な人のやうに、或る時は誠意のない人間のやうにのみ思ひ込まれてもゐた。それを知つても清吉はその他人に自分を徹しようとも試みなかつた。清吉は自己韜晦者であつた。さうして無言のうちにすつかり彼を理解しない人にとつては清吉はわかりにくい人間であつた。ことに異性には難解な人物らしいから――清吉は例によつて道化た調子でさう考へて、幾年か同棲した末に別れなければならなかつた女たちのことを今はおぼろげに、けれども憎みではない寧ろ或る懷みをさへ持つて、さうして自分の孤獨な性格を認めることでその罪の一半を清吉自身でも自分の分前にしながら、おれは異性には難解な人物だといふ短い一言のなかへそのすべての氣持を込めてあつた。それにしても今はもうそんな家庭でさへもおれには無いのだから……。清吉はむかしの女たちと相對してゐる夕餉のありさまを空間に一閃させた、さうしてそれが消え去つた後で、心のなかで言つた――

「全く何かにつけて、程を知らない人たちだ！」

それはむかしの女たちに對して言つたのぢやない。さつきまで考へてゐた現在の同居者夫婦との夕餉の食卓の光景を最後にもう一べん思ひ浮べた時に、さつき一たん途切れてゐた



彼等のことをさう結論したのである。さうしてもつと晴やかな氣持の時に考へればさすがにさうではなかつたらうが、清吉は何故か今日は到底、そこに自分の今夜の夕飯が用意されてゐるであらうその食卓のある家——ともかくも今日の清吉自身の住み家である家へ歸つて行く氣にはなれなかつた。さうして清吉は意識的にその家とは反對の方向へすたすたと歩きつづけてゐた。すべての人がそれぞれに自分の家庭の方へ急いでゐるであらうこんな日のこんな夕方に。

お京の家の夕餉のさまが、言ふまでもなく今までにもう幾度か清吉の目にまざまざと浮び上りさうになつてゐた。それを掻き消すために清吉は精一ばいで努めた——あんなにくどくどと現在の同居者外山夫婦のことを追つかけて追つかけて考へつづけてゐたのも、實はそれがとぎれる時にお京の家のことが憶ひ出されさうになつて仕方がなかつたのでそれを防ぐための一つの手段であつた。が、たうとう外山のこと結びついてお京やお京の亭主のことが、清吉の心の表面へ浮び出てしまつた。——お京たちは外山夫婦をもよく知つてゐるのだし、またどうやら清吉が外山のうちにゐることも知つてゐるのだ。またどうやら清吉が外山のうちにゐることも知つてゐるのだ。あの男のことだから、お京の亭主はきつと清吉のことを「彼奴は氣むづかしい神經質な人間のやうな面をしてゐるくせに、よくも外山のやうな奴と一日も一緒に居られるものだ

ざまに道行く人々がその香をふりかへつて見るほどの、新しい籬のロオド・パイロンを清吉は本當に「味ない煙草」と言つてゐるのである。贅澤には人の悲しみを癒す力がないからであらう。出鱈目のその文句を清吉は何度でもくり返してみた。何でもよかつたのだ。ただ、どうしても「お京よ！」と呼びかけたい氣持ちであつた。さうして繰返し繰返した。子供を眠らせようとあせるお母さんが出まかせな子守唄を熱心に歌ふやうに、清吉は自分の悲しさを、寢就かせようとしてゐるだけであつた。

すべての幸福な家庭ではもう夕餉が終つたに違ひない。さうして家庭のない人間だとも腹は空く。清吉は空腹をも感じながら歩いた——どこへといふ目あても別になかつた。

突然、清吉は立ちとまつた。

5

邦子が藝者をしてゐる土地はこの邊だ。さう、さう。たしか百合香といふのださうである。邦子が實家へ歸つたのは夏のはじめであつた——もう半年顔を見合はない。會へば邦子も思ひがけないことに喜ぶだらう。

佇んだ清吉は時計を出して見た。それから自分の心のなかを見まはしてみた。さうして町の見當を見まはしてみた。清吉は少しためらひながらもと来た方へひき返しながら、辿る

ね。僕は外山タイプの人物は見るのもいやだがね」と、お京を相手にそんなことを言ひはしないかと、ふとさう空想された清吉は、實際いま現にそんなことが言はれてゐる辭をでも聞いたやうに腹立しくなつて来た。それにしてもお京は何と答へるだらう……。清吉は新しい手袋のはまつたおぼつかなくもどかしい手で、煙草を一本、外套のポケットのなかのモロッコ皮のシガレットケースからやつとさぐり出した。その煙草を、吸ふでもなくただ吹かしながら清吉はちつと考へつめて歩いた。……

「そんな思ひやりのない事を言ふものぢやありませんわ。清吉さんは、だつて行くところがないのです」然うだ。お京さん、さう言つてくれ……

家もない

戀もない

その日その日を

お京よ！

私は、私は

かうして

味ない煙草を

吸ふばかり

いつのまにやら、清吉の心のなかではそんな出鱈目な文句が出来上つてゐた。——とつぷりと暮れた夕方の擦れちがひ

ともなくふるい記憶を辿つた。——そのころ未だ學校へ通つてゐた芳藏が學校仲間の悪友と一緒によく遊びに出かけるらしく、さうして彼らは時をり集つては遊び場所の噂などをしてゐることがあつたが、そのころ小耳に挟んだところでは、そのころは八重子と謂つた邦子の出てゐた家といふのは、清吉が今歩いて行く少しさきの或る大きな呉服屋の角を右へ折れてすぐとつづきの狭い道をもう二度右へまがつてどうとかすると、玉突場を兼ねた洋食屋があつてその近所のだしか「梅のや」とかいふ家であつた。いつか芳藏や邦子とこの邊を歩いた時にも邦子が自分でそんな話をしたことがあつた。

百合香になつた邦子も同じ土地の同じ家から出てゐるとすればやつぱり梅のやにちがひない。それにしても清吉は、一帯に藝者といふものを知らない上に、その土地のことなどは全く不案内であつた。さうして未だ義妹のやうな心持の去らないう邦子と一緒に今日の夕飯をどこかで食べようといふ自分の思ひつきを實行したく思ひながらも清吉は、勝手を知らない場所へ踏み込んで行く不安があつた。それでもいつのまにやら、聞いたことのある方角の方へ歩いてゐた。

それにしても——と、清吉は考へた——芳藏は今どんな様子であらう。あの時、いよいよ邦子とは別れるといふことを相談の形で實は報告された時に、清吉はただ一言だけ芳藏に言つた——ごく自然な穏かな調子で、



「誰しも自分の思ふやうにするのが一番さ。ひとに相談するまでもないよ。自分の好きなことをして自分で責任を避けたいのだ。俺もその流儀で来た。いいとも、勝手なことをしようぢやないか。そのうちにはてんでに人生といふものも追追と判つてくるだらうから。」

芳藏は黙つて聽いてゐた。清吉は、しかし、弟の家庭が解散されて荷づくりなどごたごたと始めるのを見るのがいやであつたし、それに弟の家庭が無くなれば、さて直ぐに行くところも無いので、旅に出てしまつた。清吉の旅の留守に芳藏は豫定より早く出發してしまつた。朝鮮へ行つてからはがきのたよりがあつたが、筆不精な清吉は返事もやらなかつた。清吉の筆不精は一族のなかでは有名だから、芳藏がそのためにも怒つて居るやうなこともあるまいが、それつきり先方から便りがないのは黙つて女をつれて行つただけに氣がひけてゐるのかも知れない。どんな女をつれて行つてどんな暮し方をしてゐるものやら。女と言へば、いつか夜おそく或る乗換場でひよつくり同じやうに家へ歸らうとする芳藏に出會つた時、今思へば芳藏は女をつれてゐた。そんなことは知らなかつたから、どんな女だつたやら見もしなかつたが、果してあの女かしら、女をつれて行つたことさへ教へないくらゐだから従つて詳しいことを言つて寄越しようもあるまいが……一たい、女があるならあるとあの時、打明けたところで別に小

めようとするのぢやない。慰められようといふのでもない。理窟はいらない。一緒に飯を食へばいいのだ。ただ話題のあるところへ行きたいのだ。さうして清吉にはさしあたり邦子のところより外には話題のあるところはなかつたのである。

邦子が再び藝者になつた話を聞いたらお京はさぞびつくりするだらう。清吉を信じ切つてゐる單純なお京は、芳藏のことを「清吉さんに似合はず不人情な人だ」と思ふだらう。また「そばに清吉さんが附いてゐながら……」とも思ふだらう。お京はたつた一度あの時（と、清吉はその時をありありと思ひ浮べながら）あの時に一度だけ邦子に逢つただけだが、邦子もお京を好いてゐたし、お京もひどく邦子を好いてゐたつけ。さうしてお京はよく邦子の噂をして言つた——  
「もうからなれば、清吉さん、あなたと一緒にすることはあきらめるより外はないのだから、ただわたしもせめて邦子さんのやうに、あんなにほがらかな氣持でいかにも楽しさうに『兄さん』と呼んで見たいわ。」

さう云つてお京は小聲で「兄さん」「兄さん」と邦子の聲音を眞似てゐたつけが……お京。今日はまたどうしてかうお京のことが思ひ出されるのであらう。あ！ さうだ！ 今日十一月の二十四日か。思ひ出のある日だつた！ もしやお京も今ごろ、ひよつくり二年前の今日を思ひ出してゐたのぢやないかしら。清吉は妙に耳をすまして見るやうな心持がした

言を言つたり干渉したりするやうな清吉でないことは知つてゐる芳藏なのに、何故さうと言はなかつたのだらう。さう言へば邦子にしたところが、實家は仲のあまりよくない兄がゐるだけでその兄とてもささやかな洋服屋をしてゐるのだから、實家へかへつてからどうするといふ考へでもあるのかとさすがにいくらか心配して聞いた清吉に對して邦子も別にこれといふことは言はなかつた。そのくせどうやら二月もたたぬうちにまた藝者に出たところを見ると、別れ話の時からそのつもりもあつたのかも知れない。相談しても始まらないと言つてしまへば全くさうには違ひないもの、清吉の身になつてみれば芳藏からも、邦子からも何かと聞かせて欲しかつた。あれぢや全く、かげでつらい思ひをしてゐた自分が芳藏からも、邦子からもごく冷淡な人間と思ひ込まれてゐたのも同然だ——清吉はふとそんな軽い不満を彼等に對して感じたが、氣がついて——ほい！ おれは全くの個人主義者になり濟してゐる筈だつた。人からも厄介なことを聞かされまい。自分でも人には言ふまいといふ方針ぢやなかつたか。自分では人に何も打明けないうえからは親身に相談してもらひたいと要求するとすれば、これもまた一種の蟲のいいことと言はなければなるまい。芳藏も邦子もつまりは、あれで清吉の方針を尊重したことになつてゐるぢやないか。さう言へば今夜も邦子に逢つて何の用がある自分であらう？ 別に邦子を慰

——どこかでお京の聲が遠くから聞えて傳はつてくるのぢやないかと。裏どほりにいつか來てゐて、ただ耳をすませば自分の靴音が聞かれる——

家もない

戀もない

その日その日を

お京よ！

私は、私は

かうして

味ない煙草を

吸ふばかり

「ええと……先づ、ホットウキスキイを一杯と、それにこれだ。」

清吉はウエイトレスの持つて來たメニューの上を指でおさへて命じながら、やつぱりさつきづきのつづきを考へつづけてゐた。——邦子をどこでどう呼べいいだらう。知つた家とてもなし、夕飯をたべる場所とても知らない。これはやつぱりウエイトレスに電話をかけさせて邦子から何かと聞くのがいい。さうだ、それまでは空腹ではあるが先づあんまり食べまい。さう決めた清吉は改めてその家のなかを見まはした。な



るほどこの家に相違ない——玉突屋と洋食屋とを兼ねてゐる。——二階からカチカチと玉の音が聞えてゐる。これが以前に芳藏などのよく出入したといふ家に違ひない。さうすれば邦子の——百合香の家といふのは間違ひなくこの近くのだ。近くでなくてもいい、何れ電話をかけて貰ふのだから。

「姐さん、ちよつと電話帳をかしてくれませんか」

ホットウキスキイを先づ持つて来たところで、清吉は電話帳を借りてみたが、どうしてだか梅のやといふ家の番號は見つからなかつた。

「姐さん、この邊にたしか梅のやといふ藝者屋がある筈だがね。無い？ 電話の番號を知らない？」

「帳面には御座いませんか」

「見つからないやうだ」

そんな會話をしてみると、突然にコック場のかげから女の聲がして、

「梅のやさんならすぐそばぢやないか」さう言ひながらおかみらしい三十ぐらゐの年増がちよいとコック場の方から顔を出して、清吉を見ると「いらつしやいまし」と一目ちらりと見たやうであつたが言つた「梅のやさんへ何か御用ですか。藝者衆？」さう言つて愛嬌笑ひをしたが或はその女自身もとはその藝者衆ぢやなかつたかと思はれる風情であつた。畜生！ この女までが！——中高で丸鬚のせむでか年こそふけ

行つたら、百合香さんに來ていただきさへすれやわかる方だとおつしやいよ。え、あそこの家はうちとはよく知つてゐるのだから居さへすれやお見えになりますよ」

おかみの親切には何だか、何もかも間違つて呑み込んでゐるやうな調子があつた。それが、顔を直ぐ赧くするくせのある清吉の頬をかつとさせるやうな氣がしたが、けれどもコックに半分ほど飲んでゐる酒のために清吉の頬は前からもう赤くなつてゐたので別に目立ちしなかつた。

註文した皿を卓の上へ置くと若い女は早速、梅のやへ行つてくれたが、百合香は今出てゐて、貰へば貰へるお座敷だけれどもそれでもまだ一時間ぐらゐしななければ……といふ返事であつた。

「あ、然うですか。ありがたう。なにそんなにまでして用は無いのだ」

清吉はさう言ひながら、邦子を待つて飯を食ふ考はあきらめて、その代りに今度は別に腹にたまりさうなものを改めて註文した。

沈鬱さうな清吉を相手にする人は誰もなかつた。おかみさんはさつきあれだけのことを取計らつてくれるとそのまま二階の玉突臺の方へ行つてしまつたし、若い女は大きな鏡の前で自分の髪を直してゐた。出前を主にしてゐるらしいこの店は部屋も粗末だし、そんなことはどうでもいいが、まだスト

てゐるがどこやらお京に似てゐる——清吉にはそんな氣がする。

「ええ、さうです」極く生眞面目な調子で清吉は答へた「百合香といふのです。そんな名のが居ますか」

「百合香さん？ その方はもう去年ぐらゐからゐないぢやありませんか知ら」

「はてね？ 僕はついこの間——さうこの七月か八月ごろにでも出たのだと思ひますがね」

「お若い方でせうか」

「いいや、二十三四ぐらゐの」

「ぢや、また新しい百合香さんといふのが出たのか知ら。その方に御用でございますか。——それぢや電話の番號をさがすより、ちよつと一つ走り、お前行つてお上げよ。——梅のやさんならわけはないから」あとの方の半分はウエイトレスに言つたのである。さうしてかの女はまだ新米らしくそこを知らない若い女に、梅のやの場所を——その角を曲つて、車屋さんの……髪結ひさんの……といふ風をしへてから清吉に言つた——

「で、もしその方がいらしつたら、ちよつとここまでお顔を出して見てもらひませうか。ねえ？ お名前はおつしやらないでもいいでせうか。あ、さうさう、それではね（さう言つておかみはウエイトレスをふりかへつて）梅のやさんへ

オブを用意してゐないからうすら寒い。清吉の頭の上では玉突臺をまはり歩く人の足音が鈍く傳はつて、その客の數は少いらしいがさつきのおかみの聲もまじつて何だか知らない談笑の聲のなかを縫ふやうに玉の音がカチカチと流れてひびく。あの足音は太つた男のもので快活な笑ひ聲だ、そんな用もないことを思つて見たりしてそのもの音を聞きながら清吉は、ホットウキスキイのつぎには冷いのをもう一杯飲んだ。顔は眞赤になり體は温くなつてきたけれども心持は少しも所謂酔つた人のやうではなかつた。さうして二階の賑やかさにくらべて清吉は、自分の身のまはりは何だか足もとでこほろぎが鳴き出すやうな氣がして、自分と相對する人はみな黙つてしまひ、自分の行くさきざきはその度ごとに何間かの間さびれてしまふやうな氣がした。影がうすいといふ言葉があるが清吉のはうすいではなくへんな影がさして、さう言へば自分の顔はエル・グレコ筆の肖像畫のやうに一種の氣味悪さ、一脈の魔氣があつて、それだから女子供は何となく自分を憚るやうなところがある。さうして自分はいんから人と喜びを分か合つた覺えはない——それが清吉自身の誇張したつまりはセンチメンタルな氣持で、清吉はもう少し酔つて來てゐるので、これが清吉の酒くせなのである。

どうしてもひとりではいけない氣持であつた。さればと言



つて今、語り合ふべき人はやはりなかつた——どうしても邦子より他には。清吉はあの洋食屋から出てくると一町とは歩かないうちにもう一度その家へ引きかへした。清吉をおくり出して客のないひまを講談雑誌を見てゐたウエイトレスは、また歸つて来た客を表戸の口に發見して、忘れものでもしたかと頓狂な聲でたづねた。清吉は半分ひとりごとの口調で答へた——

「いいや、さうじゃない、ここまで来たのだから、やつぱり、逢つて行かうと思ふのだ。あと一時間もすれば貰へるわけだね——百合香は。それぢや君、僕はこの邊の勝手は少しも知らないのだから、どこかそんなうちをおかみさんに聞いて見てをそへて下さい、面倒だか……」

二階から下りて来たおかみはうちの家號をそへて、それだけぢや無論わからなかつたのでウエイトレスと二人で外まで出て来て指さしながら教へてくれた。清吉の後すがたを見送りながら、ふたりの女たちは囁き合つてゐる様子であつた。そのすぢ向うの酒屋の角を曲つてつき當つてまたまがるその角の奥まつた家といふのが、現にさう教へられて清吉が今來てゐるところなのだが、さういふ家に坐り慣れないせゐか清吉にはどうしても居心地がよくなかつた。馴染のない人には口の重い清吉は、女中を相手には常談を言ふ心持にもなれなかつた。なまなか飲めばへんに生眞面目になる清吉であ

お邪魔だがさうして置いてくれたまへ——  
「ええ、え。そんなことは何ですけれど、百合香さん、本當にどうしたのでせうね。こんな待たれてゐる身になりながら……。ね、さうでせう？」

そんなことを言ひながら、それをしほにして女中は立つて行つてしまつた。どの座敷もしんとして別に忙しいけは、ひとでもないが、女中はそんな陰氣な氣心の知れないお客を嫌つて氣づまりがしたからであらう。全く清吉自身でも自分が氣づまりであつた。氣分の轉換をしたかつたけれどもその方法とでもない。いや、ただこの場の氣分の轉換だけぢやない。生活全體が行きづまりになつて、それをどうにか展開しないでは居られないのである。あの時——もうお京とは逢へないと思ひあきらめた時から、どうにかしてその日その日でも月日さへ立てばいいと自分を自分で甘えかして生きて来たのが、知らない間にぼつぼつと嵩じて来て、自分は淺はかな安逸と甘つたるいさびしさとに自分の身をまかせてしまつてゐるのではないだらうか。何一つ信ずるところとでもなく、さればと言つて懷疑の海底へもぐり込まうといふのでもなく……。さういふ理に落ちた、さうしてそれにふさはしく冷え切つた酒を清吉は手酌でついだ。

清吉は自分の心のなかに行き來するさまざまな人——男や女の影を澤山、つきつきに見つづけて行つた。清吉の心は一

る。百合香は、それは初めから承知の上ではあつたがなかなか來なかつた。それにこの家は百合香が出入することのないうちらしかつた。

年増の女中が言つた——「いやですな、旦那は。時計をお肴にしておひとり飲んでみらつしやるのですね。もう一時間はたつぷりお待ちなすつたでせう。何しろこんな場所ではありますし、時間のほどは當てになりませんから、それまで誰か別の子でもお呼びになつてお待ちなすつてはいかがでせう——」

「さうさ。それもいいが……」と清吉はあいまいな返事をし、知らない女などがくればこの場合一層苦しい氣持になるだらうし、それに邦子に逢ふまではともかくもさう席をくづさないでゐるのがいいと思つた。さうして言ひつゞけた「……だが、やつぱり、もう少しひとりきりで待つて見ようよ。別のひとが居たりしては叱られるからね——」清吉の常談は硬ばつてゐる。

「おやまあ、大へんですね——  
「大へんも大變、深い仲だからさ。——それに今夜はわけても他聞を憚るやうな話に、うまい金儲けの相談に來たのだからね。——だから君はさう氣を揉んでくれなくてもいいのさ。それにこのとほり僕はいけない口なのだから、忙しいところをお氣の毒だからひとり放つて置いてくれれば結構。

つの十字街であつてそれらの影はそれぞれの方向へ歩き去つた。すべて皆、過去のものである。清吉の新しいかるべき未來を暗示するものは一つもなかつた。たつた一つ、澄江だけが清吉の心の十字街のなかに未來の道を向いてぼんやりと佇んでゐる……。しかしそれをよく見つけてゐるとそれは澄江ではなくやつぱりお京——その十字街を過去の方へしく泣きながら歩み去つたお京の姿になつて來る。それは清吉自身にも苦しい澄江にだつて氣の毒ではあるし……。こんな氣持まで考へて來た時であつた。

「や！來たぞ」と清吉は咄嗟に、伏せてゐた目を、外がはの方へ見上げて聴き耳を立てた。カタカタカタといふ急ぎ足の駒下駄の音が不意にその時、清吉の居る表二階へ——さうして清吉の記憶の耳へひびいて來たからであつた。邦子の足音だ！ 聞き慣れた自分の家族の足音である。寒いころに外へ買ひ物に出て急いで歸つて來る邦子の足音だ！ 清吉にはこみ上げて來る氣持であつた。

「百合香です。今晚は！」  
「あら、百合香さん。随分お待ちですよ——  
そんな會話が、それから何やらべちやくちや、下から洩れて來て、足音ばかりではないその聲も邦子のものである。けれども聲の方はどこかつくり聲で足音のやうに清吉の胸にはひびいて來ない。あの足音を不意に聞きわけた瞬間には、



ひとりの藝者の急ぎ足の幻影と邦子の姿とをこつちやに思ひ  
浮べた。それが清吉には思ひもかけない悲しみであつた。弟  
のものと妻を二度目とは言へ藝者などをさせるのは困るとい  
ふ抽象的な心持が、その足音を聞いた一瞬間に忽然と一つの  
具體的な心持に變つた。その悲しいとも濟まないともなつか  
しいとも味氣ないともつかない氣持で、清吉はぢつと百合香  
の邦子が部屋へ来るのを待ち受けた。さうして、別の事を考  
へ込んでゐる間だのに咄嗟にそんなものを聴きつけた自分の  
耳を不氣味にもいとしくも哀れにも感ずるのであつた。その  
時しづかに階段を踏む音がして、殆んど音もなく開いた障子  
のかけから手を突いて様子ぶつた邦子が——いや、百合香  
が、おちよぼ口で硬ぼつた表情で顔をのぞかせた。

「何だい？ その顔は！ ハ、ハ、ハ！」清吉は言つた。  
百合香の邦子の硬ぼつた顔が突然いぶかしさうな、それ  
故、全く自然な顔になつた。ぼかんと半分口を開けて目を見  
開いた。——それは邦子がまだ弟のところへ來ても世帯やつ  
れもせずに、三年も前までは豊かに持つてゐた無邪氣なほど  
かな麗朗とした表情と似てゐる。百合香の表情はすぐに變つ  
た——全く邦子のものになつた——

「あら！ 兄さんね！」邦子は疊の上をすべるやうな早足で  
もう清吉の火鉢の向うに坐つてゐた。「どうしたの。珍らしい

「……………」邦子は何か思ひ出しでもしたのか黙つてゐたが  
「大丈夫——あそこは代が變つてしまつたから。兄さん。そ  
れよりはさあお酌」氣を換へるやうに邦子は急にそこにあつ  
た銚子を取上げたが振つて見て「何だい？ 空っぽぢやない  
の」さう元氣のいい聲で言つた。それから手を鳴らしかけ  
て、ぐるつとあたりを見廻してつい後にあつたベルの紐のポ  
タンを押してから坐り直して「兄さん。みんなひとりで飲ん  
で？ 飲めるやうになつたのね。藝者の言ひ分にすれや感心  
だわ——そのくせ赤くも何ともなつてゐないわ」

氣がついたが、さういふ邦子も今までの座敷で飲まされた  
のか、ほんの少しは酔つてゐるやうであつた。それとも沈み  
勝ちな清吉を直ぐに見てとつて、わざと努めたはしやぎ方と  
も思へる。さう思ひながら清吉は自分の頬をちよつと撫でて  
見て、

「あたり前さ。もう醒めちやつたよ」  
「どうして？」

「どうしても無い。酒なんでものあ初めの三杯分赤くなれ  
や、あとはいくらでも同じさ。あとからあとから醒めるさ——  
顔だつてもとの通りになるよ。ましてたかが一本の酒で、  
さ」  
「えらい事を言ふわね。一たい何本飲むの。——いつの間に  
そんな莫迦なことを覚えちやつたの」

邦子は、火鉢の上にかざしてゐる清吉の大きな骨張つた手  
を扱んで自分の小さな二つの手で掌と甲とから押へた……  
「冷たいでせう」

——しばらく無言のあとで邦子はさう言つた。さうしてこ  
の思ひつゝのつたひとりでの動作にと氣がついたかのやうに、  
そつと清吉の手を解き放して、邦子は灰のかぶつてしまつて  
ゐる火を掻き立てると、自分もその上へ手をひろげてかざし  
た。

「……………」清吉の答は無言であつた。冷たいだらうといふ  
邦子の言葉に然したる意味もなかつたのだから。

邦子はほつと溜息をしたやうに清吉には感じられた。清吉  
は邦子がこんなところで自分に逢ひたくはなかつたのだらう  
か、それを聞かうとしたがそれを言ひ出さうとするときやう  
ど言葉がぶつつかるやうに邦子が言つた、  
「ああ、ほんとうにうれしいわ。ここは知らないうちだから  
名指だと聞いて誰かと思つて來たのよ。——兄さんは新陽亭  
で聞いて來たのですつて？」

「新陽亭といふのかね。ああ、向う角の洋食屋さ。——あそ  
こは芳藏のよく知つてゐたうちぢやなかつたかい。おれは何  
だかじろじろ見られるやうな氣がしたが、それだとすると、  
芳藏とおれとはやはり似通うたところもあるから、おれのこ  
とを芳藏が年とつたと思ひやしないかなどと思つてね」

「それも藝者の言ひ分かね。だが莫迦なことぢやない。酒を  
飲むのも案外精神修養さね。今のさつきも酔つばらつて大い  
に反省してゐたところだつた。だが、酒といふものはまづい  
な。おれには直ぐに酸つばくなるぜ。——酔ひもしないのに  
よ。全く莫迦莫迦しい飲ものだ」

その時障子の外から「おや、急に元氣におなりですわね」  
障子を開けた女中は心得て酒を持つて來たのだが、ちよつと  
腰を据ゑながら「百合香さん。こちらは本當に現金ね。あな  
たが來ないうちは鼠に引かれさうだつたのよ」

「さうだよ」と清吉が言つた「ねえ、姐さん。今だから白狀  
するが、どうして心中の相談を持ちかけたものかと思つて  
ね。策略をめぐらしてゐたからさ」

「姐さん。それも無理心中よ」邦子もさう云つた。  
三人は、三人してそれぞれ下手に笑つた。

女中が出て行つた後で邦子はやつと言つた——  
「時に朝鮮から便りはあつて？」

「うん、一べんはがきが來たよ。こちらからも何とも言つて  
やらなかつたが向うもそれつきりさ」

「やつぱり誰かつれて行つたのですつてね」  
「…………おれもさういふ噂は聞いたよ」



「困つてゐるつてぢやないの？」

「？」

「お金のことでなくつてよ、そのひとの事です。兄さん、知らない？」

「それは聞かないよ」

「さう。それぢや言ふまい。わたしが餘計なことを言つちや悪いから……」

「いいよ、言つてごらん」

「でも、根が噂だし、告口のやうだわ」

「いいてば。お前が告口するのぢやない……おれが詰問すると思つて」

「……それより、あの人、ほんとうに朝鮮に居るのでせうか。門司にゐるのだといふ人がゐてよ——おせつかいがゐてね、いろんなことを聞かせるのですもの」

「いろんなこととは？　だが京城にゐることはどうも本當のやうだがな」

實際、芳藏が門司にゐるといふのは初耳であつた。それにいろいろな事情から見ても、やつぱり朝鮮にゐるのは本當らしかつた。しかし、邦子がたうとう話出したやうに、芳藏が女のことと困つてゐる——といふのは、その女の親たちといふのはよくない人たちで、それが朝鮮だか門司だかまで娘と一緒にいて行つて、店も何もその女の名義でさせてゐる

アハ、ハハハ」

「兄さんといふ人は他人のことにはいやにきばきしてゐるのね。——御自分はどう？」邦子は不平げであつた。

「おれだつて男一疋さ。見ろ、好きなやうにしたおかげさ——このとほりあがいてゐるのよ」

「えらい！」盃を五六度やり取りしてゐるうちに酔つて來てもともと深川生れの邦子はたうとうきばきした調子になつた。それから優しくからかふやうな口調で「で、兄さん。もうあきらめはつきましたかね、お京さんは」

「そいつばかりは今夜はよせよ。——氣がついたのさ、途中で。あんまり氣が減入るから思ひ當ると今日は戀の二周年の祥月命日だつた。……お京と言へばあの亭主にはあれから會つたのだよ」

「へえ？　添田に！　いつ？　どこで？」

「何、もう半年近くも前さ。ひよくり路でばつたりと顔を見合したのだ……」清吉はその時のことを思ひ出し思ひ出し話し初めた——

添田のことを、清吉はあの時以來、添田とは言はずに「お京の亭主」と呼んでゐる。少くとも心のなかでさういふふう

し、新らしい事を思ひついても一つ一つ干渉はするし、會社をやめて見て一本立をしても折角の事業も何も自分の計畫どほりには運ばず、それに女の親たちのやり口があまりきびしいので、さすがお人好しの芳藏もいや氣がしてゐる——もうこんなことはやめて東京へ歸りたいと、その土地で逢つた或る人に芳藏が言つたのを別の或る人が聞いて來て、邦子はその第二の人から聞いたといふのであつた。邦子は心から心配さうにつけ加へた——

「兄さん。何とかして上げたらどう？　もしそれが本當ならばさ」

「うむ……」清吉は生返事をした。しばらくしてから言つた「が、別にどうと言つて仕様もない。折角やりかけたことだ。序に精一ばい苦勞をして來るがいい。させて置くが第一だらう」

「それもさうか知ら——兄さんの氣質では」

「あたり前さ。今時分になつてそんなことに干渉するほどなら、お前との別れ話の時にも言ふことはあつたよ——今は始まらないから言はないが。芳藏だつて男一疋だ。好きなやうにさせて置くのが本當の情だらうぢやないか。まあ見てゐるよよ、おれの金でも費はれてゐるなら兎も角も、スツてゐるのはおやぢからの遺産さ。それも芳藏自身のわけ前だ。それに今直ぐまさか死なうとは言つてゐるわけでもあるまいぜ。

うやら以前まだ兄弟のやうにしてゐたころのなつかしい氣持にふいとなつてしまふ。その無二の友を無くしたことをはつきりと身に覺える。事實、清吉のころのなかにはそのかたしい記憶がいまだに生きてゐるのであらう——清吉は、お京の夢はごく稀にしか見なかつたのに添田の夢は腹立たしいほどよく見るのであつた。それも唾み合つてゐるやうな夢などではなく氣の合つて常談を言ひ合ひながら一緒に散歩してゐるところである。さうしてそんな夢のなかの散歩がながくつづいてから、清吉は夢のなかで不意に、さうだ、おれは以前添田とももう絶交してゐる筈だつたのに？！　とさう思ひ出すと、いつもそのとたんに夢がさめるのであつた。——うつかり添田といふ名を口にした後でもちやうどその夢の醜隙のやうな氣持になる。清吉にはそれが悲しかつたし、悲しいばかりではなくあの事件の解釋が一層こんがらかつて來るやうで考へ込まずにはゐられない。いつそ「お京の亭主」と呼んでしまへば同じ添田でも別の人に感じられる。それにすべてがお京と一緒にお京のために失はれたやうで、同じ失はれたにしてもあきらめやすい——と言はうか、あきらめにくいと言はうか、ともかくもお京の名によつて堪へ忍ぶことも出來る。清吉にとつてはさういふお京であつた。さういふ添田であつた。



あなたの夢は昨夜で二度しか見ないのに  
 あなたの亭主の夢はもう六べんも見た  
 あなたとは夢でもゆつくり話が出来ないのに  
 あの男とは夢で散歩して常談口を利き合ふ  
 夢の世界までも私には意地が悪い だから  
 私には来世も疑はれてならないのだ  
 あなたの夢はひと目で直ぐさめて  
 二度とも私はながいこと眠れなかつた  
 あなたの亭主の夢はながく見づづけて  
 その次の日には頭痛がする……  
 白状するが私は 一度あなたの亭主を  
 殺してしまつたあの夢を見てみたい  
 私がどれだけ後悔してゐるだらうかどうかを。  
 清吉にはかういふ詩もあつた。

まだ夏も初めであつた。芳藏と邦子とのうちは解散してしまつてゐるし、旅から歸つて清吉がともかくも外山のうちに落着いて間もない頃であつた。そのころまだ外山のうちに居た外山の甥といふ少年——まだやつと十五かそこらの子供を

てゐた。白いズボンにホームスパンの上着であつた。——ひどく瘦せてゐたと思ふが……

「ね」と清吉は少年に言つた「添田はひどく瘦せてゐたね」  
 「ああ、瘦せてゐたよ。若く見えたよ。けど、ひよつとすると添田さんは病氣ぢやないのかね。僕、ふとそんな気がしたよ」

「何故？」

「でもね、添田さんは僕がお辭儀するにつこり笑つたよ。あの人は面白い人で、僕が見てゐると今まで、元氣のない病氣のやうな時だけだよ——子供に笑つたなりんかするの。元氣のいい時にはいつも怒つたやうな顔をするよ」

この少年はなぐさみに小説なども讀むほど早熟であつたのでそんな觀察を持つてゐたのであらう。さう聞けばなるほど清吉にも、それが添田らしい事にも思へた。それとも添田は近ごろ氣が優しくなつたのかも知れない。添田！ お京にもそんなふうにつこり笑つてやれ、いつでも……

しかし、三町ほど歩いてゐるうちに清吉には「添田」はもうとうとましく「お京の亭主」といふ氣持になつてしまつて來てゐた。丸善の二階へ上つた清吉は、さまざまな書物を手に取つては見たが、どんなことを書いた本だか現に見ながら氣がつかないほどであつた。といふより寧ろ、黙つてふさぎ込んでゐる自分をあの早熟な少年に氣取られまいと思つて心に

つれて清吉は散歩に出た。子供の相手は氣が紛れた。

清吉は何氣なく、しかし俯向いて歩いてゐた。向うから來る人も俯向いてゐたのであらう——ふたりの行人は擦れ違ふついで三歩ほどの距離でふいと顔を上げ合つた——

添田だ！

添田を知つてゐる外山の甥もその時氣がいつたのであらう慌ててお辭儀をしながら、低い聲で

「添田さんだよ！ ねえ！」

少年は清吉の袖を引いた。清吉はちらと添田を見たきりだつた。ふたりはもう擦れ違つてしまつてゐた。ほんとうに添田であつた——清吉のこの時の感情では、その人は「お京の亭主」ではなく「添田」だつた。さう思ひながら、歩いてゐる清吉に向つて、少年はもう一べん言つた。

「添田さんだつたよ。——どうしてお辭儀をしなかつたの？」

深い事情を知らない少年は、むかしあれほどだつた友達同士がお辭儀一つし合はないで通つたのを怪しんで尋ねたのである。清吉は何とも答へずに、ただふり返つて見たいといふ感情を感じながらそれを抑へる感情もあつた。毎日顔を見合はずにはゐなかつた友達、さうしてもう一年半近くも見なかつた友達、添田もちらりと清吉を見上げたつて。清吉は別にふりかへつては見なかつた代りに、瞬間的に捉へ得た添田の姿をもう一度思ひ浮べた。白い新らしいヘルメットをかぶつ

もない書物を取り上げて見てゐたのであつた。

——あのことがあつて以來、一層多く添田の夢を見るのぢやないか知ら。清吉にはそんな氣もする……

邦子にはその時のことを手短かに話しながら清吉自身でははつきりとこまごまと思ひ出してゐた。さうして清吉は邦子に言つた——

「不意に顔と顔とを見合したのだからよかつたのさ。それが双方で一町もさきから氣がつき合つてゐたのであつてごらん。兩方とももつと複雑な、不自然な顔つきをし合はなければならなかつたらうからね。——だとすると、僕は考へただけでも氣切ないよ」

「兄さん、氣が弱いからいけないのよ、何も悪いことをしまし。恥しいのは添田ぢやありませんか。私だつたら睨みつけてやつてよ」

「フ、フ……」邦子が子供らしい單純な調子で言ひ放つたのが清吉にはをかくも可憐でもあつた「でね、邦子。それから三日ばかりしてからのことだがお京が通つたのだぜ——外山の家の前を、僕の二階の下をね。それを外山の甥が發見して「添田さんの奥さんが通るよ」つて隣の部屋窓から頓狂な聲で知らせたものさ。僕は客があつて座を立てないう



へに、その客がまた噂でお京や僕のことを知つてゐるのだから——だから、さう言はれて覗いて見るわけにもゆかない。少年に見れば先日添田とおれと妙な具合に行き逢つたことをうちへ歸つて話したらしく、それでいくらか例のいきさつがわかつたものらしいね——だからお京の行きすぎるのを僕に知らせたのだらうぜ。——ただひどく俯向いてとほつたさうだよ、お京は。——お京も添田から僕の噂でも聞いたのだらうか。それで思ひ出して僕の二階の下を通つてくれたのだね。……」

「何だ！ そんなことなの？ そんなことがそんなにうれしいの？ いやな兄さん。いつまでもいつまでも」

大分酔つぱらつて蓮葉な邦子に話の腰を折られて清吉はふつと黙つてしまつた。なるほど邦子の言ふとほりでもある：

「急に黙つてしまつたのね。——兄さん慍つたの？」

「何が、慍るものかね。ただ氣の毒になつたのだよ——」

「お京さんが？」

「いやいや！ お京はあれでいい筈ぢやないか。氣の毒なのは手前のことさ！」清吉はから元氣を出して氣輕さうに言つた。さうして、手もとの盃をぐつと一つ飲み干して、手酌でつぎかけた。

「おや、これは失禮」さう言つた聲も言葉も、それが咄嗟に

つて見るほど。

も一度いままでの座蒲團の上へ坐りながら清吉は時計を出して見たが、言つた——

「どうれ。もうそろそろ歸館にしようかな。——外山家の二階へ御歸館ぢや佗しすぎるが」

「御歸館？」さう言つて邦子も帯の間から小さな時計を出して覗いた「兄さん。いけない。まだ早いぢやないの。十過ぎたばかりよ。もう一時間は歸さないわよ。——話も少しあるの。その代り線香は自腹を切りますよ」

「これや、きつい達引だな。さういふわけなら二三日居つづけをしてもいいよ。ところが、線香は自腹を切る代りに、よく聞いて見ると話といふのが金貸せぢやないのかい。ハ、ハ、ハ」

「違ひない。たうとう見抜かれちやつた」

口さきではやつぱり常談を答へたものの、邦子はひどく眞面目に見えた——見てとつた清吉に哀れを感じさせたほど。

さうして清吉が言つた——

「話といふのは何だい。言つてごらんよ」

「ええ。それともまた今度にしようか知ら。兄さんは酔つぱらつてゐるしわたしも酔つぱらつてしまつたもの。——また来てくれるはね、兄さん」

「約束はしないがそんな氣持になればね。何しろその話とい

出た時、清吉にはいかにも、プロフェツシヨナルに悲しいものに感じられた。それをきつかけに清吉は氣を變へて言つた——

「ところで、百合香姐さん（とわざと邦子をさう呼んで）御稼業御繁盛ですかね」

「へい。おかげさまでほつほつ。それに御覽のとほりのいい旦那がありますからね」と邦子も一とほりの常談を言つたが、ほんとうの聲になつて「わたしなどね、兄さん、まだしもむかしの事もあるのだから知らせてくれる御座敷もある方よ。新らしく出たての子などはそれや可哀さうなものよ、何しろこの不景氣でせう。……兄さん大分飲むぢやないの。あとで發しますよ——さすがに兄さんだけに心配だね、百合香姐さんも。」

なるほど、清吉はいつの間にかひどく酔つてゐた。便所のなかでふと「影は妹のごとくやさしく」といふ句を思ひ出して「影は妹のごとくやさしく」「影は妹のごとくやさしく」と何度も何度も口のなかでつぶやきながら、部屋にかへる清吉の足もとではよろよろしてゐた。けれども頭のなかにはつきりしてゐた。——「影は妹のごとくやさしく」全くいい句だな、ほんとうのさびしさに逢つた人の言つた句だ、などと思

ふのを聞かせよ。折角言ひかけたのだ。氣になるから「清吉はすつかり尻を落ちつけた。清吉は何となく邦子自身の相談のやうに感じたのを、邦子にもその心持が通じたと思える。

「言ふわ。——だけど、わたし自分のことぢやないのよ。どうせわたしは自分のことなどは見切りをつけて、成るやうにさせてゐるのだからね。澄江さんのことよ、兄さん。この間、ひよつくり來たの、澄江さんがさ。わたしおどろいたわ」

「へえ、手紙のやり取りぢやないのかい？ 澄江が？ ひとりで？ これや面白いね——令嬢が藝者のうちへ訪問するのだ 新派の一場面……」

「兄さん常談ぢやないわよ」邦子は酔つぱらひらしくなつてゐる清吉を、わざと強さうな聲で、しかしほんとうにたしなめながら「兄さん、澄江さんは涙をながして話しましたよ。兄さんの心持はどうしてもわからないといふの。さうしてほかに相談をする人もなしわたしのところへ來たのですつて、だからわたしは言つたのです。——今までのわたしならそれやわたしからも話をして何とか相談をして上げないものでもない。けれど、わたしもかうなつてしまつちや、もう兄さんのところへ出入りをしていいものだから悪いものだからもわからず、遠慮をしなけれやならないとなつて見ると、かげな



がらの相談は出来るまでも、それより一そ御自分で兄さんに當つてごらんなさいつて。——でもね、澄江さんのおつしやるには、何が何でもそんなことは自分では出来ないのださうです教育のある人といふのは不自由なものだわね。——澄江さんのつもりでは兄さんも私になら好いてみるとか嫌つてるとか打明けたところをおつしやるだらう。それをあけすけに聞いてほしいといふのだわね。つまりは。一たい、兄さんは好き？ きらひ？ その點だけでもあつさりと言つてごらんなさいよ。ね」

「好きだね、あつさり言へば。前から好きだ、今でも嫌ひぢやない。それにきさくな性質のくせに、そんなことを自分で直接言へないところも僕には悪くない」

「それぢや何が悪いの？ 器量？」

「器量もさう悪くはあるまいぜ」さう言ひながら清吉は、澄江がさびしさうに片頬笑みした顔つきを思ひ出した。

「いや、悪いやうではあるが僕にはもつと美しくてもいやな顔立があるさ。それに顔なんてものはどうでもいいさ。——不愉快でさへなけりや。器量のいい女房を持つのは、景色のいいところへ住むやうなものさ。たまに来て見る人はひどく感心する。住んでゐる當人にはいつの間にか何でも無くなる」

「それぢや、氣ごころ？ あの方は氣ごころよしですよ。何

「憑きものが！ これやうまい事を云つたな」

清吉が思はず挿んだ言葉を抑へて邦子が言ひつづけた。

「……さうよ、お京さんのことよ。でね、私は答へたの——憑きものは落ちないかも知れないけれど、一たん別れた人とどうなどといふやうな氣性の兄さんぢやありません。それはわたしがよく知つてゐる。それにもとの人たちだつて皆もうそれぞれに旦那さんも持つてゐるのだから、つてね。——さう言へば兄さん、千駄木町がお嫁入りすることは知つてゐる？」

「へえ？ 知らないよ」

「私のところへ逢ひに来たわよ。もとはあんなに仲が悪かつたのに、わたしがかうなつて見ると話に来るのね。——邪推しちやいやよ、誰も兄さんの悪口など言やしないのだから……」

千駄木町といふのはもと清吉の妻であつた女のことである。いま邦子から聞くとその女が今度再縁するさうである。邦子もよくは知らなかつたが、相手は何でもキヤメラマンか何からしいので、結婚すれば遠方へ——といふのはアメリカぢやないか知ら、ともかく遠くへ行けらしいといふのである。さてさうと決つて見ると未練でも出るか、とさう邦子

よりも氣ごころが一番いいわ」

「氣ごころも悪くはないさ。……氣ごころのいい女と住むのは聞取りのいい家へ住むやうなものだな」

「そんな餘計なことはどうでもいいわよ。——はつきりおつしやい。氣のない人ね、煮え切らないよ、兄さんは。今に始まらないけれど。氣が進まなれや進まないで馴れやいいぢやないの。——もうお酒など飲まなくてもいいぢやないの。みんな空ですよ（と言つて邦子は清吉の手から盃をひつたくるやうに取上げながら）。……澄江さんの言ふのはさ、嫌はれたものなら嫌はれたで、わたしだつても厭々でも行くところはあつた。自分では無くとも家ではさがしてゐる。はつきり厭だと言はれればあきらめもつく。それならそれで家のいふとほりにする。唯、好いてみてくれるものやら嫌はれてゐるものやらどちらだかどうしてもわからない、それが苦しい——と、まづかう言つて泣いてゐたの。なるほど兄さんの話を聞いて見れば澄江さんのたよりない氣持も無理ではないわよ。それからまた澄江さんはかういふのよ。——兄さんの態度があんまり煮え切らないやうだから、もしや、兄さんがまだむかしの誰かを忘れ兼ねて何かそんな人と交渉をでも持つてゐるのぢやあるまいかつて。わたしは、だから答へたのよ。それや心持の上ぢや或はまだ憑きものがおちないのかも知れぬ……」

が常談半分に尋ねた時、清吉が「いや、もう澤山（と手を振つて見せてから）未練どころか、いい氣持だ。安心をした」と答へたのは何の嘘もなかつた。事實、清吉には難題であつたあの女も、これで立派に卒業したと清吉自身で思つた——清吉は日ごろから「戀愛學校」といふ言葉を持つてゐたが、これは戀愛を學ぶ學校といふ意味では勿論なく、戀愛は人生を教へる學校といふつもりであつた。全くあの女を通して清吉は澤山學んだ。清吉自身はもう濟んだつもりであつたが、しかしその上に先方でもさう型がつくとあれば、本當に清吉も吻とする。卒業したと清吉が思つたのはそのころであつた。さうして今更よけいなことだが、今度はうまくゆけばいいと思ふ。がそんなことよりも邦子から聞けば、あの女は時時銀座で清吉のうしろ姿を見かけると、いつも新らしい洋服を取交へて着てゐると言つたさうだけれど、いつあの女に銀座で見かけられたか知ら——そんなに度度。本當に清吉はついでこの間まで毎日のやうに銀座あたりをうろつき歩いてゐた。お京のことがあつてをまり徒然だからそんなことをしてゐたのだが、お京との噂がひろまつてゐることに氣がつくと、うつけてしよんぼりとした自分を見られまいと、知つた人などには逃げ隠れしながら歩いてゐたものを、あの女がそんなに度度見つけたのか知ら。ちつとも氣がつかかなかつた。そんなふうだとすればあの惨めな、——見かけが立派な



様子だけにその惨めさが一層目立つであらう自分を、何時、誰が、何處で見かけたかも知れない。それにしても、おれはそんなにもほんやりと歩いてゐたら知ら——さう思ふと清吉にはこの事の方があの女の再婚よりはつと問題になりさうな気がする——あの時はあれより外に仕方なかつたのだが男にはもう少しは見えがあつてもいい。……そんなことを考へてゐる清吉を邦子は何と見て取るかも知れない。清吉は言つた——

「それでお前は何かい、また千駄木町に逢ふかね」

「ええ、遠くへ行くときまればいづれお別れに一緒に御飯でもたませうと、ついこの間電話がかかつたから、約束をしてよ」

「それなら、もし噂が出たらおれのことも言つてくれ——喜んでゐるつて。……だがわざわざ言ふにはあたらないな。……あ、然うだ。それよりはね是非言つてもらひたい事がある。夫婦別れの時にいろいろ向うの荷物へ紛れて行つたものがあるのさ。何つまらないものばかり——それに欲しいものは取つて置いてもいいとも言つたし。ただね伊萬里の——焼物の名前だよ——古い伊萬里の小さな手あぶりがあつたのだ。煙草盆の代用にしてゐるのさ。オランダ模様うつしらしく妙な異人の繪があるのだ——お前も知つてゐるだらう。さうだ、白地に藍で描いたのだ。あれさ。あれは私の氣に入つて

せば何よりさ。だが妙なことを言ふやうだがおれは苦勞をした人間がすきだ。苦勞をしなかつた人間は色のあざやかな南國の大きな花だし、苦勞をした人間は色はつましく形も小さいが香の高い北の方の花だ——か果物だか、何でもそんなひねくつたことを言つた人があるが、その苦勞をして來て心のねぢくれなかつた人間をおれは好きさ。……

「……今ふいと思ひ出したが、おれは昔、女房にすればよかつたに今になつてさう思ふ娘をひとり知つてゐたのだがね。わき道へ這入るがまあお聞きよ——この話は、邦子、お前にもまだ始めての筈だ。昔さ。おれが二十二のころだ。下宿屋の女中だつたよ。が、しとやかな娘で、さうさ、そのころ十八だと言つた。下宿の女中にしてはあまりしとやかだからよく聞いて見ると、親も兄弟も無いので或るお屋敷で育つてついでこの間までそこで奉公してゐたと言つた。なぜそこをやめて來たと聞いたら、わけがあつて——いやなことを言はれたからと答へただけだつたが、主人に口説かれたとか、妾だといふ噂が立つたとかそんなことではなかつたのかな、柄の大きな美しい子だつた。それがどうしたわけだかひどく僕を好いてね。下宿の女中をしてゐても末が案じられるから看護婦になる。その試験を受けるから本を教へてくれと僕に言ふのだ。それから僕の靴を閑さへあれば日に三度ぐらゐも磨くのだ——自分でできまり悪げに笑ひながらさう言つたつ

ゐるのだ。何でもないものだが好きなのだ。多分向うへ行つてゐるのだと思ふ。あれだけは未練があるのだよ——僕のやうな暮をしてゐると自然とああいふものが身のまはりのなくさめになるのだから。これは是非忘れずに言つておくよ。何ならお前持つて來てくれると尙ありがたい」

15

邦子は再び澄江の問題に返つて、よほど熱心な態度で、それに執着してゐる。それは清吉のさびしさを澄江が救ふだらうと邦子は思ひ込んでゐるからである。邦子のころづかひは、酔つぱらつて來てゐる清吉にもひしひしと解る。しかし、清吉は言つた——

「無論、そのとほりだ——澄江がいやで他にどういふ女もあるわけぢやない。だからおれは澄江にはすまなくはない。それにしても澄江のどこが氣に入らないかといふだらう。そこだよ。自分でもよくは判らないのだ。ただまあ、お前も言ふとほり僕にはまだ憑きものも落ちないしさ。ただ心配はするな——その憑きものも今では立派におれの詩の世界のものになつてゐる。あの女はおれに本當の愛を教へたのさ。だからおれの心のなかにはいつでもおれと一緒に生きてゐる。そこで澄江だが、あれはちゃんとした令嬢だよ——人生の不仕合せといふものは未だ知らない。知らなげや一生知らないで過

け。それから部屋へうるさいほど這入つてくるのさ。をかしいことにはその都度いつも手拭で姐さんかぶりをして箒を持つてね。掃除に來たといふつもりだらう。そのくせいつでも僕の机のそばへ來てもぢもぢしてゐるのだ。人の足音でもすると箒を持つて立つ。いま思ひ出してみるといぢらしいね。だが、そのころ俺は未だ若かつた。或る綺麗なお嬢さんにうつとりしてしまつてゐてね。その可愛い女中はただ莫迦莫迦しくをかしかつた。さうしてそれつきり忘れてゐたさ。ついでこの間それを思ひ出したよ。——或る外國の小説を讀んでゐるとね、そのなかの男が相手の貴婦人に云ふ言葉がある——「私はむかし或る娘を知つてゐた。それや洗濯屋の娘で、洗濯の註文と一緒に度度文をどけたつが、私はその折釘流の文字を見てをかしかつた。こんな字を書く娘に思はれるのが恥しいやうな氣がしてその折釘流の文字のなかにまごころがあらうなどは夢にも思つて見なかつた——私はまごころといふものは襲のたくさんある絹の衣物の下にだけつまつまれてゐるものと思ひ込んでゐた。何しろ私は若かつたから」をそんなことを言つてゐるのさ、その小説のなかの男は。讀みながら私もふいと思ひ出したのだよ、あの下宿の女中を。——いかにも、「何しろ私も若かつた」いまあの娘がゐればいいがな。どうしたか知ら。さうだ、お京とは同じ年だな。——おれは親も兄弟もないといふところが、思ひ出してへん



に氣に入つてゐるよ、今では……  
「澄江は令嬢だよ。素直な令嬢だよ。赤木清吉の第三人目の女房にならなくとも行くところはいくらでもある。家で捜してくれるところへ行つて見てはどうか知ら。それやいざとなれや赤木清吉たるもの些は淋しからうさ。だが……」

「……兄さんそれぢや斷るの？ 初めは貰つてもいいやうな顔をしてゐたくせに。——あ、さうか。兄さん。仕方がなけや外へでも行くといふ澄江さんの言ひ分が兄さんの氣に入らないのぢやないか知ら、——男といふものは我儘なものだからね。さうぢやない？ 兄さん」

「外の男のことは知らない。が、おれがどうしてそんなことを言ふものか。さう言つてゐる澄江の心持は本當だとも。本當のことは他人にもまつ直ぐにわかるよ——いとしいほどわかる。或る人がね、或る青年に戀を打ちあけられて『それぢやその人のことを君はどれくらゐ思つてゐられる？』と問はれた時、その青年が『さうですわね（としばらく考へてみて）まあ五分ぐらゐ』と答へたさうだが、いいへ答さ——澄江も、あの人と一緒になれなけや死にますとも一生涯で暮らすとは言はないところがいい……」

「いいところづくめの澄江さんを、それぢや、兄さんは何故いやなの。わからないわね。——赤木清吉の三人目の女房など兄さん自分でひねくれてゐるのぢやないの——苦勞をしろ何かしら下さるだらうて。そこで従つてさ、幸福を追うて赤木清吉の妻となるべからずさ。——そんな男のところへ親だつて娘をやりがるまい。當り前さ。おれに娘があつてもおれもやらない。さういふ親をふり捨てて、人の世の幸福を無視する清吉のところへ来るのは、これや全く考へものだ。過あやまちを改むるに憚るなかれか」

煙にまかれたやうに邦子はぢつと清吉の顔を見てゐたが、邦子は靜かに言つた「それぢや、澄江さんがそこまで決心がついて來れば、いいの？」

「さう。——先づ然うだ。だが人にうっかりそんなことを要求出来るものか……」

「それぢや兄さんはひとりの方がいいといふの？」  
「それがさ、何もかもわからないのだ！ 信ずることがないからさ。だからどんな些細な事だつて考へ込んでしまつて手も足も出ない。澄江のことだつてもそのとほりだ。大根おほねがぐらつてゐる。澄江のことは宿題にしてくれ。お前がぐどく言つてくれる氣持は解るさ。ありがたい——澄江の心はもとより。……おれはもつとしつかり自分の正體を突とめて見る。ねえ、ただ今のままでいけないことだけは、これだけは全く確だ。おれは窓を閉め切つて鏡戸までおろしてゐる——譬へて見ればさ。さうして置いて自分であはうす暗いやな部屋だとこぼしてゐる。暗いのがいやなら窓を開け放せばいい

てひねくれたのよ。兄さんは」

「——さうさう性急に横槍を入れちやいけない。いふだけのことを聞けよ。——苦勞をしてひねくれたのぢや折角の北方の果物が腐つてゐるやうなものだぜ。——吾輩、たとひ苦勞はしたとしても決してひねくれない。ただね、年はとつた。見てくれ、この頃では三日に一本の歩合で白髪になるさ。年をとつて女にのぼせ上らないのだ。誰だつておれを四十近いといふぜ。——おれはもう人生に怯おそえてゐるのだ。こんな年をとるつもりぢやなかつた。「この秋や何で年をとる雲に鳥」か。「この秋や何で年をとる雲に鳥」。年はとつた、だが壯心を失つてゐるものか……」

最後にもう一本といふ酒で清吉はひどく酔つぱらつて、どうしたのだから思ひがけなく雄辯になつて來てゐる。清吉は言ひつづけた——

「澄江に言つてくれ。——いや、今度逢つた時自分でよく話し合ふよ。おれはついこの間まで人生の幸福を望んでゐた。だが今では幸福などはもう飽き飽きした——まだ味はないうちからうんざりする。高い枝の酸っぱい葡萄だからさう思ふのだらう。幸福もいいとも、幸福であれ——だ。だが赤木清吉には幸福は向かない。あいつは（と清吉は自分のことを第三人稱で呼んで）めちやくちやな性格だ。神様はあんな奴には、幸福はわけて下さらない。その代りにや——然うだな、

いのだ。本當に暗いのが好きなら黙つて暗がり愛してゐればいいのだ。暗いのだか明るいのだか外も見ないで、自分で閉め切つてそのうす暗さをかこつことを楽しんでゐる——間違ひだとも、態さまを見ろさ。……一流の詩人といふ名譽か。名譽もいものさ。只ね、名譽はおれが侮蔑してゐる連中だつても享有してゐるよ。目ざすものをしつかり見つけて、一日とそこへ近づいてゐる喜びだね——持ちたいのは——

清吉は突然に黙つた——それから目を伏せて火鉢のなかに林立してゐるロード・パイロンの吸口を見つけると唐突に言つた。

「おい、邦子。革命といふことがあるのだぜ！ お前知つてゐるかい。知らないだらう。知らなくつて幸さ。知つてれや柄になくおれがそんなことを言ひ出したのを笑ふだらうぜ、それとも怒るかな。何しろ、邦子。革命といふものがあるのだぜ。藝者なんてものは、その時には無くなるのだよ。借金などは踏み倒してもいいのだぜ。好きな男といつても一緒になれるんだぜ。それやどうだか知らないが、ともかくもおれのやうな煮え切らない人間は居なくなる。それからおれのやうなひとりぼつちの人間は居なくなる——今に誰でも「兄弟」と呼びかけ合ひさへすれやどんな心持でも分り合ふのだとさ。いいな！——嘘でなけりや尙いいな。で、さういふ時代が來るために革命といふものがあるのだとよ！ さうなれ



やおれだつてそれまでのうちに——といつて何時のことか知らないが、明日の事だつたら間に合はぬかも知れないが、ともかくしつかりよく考へて置いてこの世の思ひ出に革命軍の一兵卒にならぬとも限らず、さてはそんなものをよそにして西行法師のやうに散る花に諸行無常を觀するかも知らずさ、それとも佗びて住むかね、芭蕉のやうに。つまりは伊萬里焼の手あぶりなどと同棲するのだが。何でもいどうかし今のところを突き抜けるのだ……などと、言ひながら一生をうやむやに暮すのだらうか。つまらないな。けれども人間はざらにある。その珍重でもない人間のひとりが何をしでかさうと神さまには何でもなからう——だが人間にとつて見れば、一生は一つだから、さて何でもかまはずやつて退けるといふわけにはゆかない。思へば神さまは馬鹿だよ——折角こしらへた人間といふからくりはこれやどうも出来損ひだぜ——殊にこのおれなどはさ——

清吉はべらべらとしやべつた。何を言つてゐるのだから自分でもよくはわからなかつたし、呑まれてゐるやうにぼかんとして控へてゐる邦子を見るのをかしく氣の毒でもあつた。それから自分のことを「この酔つばらひ奴、ひどく圖に乗つた調子だな」と氣づいてもゐた。それでも、清吉の氣持は不思議に冴え冴えとしてゐた。

「お前も今日は飲んだよ。だが酒はおよし——けれどもこの言葉は清吉の喉もとで消えてしまつた。清吉が噛みころしたのだ。そんな言葉をわざわざ言ひ現すのは清吉の趣味に合はなかつたから。その代りに清吉は言つた。

「ね、百合子さん——ぢやない百合子さん。君はお化粧は下手くそだよ。素顔の方がよつぽどいい。白粉にしても眉を引くにしてもあまりきつぱりと硬すぎるのだ」

「さう」と邦子は素直に答へてから思ひ出したやうな蓮葉でつけ加へた「いい事よ。どうせ兄さんに惚れられようと思やしないのだから、それこそおせつかいだわ」

「はい！ これは失禮」

清吉と邦子とはその横丁を出て自動車の待つてゐる表どほりまで来た。自動車のなかへ這入つて行く清吉には何も言はずに、送り出た邦子は、運轉手に言つた——

「愛宕下よ。まつ直ぐとつとへ行けやいいんだわ。でも急いで衝突などしなくてもいい事よ。これでも兄弟の出来そこなひだからね」

清吉のひとり乗つた自動車は駆けて行く。ふと外を見た清吉は街の灯がぼやけて光が蜘蛛の巣のやうに見えるのを感じた。目のなかがかくしゃくしゃして來てゐる「はてな？ おれは泣いてゐるのか知ら。どうして？ 何のために？ 誰のために？ 何も今更に泣くことは無かつたのに。でも、やはり

時計は十一時半のところをすこしすぎてゐた。

「どうれ、いよいよお歸りだ」清吉は立ち上つた。

「ちよつとお待ちなさいよ。いま自動車が直ぐくるわ。——だつてそんなに酔つばらつてしまつてひとりぢや歸れやしないわ」

「さうかなあ——そんなに酔つばらつたか知ら。ぢや仕方がない。ブルデョアになるとしようか」

清吉は火鉢のわきへしやがみ直しながら、まだ残つてゐたコップの水を飲み盡してから改まつた口調で言つた——

「お前が言ふまでもなく、澄江のことは僕もよく考へるよ」

外へ出て見ると風が出てゐてその寒い夜風は清吉の頬に氣持がよかつた。清吉は帽子を脱いでしまつてその序に空を見上げた。

「やあ、いい月夜なのだ」清吉は夕方のあの一面に重く垂れさがつてゐた雲を思ひ出して「おれの氣焔で雲は吹き飛ばされたのかな」

邦子は、けれども何とも答へなかつた。酔の醒めぎはなのであらう。ふさいで見える。清吉はその邦子に言ひたかつた

泣いてゐるらしい。泣いてゐる。——おれのなかのセンチメンタリストが泣いてゐる。が、おれは泣いてはゐない。ゐないとも——そんなふうに自分の心のなかで呟いたが急に大きな聲で——

「おいおい！」

と運轉手を呼びとめた。しかしその聲で運轉手が疾走をゆるめた時に、清吉は

「いや、よしよし、何でもなし」

と言つた。——清吉は直ぐに愛宕下へは歸らずに、どこでもいいそこら中を精一杯走らせて見ると運轉手に言ひつけようとして、しかし莫迦な！と思ひかへしたのであつた。さうしてただ酔つばらいらしく呟いた——「佗しすぎるよ、まつたくこの二階は。」ふと向うから來る自動車を見て擦れち

がひざまに清吉は、あの車のなかにはどんな人間がどんなことを考へながら乗つてゐるのかな？ そんなつかぬことを思つて見て清吉は行き過ぎた車を見返つた。何もよく見られなかつた。清吉は自分の車のなかを見まはしたが、今始めて氣がついたことには、この車は清吉が時時乗つた事のあるポロ

車ではなくて氣恥しいほど大きくもあり立派でもあつた——これやおれが乗るにはもつたない。身のまはりに藝者とお酌とをうんと積み上げて乗り込む車だつたに。その立派な車の正面に小さく箆め込んである楕圓形の鏡を、清吉は何氣な







とがある。それだから私は他人から金のことで世話になつても大して氣にとめない。それでゐて自分は原稿料の値上げなどを申込むことがある。事實私は金そのものを欲しいのではないのだ。ただあんまり馬鹿にされたくないからだ。さうして今の社會状態では金を餘計に仕拂ふより外には敬意の表し方が外になさうに思へるが、どうであらう。外に途があるなら私は尊敬やら同感やらの方はどつさり貰ふことにして原稿料の値下げをしてもいい——などと私はそんなことを考へもする。現に一遍その事を言つて原稿料の値上げをしたことがある。然う、然う。その時、活動家として有名なその雜誌社長が私の理窟を聞いてから言つた——

「原稿料のことはそれぢやさういふ事にして置きませうよ。……だが、私にやつぱり金をいやしむ氣にはなれませぬね。金、金と一口には言ふがあれや自分の汗と膏と智慧に對する報酬であつて見れば、それを重んじないといふのは自分の汗と膏と智慧とを輕蔑するやうなものですからね」

「さうですとも。そのとほり」と私はその時答へた「その上、我々の仕事ではただ汗と膏と智慧とだけぢやない時たまには——ほんの時たまにはその上に涙までにじませてゐることもあるのです——それだけに僕は、そんなものの報酬として金より外に仕拂ひ方がないといふ今の社會の狀態が不滿なのですよ」

れや私とても百萬圓なら欲しい。百萬圓のなかになら私の夢も生まれる。ところで三百圓ばかりの金を持つたのでは反つて氣がふさぐくらゐのものだ。金を有難いと思へばこそ使ふことも愉快なのであらう。有難いと思へない罰には使つたつて一向面白さうな使ひ道とてもない。こんな時に私は、自分にも慈善心でもあつて、また同時にそれが善事だと思へるやうな單純さを自分が持つてゐたらさぞ助かるだらうと思つたりする。實際、私は慈善などは御免だ——私の場合に見れば、自分で有難くないもので人を有難がらせるのはへんだ。

そんな金を私は机の上に置いて、その夜、私はふと一週間ほどすれば自分の誕生日だといふことに思ひ當つた……

さうだ！ この金で一つ自分の誕生日を祝ふことにしよう。

さう思ひつくと、金の使ひ道がわかつたので私は三十分間ほど活氣づいてゐる自分を見出した。この金があれば、それほど悪くもない支那料理を一卓半買ふことが出来る。すると、私は十五人ぐらゐなら御客が出来るわけである。そこで私は自分の知人を十五人数へ上げて見た。ひとりびとりの名前をこゝへ書き上げて見たところが、諸君の御存知の人は先づあるまい。といふのは、これがもし文士仲間でもあるから十五人が十五人とも名の知られた人であるかも知れない

「君もいつの間にか大ぶんプロレタリアかぶれがして來ましたな」

「どうして！ どうして！ 僕はブルジョアだ。——ブルジョア根性の爛熟だ」

私はそんな自分を無論えらいなど思つたことはなく、ただどうも人並みのことを喜べない損な性質に生れて來てゐるやうに感ずる——この損とても嚴密に考へれば自分では氣づかずともきつと別の何かで償はれてゐるのであらうと漠然さう思ふから、私も大して愚痴は言はないが。ともかくも私は金さへ持てば使つて仕舞ひたくなる。さうしてよく使ひ道に窮することがある。若しこれが妻子があるとしてもいふのなら私だつて或は子孫のために一頃の良田をと慮つたり愛妻のため一装の輕羅をと思ひ立つたりもするだらうが、不幸にもさういふものを持ち合せないからには、やつぱり自分の爲めに使はなければならぬ。そのくせ私といふ男は妙な性質で、金のない時には欲しいものをよく思ひつくくせに、いざ金があるとなるともう、金の無い時に考へて置いたものが欲しくなくなつてゐる。といふのは、日常生活は下宿の二階でも満足する私だ。その私の欲しいといふものだからどれこれもこれも一日も缺くべからざるといふやうな品物ではないのだから。

私は金を持つと生々として來る人間を見て羨しく思ふ——それが、生憎と私は同業者仲間には仲のいい友達もない。だから私はその時私が指を折つて數へ上げた人々の名はこゝへは記さないが假に、A、B、C、D、E、F、G、H、I、J、K、L、M、N、Oとして置かう。私はそれらの人を私の御客として假想して見て、これが私の誕生日の御客に缺くべからざる賓客といふほどの人も見つからなかつた事を、今更さほどにさびしいとも思ひはしなかつたが、さてひとりひとり吟味して見るとともかくもその人と私とはそれぞれに或る共通の世界を持つてゐる友人であるにしても、かうして一堂に集めて見ると、まだ一度もそんな機會もなかつただけに、この十五人ではどうも統一した空氣が出來さうもない。といふのはAは貴婦人だと思ふとBは貧乏な畫學生だし、Cがお医者と思ふとDは小學校の先生の奥さんだし、Eは雜誌記者だと思ふとFは行商人だ。Gは學生だと思ふとHは床場の職人だ。これではどうしたつて打解けて食卓をとり圍めさうもない。私だけはそれでいいとして他のそれぞれの人は迷惑千萬だらう。——ここまで考へてくると、私は無論この思ひつきを直ぐに抛つてしまつた。——何しろもと／＼さう根底のあつた企ではないのだから。

私はうんざりしても來たし、馬鹿々々しくもなつて來たし、そればかりか悄氣でも來たので、そこで机の上にあつたサツ入を机の抽斗のなかへ追ひのけるやうにたたき込んだ。



それから、このとほり必要もない寧ろ盗れでもした方がよつ  
ぼど役に立つ金でありながら、私はその抽斗へは錠を下し  
た。別に理由はない。きつと金を大事にするといふわれ、  
社會の習慣や祖先の因襲が私にもこのつてゐて不用意のうち  
にそんなことをさせたのであらう。だとすると、つまりは、  
諸君がこの話を讀みながらこれや何といふもつたない怪し  
からんことを書いてゐるのだ！ といふ氣がするかも知れな  
いのと全く同じ理由である。

……さう氣を腐らせなくともそのうちには、誕生日までに  
は何かもつと氣に入つた金づかひの方法もあるさ。と、さう  
私は自分を慰めながら、さて、この間の晩の散歩に買つて歸  
つたオルゴールのネヂをかけると、かけつ放して床のなかへ  
這入つてカルモチンを八つ飲むとオルゴールの歌ふのを子守  
唄にして寝た。

デルスニス氏將來第二回フランス美術展覽會の紹介的批評  
を、私が新聞紙で見たのは多分九日の朝——といつても、い  
つものとほりお晝であつたと思ふ。私は急に思ひ立つて展覽  
會を見に行くことにした。空の明い天氣で、そのことの方  
が先に立つて、自分の誕生日などといふことは忘れてゐ  
た。が、私はすぐにその事を思ひ出して、もしその展覽會に  
私が買へるやうな價格の、氣に入つた作品でもあれば有難い

りなつかしく相對した一つの瞳であつたやうな氣がする。そ  
れは海岸の小ぼけな宿屋の一室へ疲れた體を座らせた旅人が  
窓外を見た時の瞳である。その旅人の瞳を通して私も亦「ユ  
ー島」を見た。太陽のツワイライトでないならば、靈のツワ  
イライトであらう。もし空が曇つてゐないのなら心が旅愁で  
曇つてゐるのであらう。繪はうすれた光のなかでほやけてゐ  
る。色も形も朴訥ではあるが、その詩情のために繪は豊かだ  
ある。油繪で描かれた東洋の文人畫の倣である。ラブラアド  
といふ人の作は、見てゆくとどれもこれもそんな氣持が溢れ  
てゐた。私はふとラブラアドの畫を欲しいと思つた。ただそ  
の繪は私が持つてゐるだけでは金が足りなかつた。尤もそれ  
に足すぐらゐる金は私に出来ない事はない。ただ未だ書くあ  
てもない原稿で金を借りなげやならない……

私はラブラアドの諸作品の前を過ぎ去つて、外の人々の作  
品を目で味ひながら歩いたが心の隅ではやつぱり「ユー  
島」を買ふ事を考へつづけてゐた。

私は場内にある喫茶店のなかへ這入つて足を休めてゐた。  
するとそこへ這入つてくるなり、私の名を呼んだのはもう五  
六年も會はない古い友達であつた。畫家で一ころはよほど仲  
よくしてゐたのが何となく疎遠になつてしまつた間柄であつ  
た。しかし、むかしの友情はさすがに私たちを一つのテーブ  
ルへ案内した。

さて展覽會場でさまざまな繪を見てゐるうちに私はたつた  
一つ、氣に入つた繪を見つけた。小さなスケッチだ。それは  
ラブラアドといふ人の手になつたもので「ユー島」といふ畫  
題であつた。どんな畫家だか私は知らなかつたが、この畫家  
の繪は水彩と油彩と合して十二三はあつたらう。水彩は油彩  
よりも前の室にあつたが、その水彩を見た時から、ちよつと  
私の心に入れた。手腕のある人といふよりは心持のある畫家  
らしいと私は感じた。それから見まはつて來ると私が目をと  
めたのはこの「ユー島」であつた。さういふ畫題だが、私に  
は島の風景も何も描いて無い——寧ろ「旅愁」と言つた方が  
よくはないかと思へる。事實、この茶つぽい黄色の畫面には  
景色より部屋の壁の方がよけいに描かれてあつた。さうして  
その壁のまんなかの海に開かれた窓をとほして何だかぼんや  
りと舟をつないだ水際やらその遠方に樹か建物だかそんなも  
のがあつた。このとほり取留めのない構圖ではあつたし、そ  
れに部屋の隅にかかつてゐたのだから、恐らくあの會場を見  
た多くの人はそれを覺えてはゐまい。一たいその畫家が地味  
なところへ、就中、その繪が一番くすんでゐた。それなのに  
今までいろいろの繪を味ひながら見てゐた私の目は、「ユー  
島」の前まで來ると、たとへば知り合ひの顔を遠くから見か  
けでもしたやうな氣持で思はず瞳を引き入れられた。さうして  
私の瞳に觸れたそのものはその瞬間、畫ではなかつてやつぱ

「ラブラアドといふのがあるね。あれやどんな人だい？」

「ふむ、君には氣に入つたかな。なるほど或る心持はある  
ね。やはりインテイミストといふのだらうよ」

「インテイミスト？——何といふことだい？」

「さうさ。親密といふ字から來てゐるのぢやないか？ 神祕  
ともちがふし——字引を引いてごらんよ。——ルドンなどが  
その代表者だらう。」

「へえ？」私にはそんな通なことはわからない。ただこの友  
達のいふのを謹聽するだけである。

彼は言つた「ラブラアドか。悪くはない。が、ヴラマンク  
の寫實的な底力はない。ドランの重厚な眞實も、ルドンの深  
奥な幻想もない……」

「さあ、それや……」と私は彼の言葉を遮つて置いてからウ  
エイトレスに勘定を命じながら言ひつづけた「それやさうか  
も知れぬ。ただ僕はあの幽情がいいのだ。それに苦もなくや  
りつばなしに描き上げてあるところがね——氣韻がある。俗  
でない」

「ふん」

彼は一應私に同意したらしくもあつた。さうでないやうに  
もあつた。さうして私たちがその喫茶場を出た時に、彼は私



の言葉を實驗して見ようとでも言ふやうに、彼自身で先に立つてラブラアドの繪の方へ歩を運び返した。

彼はしばらく佇んでラブラアドを鑑賞したやうであつたが言つた――

「いかん。いかん。」

「？」私は彼の顔を見入つた。

「いや。繪は悪くはないさ。だが、君がこの繪を手に入れたといふのはいかん。これや君、そつくり君の世界ぢやないか。自分で自分を見惚れるやうなものだ――己惚鏡だぜ。君は何故ヴラマンクのあの……」と言ひながら彼は、直ぐ近いところにあつた一つの繪を目顔で示しながら「あの静物などを欲しいと言はないのだ。自然の持つてゐる根強い優しさ懐しさがかがやき出てゐるぢやないか。それに手ごろの大きさではあり……」

「ただ、高い」

「それにもう賣れて居る。……僕は必ずしも買ふといふ意味で言ふのではないのさ。鑑賞の目的からね。……もしヴラマンクでは甘さが足りなければ、フランドランはどうだい。見た？ 麥稈細工のやうな綺麗な色だが卑しくはない。何よりな事には、お祭の日の小娘見たやうにほがらかな晴やかな氣持がうれいぢやないか……」彼は雄辯に、さうして親切に語りつづけた。彼は私に自分とは反對な、自分を徒らに慰め

るといふよりは自分を養ふやうなものを薦めようといふのであつた。さうしてそれは確に悪い忠言ではない。彼は五六年もまるで逢ひもしないくせに、私の作品でも讀むのか私をよくくしつてゐて、私の安易な消極的な心持を見てとつてしまつてゐる。それがちよつと私の心を刺した。

「ヴラマンクに、フランドラン!? 似ても似つかないが、その二人を僕に薦める君の意見は僕にも解るよ」私は寧ろ少しばかりやけになつて言つた――尤も人ごみであつたから囁くやうな聲ではあつたが「一そ、それならデフェイはどうだ。あのギラ／＼する海や競馬場の畫家は。あれや君、生きてゐる刻々が無限の楽しみであるやうな、潤達な絢爛な、さうして傍目もふらない急進的な、男性的な……」

私がそんなことを言ひ出した時である。私たちは不意に聲をかけられて、ふりかへると、それは私たちの或る先輩の一家族がやはり見物に来てゐて、私たちを見つけたのであつた。

二十分ほど後に私はそれらの人々に雜つて、どやどやと會場から出た。何も買はなかつた。ただつひその考を決行しかねたのだ。――ひとりであつたら或は決行したかも知れない。私は自分が擇んだ繪は決して誰も争うて買取るやうな種類のものではないと信じてゐたから、この次にひとりであつてこつそり買つてもいいと思つた。

繪の展覽會を見て歸る途中では、すべての現實の風景も亦、繪のやうに見える。いい繪を見た後では私はよく少しばかり自分に持合せのあるさうして今は忘れ勝ちな畫興を呼びおこすのである。グレイハウンドといふこゝのレストランの酒場は、堀割に沿つてゐて、窓の下はすぐに水で、近いところにある大きな橋の下のアアチから船が現れて來た。船はゴンドラではない――下肥を積んでゐるやつかも知れない。それでも、もう夕方になつて水の上には向ふ河岸の窓の灯が流れてゐる。私はちつと窓の外を見てゐた。さつきからひとり頻りと飲んでゐた私の友達は、私の視線を追ひながら言つた――

「ターナーアぢや。ウキストラアぢや。フフ、水のほとりぢや」

その酔つばらひは大きな聲で白のやうに言つた。

「ハハ」と私も笑つた「水のほとりか」

私たちは五年ほど前の二人にだけ共通の言葉を思ひ出して、それを使つて見てよろこんだ。私が今日展覽會場で偶然出逢つた私の友人であるこの畫家は水のほとりを大へん愛してゐる――水のほとりに來ると情慾を感じるなど不思議なことを言つたことがあつたので、私たちはそのころの事を思ひ出して笑つたのだ。

「おい、お前はやつぱりいいところがあるよ。かうして逢つて見るとなあ。お前と逢ふとおれもやつぱり昔のとほりになるぞ。水のほとりぢや、ハツハツハツ」

私の友達はいつの間にか、本當にいつ酔つばらつたのだかも知らうかつかり酔つばらひになつて、さういふ精神状態に特有な親愛を私に示し出した。――何でも、彼はこの酒場が好きでよくやつて來るのださうで、然ら言つて今日も展覽會場を出ると遠く私をこゝまで誘ひ出したくらゐだから、場所にも馴染があつてから手取早く酔つばらふのかも知れないが、彼の酔つばらひぶりは加速度的に加はつて來た。

「おい。お前はやつぱりいいところがあるぞ。しつかりしろ。おい自重してくれよ。さう／＼いつまでも泣きごとばかり言つてゐちやいかん。さ。自重せい。自重せい。――俺は言つてしまふが、お前の作品なら何でもいいと言つて愛讀してゐる美人があるぞツ。……」

「ふむ? これや耳よりの話だね」私は相手が陽氣になればなるほど氣が減入るのを無理に我慢しながら受答へをした。――でもさう悪い氣持でもなかつた。

「こら。××××」と彼は私の名前を叫び立てた。私はびくつとした――といふのは私だつていくらか名前を知られた文士だつたから、外にも五六組も客があるこんなところで、今から何を言ふかわからないこの酔つばらひに自分の名を呼び



上げられたのはびくつとする。が相手は一向御構ひもなかつた「おい、××××」ともう一ぺん私をびくつとさせて「ね、お前をそんなに愛して見ぬ戀に憧れてゐる女は〇といふのだ。覚えて置け——忘れちゃいかん。お前のものなら何でも好きだとさ。だからおれもその女から借りてお前の作品は讀んださ。何だ！ どれもこれも安っぽい象牙の塔さ——と、さういふと〇は慍つたぜ。美人だよ。Sweet and twenty——嘘ぢやないよ。美人だ。あまりお前をほめるのでおれは忌々しかつたさ。で、おれはお前を知つてゐるといふので友達になつて貰へたのよ。綺麗な女だぞ、すばらしい！ おれは住所がわかり次第お前を紹介しようと言つた——お前が悪いよ。轉々として歩いて、おれに所を教へない。——おれはその女と仲のいい友達になつたぞ。——しように散歩をした。白髯神社の境内を歩いた。ぐるぐると歩いた……」

「また水のほとりかい」  
「水のほとりぢや。半獸神ぢや。ニンフにキスをさせろと言つたのぢや。振られをつたわい。慍つちやいかん。友よ、宥せ。お前にラブしてゐたニンフぢや——慍つちやいかん。振られをつたわい。フフ、フ、××××。お前なら許すと言つたぞ……もう駄目ぢや。おれを危険人物あつかひにしやがつた。フ、フ、フ。それつきりおれのところへはおさらばぢやと思つたら、つひこの間結婚をしをつた。しかも支那へ行つ

くともなくまいてしまつた私は、たつたひとりになると銀座の方へコツコツと歩き出してゐた。銀座をひとりて歩く小説を私は今までにあまり時々書きすぎてゐる。で、その晩の散歩とてもいつものと大して違つたことはなかつた。ただほんの少し違つてゐることと言へば、私が例のいつもよりは澤山に金を持つてゐたといふことだけであつた。私は早くその金を費ひたかつた——ラブラドの「ユ一島」を買つてしまへばよかつたに……私は、そんなことを思ひ初めると自然と今日の一日のことを回想して、つひ今のさつきあんな風に別れて来た酔つばらひの友達のことやら、その酔つばらひがしやべつた嘘か本當かわからない——いづれ多少は根據のあることだらうが——〇とやらいふ女のことなどを、別にどうといふわけもなく思ひかへした。私はふつと吹き出して笑つた

ピアノをたたくのぢや。  
キイが指を弾く官能ぢや。  
水のほとりぢや。  
命のただ中ぢや。

とさう言つた彼の言葉を私も覚え込んでゐたと見えて、いつの間にか自分の唇の上にもその出鱈目の文句が咳かされてゐたからである。「まつたく」と私は眞顔になつて自分に言つた「あの酔つばらひ振りは命のただ中ぢや。おれもあんな風に

てしまひをつた……」

酔つばらひはよろ／＼と立ち上つたが泳ぐやうな手つきをして、白のやうにまた唄ふやうに叫んだ——

「ピアノをたたくのぢや。  
キイが指を弾く官能ぢや。  
水のほとりぢや。  
命のただ中ぢや。

私は全く手こずつてしまつた。こんな質の悪い酔つばらひにならうとも知らずにこの男と一緒に誕生日の晩餐をしようと言ひ出したのだが。それでもやつと彼をウエイトレスたちの助を藉りて抱きとめると勘定を濟せて外へ出た。私の友達には電信柱のかげにたつて小便をしてゐるらしかつた。私は少しはなれて待つてゐたが、いつの間にか彼を見失つてしまつた——私も少しは酔つばらつてゐたのである。私は一そ彼をひとりのこして歸らうと思つたが、やつぱりいくらかは氣になつたからつひ今出たばかりのカフェ・グレイハウンドへも一度行つて見た。戸口までくるとなから洩れて来る出鱈目にたたらしいピアノの音を聞きつけた時、私は私の友達がそこにあると思つたので、もう安心して逃げる事が出来た。

もうこれからさきはあまり面白くもない——といつて今までのところが面白いつもりかと言はれても困るが。友達をま

酔つばらつて見たいものだが……」私は考へつづけた「あの男は俺に自重しろと言つた。安っぽい象牙の塔だとも言つた……」——私はそんなことをとぎれとぎれに考へると同時に、自分の欲しいと思ふものを捜し捜し銀座の街を、左様、その兩側を二へんづつ行つたり來たりした。けれども私の目にとまるものは一つもなかつた。

「……然うだ」としばらくして私は考へつづけた「これからは初夏のいい季節になる。何しろ健康を重んずるには散歩が第一だが、ステッキを一本欲しいものだ——いいのがあつた筈だ。スネークウッドの太いので——銀の握のある——その銀の握には風を孕んだ帆船の見事な彫刻があつた。あれがいい。あれを欲しいと思つた時に俺は金がなかつたのだ——たしか百四十圓と言つた。あの店へ行つて見よう！ あの店へ!!」

しかし、そこへ來た時にはそれはもう無かつた。さうだらう、一年も前に私が見たのだから。私は仕方なしに、安いステッキを一本求めた——尤もこれとてもさういやなものではなかつたが。けれども、あのスネークウッドのステッキがもう無いとなつて見るとあの豪華な趣味が一層よかつたものやうに感ぜられる。と、私にふと妙な考へが起つた——といふのは、私の今までの生涯のうちで、欲しいと思つて得なかつたもの、書きたいと思つて書けなかつたもの、別れたくないのに別れなければならなかつた人々、そんなものが何處



か、それは我々には全く知らないどこかへ行けば、私のさういふものばかりがそこにすつかりそこに一つ残らず具つて残つてゐるのではないだらうか。どこかにそんなところがないであらうか。そこへ行つて見ると私になぐさみに圖を引いた家のなかの一番氣に入つたものがちやんと立派に建つてゐて、そこには第一に彼の女が私を月下のベランダを待つてゐるし、私のほしかつたものでそこに具つて無いものはないのだから、スネークウッドのステッキもあるし、それにひよつとすると、今日欲しいと思つた瞬間にその家の壁には「ユー島」の繪までが吊りさがつてゐる！ おゝ！ ……何と莫迦なことを私は考へて歩いてゐたものではないか。

…と、ある店の前を通りすぎてから、私は一丁ほど引きかへしてその店の中へ這入つた。私はそこでピクニックの時につかういろいろの炊事道具を用意してあるバスケットをほしかつたのだ。私は店員に言つた――

「たつた一人前の道具だけあればいいのだ。その代りその一人前のものは何にもかも完全に揃つてゐなければいけないのだ。――そんなものは無いかね」

「？」店員は彼自身の耳を疑ふやうな顔をしてから、不思議さうに私の顔を見上げて言つた「さうでございますな。何しろ御遊山にいらつしやる御道具ですから御人数の多いほどよろしうございませう」

「あさうだな」と私はわかり切つた事を言はれて何と返答し

ようかともごつたが、結局五人前のバスケットを一つ買ふことにした。さうして自分に言つた「何しろ、友達もなしでピクニックを思ひ立つ奴もないものだ」

店員は私の買物をしばらくながら御愛想を言つた「ええ、これだけ御用意が御座いますれば奥様と御坊ちゃんがた、それに御女中の分も御間に御合ひになりませう」

私はそれには答へないで彼がしばらくゐるのを見ながら氣むづかしく言つた、「君、君、それや一そ、そんなことをしてしばつたりなどしない方がいい。バスケットなのだからそのまま持つた方がいいぢやないか」

私は新しいステッキを小脇にかかへると、御とどけしよらかといふその買物――ちよつとした大きさのバスケットを自分で引つ上げた。――一丁ほど歩いた時には私はつまらない出来心でへんな用もないものを買つてしまつたことを後悔してゐた。行きずりに誰でもそれを欲しいといふ人があつたら呉れてやつてもいいやうな氣持であつた。私は誰かをつかまへてこれにくれてやりたい――「さあ、君、これを進呈するよ。ねえ、楽しい遊山君。これだけ――五人前あれや、奥様の分も御子供衆の分も御女中のまであるといふことだぜ」

私は銀座の四つ辻に立つて、さて私は、あの自分が欲しか

つたといふものなら何でもそこに集つてゐるといふその家――「素通りした幸福の家」へ行くためには一たいどの電車へ乗つたらいいのだらうとでもいふやうに、その四辻にほんやりと立ちつくした。手には重くなつて来たバスケットを下げ、小脇には新らしいステッキがズリ落ちさうになり、それが私にはへんに腹立しく、悲しく、さうして最後にをかしくなつた。それから私は自分自身に言ひかけた――

仕事は出鱈目ぢや。

金は無駄づかひぢや。

安つばい象牙の塔ぢや。

命の堂々めぐりぢや。



春の夜

×××君の語つた話である——書いて見よう、つまりぬかも知れぬが。

「私は本郷三丁目で電車を乗かへるために下りた。けれどもどうもそのまま集鴨の家へかへる氣持にはならなかつた。といふのはその晩は散歩に適した暖い春の晩であつたし、それに家へかへれば女房は今朝からヒステリイを起してゐて彼の女のヒステリイは一日や二日はきつとつゞくのだから、歸つて見てもなほつてゐる氣づかひはない。正直に言ふが、私はその女房がどうも嫌ひであつたのだ。それには深いわけもある——がそれは今は言ふまい。たゞ私が家へかへりたくなかつたといふことだけ知つて貰へばよい。さういふわけで本郷三丁目の停留場の人ごみに佇んでゐた私は、この近所に友達でもあればいと思つた。生憎とその邊には友達といふやうなものもなかつた。が、ふつと思ひ出したのは或る女のことだ——その女とはちよつと知り合ひでもあるし、その女の亭主といふのも二三度逢つて知つてゐる。よく遊びに来い

子夫婦もBの女もそれぞれに歸つて行つたが。それだから私がA子夫婦を知つたのはその時ではない。

「それよりも前に私はBをたづねた時であつた。さうしてその安ホテルの食堂で飯を食つた時に、やはりその食堂の一隅にゐた男女があつたが、本當の夫婦にしてはどうも男の年が少し若すぎて、たとひ本當の夫婦としてもそれはどうしてもし戀人あがりの夫婦者と思へたのだが、それで私とBとはその二人の方を何とはなく注意してゐた。女は目が悪いと見えて色眼鏡をかけてゐたが、悪い女でもないやうであつた。

「或る時Bが言つた——「君、このまへ食堂で見かけた女ね。あれや、あの時は遠かつたし眼鏡などかけてゐてよくわからなかつたが、つくづく見るとなかなか美人だよ。あの男の亭主が宿の女中に手紙をとよけさせてね、僕にさ、逢ひたいといふのだ。逢つて見ると女房が——あの眼鏡の女が活動の女優になりたがつてゐるので、僕に聞けば誰か知つてゐるだらうと思つてたづねに来たといふのだらう。あれ(といふのはB自身の女のことだが)がやはり女優だといふことを聞いたからださうだ。それでA子をつれて來させて見たが、あれなら女優になれるとも。僕は××キネマのCに紹介してやるつ

と言つてゐた——その亭主も、その女も。

私はすぐそのA子夫婦を訪ねて見る氣になつた。ふわ／＼した若い同士の夫婦だから、こんな晩にはうちにはゐないかも知れない。居なげやゐないでもかまはない……

「そのA子夫婦といふのはホテルともつかず下宿ともつかぬやうな家の一室に住んでゐた。——その人たちと私と知合ひになつた筋道もちよつと話して置いた方がいゝ。

そのころ私がひどく親密にしてゐた友達がひとりあつたが、そのBがつひこの間までやはりA子夫婦のゐる家にあつたことがあつた。——今考へて見ると、Bは情婦に逢ふのに都合がいゝやうに女房にはうまい口實を見つけて、自分の家がありながらこんな宿屋見たやうなところへひとり住んでゐたのであつたらう。私がBを訪ねた或る時のときもその女が入りびたりになつてゐた。さうして花を引いて遊んでゐたつが、A子夫婦も同宿のよしみでやつぱりその仲間にあつた。——尤も僕が這入つていつたきりその遊びはやめになつてA

もりだ……」

——そんなに美人か知ら？ と私は思つた。

或る時またBが言つた——「あの女の亭主ね、あいつがアマイ男ださうで、女房の言ひなり次第なのださうだ——宿の女中が言つてゐる。さう言へばよほどあの女に惚れてゐるぜ。さあ、何をしてゐる男だか。いくらか金でもあつてたゞ遊んでゐるぢやないかね」

「で何か、あの女は女優になることにきまつたかね？」  
「A子はともかくもCに紹介してやつた。少し見習はしてみれば採否のほどは決定するさうだが、柄はあれでよかつたのだらう。生憎とCが洋行するさうだから、どんな都合だか僕も知らないが——

（Bは活動の背景装置のデザインをやる男である。この話をする「私」は畫家だ。だからすべてはそんな社會の出來事である——ちよつと斷つて置く）

私はBとA子に就てこんな噂をし合つてゐるうちに、Bの部屋などで一度か二度A子にもA子の夫にも落ち合つたことがある。が、別に口を利くといふほどでもなかつた。A子と私と偶然いづらか親しくなつたのはCの送別會の席上に於てであつた。そこへは、かねてCと知り合ひでもあり私も出席



したがA子も来てゐた。A子は顔馴染の人が少いのでほんやりしてゐる様子であつたが、私を見つけると言葉をかけて、「今晚は。Bさんはお見えになつてはゐらつしやらないやうですね」と言つた。

成る程。Bは出席してゐなかつた。そんなことからA子は私にお茶を汲んでくれたりなどして、記念撮影の時なども私の近くのところへ来て立つてゐた。會のかへりには、(會は日本橋の或る家であつたのだが)方向も同じであつたし私とA子とは一緒に電車を待つてゐたが、電車は三つとほつたけれど、どうしてだか満員ばかりで、私はそんな電車へ無理に乗るよりは須田町まで歩くことにした。別に誘つたわけぢやなかつたがA子も私について来た。須田町まで来ると、今度はA子が言ひ出した——こゝまで来れば本郷三丁目まではいけないからなのだ。そこで私もそこで歩いてもいいつもりになつた。本當のところあの時の氣持ちやA子と一緒に歩くのも、ひとりでももう少し歩いたらう——會の歸りなどには誰だつてもそんな氣持が起ることがあるものだ。ところが、須田町から松住町のところをくると電車線路に沿つて歩いて、明神前の坂あたりへ来て、あのお茶の水の學校の裏手の長い土堤のあるあたりを、プラタンの並木のところをA子と並んで歩いてゐるのは、事實、一人で歩くのとは違つた氣持がふいと感じられた。——悪い氣持ではなかつた。A子はそ

のではない。

別れぎはにA子は、今度遊びに来いと言つた。それからA子の夫も私を好いてゐるとも言つた。——さう言へば、それまで一度Bについてその青年も私のところへ遊びに来たこともあつた、A子は彼女たちの部屋の番號を教へて、それは三階の表がはの、外から見ると右から三つ目の部屋だと説明した。それからその家には彼女たちと同じ姓のDといふ人が外にももう一人ゐるから間違はないやうにと言つた。——私はそんなけぶりを別に見せたつもりはないがA子は、そのやうに私が彼女たちのところへ遊びに来ることを待つてゐるやうであつた。だから、今夜、遊びに行つても別にをかしくはないであらう……

『正直に言ふが、私はA子のところへ遊びに行くつもりになつたので、その亭主のDのところへ行く氣持はなかつた。といふのは私はいつの間にかDを少し軽んじてゐた。一たい私は妙に金のある人間を輕蔑したがる癖がある上に、その金のあつた人間に才能が無いと來ては一そう好かない。どうもDは見たところはさほどの才能の士とも覺えない。それから私は女房にアマイ人物は嫌ひではないが、宿の女中にまで見抜かれるやうなだらしないアマイのはよくない。さういふわけで私にはDはちよつと、ほんのちよつと滑稽な人間に思へた。』

のつひ二週間ほど前に或る展覺會へ出品した私の繪のことなどを話題にしてゐる。それから自分の亭主は詩人になるつもりだらう。才能があるのか知ら?とも話をした。A子といふ女は見かけは氣取つてゐるけれど話して見るとちつとも氣取つてゐるなかつた。といふよりも氣取つて見ても直ぐにぼろが出てゐるので、ぼろが出ていふ女であつた。——私たちがそのころ人間を三つに分類してゐたが、その一つは哲人、その一つは雅人、その一つは俗人とかうである。無論俗人をひどく輕蔑するのだ。ところで女には哲人はあり得ない。女の哲人などといふ言葉は全くのパラドックスだ。そこで女にも雅人はある。けれども根が女だから深い意味で雅致はあり得ない。つまり女の雅人といふものはどこか知ら抜けたところのあるのにきまつてゐる、言はゞ、女さかしく云々といふがつまり牛を賣りそこなはない女だ。それが女としては雅人だ。もつとはつきりいふと女のうちに話してゐて面白いのはどこかIdioticなところがある方がいい。私たちは、それでそんな性質の面白味のことをIdiotic beautyなどといふ言葉をこしらへてゐたものだが、A子にもちよつとばかりそのIdiotic beautyがあるやうな氣がする……そんなことを考へながら私は歩いてゐたのであつた。つまりごく微量な親愛を感じたのである。もとよりそれは口へ出して表現したりする程度のも

尤もこれもしりやが女だつたら、やつぱりIdiotic Beautyの仲間かも知れない。ともかくも私はDを好く好かないではない第一それほど念頭には置いてゐなかつた。しかし、A子をだつても、無論さう複雑な氣持で訪問するのではなかつた——何しろ、居なければ居ないでもいくらゐるつもりであつたのだから。——正直に言ふ以上、掛引はないのだから私の言ふとほりに聞いて置いて置いてくれなけやいけな。どうもB君たちは、さういふことで私をひどく誤解してゐるからね。(と、そこで×××君は何か外の事でも思ひ出したか、そんな事を言つた)……

『私はその家の前へ来て、その高い建物を見上げた。三階の表がはの、外から見て右の三つ目の部屋。——留守ではないやうだ。兩隣の部屋は灯が消えてゐるけれどその部屋には灯がともつてゐる。けれどもカーテンは引つばつてある。せつかく來たのだから成るべく居た方がいい。私はその窓を見上げながら歩いた。と、オヤ——! 味なことをやつてゐるぞ! といふのはそのカーテンの上へ影法師がうつつたのだ。くつきりうつつた。突然に現はれて、それがどうも抱擁し合つてゐるらしい。在宅は結構だけれども、これや氣なしに這入つて行つて邪魔にされやしないか知ら。……私は立ちとまつてそのカーテンの影が動いて消えたところを見なが



ら訪ねようかどうしようか。少し戸迷ひしたがやつぱり訪ねて見ることにした。

「二十一番のDさんはいますかね」

と尋ねると「居ます」と言つたきり宿の女中は取次いでくれさうにもない。「お部屋は御存知でせう」といふところを見るに知つてゐるならひとりで行けといふつもりらしい。女中の奴は私が以前Bのところへ来たところに顔馴染なのをいいことにして、高いところだから案内するのが大儀なのであらう。そこで私はひとりで二十一番の部屋へ上つて行つた。

「コッ、コッ、コッ。D君、D君!」コッ、コッ、コッ!

私は部屋の扉をノックしながら部屋の主の名を呼んだ。部屋はひっそりしてゐる。はて? と思つたから私はそのまま引返さうとしてゐた。と。ちやうどその時、不意に扉が開いてDがぬつと現れた。私の顔を見ると彼は頓狂な聲を出した――

「や! XXさんですか。それや珍客だ――思ひもかけない!」

さう言つて彼は、きよろ／＼とそこで一つぐるつとまはるやうな様子をして、自分の部屋のなかに氣にながら、それでも「さあどうぞ」と私を案内しながら奥の方の部屋へ這入つて行つたが、いきなりその机の前へきちんと坐つた。それからその上にあつた翻譯のバイロン詩集を無暗に開くと、取

さうして、ふとさつきの喧嘩といふのが何か自分にも關係があつた事ぢやないかといふ氣もしたけれども、そんな筈もあるまい――たとひ、さうにしたところで別に私の知つた事ぢやないなどと思ひながら、どんなつづき工合だかわからないバイロンの叙事詩を見てゐた。Dは私がバイロン詩集を見てゐるのをとつつきに、何だか再びその詩人のことを言ひ出したが、私はこのぎこちないチグハグな空氣のなかで、Dからバイロン論を聞かうとも思はなかつたから言つた――

「温かくつて、いかにもいい晩だから僕は散歩に來たついでに寄つたのです。お茶でも飲ましてもらはうと思つたが、夫婦喧嘩の最中ぢや仕方がない――ぢや、もう失敬して僕は散歩でもしよう」それから私はちよつと笑ひながら「實はかどまで來てこの部屋の空氣がへんなことは直覺したのだが、どうも夫婦喧嘩とは氣がつかせませんでしたよ」

「へ? もうお歸りですか? それから散歩ですか?」さう答へたDは私をまともに見上げたがどうしてだかその目つきが救ひを求めてゐるやうにも思へた。

「ええ。散歩です。そとはいい氣持の春の夜だ……。どうです、君たちも喧嘩は一つゆつくりやり直すことにして、今夜は散歩でもしちや?」

「散歩はいいですね。行きませうか。ねえA子、お前も行くだらう。大好きなXXさんと一緒なら。ねえ、A子、」

つてつけたやうに言つた――

「バイロンはいいですね。實にいいですね」

彼のてれ方があまりひどいので私は口の利きやうもなかつた。でも、二分ほどたつとはやつと自分のへんなのに氣がついたらしく言つた――

「XXさん。實はね、今その、夫婦喧嘩をしてゐたところでした」

なるほどさう言はれて見ると、部屋の片隅ではA子がしくしく泣いてゐた。――それではさつき抱擁してゐたと云つたのはつかみ合ひをしてゐたのであつたかも知れない。なるほど聞けばさうのやうでもある。

「一たいどうしたと言ふのです」

その私の言葉には答へないでDは泣いてゐる彼の妻をふりかへりながら言つた――

「A子、もう泣くのはやめたらどうだ――XXさんが來てくたさつたのだけ、お前の大好きなXXさんぢやないか。ねえ」それからDは私の方を見直して「XXさん。A子はね、あなたの事を大好きなんです。東京へ來てから逢つた人のうちぢやあなたが一番好きだと言つてゐるのです」

「これや有難い。私が人に好かれたのはこれが始めてだ」私はともかくもそんなことを言ひはしたが、實際かうなると今度は私がバイロン詩集を開かなけりやならない事になつた。

「いやいや、僕は無理に誘ふわけぢやありませんよ」私は言つた――大好きなXXさんと言はれるのがへんに氣になるので。けれどもDはそんなことにはかまはずに、A子の方へ立つて行きながら、女の肩へ手をかけてやはり同じやうな言葉で散歩をすゝめてゐるのであつた。女は小さな聲で何か言つてゐる。

「う? うむ、うむ、」とDは女と話し合つてゐる「……あまり賑やかでないところなら? それやどこでもいいよ。あ、さうだ――XXさん。どこでもいいですね。ねえ、A子。行かうよ」

「……」女は無言で大きく頷いた――私は黙つて見てゐたが、その子供らしい様子がちよつと悪くはなかつた。

A子は少し明るい方へにぢり寄つて、これから私には改めて無言のまま丁寧なお辭儀をして懐から鏡と白粉紙とをとり出すと、泣いて赤くなつてゐる鼻のさきや頬べたなどしきりにお化粧し出した。女は他所行きの着物を着てゐた――外出しかけて夫婦喧嘩になつたのか、でなければ外から歸ると早におつ初めたものにちがひない。その妻の姿をちら／＼と見ながらDが言つた――

「いや、全く、私もよくない。だんだん狂暴になつて來るものだから」Dはその言葉をしぐさで見せるとでもいふやうに藝術家氣取で長くのばした髪を兩手でくしゃ／＼とかき上げ



ながら「ね、××さん。見てやつて下さい。今日などもあれの着物をあんなに引き裂いてしまつたりして」女は夫の言葉を事實で見せるつもりだか、それともそれがどのぐらゐるだか見直すつもりだか、自分で引つづいて見てゐる。なるほど羽織の袖つけが三寸ほどほどけて赤いハッ橋かなにかの裏が見えてゐる。Dは言ひつづけた「手だつてもあの通りです。血を出すやうなことをしてしまつて」言葉は大げさだがほんの引つ搔いたか何かしたのであらう——女は血の絲がにじみ出てゐる手の甲を、誰にといふこともなく見せた。

——Idiotic Beauty と私のいふのはそんなことなのだ。

「三人はつれ立つて出たが、女は二三歩おくれつてついて来た。Dは途々私にたづねもしないことを半ば獨言で話しかけた。

Dは言つた——「誰が悪いのだから知らない。いや私も悪いのだ。だがA子だつて悪いのだ。ふたりが一緒にゐるのはどうもよくない。だからもう別れようと思つて、それよりも前にひとりよく考へて見ようと思つて、私は今夜ひとりどこかへ行くつもりだつたのです——山の中の温泉場か何かへ。それで荷づくりをしてゐると、A子がもう一晩待つてくれと言つて泣くのです……」

「いや——」と私は言つた「僕はひとから大事な話を聞かされるのはいやだ。ことにそれが内証の話と来て、しかも面白いことでもあつてごらん。僕はおしやべりだから困るのだ——そいつをしやべりたい誘惑としやべつちやならないといふ義務とが内証してね。面白い大事でない話なら聞かせ給へ。で、なけれややめるのだね。D君、君も一たい輕卒ですぜ。僕といふ人物をよくも知らないでさ。それに喧嘩は延期したまへ。僕は喧嘩のつゞきをしなさいと言つて君たちを散歩に誘つたのぢやない」

Dは私より、六つ七つも年の若い男であつたから、私にさう言はれると叱られでもしたかのやうにしをれて黙つた。A子も黙つた。そこで私は何かもう少ししやべつてやらなければならなかつたので言ひつづけた——

「君たちは御存知あるまいが、僕といふ男はまつたくのおしやべりでね。僕が小説家なら自分のおしやべりを題目にしてこんなことを書かうと思ふぐらゐさ（そこで私は即興的に一つの話をつくり出しながら）——まづ或る男が人殺しをするのさ、女の事か何かでね。うまく祕密に運んでゐるのだ。それを偶然にも私が——私のやうな男が、こつそり見出すのだ。その殺し方がいかにも深刻である。どうも自分ひとりの胸にしまつて置けないほど面白い。さういふ珍らしい怖ろしい事を自分が見たといふことを言ひたくてならない。それで

口を利いた「今晚行くと言つたところで今はお金がないのです。だからわたし行くならお金をこしらへて来て上げるから、あしたいらつしやい——と言つただけです」女はいつの間にか私とDとの間へ加はつて歩き出してゐた。それから言ひつづけた「行くならば今からでも何時からでも、どこへでも行らつしやるわい」女はからかひ氣味にさういふのであつた。さうしてつひ二十分前までは泣いてゐた女とも見えなくなつた。どこかみだらな空氣のあるほどなまめいた笑ひ顔だ。

女にさう言はれながら男は黙つて十歩ほど歩いてゐたが女のうわつた笑ひ顔とは全く反對なしみじみとした調子で私に向つて言つた「ねえ、あの通りです。だから自然と喧嘩にならざるを得ないので。私が金も持たずに出て行くと言つたらとめるどころか、金があるまいから金をこしらへて来てやるといふのは何といふ言ひ草でせう。おい、A子！ 誰にその金を借りて来るのだ！」

「おい、D君もうよし給へ」私は言つた「つまらないぢやないか」

「いやいや。さう一口には言はないで下さい。これにはわけがあるのですから——さうだ、××さん、あなたに聞いていただけばわかるのだが……。A子、話してもいいかい？」

「好きなやうになさいよ。わたしだつて聞いていただくわ」

密告しようかと思ふのだが、それよりもさきにその男は女を殺した原因を搜つて見るとどうも殺した男の氣持が同情出来る。それにその男は女を殺してから何か敬虔な生活をしてゐる。どうしても密告するわけにも行かない。しかしそれを誰かに言はずにゐてはあまり言ひたいので神經衰弱がひどくなる。それで思ひ切つて言つてしまふのだ、すべての事情を——

「その人殺しをした當の人物にね……それからさきはどうするか知らない。ともかくも内密な話や事件を知るといふことは僕のやうなおしやべりには重荷だね。それに僕にはおしやべり哲學があるからなほいけない。——いづれ人間のした事だから人間同士で内緒にしなけれやならないなんてことはあるまいといふのさ。それを内緒にしたがるのはへんだよ。——おやおやこれぢや君に打明け話をしたまへとすすめてゐるやうな言ひ草になつたな」

私はなんでもそんなことをひとりしやべつてゐたが、妙に氣がそわ／＼してゐるせいか電車通まで來るとつひ電車に沿うて明るいところを歩きさうになつた。

「あら！ そちらにいらつしやるの。明るくついでいやだわ——わたし、羽織のやぶれてゐるのを見られるもの」

A子がさう言つたから、私たちは氣がついて大學の構内を上野の方へ抜けることにした。

私は途中で煙草を買つてゐたから、彼等よりも一足おくれ



た。赤門をくぐつた時には彼等から十五歩はへだたつてゐた。朧月夜でそれは今までは氣がつかかなかつたが極く淡い霞が下りてゐる。大學の構内は四月の夕方になると教室の階段の上を小使が古ベンと櫻とを掃くといはれるくらゐだ。その櫻の並木の下をこの朧夜に私の直ぐ前をD夫婦が歩いて行くのだ。その後姿を見て私は歩いてゐた。彼等は何をだか、とにかく何か話し合つてゐる。よそ目には仲のいい夫婦である。――妬けたらうと言ふのかい。待ちたまへ。せつかくのお察しだけれども私にはそれが全く反對であつた。私は急に悲しくなつてゐたのだ。それも詩人のやうにはではない。たゞの人のやうに悲しくなつたのである。

私は自分の前をゆつくりと話し合ひながら歩いて行くDとA子とを見ながら、四年前の自分自身と或る女との影をそこに見たのである――

.....

その出来事を無論私は忘れてはゐなかつた。けれども私たちがそのやうにして、こんな春の晩に――いやもつと晚い春であつたが、ともかくおぼろ月の下をD夫婦のやうにゆつくり歩いたことがあつたといふときのその些細な情景は、その外の大きな出来事にかくれて私の心のなかには、今まで、このD夫婦のうしろ姿を見るまでは全く思ひ出したこともなかつた。私たちが歩いたのであつた。ちやうど或る先輩の夫人

この女はいつの間にか私にそんな慣々しい言葉をつかつてゐる。私はそれに氣がつきながら答へた。

「なに、くたびれたからです。それに君たちが仲よく話をしているから邪魔をしては悪からうと思つてひとり歩いてゐた」

「ハ、ハ、ハ！」愉快に笑ひ出したのはDであつた。さうして彼は問ひもしないことを答へた「で、私は、××さん。ともかくも今夜はどこへも行かないことにします。もう時間も遅いですからね」――まだ宵の口なのにDはさう言つた。

「……」私にはちよつと話のつきがわからなかつたが、直ぐに言つた「あゝ、それがいいね」――Dがどこへも行かないといふのは、さつき今直ぐにも山のなかの温泉場かどこかへ出かけて行くと言つた言葉を取消したものだといふことが私にも氣がついた。多分Dは私がおくられて歩いてゐる間にA子に謝つて仲直りをしたのであらう。Dはそれからほひどくはしやぎ出した。A子に話しかけなげや私に話しかけるし、でなければひとりだ。

「こ、ひ、の、ために、身は、と、ら、はれ……」

といふ節を口笛で繰返し繰返し吹いてゐる――

「かの、手を、と、る、のは、いつの日、いつの日」

「フ、フ、フ、何度おそへてあげてもあなたのは出鱈目ね。およしなさいよ、見つともない」

が死んでその弔ひのために本郷へ来た私たちは、やつぱりここを通り抜けてゐた。私たちはやつぱり別れ話を歩いて歩いた。D夫婦の別れ話はどれだけ根底のあるものか知らなけれど、あの時の私たちのものは、もつと眞剣に進んでしまつてゐるものであつた。私の妻は別に男をこしらへるし私は私で別に女をこしらへるし、一言に言へば私たちは互に見捨て合つたわけであつた。私たちふたりはもう諍み合ふやうなことはせずに静かに別々の道の方へわかれ／＼に踏み出してゐた。それゆゑ私たちはその晩にももう別に怨恨のやうなものほども抱かずに、たゞ空の險惡に曇つたそれでもごく静かな日のやうに平和に、この路をやつぱり上野の方へ通り抜けてゐたのであつた……この思ひ出が不意に現はれて私のこゝろを曇らせたのだ。私はわれ知らずとぼ／＼と歩いてゐた――二三丁ほどの間。

氣がついて私がついに一度、さきを歩いてゐる彼等を見た時に、A子は私の方をふりかへりながら、私を待つやうに立ちどまつた。Dも一緒に立ちどまつた。そこで私も足を早めて彼等に追ひついて彼等の仲間に加はつたには加はつた。けれども、私はもうさつきまでとは違つてひとりでおしやべりをしつゞけるやうなことはなかつた。A子がまづ目ざとくそれに氣がついたと見えて私に言つた――

「さつきから何をぼんやりしてゐらしたの？」

DはA子にそんなことを言はれてゐる。

……それにしても私は、この男のやうにアマイ男ではなかつたらう――そんなことを思ひつゞけながら私はもうこの連中と歩くのはいやになつてゐた。電車線路に出たからそれを幸に私は言つた――

「D君。僕はもう歸るよ……」

「どうしてです？　せつかく僕たちをさそひ出して」

「××さん。もう少しいらつしやいよ。まだ七時半ぢやありませんか」

A子の言葉につゞけてDが言つた「別に用事ぢやないでせう？　もう少しつき合つて下さい――お金さへあれやどこかで御馳走するのだからね、A子」

「あなたがみんな」とA子が言つた「みんな無駄費ひしてしまつたのです」

A子には答へないでDが人ごみのなかを私に擦り倚つて耳うちをする「ねえ、××さん。もう少し一緒に歩いてください。今ふたりきりになればまた喧嘩になります。――やつと直りかゝつたところなのですから」

私は、さういふのをふりすて、歸るわけにも行かなかつたから、やつぱり一緒に行つた。

A子は物好きに上野の石段を登り出した。Dがそのあとへついて行く。私も登つた――その石段を踏みのぼりながら私



はさつきからの思ひ出をつづけながら、ふと自分の心のなかで大變不愉快な一人物に出會つた。その一瞬に今まではただらけて重く曇つてゐた私の氣持が不意に開展した。——思ひがけない稻妻である——

『私の心持を天然そんなに嚴格なものにしたその男Eといふのは或る新聞社の美術記者であつた。彼自身もきつと繪なり彫刻なりの才能は持つてゐたのであらうけれどもその才能はまだ少しも示してはゐなかつたのに、たゞ彼が美術記者であるといふ事實でその道の大家と逢つてゐるうちにいつの間にか彼自身もやはり大家と同じやうな權威を具へて來た男であつた。私は無論そんな大家ではないから彼に逢つたことはそれまでに二三度しかなかつた。私の以前の妻F子がその男のことを私にたづねた時にも私はたゞそのやうに答へたゞけであつた。』

私はさつき或る先輩の夫人が死んだのでその見舞のかへり道にF子とふたりで大學の構内を抜けたことがあると言つたが、その先輩の家のお通夜でF子はEに逢つたのださうである。私もその葬式や何かで偶然重ね重ねEに逢つた。けれどもそのために彼と格別親しくなつた覚えはなかつた。私たちがたうとう離別するやうになつたのはその葬式のすぐ後であつたが、私は或る日の三時ごろに電話を受けた。私

聞記事にならうとも思へない。私はEといふ人をへんな男だと思つた。さう思つてゐる最中にその當のEが電話があつてから一時間とは経たないのに何を思つてかひよつくり私の所へ顔を出したのである——

「電話ではどうもよくわからなかつたからな。遊びに來て見たのさ」とさういふのであつた。無論、Eは今までに私の所へなど足を踏み入れたことは一度もなかつた。

その座には外にも私の友達があつて私はその友達と一緒にちよつとした用事で或る先輩を訪問しなければならぬところであつた。私も私の友達もその先輩とは初対面ではあるし、Eはそんな先輩などは呼び捨てにして噂をするほど親しいらしかつたから、私はEにその先輩のところへ一緒に行くつてくれるやうに頼んでみた。Eは今日はあの邊は路がわるいからとか、あの男の顔を見ても別に面白くもなしさとか、そんなことを言つてそのまゝ歸つて行つたが、ずつと後日になつて私が想像するには私たちが夫婦別れをしたところを見とどけてその足でF子の樂屋——言ひ忘れてゐたがF子は淺草のオペラ女優であつたから、その樂屋へでも行つたのかも知れない。

それから一ヶ月程の後に私がEに出逢つた時にはEはF子のことなどは何も言はなかつたが最後に一言だけ言つた——「どうだね、前の細君には逢ふかね」

は電話といふものは大きらひだし誰からも電話がかゝつてくる筈はないのである。若しかすると或はF子が殘夢だか殘務だか、急に思ひ出したことでもあつたのかも知れないと思ひながら私は電話口へ出た。親しげに向ふは口を利くが全く馴染のない聲であつた。男の聲である。しやがれたやうな聲である——私は向ふの名告るのを聞いて始めてそれがEの聲であつたことに氣がついた。それにしてもEの電話は私には妙であつた——彼が言ふのは

「君が細君と別れるとか別れたとかいふ噂をきいたがそれは本當か」

とそんなことなのである。私にはEのつもりがわからなかつた——無論彼から離婚を考へ直したらどうかと忠告されるほどの親友ではなし、それどころかそんな噂でわざ／＼見舞の電話さへもをかしいのである。私は電話で言つた——

「それがどうしたのです」

「いや、何でもないのでけれどたゞ事實かどうかと思つてね」

「はあ？……お見舞は有難う」私は我知らずとぼけた氣持になつてともかくもそんなことを答へて電話をきつた。私はそんな電話をかけてよこした男が新聞記者であるだけにひよつとして何かそんな職業上の用事であつたかも知れないとも思つて見たが、しかし私のやうな一畫學生の夫婦別れが何の新

「いいや。用もないもの」

「今どこにゐるの」

「さう、深川の方へどこか部屋を借りると言つてゐたつてが、どこだか知らないよ」

「はあ、さうか」

私は正直に答へたが、やはり後で思ひ合すと、私をためしに見てゐたのだらう。——といふのは、私はその後人からEがF子の旅興行のさきまで逢ひに行つて來てのわけを言つてゐるといふ噂を聞いたからである。私にとつてF子はどうせ別れたほどの女である。F子が何をしようとしてF子に就てどんな噂があらうと、私は無關心であつた——正直に言ふが私は、その後六七度もF子が思ひ出したやうに呼び出しの手紙などをよこした時には、初めの二度だけはそれに應じて出て行つて見たけれども、私にはうるさく困つた事であつた。私は全然無關心になつて、時折にはこんなふうでも不人情ではないのか知らず、われながらさう思ふことさへあつた程であつた。それなのにさうしてそれはもう私たちが別れてから二年以上も経つてから私の耳に這入つた噂であつたのにEのことを聞いた時に、私は女を憫れむ氣持と一緒にEといふ男を「見下げ果てた」といふ言葉で思ひ出した。

Eのやり方のどこに道德的な批難があると私は言ふのではない。いや、私はどちらかといふと道德などといふものは知



らない方の側だ。不幸なわれわれ人間の情熱の導くところ所謂道徳から外れた行爲がわれわれには實に屢々あることを私は認める。さうして私はそれをわれわれ凡人の受難だと思つてゐるからである。さうしてそんな場合、道徳を盾にして第一の石を投げる人を見るとその彼等に、私はかへつて憤りを感じることもよくある——そんな時に、何ごとも聞かぬふりをして沙の上に文字を書いてみたといふ人を私はえらいと思つてゐる。私がEを「見下げはてた」と思ふのはこれとは全く反對である。私はそれに就て所謂不道徳でないところに寧ろ醜惡さを感じたのである。私はEのことを虚心で言つてゐるつもりだが、君がそれ以上に氣をまはすやうなら何とも仕方がないが、私といふ男は、友達の女房をつれて出奔する男を見るより、友達のものゝの妾が藝者に出たのを買った男の方をもつと怪しからぬやうな氣がする人間だ。——さう聞いて君がすぐに僕の感じ方に同感してくれるか知ら。私はかういふ點で私と同感でない人間が世の中に多いやうな氣がして腹立しいよ。私は世俗の道徳といふものが不幸な人たちに對つては實に苛酷なくせに或る一面ではあまりに寛大な氣がしてならないことが時々ある。だから私は道徳などといふものを無視してゐるのだが——道徳論はまた今度の時にするとして話のつぎだが。私はEといふ人物のことをそのやうに思ひ出すと、あの日の電話のしゃがれた聲がまだ耳の底でひび

くやうな氣持がして、突然私は今夜の自分——D夫婦とかうして一緒に歩いてゐる自分に、ハッ、と氣がついて、それが私には稲妻であつた——  
「ハ——」私は愕いて自分自身に言つた。「かうしてうっかりしてゐるとおれもEになる。Eになるまい！ Eになるまい！」  
.....  
「Dは私がそんなことを考へてゐようとは知る筈もないからひとりではしやぎかへつてみた。さうしてこんなことを言つてゐる——  
「ねえ、A子。一ぺんみんなでお花見をしようよ。自動車は俗だから馬車がいい。ねえ、××さん。馬車の方がずつといいでせう。それでこの三人で——私とA子とあなたと、然うだそれからBさんも仲間へ這入つて貰はう。一日中、その馬車で賑やかなところを通るので。今年はまだおそくなつたから來年の春ね。けれども來年の春になつたらこの三人がみんなかうして東京に居るかどうかはわからないな」  
それには答へないでA子は私に言つた「Cさんはもうアメリカへ着いたところですわね」  
「さうですわね」私はさう答へたきり、あの送別會のかへり路のことなど話題はあつたけれども話しつづけようともしなかつた。

三人は竹の臺の方へぶらぶらと歩いて居た。花の季節ではあつたが、その日は朝のうちから三時ごろまで雨であつたせいか、その邊は季節に似合はずひつそりとしてゐた。私は氣が重くなつて、その上に「Eになるまい！」といふ一言のため立場が妙に窮屈になつて黙つてゐた。  
「××さん」A子は言つた「おくとびれだのに迷惑ですわね」  
「本當に黙つてしまつたのですわね。何か面白い話をして下さい」  
「うちに女房が待つてゐると思ふと」と私はわざといい加減なことを言つた「早くかへりたくなつたのでね」  
A子が月をほめた。ほんとうにい、朧月夜ではあつた。Dが月の上をさへぎつて過ぎて行く薄絹のやうな雲をほめた。そこで私たちは自然と花や月のことを話し出した——三人は三人でそれぞれ沈黙が怖ろしかつたからである。さういふ氣持だから折角の話もはづまう筈もなかつた。かうなつては三人とも、仕方なしに話し仕方なしに歩きつづけてゐる状態であつた。公園のなかの廣い路を通る時であつた。路ばたにあつた自動體量計を見つけたDは言つた——  
「どれどれ。一つ目方をかけてやらう——随分瘠せた筈だからなあ」  
さう言ひながらDはその臺の上へ乗つたままポケットのな

かから銅貨をさぐり出した。私はちやうど新しい煙草を口にくわへてマツチを用意してゐるときであつた。私はそのマツチの燃えさしを體量計の針のあるところへ持つて行つて覗いて見た。  
「駄目だよ。針は動きやしない。この機械は壊れてゐるのだ」私は言つた。  
「まあ、××さんの横顔は……」とマツチが消えて行つた時にA子が言つた「まるで△△に出る□□□□の大映しにそつくりよ」  
△△や□□といふのは活動寫眞の題とそれへ出る役者との名であらうが、私は聞き覚えもしなかつた。私はただその路の樹立の茂みの間から、あのころF子と私との居たあの下宿のあたりが見えるのを知りながらF子やEやそのころのことをさしたるペーソスなしに思ひ浮べた。それから今の妻であるG子や、そのヒステリイや、ヒステリイの原因や……  
「あら！ つめたい！——襟首へ樹のしづくが落ちたのですもの」  
A子がそんなことを言つた。  
.....  
「廣小路まで来て私はもう電車へ乗ると言つた。もう少しだから——さう本郷三丁目まで歩かうとDは言つた。でも私は乗るといふとDたちもその少しの間をやはり電車でかへつた。



三丁目へ来て、彼等はそこで乗り捨てるために、私は乗り換へるために三人一緒に下りたが、別れて歸つて行くDを見送つてゐた時に私は彼を呼びとめた。Dは電車線路を横切つて私のところへやつて来た。A子は線路の向側から私たちを見てゐる。私はそばへ来たDに言つた。思ひ切つて言つた――

「君が女にアマ過ぎるのだ。それがよくないのだ、冗談にする夫婦喧嘩なら道楽もいかげんにし給へ。でなけりやもつと慎重の態度で、さ」それは私が今までに人に忠告といふものをした唯一のものであつたが、私は急に氣恥しくなつて玉突場で流行つたことのある下手な語呂を思ひついてつけ加へた「ね、何ごとももつと眞鑄のバイブで、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ」Dは何か言ひたさうな顔つきであつたが私は言つた――  
「さよなら」

その後、正直に言ふが私はもう一度D夫婦のゐる家の下まで行つたことがある。といふのは、あの時のDたちの夫婦喧嘩はどうやら實際に底力のあるものやうな氣もしたから、その成り行きがちよつと氣になつたのである。けれども私はその家の前まで行つて自分で自分自身に問ふて見た――自分は本當に彼等を心配してゐるのか。それともたゞの物好きか。それとももつと何か考へがあるのではないか――A子にほんのちよつとした興味でも持つてゐるのぢやないか。

翌日は、Dが本當にA子を迎へに来た。Dは私がいつかあんな忠告めいたことを言つたりしたので、青年だけに單純に私を信頼出来る人のやうに思ひ込んでゐるらしい口調なのが、私には一さう身が省みられる氣持であつた。

夜中に美しい女が突然たづねて来たといふことが私の妻のヒステリイを一さう嵩じさせて……いや、こんなことまで言つてゐては、この話はどこまでひろがるやらわからないから止さう。その外にさまざま事件がこの前後にこたごたと起つてきて、それが皆、私のころのなかでは錯雜して唐草模様のやうにながつてゐる。それらのすべてはいづれ出直して聞いてもらふことにして――實際は、このA子の話はもう今は言はない話のなかのエピソードなのだが。そのエピソードだけまつ聞いて貰つたのだ。で、この話のあとがもうほんの少しある。――

その後、二年も経つてから、その二年の間に私はあのヒステリイの第二番目の妻とも別れたし、その時には全くの獨身であつたが、私は不意にA子から手紙を貰つた。A子はDともその外の人――それが彼女とDとの離別の原因であつたのだ。その事をもA子は私に打明けたが――その人とも再び別れてやはり獨身であつた。A子は四五へんも私のところへ遊びに来てくれた。

「Eになるまい！」

私はそのまゝ彼等の家の前を通りすぎた。事實、親切からともただ物好きで成り行きが知りたいだけでも、言ひ切つてしまふ自信が私になかつたからである。

その後、一月半ほど経つた或る晩夜更けに家の者が皆寢てゐる私だけが未だ起きてゐる時刻に、突然、表の戸を敲くものがあつた。私は二階の窓から顔を出して見るとそれは車から下りた女で、A子の聲であつた。そんな夜中に私のところをたづねて来たA子を不審に思ひながらも私は下りて行つた。

A子が言ふには、今夜いよいよDと別れることになつてあの宿を引き上げて、A子自身は神戸へ歸るつもりで、Dに送られて停車場へ行つた。終列車は十分ほどのことで乗り遅れた。もう一度あの宿屋へ歸るわけにもゆかないし、Dは友達の家で泊るけれども、そこはA子まで泊れるところではない。それなら宿屋へ泊るとA子が言つたけれどもDはいけなと言つた。最後にDは私のところならばいいから行つて頼めと言つたからこんな夜中ではあつたが来たといふのであつた。その上によく聞くと、朝になればD自身もここへA子を迎へに来るのだとも言つた。私はそこでA子をよめることにした。

A子は私のモデルになつてやると言つた。

私はA子の顔は描いたけれども、Eは描かなかつた。畫家が裸體を描くのは何でもない事なのに、私にはそれを憚る心持があつた。――「Eになるまい！」

やはりそのころの或る時。

A子は私の時計の鎖にさげてあるものを見てそれは何だとたづねた。それは Pocket――小さな寫眞入れだ、けれども今はからつぽだと私は言つた。

「私のを上げませうか？」とA子は冗談らしく言つた。

「有難う。貰ふのもいいが、私は氣まぐれだからせつかく貰つて見てもすぐ無くするからね」私はさう答へた。

やはりそのころの或る晩。

私はA子と一緒に淺草へ活動寫眞を見に行つたことがあつた。歸りには運悪くひどい夕立になつてきた。私とA子とは同じタクシーに乗つた。私はその車のなかで考へた。――今「この車を自分の好きなどんどこへ留めさせたところだ、A子は決して反對しはしないのだ。それはもう判り切つてゐる……」――「は！ Eになるまい！」でも、今ならもうEではないだらうぢやないか？「いや、とにかく、何だつていけないのだ！」私は自分自身のなかのさういふ對話の



ために沈黙してゐた。ふとA子が私に言った——いつもよりももつと慣々しく——  
「あなた、何を考へ込んでゐらつしやるの？」  
「う……あ、僕ですか、D君のことを——僕の知り合ひで君には御亭主だつたあの人の顔を思ひ出さうとしてゐたところ  
です。」

『やはりその前後の或る時。』

A子は何を思つたのか私にこんなことを言つた——「わたしね、或るひとに、女の人よ、あなたのところへ遊びに行くつて話をしたのよ。さうしたら、その人が言ふには、あなたの事を——愠つちやいやですよ——あの人は危険なんぢやないの？ つてさう言ふのですよ」言外には、「私はそれを承知であなたとつき合つてゐるのですよ」と言つてゐる、

私には何とも答へられなかつた。

A子は言ひそへた——「あなたがあんまり女に親切過ぎるからでせう」

私には猶のこと何とも答へられなかつた。

「何？ 私が女に好かれた話で珍らしかつたつて？ 冗談を言つてからかつてはいけないよ。からかふなら一そう、私がそんな女ときれいにつき合つたのは珍らしいと言ひ給へ——

### 窓展く

電車通りから四五間奥まつた路次に、烏籠のやうな格好の揃ひの家が七八軒一廓をしてゐる。私の家はその一廓のうちで表に一番近いところにある。それでなくつてさへ小つぽけな貸家の、ましてや街の中のことだから、庭などといふものはある。しかし、そこは、さる高貴な人のお邸に接してゐて、高い煉瓦塀で、ところがその煉瓦塀だけでもまた不充分と見えてその上へもつて来てトタン塀をもう一層高くつぎ足して築いて、完全に日光を私の庭から遮つてゐる。おかげで立枯れになつてしまつた躑躅が二本、それにこれもやはり枯れ木の柘榴が一本。躑躅の方はひつこ抜いて、その片隅へ隠して置いたが、柘榴は厄介なことに、ちよつとした大木なものだから、どうにも仕方がない。手輕るに抜き取る事もならず、抜いたにしたところが、その捨場所もない。どこかへ持ち出さうにも、この家の兩脇はびつしり隣家へくつついて、人ひとりかどうやら辛うじてといふほどの、空地とも呼べない空地なのだから、こんな枝を張つた木などは五十片きれにでも切

これや、僕が不愉快な思ひ出をつくりさうになるところを危く踏みとどまつた話のつもりであつたのだからね。——A子かい。その後、去年、大阪のうちから年賀狀をくれたつてが、それからどうしたやら……」

り刻まなげや、外へ運び出せもしない。もともと腰かけに住んでゐるのではあり、それ程の面倒をするがものもないので、木は枯れたままで立つてゐる。その枯木がまた、表を自動車でも疾走する度にひどくふるへる。それが例の煉瓦塀の上のトタン塀へ小枝が觸れてゐるものだから、ガタン／＼業々しい音を立てる。家の小屋組は地震ですつかりゆるんでしまつたところへこの物音だから、知らない客はまだ地震かと目を見据えるほどである。かういふ困つた木のほかには、家主が縁日でも仕入れて植えたらしまらぬ灌木がそれでも、不思議に枯れもせずにある。これが色も香もない私のところの庭である。私は時々故郷の田園の廣い庭を思ひ出して、自分の都會での居住を、屢々自ら呪ふことがある。ついでに一般の都會居住者をも憐れむのである。……  
現在、この家に住んでゐるのが四人——でも、ひとりに四疊以上の廣さを占めることが出来る。  
その人々とは第一が私。  
それからA。



それからR。  
それからT。

最後の人物だけはちよと紹介するが、これは私の内縁の妻である。半年ほど前からこの家にゐる。

で、大たいに於て私は幸福だと言つていい。即ち、平凡にもの事が運んでゐるの謂である。

そこでつひこの間のことであつたが、——さう、まだ十日とは経つまい。或る雨あがりの美しい朝であつた。楊子をつかひながら見てゐると、三坪ほどの空地を掃くためにRは、庭箒と埃とりを持って、雪隠のうらへ出た……

「や！、どうもすみません。あとで掃除をします」

突然、さう言つたのは、脊中合せになつてゐる豆腐屋のおやぢだつた。それが思ひがけないところから首を出してゐたのだ。おや！、妙なところへ穴をあけやがつたな。私もその時始めて気が付いた。それは私の家の雪隠の窓と向ひ合つて、豆腐屋では一つの新しい窓を設けたのである。いや、まだ出来上つてはゐない。出来上りつゝあつた。大工も何もない、ただ男がふたりで、鋸をゴシ／＼操りながら家の脊中へ無雑作に、穴をあけたのである。大きさはまづ二尺平方だつた。朝寝坊な私の家でまだ氣づかないうちに、大部分の仕事は已に終つてゐて、細部を工夫してゐるところだつた。

ことだ。なるほどまた、そんな市中で火を燃しては悪いとは云へ、たかが埃でせいせい煙草の吸殻が蓄つて汚いからといふぐらいのことだ。それを直接私の方へ注意をすることか、わざ／＼家主へ言つて行く程のものはないのである。しかし言はれてみればこちらが悪いのだからあやまつては置いた。しかしこちらから喧嘩をするつもりなら、彼と同じぐらゐな言ひ分はあつたのだ。雨がふると彼の家の物置きの屋根のしぶきが私の家の廊下へはげしく飛沫をあげせかけて、そこを開けては置けない。それは向ふの屋根が遠慮もなくこちらへ突き出して來てゐるからだ。また火を使ふ商賣である彼の家の煙突が非常に低くつて、風の工合でその煙が私の二階へ吹き込む。煙だけではない、その低い煙突のところへ匏屑や紙屑を放り込むと見えて、その燃料の形をして火の子が盛んに舞ひ込む。夏のうち、白い干しものでもしてゐると、その爲めに汚れるほどである。それだけの低さの煙突ならば、きつと石炭を燃す等で許可されてゐるに相違ない。だが、近所合壁で一々そんなことを言ひ合つてゐては仕方がない。私たちがただ相手が自分の受ける不快だけ知つてゐて、自分の與へる不快を一向氣づかない蟲のよさを苦笑してすましてゐた。それだけならば何でもなかつたのだが、この春のころの事である。私は或る家から小犬を預けられた——轉居するに就て今度の家は新築で、隣家との間にまだ垣根が出来てゐない。

数の少いRも何一つ答へた様子はなかつた。

「今、ものを言つたのほうちへ言つたのぢやなかつたの？」

Tがさう尋ねた。

「さうだよ」

「なぜなんとか返事をなさらないの？」

私はこの窓が氣に入らなかつた。それや、自分の家の脊中へ自分で穴をあけるのは、こちらで文句はないが、私の家の雪隠とあまり近いからだ。彼の家と私の家との間はほんの二尺とはない。私の雪隠の窓から手を出せば、彼の窓に手がとどくどころではない。手は窓をとほして彼の家の空氣をつかむ事さへ出来るのだ。——それよりも私はもともとこの豆腐屋を甚だ憎んでゐる。彼は、私の家から彼の屋根へ唾をするとか、ものを投げたとか、さては自分の家の脊中で埃を燃したりして貰つては、ここにはいゝ布團が納つてあるから燻ぶるとか、さういふ抗議を持つて家主へ私の家を排斥に行つたことがある。彼の家屋が汚くなる事も本當ではあるし、埃を燃したので誤つて彼の家の板が少しこげた事も事實である。そのころ何しろ男ばかりの家でだらしなくはしてあつた。しかし私の家の誰もわざ／＼そのやうな事をした事はないのである。私の家の二階の窓から何氣なくやる事が、みんな彼の家の屋根に落ちかかる。問題は家があんまり接近してゐる

直ぐに垣根をこしらへるからほんのしばらく預れといふのであつた。(私の犬好きは有名だつた。)それはまだ二ヶ月とは経たない小犬だつたので直に私の家に馴れた。それが或る朝見えなくなつたのだ。捜すと、近所の子供の話に、犬は豆腐屋のおやぢに殺されてどこかへ持つて行かれたといふのである。理由は、小犬が豆腐屋のひとり子にぢやれつて子供は大きな聲で泣いたのださうである。もう少し大きな子供の見聞では、おやぢがいきなり出て來て、鑑札も何もない奴だから殺してもいいのだ。狂犬かもしれないぞと言ひ乍ら太い鐵の棒で頭を打ち据えた。小犬はその場でクルツと一まはりするとそのまま打倒れた。そいつを豆腐屋はつまみ上げて行つて、大通の泥溝どろぼろのなかへほほり込んだといふのである。そこへまたもうひとり別に近所のそばやの小僧が來て、犬はまだ死んでゐない。溝のなかでもがいてゐたのを小僧自身拾ひ上げて、泥だらけだつたから水をかけて洗つてやつて來たと知らしてくれた。飯たきを頼んでゐる婆やが、その事をまだ寢てゐる私に報告に來て、その瀕死の小犬を「たいどうしよるか」と相談をした。仕方がない、放つて置かう。死にさうになつてゐるのを動かすのも悪いし、それよりけそんなに苦しんでゐる者を見たくない。その代り死んでしまつたら、おれが自分で行つて豆腐屋の店さきへ投り込んでくれるからと言ひながら、私は起き直つた。婆やは自分のせいやうに詫び



て、庭から外へ出さないやうに注意してゐたのだつたのに、犬は自分で出たのだと言つた。また、尤も豆腐やは二三日来業を煮してゐたかも知れない——犬は與へてやつた寢床を寒がつて、豆腐やの床下へもぐつてそこに寝てゐた。時々鼻をならすものだから豆腐やでもうるさいと思つてゐた折からだつたのだらうとも言つた。婆や自身もうるさがつてゐたらしい口吻が私を一さう不氣嫌にした。窓の外はじめじめした春雨であつた。私は豆腐屋のトタン屋根へ啖を吐つかけてやつた。さうしてこんなせせつ込みしいところへ犬など預けに來た人間まで腹立たしくなつて來た。

通には死にかかつてゐる小犬を見るために人だかりがしてゐた。とさう來客のひとりが話した。それや私の家の犬だ。まだ死なないでゐるのかと問ふと、八分どほりは死んでゐたといふ事であつた。そのうちに私の家の前がどや／＼と騒がしくなつて、近所の子供たちがうちの婆やを口々に呼びかけた——お婆さん。犬が來たよ。お婆さん。犬が來たよ。

よろめいて辛じて歩いてゐた。一心に地面を嗅ぎながら、目はつり上つて、呼んだけれども瞳を動かすことさへも出來ないらしかつた。不憫を感じる前に物凄かつた。頭は腫上つて、ぐつしよりと泥に濡れた體は板のやうにつぶれてしまつてゐた。まだ朝飯もやつてなかつたのである。食物を與へた

間へ入れてしまつた。又、鑑札を受けてゐないから殺してもいいといふ彼の正義觀がへんに私に氣に入らなかつた。私の家では彼から豆腐を買はない事にした。尤も豆腐は私はあまり好きではない。ところでこの男が私の家の便所や庭（といふのも、前述のとほり滑稽だが）を唯一の眺望として勝手に窓をつくる。それから、いやどうも濟みませんなどと、自分の都合の悪い時にはなまなか温和さうに人並の口を利くのだ。そんな男に返事をする口は私は持たない。私は身分によつて人を侮蔑した覚えは一度もないだけに、相手を高が豆腐屋のおやぢとは思へないで、その厚かましさを憎むのである。そのくせ私は當の豆腐屋のおやぢの顔は別に見覚えてもゐない程である。この種の私の偏見は實におとなげなくをかしいものであることを私は自分で氣がつく。どうも、をかしくつても仕方がない。

ともかくも、私は豆腐屋には返答をしなかつた。私のつもりでは、豆腐屋がそこへ窓を設けたことを、私が認めないものである。

窓と窓とはこのやうに向ひ合つて、私の家の便所からは隣の一室は見とほしになつた。先方でそんなへんなどころへ勝手に窓をこしらへたのを、何もこちらで遠慮をしてやることではないといふので、私は敢て私の便所の窓をしめてやらぬ。先方ではガラスに紙を張つたものを簾込むやうにこしらへて

なかつた。しかし回復した。私は喜びながら四這ひになつてよろめいて歸つて來た犬の眞似をして皆を笑はせた。興に乗じて、私は獨白で犬の心理描寫を試みた——…俺はひよつとすると今死ぬかも知れない。…俺のまはりのこの人だかりは俺を見物に來てゐるのだな。…それにしてもここはどこだらう。さうだ。ここはどこかの道ばたぢやないか。——俺は道ばたで死なうとしてゐる。みんな俺を宿なしの野良犬だと思ひ込んでゐるに違ひないが、俺はそんな者ではない。ちやんとした家がある。家の人たちは俺の事を案じてゐるだらうな。然うだ。ここでこのまま死んだのでは俺は死恥を曝すのだ。ともかくも俺はどうにかして吾が家へ歸らなければならぬ。これがこの際の急務だ。…そこで、犬を眞似て倒れてゐた私は、よろめきながら立つて——…それにしても俺の家は一たいどの方角だつたらう。——犬の私は目を引きつらせて鼻を疊にすりつけてふら／＼と歩き出した…

すべては「がまだこの家へ來る以前のことであつたから、彼女は私が豆腐屋を憎んで口も利かない理由は知らなかつたのだ。實際、私は諸君が冷靜に考へるより案外この豆腐屋を憎んでゐるのだ。最初はまだ身勝手な男とばかり思つてゐたのを、その後「花を愛するものは詩人だ。動物を愛するものは善人だ」といふ私の箴言によつて、私は豆腐屋を悪人の仲間

ゐるのに、何故かそれを開放してある。かうして私の便所の窓も亦、一つの展望を持つことになつた。

その部屋といふのは、離れ座敷で——座敷といふものをかしいが、ともかくも一つの獨立した屋根の下にある。そのトタン屋根は前に私たちがそこを汚くするといふので抗議されたところだし、その床の下は例の小犬がもぐつて行つたところなのだ。屋根の大きさから判断すると六疊ほどある。しかし、便所の窓から見えるところによると押入れがあるやうだから四疊半だらう。そこにひとりの男が世帯を持つてゐる。どうも新らしくそこへ住む事になつたらしい。豆腐屋が部屋貸しをしたのだらう。さうしてあまり薄暗いともいふので、あんなところへ窓をきつたらしい。この同居人——私にとつて新しい隣人は三十すぎの男だつた。それ以上には、どんな顔の、何をする男だらうといふ程な興味すらも私には持てなかつた。ただその新しい窓に對する敵意もどうやら薄らいだ。豆腐屋のおやぢなら、もし間違つて紙屑一片でも投げたら吐鳴りつけてやらうぐらゐの氣持は、この窓に對しても無かつた……

「男やもめに何とかと言ふけれども、一たいどんなことをして暮してゐるのでせうねえ」

女には多少の興味があるらしく「はそんなことを言つてゐたけれども、その後、話題にならなかつたところを見ると面



白い発見も別になかつたらしい。それが、一昨晚のことだつた。

客があつてみんな二階にゐた。不意にTが下から呼んだ。「Aさん! Rさん! おりて来てごらんなさい。珍らしいものがあるんだから」

何か常談らしいのだが、その聲がほんとうだつたからAもRも下りて行つた。それから梯子段のところでは何か話し合つてゐる。客といふのは極く親しい人ではあり、私も何かと思つて客をほり放しにして下りて行つてみた。Tは梯子段の中ほどにゐて、例の窓の方を指しながら性急に囁いた――

「いま、お嫁さんが来たんですよ。――え、お嫁入りですよ。周旋屋がつれて来たの。周旋は両方から十五圓づつとるのですね。金を受取つてみたわよ。それから里がへりがどうのなつて、いろんなことを言つてゐるのが聞えたわ……」つまらない事を発見して来てTは子供のやうに珍しがつて喜んでゐる「氣の早い。もう丸鬻を結つて来てゐるのよ。ちよつと覗いでごらんなさい」

私もちよつとした興味に驅られて覗いて来てみた。なるほど丸鬻の女二十五六のがひとり窓の正面に見える。しかし私はそれ以上に覗き込むほどの好奇心もなかつた。ただ、こんなところから、こんな結婚式を見ることが一種奇妙にかしつかつた。ユーモラスといふことの正當な意味はかうでもあ

「ふむ? どんな自由結婚論をね?」

「いや、何ももない、たゞ、男は三十以上、女なら二十五以上、勝手に結婚することが法律上いいといふやうなことだけですけれどね」

「どんな男だい、俺はよく見ないが」

「さあね。わからないわ。髪を分けて眼鏡をかけて。ニコニコがすりの単衣などを着て、何を商賣にする人だか知らないが、夜なべに袋はりなど内職してゐたわ。きつとお嫁さんを貰ふのでかせいでゐたんでせう。簞笥見たやうなものもあるし、鼠入らずなども買つて来てありますよ」

隣の談笑は十一時半ごろまでつづいた。私たちもそのころまで隣の噂をした。それぞれ寢に就かうといふので便所へ入ると、又新しい発見をした。それは手まはしのいい丸鬻の花嫁と思つたのは間違ひで、あれはいづれ世話をした友達の女房か何からしくもう歸つてしまつてゐて、その代りにはやはり昨日の話のとほり若い十七八の島田鬻がひとり残つてゐたさうである。――これもやつぱりTの発見である――「ガスの着物にメリンスの帯で島田だけはでも結び立てよ」私はまた私で誰も見なかつたけれど男の聲だけを聞いた。それは何のことだかは知れないけれども「正直にやつてさへすればね」といふ一言だけだつた。

寝る前に二階の窓から首を出してみると十三夜のこの上な

らうかと思へる。聞けば隣人はともかくも羽織にセルの袴をちやんと着用してゐるさうである。眞面目なめでたい結婚に相違ないのだ。その花婿に周旋屋が「お前さんもまあそのうち、それや一週間後でも半年後でもいい、懐の都合もあるだらうから工面のいい時に、一つ花嫁の實家へ二人づれで行つて安心もし安心もさせたがよからう」といふやうなことを云ひながら、十五圓受取つてゐたさうだ。外にも三四人ぐらひの人がゐると見えて、酒氣を帯びた談笑の聲が手にとるやうに聞えて来た。

「さうく」とTが思ひ出したらしく言つた「さう言へば、きのうのお友達らしい人が来て話をしてゐたのはやつぱりお嫁さんの事だつたのね。十八九のがひとり、外にももうひとりあるがそれは少し年をとつてゐる。二十六七だから、若い方がいいだらう。とさう言つてゐたが、年とつた方がよかつたと見えるわね。歸りぎわにそのお友達のやうな人が、財布でも開けて云つたのでせう――つまらないな、一錢銅貨一つだつてありやしないといふと、だからさ、飯ぐらひ食つて行けよ――と隣の人が言つてゐてよ。あれ新潟の人ぢやないか知ら。そんな言葉つきだけれど」

すると無口のRが言つた「今、考へるとおとつひも面白いことがあつたのです――やつぱりそのきのふの友達かも知れない。ふたりでね、自由結婚論をしてゐたつげが」

く静かな月夜だつた。そのせもあるだらう、私は「正直にやつてさへすればね」と言つた新夫婦を祝福する好い隣人の心を持つてゐた。

次の日の朝になつて、――つまり昨日の朝だが、私は多少の好奇心を持つてそつと隣をうかがつて見た。男は窓の方をうしろにしてもつと明るい方に机に向つてゐた――そこに机があつたことは、少し意外だつた。男はその机によつて手紙を書いてゐるらしい。すでに書き上げたのが五六通ばかりもそのうしろに置いてある。女は? 少しのび上つて注意してみると男のうしろに、お尻を向けあつて疊の上へこども込んでゐる。さういふ新境界に於かれた男女の自然な状態として單にてゐるのだといふやうにも思へるし、また妙に不安のある静かさのやうにもある。何か氣に入らない事があつたのぢやないかなと、人ごとながら少し氣がかりだつた。朝飯を了つてそれから新聞をのこりなく見てから、私は唾をほくために庭の方へ首を差延べた。さうして何氣なくその方を見ると、あの小窓はここからも見えるので、そこへ深く肘をかけた女がちつと俯向いたまま私のすさまじい庭の土を見つめてゐる。この朝はその前夜のよい月夜にくらべて思ひがけない雨だから、そのやうな様子をしてゐる女が少し陰氣すぎていけない。

それでも、そのうちに、私は隣から洩れたごく低い笑ひ聲



を一度聞いた。

今日は昨日よりもよけいに話聲がするではないか。

今も笑ひ聲が聞える。又、鋸の音のやうなのがしてゐるが、今度はまだ窓を展くのではあるまい。恐らくは閉すのであらうか——工合の思はしくなかつた障子をもう一度細工しなほして。それがいい。私たちはもう覗かないつもりだけれども、それでも、もう秋冷を覚えるではないか。

「秋ふかき隣は何をする人ぞ」

### 時計のいたづら

I

机の上から枕もとへ持つて来た時計を臥ながら弄んで、その持主は、そのしやれた時計が今さうひどく氣に入つてゐる。趣味のいい代物だと信じてゐる。薄手の、さりとて、華車に失しない銀時計で、わざと少々古風に細工してある。そのさえくとした光澤のいい文字板には、ダイヤモンドといふ型の——いや、それよりはもつと小さいかと思へる活字で

ULYSSE NARDIN

LOUIE & GENEVE

と書いてある。くつきりと美しく並んでゐる。Ulysse Nardin Loue and Geneve と彼は口のなかで二三べん呟いてみて、ひよいとそれがウキリアム・ブレクタの詩句か何かのやうな響があるやうな氣がする。——「對句のやうに美しい唇」か。どうしてだか我々の主人公はふとそんなことを思つた。——この男は永年の神經衰弱で一種の輕微な意思奔逸に落人つてゐるからであらうと思ふ。彼は小ブルジョアで兼ねて

へぼ、詩人である。何をして食つてゐるのだからこゝまでは私も知らん。即ち、私が今、ピンセットで摘み上げたこの男はサロン文學の駄作の主人公には持つて來いに出來てゐる。さうしてこゝでもう一つ序に注意すべき事は、私が偶然にこのやうな人物を拾つたからこのやうな話を書くのであつて、敢てこのやうな話を書きたくてこんな主人公を探し出したのではないといふ事實である。これ等のことを御承知の上で、親愛なる讀者諸君よ、この波瀾曲折に富んだ物語は讀まれなければならぬ。さうして諸君の何よりの急務は讀んで感心することにある。

——これは一見つまらない時計のやうだが、そこらにざらにある金時計などよりは倍も好いんだからな。——我々の主人公はどうやらそんなことをちよつと問題にし出した。——みんなは、どうもこいつを安物のやうに見ていけない。心外だが、さればと言つて吹聴してしまつたのでは、折角のこの時計の奥床しさに對して申しわけがない。……が、見る人間が見ればちゃんと判るんだ。現にこの鎖を——と、そこで彼



は今度はその白色のどツしりとした鎖の端を高くつまみ上げて、そいつを疊の上へザク／＼と音をさせながら置いたり、また持ち上げたりして遊びながら——この鎖を買った時だつても、こいつが果して時計に似合ふかどうかを試さうと思つてポケットからとり出すや否や、店の主はそいつを横目で素早く見て取つて、

「失禮ながらちよつと拜見させて下さいまし」と、恭しく手を差し出しながら、

「へへえ」と感に打たれたやうな聲を出して「何と！ 高尚なものですな。こら！ みんなも拜見させていたくださいな。これや珍らしいお品だよ。すつきりとしたものですねえ」

いかにもつく／＼とさう言ひながら中僧や小僧たちにも見せたものだ、それから店の主人は、彼が買はうかどうかどうしようと迷つてゐた一つの鎖を、匣のなかから外すと、それを時計にぶらさげた形で持ち副へながら、

「さよう。細くも御座いませんやうですな」

と言つたものである。實をいふとその鎖は大して彼の氣に入つてはゐなかつたのに、その場の呼吸でつひうっかり買ふ氣になつたのであつた。時計をほめておだてて置いて、主人はうまく俺を賣りつけた……そんなことは俺だつてちやんと知つてゐるよ——と彼は考へた。だからこそ、思ひ出すと、そいつが少し葉腹で、従つてこの鎖は、——と、彼はその鎖

を指から放してしまつた。鎖はザク／＼と落ちて、グシヤリと丸まつて、ガラ／＼と電燈の光に眩しくかがやいてゐる。彼はそれを見つめながら、不意とその鎖がだん／＼いやになつて来てしまつた。さうしてさういふ視線を五分ほどつづけてゐるうちに、彼の心はその鎖に就てほゞ三段に分つことの出来る進行を加速度的につづけた。

第一にはその品質に對する憎悪である。それはプラチナでもなく、ニッケルでもない。又ホワイトゴールドでもない。ごく新しい一種の人工金屬で、しかしそれはそれ自身で獨立的に權威があるといふよりも他の最も貴重な物にそつくりだといふので、つまりは物欲しさで淺ましさとこの傑作であるといはなければならぬ。かつて或るカフェのウエイトレスが全く若い貴婦人のやうなスタイルで店へ通ふてゐるのを見たことがあるが、さうして其志や憐むべしと思ひ、同時にその姿や愛すべしとも思つてつく／＼その後姿を見送つた事があつたが、この鎖も多少此ウエイトレスに似てゐる。簡単に云ふと、この代物は目方に於ても光澤に於てもプラチナにそつくりなので、その點に於てはホワイトゴールドなどのやうな間抜けなものではないとは言へ、やはり、一種のイミテーションに相違ないのである。高いなら高い。安いならば安い。さうしてもつと純粹な、且つ素性の何人にもわかるやうなのを持つことは趣味の士としての心がけでなければならぬ。

彼はそんなことを思ひながら寝たのだ。

II

第二には、その細工がごくありふれた奴で、彼は最初にはその平凡な處が飽きが來ないだらうと思つたのであつたが、かうしてその品質に對して不満を抱き始めると、その細工までが、飽きないどころかいよ／＼曲がなくなつてしまふ。せめてこの細工が時計に打つてつけの趣味でもあつたならば、そこにまた理由も發見出來ようといふものであるが……なに、氣に入らないとなりや直ぐにも取り返へればいゝさ、何も女房をとり代へるのとは違ふ、煩悶する事はない。

第三に、これは第二の末節に接續して甚だ有效であつたが、あの時、あの店の主人の話ではこの鎖の金屬はつづしにして一匁十六圓でならいつでも引取るのだし、これは四匁三分あるのだから14が4の46の、24、13が3の、34の12ええと、——ともかくもあまりたいした損ではなしに、この鎖は取換へる事が出来る……

彼は、そこでもう一べん、その時計と鎖とに目をやつた。今まで氣がつかなかつたが、まあ何といふ不調和だらう。——不調和。不調和。まるであの女があつた男の女房になつてゐるやうなものだ彼は手をのばして電燈をパチンと消すと、

「對句のやうに美しい唇……ふともう忘れてもいい彼の女の顔を思ひ出し、それが……、我々は此の氣まぐれな男のわけても今夜のやうな氣まぐれな晩の聯想について行くことは出来ない。ロオーレンス、スターンではないから。要するに

あの晩、あんな風に——といふのは第一章に書いたとほりであるが、あんなにゆつくりと時計を見た事も、どうやらこんなことになる約束があつたからかも知れない。一たい、あの鎖のことをあんなくそみに思つたのがそも／＼よくなかつた。自分でケチをつけてしまつた。時計はもう多分現はれないだらう。昨夜も搜したのだし今日も搜したのだ。それにしては一たい誰が盗んで行つたのだらう。せつかくの秋晴が、さうしてその散歩が、どうも面白くない。忘れてゐる時でもその失はれた時計が潜在意識にあり、しかもいつも潜在してゐてくれればまだしも、それがひよくりと表面へ浮出しに來る。

尤も、搜したと言つても、二度ともそそくさに見ただけだ。留守にT子がゆつくりと搜して置いてくれれば出て來るだらう。いや、やつぱり出ないかも知れない。さうさ、あの晩の事が何しろどうもよくない。「おい、A」と彼はふりかへつて同じ散歩者のAを呼んだ。「どうだね。時計はあると思ふか。無いと思ふか。賭をしよう。俺はもう無いと思ふ。あつたら祝ひにおごるよ——あの時計は俺の氣に入つてゐるんだからな。鎖もさ」慌ててさう



つけ加へた。賞めると出て来るやうな気がしたからだ。彼はAに「あると思ふ」と言つて貰ひたかつた。そこで自分では無いと思ふ方を言つたのだ。しかしAは言つた——  
「さあ。どうもやつぱり無いやうな気がするな。」  
「え。」彼は心細さうに「それぢや、ふたりとも無いと思ふぢや賭にならないぢやないか。何故ないと思ふ？」  
「そんな豫感がするんだよ」とAは答へた「でもね、僕は昨日の三時ごろにあの机のわきの臺の上で見たんだよ。それからあそこ窓はあのとほりだし、窓の向ふまでは二軒の家物干し臺があるだらう。手を延せば直ぐだ。僕はその時、これやちよつと不用心だなと何氣なく思つたところだつた。」

「ふむ、そんなことを考へたかい。それぢややつぱり物干し臺で物欲しいと思はれたかな」

そんな常談を言ひながら彼は心では、ああやつぱり駄目かなと思つた、弟のAがそんなことを豫覺したのは全くよくない。この間金を落した時だつてもさうだ。自分でこれやこんなことをしてゐると金を落してしまふわいと思ひながら、今度氣がついた時にはもうなかつた。一たい我々の一族は不思議と第六感が發達してゐるので、この間金を落した時だつても……彼は、もう一ぺん又同じことを考へ直して、——この間は金を落し、今日は時計を無くし、十日とは経たないうち

III

家へかへるといきなり彼は、

「時計はあつたかい？」

と言ひながらつか／＼と茶の間へ這入つて行くと、そこに客がゐたので面喰つた。客が婆さんであつたので彼はちよつと僻易した。

「やあ」

と一口言つて立つたまま、彼はT子に

「時計は？」

「ありませんわ」

「え、無い。嘘だらう」

「いいえ。見えますよ。」

彼はHをつれてそそくさと二階へ上つた。彼は茶の間にゐる婆さんを好かなかつた。理由は、挨拶が丁寧すぎてその上にもう一つ、いつか立替へた金の拂へないでゐる申しわけが同様に甚だ長すぎる點にあつた。それで彼はT子の言葉を信じなかつたけれども、その顔つきには見失はれたものが出ないと言つたけれども、その顔つきには見失はれてゐなかつた。T子の言葉は常談にしか思へなかつた。T子の言葉は寧ろ彼に安心を與へた。わざとほけてゐるやうにとれたからである。し

につづけさまにこの始末ぢや、今に何が起るかかわらないやうな氣がして彼はすつかり悄氣てしまつた。

「おい！ おい／＼！」

突然、Aが呼びかけるから首を上げると、

「Hさんだよ」

見ると、彼の鼻のすぐ前にHが立つてゐる。

「や、おかへりですか。今お宅へうかがつたところでした」

「はあ」

彼は氣のない返事してゐる。

「もう歸るところですよ。一緒にお出でなさい」

彼があんまりぼんやりしてゐるのでAが歩き出しながらHにさう言つた。彼もやつと氣がついて、

「さう。さ、一緒に行きませうや。——實は僕、今日、時計を無くしちやつてね」

Hも彼等と同じ方へ歩きながら「へえ？ 道ですか？」

「いいや。うちで。出がけに無いことがわかつたんだ。いや、昨夜からなかつたのだ。ゆうべ客があつて時間を聞くから、見ようと思つたらいつも置くところに無い。その時も捜したのだがそのままになつてゐて、今日また出がけに氣がついて捜した。無いんです」

「ははあん？ 妙ですな」

「妙ですよ」

かし弟のAがつづいて二階へ上つて來た。こんなことを呟きながら——

「さてな。どうしたのだらうな。氣がかりでいけないな」

「なあに。あつたんだらう。あるを出さないのだらう」

「さうではないさうだよ。本當のことを聞かせるといつて今よく聞いたんだよ。本當に見つけないさうだ」

「本當か。ふむ、困つたな……」

「一たいどこへお置きになつたのです」この心配を共有しなければ友情に反するといふのでHも、そばからさう言つた。

「ここの上——」彼はふりかへつて手を差し延べて自分のうしろにある机の、そのわきの臺を指した。班竹で出來た支那風の小さなものである。「ここの上へいつも置いておくのです。きのふもね、三時ごろには弟がここで見かけたのです」

「確にあつたのだよ。僕が出かけやうと思つて、ちよつと時間を見たら、ちやうど三時二十分ごろでした」

「それから客が來たのは夕御飯の時だつたから、その時、時計がなかつたのだから、三時半から六時半までの間の事だね。ふむ——」彼の頭の中には今まで影であつたものが、むつくりと現はれて鮮やかに活躍し初めた……

「ちやうど夕御飯のころですな。——茶の間に下りてみらしたつたのですか」

「え！——ちやうどその頃、夕方。ちやうど干し物をとり込



む時刻です。きのふもい秋晴れだつた……」その日見た一つの光景を彼は思ひ出した。

「うむ。——たい、どうも不用心なところにあつたと僕は思つたのです。不思議とその時計を見て出かけた後でね」

「窓はあけてありましたか」

「いや、閉めてありましたかね」

「だが閉めたつて何にもなりやしない」弟と客との問答へ彼がかう言葉を挟んで、つと立ち上つて窓のところへ行つて

「ね、これです」——開けてあつた窓をびつしやりと閉めた。その障子の真中は一尺五寸に二尺ほど、ガバと穴があいてゐた。ガラスの箆つてゐたところである——「この間の大風、戸をしめずにゐたら、ガラスは飛んで破れちやつたんです」

「ははあ、かうなつて閉まつてゐるくらゐなら、あいてゐる方がましですね」

「さうです」彼はその穴へ手をかけて、ビシヤリと障子を開けながら「さうしてここはこのとほりです」さう言ひながら外を眺めた。彼のするとほりに客も立つて来て覗いた。

「なあんだ。こりやすぐ屋根つづきですね。いや、何んだつてあんまり近すぎる。おや、あそこの屋根はなんです」

「あれは鹽せんべいやの屋根でしてね。あの板の上へ一面に、毎日なまのせんべいを干すんですよ。——赤いせんべい

居た。彼は再びびよこんと窓を乗り越えて、今度は自分の部屋に居た。いつの間にかI子がお茶を持って二階へ来てゐて、

「おや、何をしてゐらつしやるの」

「何、運動をさ」

「時計は？」

「無い！」

「さうを？」

I子は直ぐに下りて行つた。彼等三人は茶をのみ始めた。と、彼は危く含んでゐた茶を嘔き出すところだつた。

「何です。何がそんなにをかしいのです」

「いや、なあに。西洋の一口話をふいと思ひ出したのでさ。裁判官が盗人を取調べてね『その方はまた何と心得て窃盗などを働いたか』すると賊が云ふのさ『何だと心得てだなんて……。戸は開いてゐる。人どほりはない。奥には金目のものが見えてゐる。これや、まあ考へてもごらんなさいましよ、旦那だつても這入らずにやゐられますまいが』……」

「ハ、ハ、ハ」

IV

「で、客に來た人は、きのふ、誰もありませんでしたか——

を干すと此の障子へ赤く映る程にねえ。毎日幾人も人が昇りますよ。屋上工場だ。しかし今までにものをなくした事はありませんよ。もつと近いところをごらんなさい。そら、目の前に細い柱がありますね、向ふにも。ここが、この下の家の物干し場です。ね——」

彼はさう言ながら、ひらりとその窓を飛び越した。それから次の瞬間には自分の家の狭い板庇の上に下りてゐた。そこと隣家の屋根とは五寸とはへだたつてゐなかつた。彼は足を踏出す眞似をして、他の二人にそこを越すことが平地を歩くと同様なことを黙つて示した。それから手を差出して臺の上をさわつた。

「しかし、あなたは背が高いから」とそれを見ながら客は言つた「ですが、私のやうに背の低い人間だつたらそこから、この臺の上のものは見えますか」

彼は早速に五寸ほど身をこごめてみた「見えますよ、よく見えますよ」

「おい、もうやめた方がいいよ」と弟が彼に言つた「近所で見へんな眞似をしてゐると思ふよ」

「知らない人はへんな眞似をしてゐると思ふ。知つてゐる人があつたらひやりとする」

「今度やらうとする人間には手本を見せてやるか。ハ、ハ、ハ」

尤も、ここへ来てそんなことをするほどの太い人物もありませんがねえ」

しばらくの沈黙を破つて客がさう言つた。

「さう」と彼は答へた「大ていは一度きりの人ぢやないから。しかし、ともかくも客は三人あつたのです。ひとり夜来てかへりがけに時間をたずねたといふその人で——これは女ですが、遠慮をしてその隅つこの方にゐて時計の近所などへはてんで來はしない。それにそのころには時計は既にもう見當らなかつたのです。もう二人は——さう、そのうちのひとりとは来てすぐに歸つてやつぱりその入口のところゐたきりでした。その間に僕は下へもどこへも行きはしない。のこりの一人だが、これがちよつと——一應は取調べられるかも知れないな。時計の方へ行つて窓から外を眺めたりもしてゐたし、三時間ばかり遊んで行つたからその間に僕も下へおりたりした。それから五十圓ばかり金が欲しいやうな話もしたよ——それがさうだ。恰も三時から夕飯近くまでゐたよ。誰だと思ひます。I君さ。我々はあの信賴すべき人物はよく知つてゐるが、警察ではわかるまい——ともかくも取調べるだらうな。I君さぞ面喰ふだらう。をかしいな。嫌疑者が思ひがけなくひとり出て來たぞ」

彼の言つたのは無論常談だし、又I君を知つてゐるHにもAにもそれが常談だといふことが直ぐに通じた。



「すると」と客が言った。「I君が、あなたと夕御飯までここにゐたのだから、さうしてI君がそんな人でないことは言ふまでもないのだから、つまり時計はあなたの方が夕御飯をあがつてゐる三十分ほどの間に無くなつたのですね」

「あ、なるほど。三時二十分から六時半の三時間が、I君の信用によつて三十分に短縮したわけだな——夕飯の時刻の三十分。——あたりはうす暗くなつてゐる……」

「いよ／＼無いとなれば、もう決つてゐるんだよ」Aが思ひ切つたやうにさう言つた。

「……」無言で彼もうなづいた。

「あの窓のわざと相違ないですね。——たいどんな時計なのですか？——無論いいには相違ないが」

「ええ。だが見かけはごく悪いので。銀の時計です。ただ機械はずばらしいのです。たとへば針を逆にまはすでせう。——秒コンドの針がちよつと戸迷ひして、しかも十秒ばかり健氣にも逆行した上でそれからやつと止るのです。それほど精密に出来てゐるのです。それに趣味から氣に入つてゐたのでねえ」

「しかし類の妙な奴だから直ぐ脚はつくね」

「うん。しかし見かけはあのとほりの奴だから粗末なものだと思つて取扱ふだらうよ。鎖だつてもニツケルそつくりだからね」

彼はうなづいて見せてから暫く黙つてゐたが小聲で言ひ出した。「ね、H君。あの窓の直ぐ下の屋根のなかに間借をしてゐる夫婦者がゐるんだ。細君はつひ二週間ほど前に来たのだよ。それがね、偶然のことでの結婚式——ともかくも結婚式だ——それがすつかりうちから見えてね。といふのはうちの便所の前と向ひ合つてゐるところへ、向ふで窓を一つぶち開けてね。びつたり向ひ合つてそれが文字どほりに手のとどくところさ。その向ふの窓のなかが、こちらの便所から何もかもすつかり、自分のうちと同じに見えるのさ——屋根を見てもわかるとほり、あのとほりくつついて居るんでせう。話まで手にとるやうに聞えるのでね、その細君といふのが、周旋屋か、結婚媒介所がつれて来たのだがね」

「はあ？その話は私、雑誌で讀みましたよ」

「へえ！いつです」

「つい四五日前ですよ。今お話のとほりを詳しく書いてありましたよ。自分ででも見た人のやうに。……たしか「改造」で見ましたか知ら」

「畜生。あいつがもう書いたんだな。佐藤でせう」

「何でもそんな人でした」

「彼奴。——書くことがないものだから。ふむ然うですか。——僕も讀んでみよう。……それぢや君は御存知だらうが、その細君がね。昨日しきりにあそこの物干臺へ出て来て働い

「はア、失禮ですが一體どれくらゐるものですか」

「まあ、失禮ながら君の月給の倍です」

「やあ！——それは大變だ」客は半分意識的にしかしあとの半分は無意識にそんな聲を出した。

「——社會主義者たる君には少し遠慮があるけれどもね」

「それほどのものと知つたら反つて盗りはしなかつたでせうね。ほんのちよつとしたものぐらゐに見たので……」

見失はれたこの時計に就て一座は熱心に評定をつづけた。

「……何しろ困つたな。とどけ出て置いた方がいいものだから、どうしようかな」

「それや届け出て置いた方がいいです」社會主義者Hが一も二もなく所有權の保護を力説するらしい口吻なのは、少々奇觀であつた。

「さう。やつぱり届けるかな。もう一應よく搜した上で……もし無ければもう見當はわかつてゐるんです——それが却つて困るんだが……僕は實はきのふそこで、窓のところを人を見かけたのです——」

「へえ？」

「いつも見かけない人が、きのふその物干臺へ登つてゐたのです。なに、張り物をしてゐたのですか」

「へえ？」

「さう。やつぱり届けるかな。もう一應よく搜した上で……もし無ければもう見當はわかつてゐるんです——それが却つて困るんだが……僕は實はきのふそこで、窓のところを人を見かけたのです——」

「さ。どうもそこまで知らなかつたが。いや、確かにきのふ始めてです。でもあれからいつもじめ／＼した日、物を干したり張りものをしたりする日は無かつたでせう。きのふが始めての秋晴だつた……」

「すると、始めてそこへ登つてみて、いつも蓄音器などを鳴らして遊んでゐるうちだが、たいどんならちだらうと、ひよいと家のなかを覗き込んだりして、すぐ手のとどくところにあつたものを見つけたかも知れないですね。——たい田舎の人といふものは、我々も田舎でよく育つて知つてゐますけれど、自分のものや他人のものなどの見さかひが、あまりはつきりとしらないのではないでせうか。ちよつとそこの花を摘んだり道ばたにあつた果物を搾いだりするやうな氣持で。無智——やつぱり一種の田舎の純朴の變形で……」



「ふむ」彼は外のことを考へてゐた。さうしてひとり言のやうに言ひ出した。「……戸はあいてゐる。人どほりは無い。奥を見ると金目のものがある——か。——いや、無論のことさうと決めてしまふわけにもいかん。ひよつとするとそこらに在るのかも知れない、——二階ではなく下にありさうな気がする。下の柱時計がひどく狂ふものだから、それを見るために僕はI君が歸る時か何か、それを下まで送つて序にある時計を持つておける。それから柱時計と見くらべてゐるうちに便所へ行きたくなる。時計を握つたまま便所へ持ち込んで、気がついてそれを窓の上へちよつと乗せて置く。それつきり忘れて来てしまふ……どうも何だか、そんなこともあり得るやうな、いやあつたやうな気がして来たぞ……」

「いや、そんな事が——ありもしなかつた事があつたやうに思へたりする事が、時々あるものですよ、殊にかういふと考へ込んでゐると」

「然し、假に今もし便所の窓に時計がボツネンと置かれてあつたとしたら、ここでまたもう一度考へ込まなければならぬことが出来て来る。そこへ、一たい、僕自身が置きわすれたのだから、それとも時計を持つて行つた人が、ここからうして時計々々と騒ぐのを見て、殊に僕が庇屋根に下りてみたりしたのに氣味が悪くなつて、そつとあちらの窓からこちらの便所の窓へ時計をかへして置くやうなことを考へた……」

彼も目の前に落ちてゐる一つの不思議な時計を見た。それは信じ難かつた——幻影か何かのやうに。

「その時計とは別ですか」

客がやつと完全に言葉を言つた時、彼は手を延して見ても大丈夫、時計は消えさうにもないとわかつた。

「何の事だ！」

彼は手にとつて、怒つたやうな聲だつた。それからきまり悪さをかきさつたがこんがらがつて彼はクス／＼と笑ひ出した。「こん畜生、うまく隠れん坊をしてゐたな。ちよつといたづらのつもりで隠れたら、皆があんまり大騒ぎをし出したので、をかきさを噛み殺してゐたんです。——忍び切れなくなつて吹き出しちやつたから、その拍子に出て来たのだ」

「ひとりでにころがり出したのですか」

「いや、まさか！ただね、僕が何氣なく本を一冊引き出したら、そいつと一緒に出来たのさ。待つてゐたとばかり」

「奥さんが、ひよつとして、そんなところへ隠してお置きになつたのぢやありませんか」

「さあ、何しろ……」

彼等はもう一度笑ひ出した。なかでも一番笑つたのは時計だつた。鎖はさまを見ろとばかり苦笑してゐる——彼にはそんな氣がする。——時計は持主の心配が氣の毒で出たくつて

……。ええ、うるさいな。高が時計一つの事ぢやないか！」「まあ何にしろ」とAは少しやけになりかかつてゐる兄を慰めるやうに「もう一度、篋と捜して見ようぢやないか。捜すとやつても狭いところだ。家中捜したつてもわけはない」「それにしても成べく早い方がいいですね。あんまり遅れては届出るにも悪いし……」

客もさう言つて注意した。さうして皆の心のなかには駄目なことを確實にするためにといふ意嚮ばかりがあつた。就中、彼はここは斷じて無いことを思ふと、人々のすすめさへ氣に入らなかつた。彼は妻のI子が實に丹念な性格で彼女がものを捜す細心な様子をよく知つてゐたからである。

「さあ？ I子も無いといふのだし、ここらにある筈もないのだが。どうれ」

彼は不精不性に机の方へふりかへつた。

とたんに、ドタン、バサリ！ とごく低音がした。本の一冊でも落ちたやうに。

「あ」

Aが短い音を發した。

三十秒ほどして、

「そこにあるのは……」

「あるではないか」

仕方がないのを、鎖が引きとめてなかなか出やうとはしなかつた……

「まあ、皆さん、何がそんなに面白いのでせう。御飯を食べたいぢやかうと思つて、何べんお呼びしても聞いて下さらないのね」いつの間にかI子が来て立つてゐた「まあ、あかりもつけないで」

I子が電燈のスイッチをひねると、明るい光のなかで彼は時計を珍らしさうにもう一度見て、わざと道化た聲で

「全くこの品に相違ございません。鎖も、なかなかいい鎖だ」

「H君。今日自慢の時計を吹聴する好機會を得たやうなものでしたよ」

V

「一つ大騒ぎの主人を拜見させて下さい」

Hに渡す時計を見ながらI子は、

「時計々々であつたぢやありませんか。私も随分心配しましたよおかげで」

「でも見つかつてよかつたわねえ。随分とたづねたでせう。さつきから」

みんなが食卓についた時、I子がさう言ひ出した。

「何を言つてるんだい。俺が捜せばすぐにあつたぢやない



か」

Aと客とはまた笑つた。

「でも、無い、無いとおつしやつたぢやありませんか」

「それや無かつたさ。捜さないうちには」

「——さつきから捜さなかつたの」

「自分こそどこを捜したのだい」

「いいえ、わたし、捜しやしませんよ。だつてお出かけになるとすぐ婆さんが来て、旦那が御留守ならと言つて座り込んだのでせう。捜す間なんかありやしませんよ。でも、捜したやうに言はなげや、あなたがお怒りになるでせう。さうすれや婆やさんに氣の毒でせう」

「フフン。ばかにしてら。みんなお前が一生懸命さがしたものとばかり思つて……」

「だから、わたし、Aさんによく見て下さいと言つてあるぢやありませんか。——無い、無いとおつしやるから、わたし、ずるぶん氣を揉んでゐたの。きつと無くなつたと思つて。さう言へば、きのふの夕方、あすこの向ふでは（言ひながら便所の方を指しながら小聲になつて）牛肉の匂ひがして來たのでせう。まあボール箱をはつてゐてあんな御馳走をしてと思つてゐたやさきだつたから、あれやさきつと時計を儲けたからだつたかしら、と思つてさ、今もさう考へてゐたところでしたわ」

「ばかな！」

彼等は別に何もかぜぎもしなかつたけれども牛鍋の用意をしてゐる。T子は隣のゆふべの御馳走から今日のうちの御馳走を聯想したのだらうが、彼等には偶然のやうにをかしかつた。

「ばかな！ 誰がそんな泥坊があるものか！」

「さうを？」

「あたりまへさ」

「だつて、あなたも盗れたらしいておつしやつたぢやないの」

「それや、とられたかと思つたさ。——おい、もつと炭をつぎなさい。これぢや火が駄目だ。待ちどほしい」

彼は火を吹いてゐた顔を上げて「フ、フ、フ、みんなしてつまらない事を言つて、やれ時計を盗んで、牛肉を食つたらうの、田舎の人は自分のものと人のものとの見さかひがないからだの、晝間見えておいて夕方干し物を取込んだ序にだのと、——まことしやかに、言ひたい放題なことをいひ、申しわけが御座いません」彼は箸をおいて、隣の方角へ向き直りながら丁寧にお辭儀をした。半分ふざけてゐて半分實意があつた。

「御自分で言ひ出したくせにねえ、Aさん」

「ウフフ」

婦して牛肉を食つただらうなんて、そんな面目ない事を思ひやしないぜ。ただね。あの細君が時計をみてふとそれをとつてしまつて、これや死んだ兄さんの片身だけんど……とか何とか言つて、可愛い亭主にやりやしなかつたかと思つたのだよ——だとすると、これや何でもなく届けられないつて彼はそこまで低い聲で言つて來たのが急に大聲で「いや何しろ、いい時計だ。いい時計だ。鎖も實に上等。だがこれからもうあんないたづらをしちやいけないよ」

皆が笑つてゐるうちに、彼は、これやまたうっかり佐藤などに言はない事にしなげや、あいつまたぐめたとばかり直ぐにも、何かに書くだらうと思つた。それから、創造力のない小説家などを友達に持つことは何かにつけて、全く、金のない親類を持つたと同様によくはないと思ひながら、牛肉の一片を箸でつまみ上げてゐる。



# 指 紋

(私の不幸な友人の一生に就ての怪奇な物語)

R・Nは私の少年時代からの唯一の親友であつた。彼が二十の時に、その愛する藝術上の見聞を博めるために洋行をしてからも、數年間は折にふれて、パリから、フロオレンスから、ロンドンから、いろいろ面白い手紙を(それは私が今まで見た日本字で書かれた文章のうちの最も天才的なものゝ一つである)くれることを忘れなかつたが、彼がロンドンへ行つてから二年目、洋行してから六年目、一九〇七年八月十一日といふ日はがきを最後にして、それまでにだんだん文句の短くなつて行つた音信が、ぼつたり絶えてしまつた。それでも、私はなる可く缺かさないうやうに心がけて私からの手紙を出して居たのである。私の手紙は多分見て居たのであらう。發信者である私の手へ舞ひもどるやうなことは一度もなかつたから。併し、返事は一つも見られなかつた。私は私の唯一の親友の生活をかうして暫く見失つて居た。それを知らたいにも、その母を洋行前に無くして後の彼には、身寄りといふやうなものは一人もなかつた。さうして私にさへ手紙を書けないほどなのだから、日本に居る他の誰にも手紙を書い

て居ようとは考へられなかつた。私は彼が異郷で戀愛にでも熱中して居るかとも想像した。それならば、何れそのうちに便りもあらうと思つて居たのに、それも空頼みであつた。私はたうとう「去る者は日に疎し」と思はざるを得なかつた。ところがそれから四年目である一九一一年に、七月十一日のロンドンのスタンプ(彼自身は日附も何もして居なかつた)のあるはがきで彼は、思ひ出したやうに私に宛てて歸朝する旨だけを手短かに書いて寄こした。その後カイロから、シンガポールから、香港から、上海から、文句は何もない繪はがきをくれて、彼がロンドンから歸朝する旨を知らせてからやつと一年半ばかりを経た一九一二年もずつと暮になつてから、彼は思ひがけない私を訪ねてひよつくり私の支關へ現れた。私は彼を一見見た瞬間に、「健康を害して居るな」と思つた。彼は全く精力を消耗し盡した人のやうに見えた。さうしてそれは決して旅の疲れなどとばかりは言へない程度のものであつた。彼はどう見ても三十位の人とは見えなかつた。さうしてその一種異様なふけ方は、老人のやうでもあつた。

又、壯者のやうでもあつた。表情は非常に鈍くなつて、ただ目の光だけが寶玉のやうに光輝燦爛として居るのであつた。さう言つただけでは、他の人にはその時の彼の容子は未だはつきりとは想像出来ないであらう。が、唯あまり愉快な容貌でなかつたらう位には推察してもらへるであらう。私は今はそれ位で満足して置かう。

十幾年振りかで會ひながら彼は私に向つて決して楽しさうに話しかけようともしないのであつた。私は我が未だ少年であつた時に、彼がいかにブリリアントな座談者であつたかを回想しながら、人間といふものはかうも變るものであらうかと疑つた。彼はただいかに物憂げな調子で私の話しかけるのに答へた。健康を害して居るのではないかと私が尋ねた時にも、(正直に言ふと私は少し想像を逞しうして Syphilis ではないかと思つたのだ)彼はただ、「いや」とだけだるい一語を言つたきりであつた。併し私がこんな打ち解けない彼に就て私に對する彼の友情を疑ふのはよくない。といふわけは、兎にも角にも、彼は日本へ來ると最先きに私を訪ねてくれたのだから。解らないことはそればかりではない。その時彼は「東京に住むつもりだ」と言つて置きながら、二三日すると彼は不意に長崎へ行くと言ひ出した。私は最初はそれを「ただちよつと長崎へ行く」といふ意味に解釋した。長崎は彼の故郷であつたから。併し、彼は長崎に住むのだと言ひ

直した時に、私は何故となく彼の言ふことが解らない氣持があつた。彼は長崎の生れであつたけれども、幼少の頃から東京で育つた。それに彼は長崎には彼の不愉快な遺産相續の出來事以來絶交になつて居る親類があるといふので、以前からひどく長崎の土地までを憎んで居たからである。

彼はあたふたと長崎へ出發した。私は彼が長崎に着いたといふ報知だけは得た。しかも私は手紙の返事を彼に書くわけには行かなかつた。といふのは、彼が出發の時の約束を無視して、私に彼の宿所を教へてくれなかつたからであつた。十年前の打解けた親友は、今、私には謎になつて現れて來た。さうして若し彼がそれきり私の目の前に現れて來たならば、私が最後に彼に會つた時の彼の印象から考へて、私もスピリチュアリストの仲間入りをして、私は私の最も親しい友達の幽霊と——しかもそれをそれとは氣づかずに、數日間一緒に暮したのだと考へたかも知れない。實際その時も私には何だかそんな氣持もしないではなかつた。けれどもそれから半年ばかりの後に、私は再び私の「謎の親友」が、長崎から歸つて私の家へ來たのを迎へた。

その時には彼は前よりはいくらか元氣がよかつた。さうして彼は、再び考へをかへて東京へ住むことに決心したこと、私に彼と一緒に生活する意志があるかどうか——即ち、その時には既に妻を持つて居た私の家庭へ彼が寄寓したいと言ふ



のであつた。  
「さうすれば、私は君達の厄介になる代りに家を一つ建てて上げたいのだが……」

彼はさう言つて、それに對して即座の返事を與へかねて居る私に、私の顔をちつと見つめながら嘆願する人の口調で、併しゆつくりと、低い聲で言ひ足した。

「ね……私をかくまつてくれ給へ。」

「私をかくまつてくれ？」この言葉を、私が初めて彼から聞いた時、私は非常な大事を豫想せざるを得なかつた。と同時に、若しやR・Nは氣が違つたのではあるまいかといふ考へが、突然胸に浮んだ。けれども、彼の説明を聞いて居るうちに、私の心配と疑問とは、幸にも少しづつ氷解されるやうに思へた。

彼は大要次の如き事を英語で話し出した——多分私以外の人あまり聞かれたくなかつたからであらう。それともそんな風に話をするには、英語の方が適當だと考へたのであつたかも知れない。實際、その時はさうでなかつたにしても、彼はそんな風な藝術的感覚を、以前はよく實生活の上に活用させて居たものだから。私としては今こゝでも彼の話を、彼の話したとほりのやうな英語で書けたならば、さぞ趣があるに相違ないと思ふのだが、私にはそれは出来ない。いや、いかなるその語學の大家でも出来ないであらう。といふのは彼の

つた。君は勿論阿片の酔心地といふものを知るまい——阿片の酔心地といふものは、一口に言へば藝術そのものの *Ecstasy* だ。五體のすべてを以て聞く美しい *Extirpation* だ。嗟！ 少くとも、その頃ではさうであつたのに！」

彼はさう言つて深い吐息をした。さうして暫くは何か物思ひに耽るやうにいかにも重苦しい憂鬱の表情を示しながら、何かを底に湛へた夜の深淵のやうに沈黙した。それがいかにも意味深げであつた。その理由で私はその時の沈黙を忘れずに居たが、それは、餘程後になつて思ひ合されることがあつた。

暫くして彼は言ひつづけた——

「私は三四年のうちに阿片丁幾の四千滴に相當する量を一日のうちに用ゐるねば居られなくなつた。私には君に向つて手紙一行、はがき一枚書くだけの根氣もなくなつた。併し、私には、いい事か悪い事か未だ藝術上の野心も残つて居た。さうして流石に阿片にばかり溺れて満足して居れるほど、デカダシンにはなつて居なかつた。私はせめてはその阿片の量をへらさうと努力した。けれどもそれも殆んど無駄であつた。私が日本へ歸らうと決心したのは、その時である。そこには阿片窟などといふものはない。私は早く其處へ歸つて健全な生涯に歸らう。私は思ひ立つた。佐藤君、私はその時魔睡の夢のなかで君の姿をよくありありと見たものだ……」

その時話した英語は、單純で明晰で、それで居て非常に混雜したりズムをもつた文字ばかりをわざわざ擇んだかと思へるやうな異様な効果を持つた言葉であつたから。——それで、彼は言つた。

「何時であつたか、私が未だ君に對して手紙を書くだけの根氣を持つて居た當時私は、多分君に *Thomas de Quincy* の *Opium Eater* を推賞したやうに思ふ。それともそんなことはなかつたかね？ その前後のことだ。私は或る日ロンドンのイストエンドで一人の男に出會つた。その男はもとマドロスだつたといふので、今でも——その時でも同じやうにマドロスの風をして居た。私はその男と居酒屋で向ひ合つた。二人は互に親愛を示し合ひながら酔つぱらつた。酔つぱらば酔つぱらふだけ一層親愛の度を加へ合つた、全く見ず知らずの人であつたけれども。今思へば、私はあまり多分の好奇心を持つて居すぎた……私の一生は多分、「人間はあまり澤山の好奇心とあまり少しの意志とを持つてはいけない」といふモオラルになることだらう。それはそれとして、私はその男に向つて、「私はこれから後とても何時でもお前と遊び度い」とそんなことも言つた。最後に「今夜はお前の最も面白いと思ふところへ私を連れて行け」とそんなことも言つた。それでその男が私を連れて行つたところは、何處であつたと思ふ？ それは阿片窟だつたのだ。私はそこへ入りかゝつた。

「私は一日一日と延びて居る私の決心を敢然として實行することにした。さうしていよいよ歸朝の途に上る——正しい生涯に近づかうといふ前日、私はその夜、今夜こそこれが最後だと思ひながら、幾百度歩んだかわからない道——さうして普通の人は多分一生に一度も歩かないであらう細い道を辿つて、天國への入口よりもつと狭い扉を潜つた。その地下室にはその夜もマドロスのゼエムス（あの男は確かさういふ名であつた）が、私の來るのを當てにして金をもたずに、其處に居るのであつた。私は彼に「もう明日からは私を當てにしては來るな」とさう言つた。ゼエムスはその理由を尋ねたから、私は歸國する旨を、正直に答へた。ゼエムスはお前の國には、こんな天國（阿片窟のことである）がなくつて可哀相だと言つた。私は答へなかつた。併しゼエムスはちやうど悪魔はかうもするであらうと思ふやうに私の耳もとで、その囁きたぜえぜえ言ふ聲でうは言のやうに囁きつづけるのであつた——旦那のやうになつてはもう駄目ですぜ、とてもこの魔薬はやめられません。もしどうしてもお歸りなら、せめては港へお寄りなさい。ところは皆私が教へて上げます、港々の阿片窟のあるところを。いや、旦那などのやうな金持にはそんなもの無駄だ。それより手とり早く、港へ下りたら、ボリスマンに、幾らかを握らせて——それは多ければ多いほどいい——さて空を指しながら、「彼處はどこだね？」と聞いて



てごらんさい。空を指して見せるんですよ。それが合圖だから。忘れてはいけません。いや、大丈夫、外のことは忘れても、情婦の顔を見忘れても、阿片の事に就てなら何でも、一生忘れる氣づかひはないのだから、旦那は今、そんなことは一切忘れるつもりで居るだらうが。それで若し其處が見つかつたらば——きつと見つかるから——その家の奴にさう仰言い。「目の窪の三つある髑髏」が教へたと、さう言ひながら、彼はシャツの胸を押し開いて、肩のところの丸味を利用して入れ墨した眼窩の三つある髑髏をつき出して見せた。ゼエムスは悪魔のギターのやうな聲でもつと語りつづけようとした。私はあまりうるさかつたから、金をたたきつけてやつた。……私は其の後、船室での幻に、極く平靜な月光の海上を進んで行く悪魔その物の船の高いマストに、眼窩の三つある骸骨のゼエムスが、蝙蝠のやうにぶらさがつて働いて居るのを見たことがあつた……

「私は船に乗る時に、錠劑になつて居る阿片を、わざと三粒だけ手に入れて置いた。それは私には十五日分にしか當らない。私はそれを船のなかでこつそりと極く少しづつ用ひてだんだんと量を減しながら用ひて、君と再び會ふ時にもうオピウム・イイターではなくなつて居やうと心に誓うたからである。それを果して實行したかどうかを咎めるな。私は最初は、あの時ゼエムスが言つた言葉が本當だらうか、それと

\* \* \* \* \*

彼は根氣が無くなつて居るどころではない、寧ろ狂的に見えるやうな熱心と感興とを持ちつづけ居るらしく、他のすべてのごとは忘れて居るらしく、家の設計を企て初めた。その間、彼は私にさへ一言も口を利かない日がつづいた。その設計を見た時に、これほど精細なさうして明確な、然も不思議な間取りの圖を見て、真問家は我々の前で驚いた。家は半年ばかりの間に南向の丘の上へ建てられた（それが即ち今日私の往んで居るこの家である。大きくはないけれども、チャアミングで、その上實に住心持がいい。これはあの當時外國から私にくれた彼の澤山の手紙と一緒に、正しく彼のこの世に残して行つた藝術品の一つである）「阿片を用ゐることは絶対にやめる。しかしそれは即座に出來得るものではない私は少しづつ量を減じて十五ヶ月の間には、きつと絶対にやめる」さういふ彼の堅い言質を信用して、私の家は彼の爲めに

も噤言か、或は金をせびるための出たらめか、それを確めるためだと、私自身に言ひわけをしながら、さうして實際多少はさういふ疑問をも解きたい好奇心から、又告白しなければならぬが、私の阿片はもう殆んどなくなつても居たから、私は船がカイロへ着いた時に、上陸すると、思ひ切つてゼエムスの言つたとほりのことをして見た。ところがゼエムスの話したのは皆本當であつた。私は日のことも何も忘れて其處の阿片窟で睡つて居た。私は船の出帆に乗り遅れた。私はコンスタンチノブルでも悪い日を費した。シンガポールでも、香港でも、上海でも。その間でも私はだんだん量を減して行くようには努力した。私は決してオピウム・イイターとして日本へ歸るまいといふ決心を齎さなかつた。私の道徳的な自覺からも、それ以上に又日本に阿片窟のないことの私自身にとつての不便を思ふことによつて。

「ところが上海に居る時である。私は、其處の阿片窟の支那人から『若し日本へ歸つたら、長崎M・B町十九番地の劉といふ支那人の家へ出入してやれ』と、さう一言云はれた。言ふまでもなく其處にも阿片窟があつたのだ！」

ここまで語つて來た彼は、不意に何か言葉がものに突き當つたかのやうに、驚いて口を噤んだ。私はただ彼の言葉にうつとりと聞きとれて居た。といふのは、彼の語り出す事柄が、それほど暗黒な事實であつたから、彼の言葉を聞いて、彼一人の阿片窟になつた。さうして私自身も今では「阿片を食ふ人」をかくまつて居るといふ秘密を持たねばならなかつた。私はそれが洩れることのないようにと思つて女中さへ使ふことが出來なくなつた。R・Nはその點では私以上に用心深かつた。彼は七間ある家のうちの二室を彼自身のものにして使用した。そのうちの二室は家根裏であつた。さうして其處こそ、彼がその秘密を悉にする場所である。彼がどういふ風にしてそれをして居るか私は決してそれを見ようとはしなかつた。私はそんなものを見るのが怖ろしかつたのだ。若し一目でも見るやうなことから、知らず知らずその方に近づいて、自分自身もオピウム・イイターにならないとも限らない。私にはさういふ誘惑に對する脆い性質があつたから。こんなわけでは私は阿片に就ては何の知識もない——R・Nの口から聞いた事以外には。併し乍ら、私は阿片の夢がどんなに不快にR・Nを襲ひつたかといふことだけは、ここで述べることが出来る。私は夜中に、或は白晝に三階になつて居る家根裏の一室から、その床と二階の天井とを透して、さうして家ぢう全體に、むしろ私の世界全體にまで擴がりながら、彼の呻き聲が、眠つて居る、或は書物を見て居る私にまで聞えて來た。それは丁度死を面前に見て居る病人——寧ろ病獸のやうな物凄さで私を驚かせ、苦しませ、歎きさせ、心配させ、又正直に言へば腹立たせもして、それがあまり長く



つづく時には、私自身さへもその聲に合せて呻り出しさうになつた。事實、さうしたことも屢屢あつた。或る日のごときは、どうしていか解らなくなつた私をして、たうとうこの青髭部屋へ駆け込ませたほど、物凄く呻きつづけ、叫びたてるのを聞かねばならなかつた。私はその時には彼に對する心配と自分自身の腹立ちとを兩方、等分に、同時に感じながら、思はずあの狭い急な家根裏への梯子を飛び上つた。併し、あまりの不氣味さにはばらく其處に突立つた上、辛うじて決心をしてその部屋へ入らうとした。小さな扉には固い錠があつた。私は合鍵をとり出した——ひよつとすると、今、R・Nが死にかかつて居るのではないかと思つたから。私は扉を三分ほど隙けて、先づ一とほり内部を窺うた。その時は白晝であつたから、小窓から差し込む冬の日光が、このうす暗い部屋のなかへ帯になつて流れ込んで、その一端が、寝椅子に打倒れたまま身きもせず居る彼の横顔へまともに照りつけて居た。その南の小窓はちやうど獄窓にそっくりであつた。その上にR・Nのいかなる觀念であつたか、獄窓と全く同じやうに嚴重な鐵格子さへ箆められて居た。それ故、部屋の床の上に晴れがましく當つて居る日影にも鐵格子の影が縞になつて投影して居た。その小さな日影には、彼の愛育して居た若い小猫が、平氣ですやすやと眠つて居た。その平然たる様子が私には憎々しかつた。私は思ひ切つてつかつか

と部屋に侵入して、R・Nを呼びかけた。彼は、呻き乍ら「何だ」と問ひ返した。彼はぶるぶると身をわななかせ、苦痛の表情で顔が歪んで、しかもそんな状態に居ながら普通の状態の人のやうに會話するのが、その私には最も不氣味に感ぜられた。私は手をかけて彼を揺り起した。彼は私のその動作で初めて目を開けたが、私がいかに不思議であるらしく、小兒が見知らぬ人に對してするやうな眼で私を見上げ見下ろして居たが、  
「おお、佐藤君！」  
不意にさう叫んだ彼は寝椅子の上によろめきながら脆坐した。さうして私の體を抱くやうにして、彼はさめざめと泣くのであつた。可哀さうに、かうして私の友達に頭が腐つて、狂氣しかけて居るのだ。さうに違ひない。と私はその時さう感じた。さうして私もつひセンチメンタルになつて涙がこぼれさうになつた。  
けれども、これは彼が極く悪い状態に居る時であつて、そんな状態は一週に二度多くて三度位しか無かつた——呻り叫ぶやうなことは。さうして幸にも、彼の阿片量は少しづつ減じて行きつつあるやうに見えた。平靜な日も（それが何の加減であるかを私は知らない）十日に一度はないではなかつた。その日には、彼の童話風の空想と壯麗を無制限に含んだ彼の見聞談や、或は實に奇妙な事柄の上に奇妙に組立てられた

——それで居て明晰に私を同感させるやうな奇論を私に聞かせて私を蠱惑した。實際、彼の意見は事毎に不思議であつた。しかも彼自身にとつてはそれは極く平凡な普通見解としか思つて居ないらしかつた。一例を言へば、活動寫眞に就てである。彼は活動寫眞を藝術の最も新しい立派な一様式だ、さうして科學が藝術に向つて直接寄與した唯一のものである、それは白日夢の喜びを最も確實に實現した、一個の別世界をわれわれの前に啓示し、開展した。と斷言した。それはヴァルガアな、グロテスクな、またファンタステイクな、現代の人人のみが知る美だ、と説いた。それに就て、彼はながながと私にその理由を説明して聞かせた。それは何等の間違つた點のない立論で、且つ一篇の散文詩のやうな議論として私をよろこばせた。（私はせめてそれだけでもここへ書いて見たい。しかしこの原稿の紙數や締切りやの關係から、必要な道草も喰つて居られないことを遺憾とする。併し、何時か好機を得て彼が私に聞かせたうちの私を敬服させた事柄を、彼の代りに私が書き列ねるであらうことを約束する。）彼はさういふ議論だけではなく、實際に於ても活動寫眞を異常に愛好して居た。子供がさうする以上に愛好して居た。活動寫眞は阿片の夢のなかの極く平凡なものに似て居る。私はオピウム・イイターとしての初期にはあれ位のをよく見たものである。それが私にとつてはなつかしくもあり、悲しくもあ

る——と彼はそんな事を言つた。さうして一ヶ月に精々一度ぐらゐ、彼が外出出来るやうな日には、必ず私や私の妻を淺草へ誘ふのであつた。私の妻はこの半狂人と一緒に町を歩くことを、否、一緒に住んで居ることをひどく好ましく思つて居ないらしかつた。その上それを言ふことを私にも遠慮をして居た。それが私にもよく解る。又無理のないことである。それ故、彼が外出しようと言ひ出す時には、たとひそれがどれほど私にとつて多忙な日であつても、何時でも彼を連れて外出するのであつた。それが私のこの友達への義務でもあり、同時に又私の妻への義務であつた。  
或る日であつた。私はまたしても淺草の活動寫眞へ彼のお供をしなければならぬことになつた。私は彼の擇ぶままに、D館の『女賊ロザリオ』といふ寫眞を見ることにした。氣がついて見ると、その日は日曜だつたものだから、我々は電車の中でも、D館のなかでも満員の込込に苦しめられた。『女賊ロザリオ』といふのは（見た人もあるかも知れないが）米國のグリーンフラグ會社の傑作ださうで、表題のやうな女賊を頭にした盜賊達の出で来る探偵物で、筋はあまり目さきの變つたものではなかつたが、畫面のとり方にはなかなか繪畫的な、それで居て清新なところがあつた。それから、女賊になる某といふ女優は、辯士の説明によると「當時米國に於けるウンバイヤ女優の權威」なさうだが、成程なかなか



チャアミングであつた。殊に男装のやうな乗馬服で出て来るところが就中よかつた。R・Nはフェルムのとつつきから——あの緑の旗がひらひらと風に翻るグリーン・フラダ會社のマアクを見る時から、既にもう白晝の幻を楽しむ人のやうに、場所も、時間も、傍に私の居ることも、大勢の群集に揉まれて居ることさへ忘れられたしく、恍惚と見入つて居るのであつた。そのいかにも發人らしい喜び方の表情が、寧ろ私を悲しくした——この時ばかりではなく、いつもこんな機會にはさうであるが。……晝面はずんと轉展して行つた。ちやうど、女賊ロザリオがその子分の運轉手ジョンソンといふ男と、或る酒場の片隅で何かのたくらみを耳打ちするところであつた——晝面は彼の表情を見せるため大映しになつた。初めはロザリオの顔だけしか見えない。ロザリオは見かけはいかにも可憐で高貴で若い貴婦人のやうな顔を、強い光の逆光線のなかで、我々の眼の前へ大きく現はした。さうして、つと皓齒を見せて笑ふ。その顔は實際妖艶であつた。ロザリオの命令を承知したジョンソンが、大きく頷き乍ら、その凄微笑顔をひよいと見物の方へふり向けた、……

「お！」

突然、こんな低いけれど鋭い叫びと一緒に、私は、むづと私の片腕をつかまれて驚いた。

「おい、君どうした？」

「嗟、R・Nはたうとう本當に氣が違つた。」私は心の中でさう呟きながら、彼のするところになつて外へ出た。最初、私は彼が私をどうかするつもりだらうと考へたのだ。が、別段そんな様子もない。外へ出て白晝のなかで見ると、R・Nはその疲切つた顔の上に何か薄笑ひをさへ帯びて居るのである。併し、彼は黙々として、あれきり一語も言はずに私と列んで歩いた。列んで電車へ乗つた。それから彼が再び口を利いたのは、私が須田町で彼に乗り換へを促した時であつた。彼は私が立上つても、やはり坐つたまゝで、「私は丸善まで行く積りだ」とさう言ふのである。私はこの狂人をどうするわけにも行かなかつた。さうして私も彼に従つて丸善まで行かなければならなかつた。丸善の前まで来るのを待兼ねて彼は立上つた。眞先きに電車を下りた。丸善のあのU字形の階段を、彼は駆け出さんばかり性急に上つて行つた。

「フランス語か英語かで書かれたもので指紋の研究のオオソリテイになる書物はないか」彼は店員に向つてさう尋ねた。さうして店員は、英語にもあるにはあるが、獨逸語ならば更にいいのがあると答へた。R・Nは、それならばといふので英語でも獨逸語でもそれに關するものならば皆買はうと言つた。さうして可なり大部な書物を二三冊あるにも拘はらず、R・Nは未だそれだけでも満足出来ないと思へて、その他のそれに關する研究書目をつつかり調べさせて、それらのすべ

私は思はず動悸を高めて、私の腕をそんなに強く捉へたR・Nを、うす暗がりのなかに凝視した。こんな人込みに蒸されて、R・Nは春先きでもあり、てつきり發狂したと思ひながら。R・Nは、併し、

「いや何でもなし。何でもなし」

さう言ひながら、私の二の腕を離すと直ぐその手で彼の額の汗を拭うた、別段暑い筈はなかつたのに。私は、彼のその二度目の聲が案外落着いて居るので少しは安心もした。私はもう歸らうと言つたけれども、彼は返事さへしようとはしなかつた。彼は再び熱心に、けれども以前のやうにうつとりと見惚れるのではなく、眼を鋭く光らせながら眺めつづける様子だつた。……ロザリオの盜賊團は、日常決して手袋をその手から外すことがなかつた。けれども運轉手ジョンソンの手袋は何時の間にか擦り切れて居た。それを、その職業のため指の感覚が幾分鈍つて居るジョンソンは少しも氣づかなかつた。さうして或る犯罪の場所へ、うっかり指紋を残して來た。その指紋が再び大映しで、顯微鏡下の或る微菌か何かのやうに不氣味なほど擴大されて、見物の目の前へ現れた。

「よし！ さあもう歸らう」

R・Nは、再びこんなことを叫びながら、私の腕を捉へると、それをぐつと壓へ、弄き合つて居る見物をどんどん押し分けて、私を外へ連れ出さうとした。

でも悉く大急ぎで取寄せるやうにと依頼した。その外に獨逸語の研究に必要な書物を、文法書やら辭書やら、それに店にあつた例の指紋の書物の七八冊をも加へて、殆んど積上げて二三尺もある程の買ひ物をした。そのうちの英語で書いた一冊だけは彼のポケットへ納めて、あとは出来るだけ早くとどけるやうにと言ひながら、彼は私のアドレスと私の名前とを書き残した。(この時ばかりでなく、何か名告りをしなければならぬやうな場合には、彼は大てい私の名を告げて居たやうである。亞米利加ローザンセルズで發行される週刊の活動寫眞雜誌も私の名宛で、彼のところへとどいて居たから。こんなわけで、若しこの文章が自然、丸善の店員諸君の誰かの目に入るやうな機會があつたならば、序に言つて置きますが、あの時、奇妙なちよつと讀む人の少ない書物をあれほどどつさり買込んだ奇特な研究家で、且つ奇特な購買者は實は私ではなかつたのである。それ以來、丸善では私宛に雜誌「學鑑」を送つてくれて居るから、ちよつとこの機會に此處へ書いて置く)その不思議な熱心な指紋の研究者は、改めて言ふまでもなくR・Nである。彼は丸善の店を出るや否や、もう電車のなかからそのポケットのなかの一冊を耽讀し出して居た。

その後二三ヶ月の間、私の不幸な狂氣の友人は、何の爲めであるか、再び家の設計にとりかかつた時の——否それより







しながら、立上つて、ポケットから出した煙草へ火をつけた。家と家との間から港の海とそれを包んだ岬の一角とが、三尺ほど見えた。さすがに少しは疲労したのであらう、R・Nも其處では私と一緒に立ちどまつた。けれども私より先にまた歩き出した。石疊のある道は山の中腹を半圓形に曲つて山の側面へ出ると、太陽が眞上から我の顔にあたつた。兩側の家は今までのうちで最も汚く、兩側にそれらの家があつても道は市街の中とは考へられない程野蠻な傾斜で滑るやうに落ちて行く。工場の鐵板をたたく音が港らしい氣分をもつて町全體を震はせ、睡眠不足の私の頭にかんかん響いた。道は全く平になつた。R・Nは何か私に言ひかけたけれども、今度は私の方で口を利くのが厭やになつた。小さな支那料理の軒が殆んど軒並に、五六軒おきに見られるところへ來た。R・Nは少し自信がないらしく左へまがつたが、五六町行く。

又左へ曲つた。さうしてすぐ右に折れた。其の道は今までのそれと同様にやはり石疊のある併し今までのそれよりはもつと狭くつて精々一間位の路次であつた。その路次が三四軒一直線に、道といふより深い溝渠の感で暗く連り續いて居た。それからはよく覺えられなかつたが——私の不注意と、それ以上にその道筋の複雑とに依つて——我我はやがて一軒の家の前に立つた。「ふん、空家になつた」とさう言ひなが

ない。「何故? そんなに荒廢して居るのか」否、併しあそこは荒れて居る以上だ。あの家は化物が出るのです! 「化物! そんな馬鹿なことを私は信じない」「あの家では夜中に天井から血の滴るのを見た人もある。その滴る一滴一滴の音だけならば彼處に住んだすべての人が、五家族——少くとも二十人の人が皆一様に聞いたといふ。私はそれを彼等自身の口から直接に聞いた。彼等は皆一週間以上を越えて住むやうなことは決してなかつた。今では隣人で、この家に就て知らぬ人は何人もない……」「この今の家主は誰だ、何町の誰だ?」「家主は知らない、けれども日本人の床屋へ行けば解るだらう」「……………」何か言ひながらR・Nは立上つた。ポケットから五十錢銀貨をとり出したR・Nはそれを木の卓の上へ投げた。それがびんと一つ跳ね上つて床の上へころげ落ちる。彼はその代にもう一つの五十錢銀貨をとり出した。女は愛嬌笑をしてそれを二つ拾つて居る。R・Nは傍に居た私の存在をも忘れて居たらしく、一人すたすたと店を出た。「ふむ、血が滴る? 血が滴る?」とさうひとり言を呟きながら、その店と先刻の空家(これが多分以前の阿片窟ではなにか知ら)との間の、巾四尺程なやつと人間一人だけが通れるほどの路次へ入つた。路次を出た。其處はすぐ堀割で、あの空家やバアの裏壁との間に一間か九尺か位の空地を残して居る。路次の出口と殆んど一直線に、同じく巾四尺ほどの木

らR・Nはその空家の隣りである家へ這入つて居つた。そこはバアであつた。今起きたばかりの様子で、顔にそばかすのある三十女が、やつと掃除の塵の納りかかつた部屋に立つて居た。その女は外國人である。けれども私には何國人であるかは解らない。但し、英語で茶をいひつけたR・Nの言葉に従つて、我我に紅茶を用意した。茶をもつて來た女にむかつて、R・Nは何か簡単な、しかも私には判らない言葉を言つた。女も同じやうに私に判らないことを言つた——何れも英語ではあつたけれども。多分、私の直覺では二人はあまり上品でない常談でも言ひ合つたらしい。女はそれを言ひながら我我の傍の椅子へ腰かけた、さうして兩肘を卓上について二重になつて居る頸を兩手の拳の上へ乗せた。R・Nはそれを見ながらポケットからシガレットケースを出して、それを彼の女の面前へ、その木の卓の上へカルタを打つ人のやうな手付で投げ出した。さうしながらR・Nは喋り出した。女が答へる。それから女の方が餘計に喋り出す。私には大抵はよく解らない。早口でもあるし、俗語ばかりのやうでもあるから。併し乍ら、いくらか解るところもないではない——例へば、「隣の空家はあれは貸家であらうか」「然うです。けれどもあんな家を借りてどうなさるの?」「私はお前さんと同じ店を開いて競争しようと思ふ……兎に角、貸家か?」「貸家は貸家です。併し、借りる人もなければ借りたつて住めるものでは

の粗末な橋が二間ほどのその堀割を向側に渡して居る。その出口と橋との間の空地へ來るとR・Nは不意に其處へ佇立した。其處へ突立つたまま、何か方角を考へて居る。「そんなところへ突立つてどうしたのだ?」「ふむ、此處かも知れない、ふむ」彼はさう言つた。併しそれは私に向つてではない。彼自身のひとり言なのだ。それから、小汚いバアを出てから、今初めて私の存在に氣づいたらしく、私に向つては次のやうな事を言つた。「君。ここを覺えて置いてくれ給へ!」さう言つた彼は、彼自身の立つて居る場所を、彼自身の靴の下を指した。それから二三歩後さざりして、彼の蝙蝠傘の尖で地上へ地面を愛撫するやうにそつと×印をした。さて橋の方へ歩き出した——「土は汝の上に輕かれ」(それは外國で人を弔ふ言葉なのだ)と呟きながら。もうこの男のすることは、解らぬことだらけだつた。けれども、就中、この一年間の前後を通じてこの時のこのしくさや表情ほど私に不可解なものはない。それには何か深い意味がありさうに其時私は考へた。が、すぐそれを打消した、どうせ氣違ひのことだから。其上に私自身に關して言へば、私は不眠不休の旅行の爲めにたうとうよほどの神経衰弱になつてしまつたら。こんな日が若し十日もつづかれたら、私自身もR・Nと同じやうになるに相違ない。



R・Nは直ぐその「日本人の床屋」を見出した。彼は私に通辯せよと言つて、さうして、「あの堀の向うのお化けの出る家は君が差配をして居るのか。それならば、私はそんな噂などには一向無頓着だから、それを借りるかも知れない。面倒だがちよつとなかを見せてくれ」とさうその床屋へ私を通じて申込んだ。不愛想な床屋の不愛想な女房は、我我が今通つて来たどほりの道を案内して五つ六つある鍵をちやらんちやらん言はせながら前に立つて歩いた。さうして、再び狭い木の橋を渡り、×の印のあつたところを通ると、あの空家の裏口を開けて、我我を先づ這入らせ、彼の女はその扉のところに、我我の物好きをうるさがるやうな顔付きで立つて居る。うすくらがりの家のなかは微臭かつた。どこかでこほろぎが鳴いて居た。今我我が這入つて来た扉からの光線をたよりに、R・Nは、一つの窓を開けた、金に輝いた太陽の光が愉しさうに部屋の中へ舞ひ乍ら流れ込んだ。私はいつか私の家のR・Nの青髭部屋を覗いた時のことを思ひ出した。さうして早く家へ歸つて、或は、家へ歸らなくとも、一度ぐつすり眠りたい欲望で一杯になつて来た。R・Nは我我の思惑には一切無頓着で熱心にあたりを見まはして居る。家は表は古い煉瓦造りで、内部は大部分木造になつて居る。又、殆んどすべてが古煉瓦を疊んだ土間である。

「君、このうちをよく覚えて置いてくれ給へ。君をわざわざ座に一間以上の糸になつた。どうするかと尙も見て居ると、彼は彼の時計の鎖について居た金のメタルを外し出した。それが外れると、例のか細い糸の一端へこの金メタルをさげて、それを流しの板と板との隙間から落し込んだ。金メタルの重さに引かれて、流しの板の上にはぐし重ねられて居る糸は滑りながらだんだん下の方へ呑まれて行く。彼はいかにもその即座の思ひつきに満足したらしく、私の顔を見ながら會心の笑を洩すのであつた。實際その時は私も思はず叫んだ。

「成程！ ずる分深い。この床下は！」

その時、ちやうど今までは扉のところから放れて何處かへ行つて居たものと考へられる例の床屋の女房は、

「未だ、御覽なさいますか」

さう、多少訝しさに、又多少腹立しさうな大聲で、扉からなかを覗き込んで叫んだ。その聲が、妙に家のなかへ陰慘に反響した。R・Nは未だ先刻の笑ひを浮べたまま私に囁いた。

「あの女に金を一圓ばかりやれ。それから一二分間、いい加減なことを言つて断つて居てくれ。私も直ぐ出て行く」

私は彼の言ふどほりにした。女は辭退し乍らその金を受けとつた。R・Nも直ぐ出て来た。女は我我に對してあまり無愛嬌だつたと氣がついたらしく、私には聞きなれない長崎地

此處まで連れて来たのは、この家を見せたかつたからだ」

R・Nは私の耳もとでさう囁いた「見給へ、天井（指さして）は古い。その割合に床（見下して）はごく新しい。この家は三四年前に手入れをした筈だ——ちやうど私が君の家へかくまつて貰ひに行つたところにね」言ひつづけながら、彼は私を家の或る一隅へ、今は臺所になつて居るところへつれて行つた「ね、以前はここに入口があつたのだ——審の入口が。だから見給へ」彼は彼の蝙蝠傘の尖でその床を、とんとんとたたいて見せた、又二尺ほど距つた他の部分も。その二つをたたき較べた「どうだ。このどほりだ、少し注意すれば音が違ふのに氣がつく筈だ」正直に言ふと私には音の違ひがよく解らなかつた。彼は直ぐ私のその心を見抜いたらしく、「君には未だよくわからぬやうだが」さう言ひながら流し元のところまで歩んだ。その流しといふのは二方は家の壁を利用し、他の直角な二方はやはり古煉瓦を積み上げて、その上に木の板を幾枚か張り合せたものだつた。その流しは新しく（即ちR・Nに憑れば四年前に）出来たものと見えて、板の張り方などは極くぞんざいだつた。且つ新しい板は住む人がなくて水を流されない爲め板と板との間にすき間が出来て居た。R・Nは目敏くもそれを見て置いたと見える。何をするかと思ふと、彼は絹糸(?)で出来て居る彼の手袋の片方をとり出してそれを噛み解くした。手袋は縲縲と解けて、即

方の方言でやはりあんな家は借りなかつた方がいゝ事、その家に起る怪事——それは物好きな人達が試みにその家にとまる時には決して何の變事もないのに、いざ人が住んだとなるや否や、直ちに噂の通りの怪事——夜の九時頃から二時頃までは毎夜必ず天井から血の滴る音がすること、……などを訥辯な口で話すのであつた。R・Nが、今更のやうに非常な注意と陰氣な表情とでその話を傾聴して居るさまは、目立つて私にも看取出来た。我我は直ぐ床屋の女房とは別れた。その時、R・Nはさも心配さうに言つた。

「おい、あまり急いで糸をたぐり上げたので、金メタルは糸から切れた。審のなかへ落ちてしまつた。どうしたらいいだらう」

「そんなに惜しいものかい」

「いやメタルなどは何でもない。だがあんなものを落して置いては危険だ。足がつくからね」

「何？」

彼は私の間には答へようとはしなかつた。さうして辻待をして居た人力車を手を擧げて呼んだ。車夫はR・Nを見るに、*where?* と變な英語で尋ねた。（それは無理もない事であつた。もともとと外國人風の顔立などこへ、永らく洋行して居たのでR・Nはその風采に於て日本人より外國人に近かつた）R・Nは「ステイション」といふ。我我の車は東京の日



本橋の裏通りの或る部分や、下谷の何處だかによく似たやうな町を通つて居た……餘り疲れて居たので私は車の上で居眠りをして居たと見える。車の楯棒が下りたので私は始めて目が覺めた。我我はもう「ステイション」へ来て居た。R・Nが車夫に「where's」と聞かれた時、「ステイション」と答へたのを、私は彼がその附近へ宿をとることだとばかり信じて居た。ところがさうではないらしく、「三時十五分にも汽車がある」などと云つて居るのを見て、私は驚いた。

「ねえ君、一晩ぐらゐは何處かへとまらうぢやないか。私にすれば折角来たのだから少しは見物もしたい。それに第一非常に疲れ切つて居る。今も車の上で眠つた位だ」

「それはさうだらう。だが眠るのは、博多か門司か廣島か大阪か京都かにしよう。いや一層のこと東京へ行つてゆつくり眠らう——成るべく長崎から遠いだけいい。實は長崎は私にとつて本當に厭やな記憶があるのだから。どうぞ勘辨してくれ」R・Nはそんな事を言ふ。それから、彼はポケットを捜しながら、「さうだ、忘れるところだつた——僕も大分疲れて居る——これを出さなげや」見ると、彼は豫め用意して居たらしい、二通の外國行きの手紙を持つて居た。

「この手紙こそ僕の運定めだからな」

私には今更のことだが、何のことだが解らない事ばかりだ。この暴君のやうな、氣違ひのやうな、又非常に多忙な探

アラインした場所がある。インキの色は新らしく極く鮮かで、その英文は譯して見ると大體次のやうな意味だ——

ウキリアム・ウキルスン氏、その人はグリーンフラグ會社の專屬俳優にして『XYZ』を初舞臺として、『女賊ロザリオ』『汽車泥棒』其他の映畫に現れて、端役ではあつたとは言へ、江湖の活動寫眞愛好家に依りてその深刻なる藝風を認められ、それに依つて多大の將來を囑目され居たるウキリアム・ウキルスン氏は、十月二十七日突然行方不明となつた。その原因は全く知るべくもないけれども、彼は元來英國風の姓名を名乗るにも不係、獨逸人らしき風貌を具備して居る點より判斷して、時節柄多分獨探なりし者が、その發覺の心配のためにこの怪しむべき舉動に出でたるものなるべしと評判されて居る。何は兎もあれ、我我は活動寫眞愛好者の立場よりして、この有望なる少壯俳優を、突然我我の眼界から見失つたことを最も惜しむものである。

その間私の眼の動くところをぢつと凝視して居たR・Nは、私が讀み終つたのを見るや否や、言つた。

「おい、そのウキリアム・ウキルスン氏といふのは、そら、『女賊ロザリオ』の中で運轉手ジョンソンになつた男だぜ……まあ、私の部屋へ来たまへ。君は私を狂人だと思つて居るやうだが、或は本當にさうかも知れないが、私は今日こそ君

偵のやうでもあるこの友達のおかげで、私はたうとう長崎も見ず、眠る間もなく——食事は朝も晝も停車場の食堂で食つたが——三時十五分の汽車に乗らねばならなかつた。汽車へ乗ると頭は一層混亂する。來る時汽車のなかで覺えた例の奇妙な文句が汽車に揺られて居ると何時の間にか、車輪の音と調子を合せて思ひ出され、それが口について私を苦しめ出した——Provided that there are two finger patterns quite similar……Provided that there are two finger patterns quite similar……Provided that……that……there are……(以下何百遍でも)……R・Nの畜生め！私をも氣違ひにするつもりか！

\* \* \* \* \*

珍らしくも突然私の部屋へ入つて來た彼を見ると、手に二つ折りにしてひろげた雑誌か何か持つて居る。それは或る日の灯ともし頃だつた。彼はその手にしたものを、私の目の前へつきつけながら、何時にない活氣を帯びて言つた。

「これを見給へ！これを！」

實をいふとその頃には既に彼に對しては心配や不安を通り過して寧ろ彼の一舉一動に好奇心を動かし初めて居た私は、彼の言ふままにそれを手にとつて見た。何だ。又、あの活動寫眞雜誌か。そこには十五六行ばかり、赤いインキでアンダに對して、私が君の家にかくまつて貰つて居た本當の理由を告白するつもりなんだから」

彼の部屋へ誘はれた私は、彼の机の前で彼と相對して腰をかけた。彼は暫く、ほんの二三分、黙つて考へ込んで居たが、それは今から私に告げようとする事柄の順序を考へて居たのだらう。彼は不意に立上つて、先づその混亂して部屋の片隅のトランクの上にあつた彼の手袋を拾ひ上げた。さうして、その双の手袋をばたばたと打合して塵を拂ふと、何のつもりだかそれを兩方の手にはめた。(今のさつきも、彼は私が彼を狂人だと思つて居ることを狂人らしい敏感で看破して、不平を言つたが、實際彼のすることは、この通りに一つ一つ狂人らしいのである)手袋をはめると、彼は再び机の方へ歸つて來た。さて錠を下して居る机の抽斗を手袋のはまつた幾分不器用な手つきで開けると、中から大事さうに一つの金色の時計をとり出した。手袋のはまつた手でその龍頭を押すと、兩蓋の時計の文字板のある方の蓋がびんと開いた。さて初めて氣がついたらしく、私にその机の上にある燭臺へ灯をともしようと頼んだ。私は言はれたとほりにした。R・Nの部屋のなかには電燈の光と燭臺からの光とで、手まはりのすべての物の影が二つづつになつた。R・Nは手に持つて居た時計をその蠟燭の光のすぐ前に翳した。

「どうだ、君。この蓋の裏に見える指紋が見えるかい」成



程、R・Nからさう言はれて見ると、そこには我我が硝子や陶器や或は金屬の光滑な表面から、偶然にも屢屢見出すであらうやうな指紋が、一つ、極めて鮮やかに、繊細に、くつきり浮いて印せられて居るのであつた。それは勿論人間自身の手で偶然描き出されたものである。私は一見してそれだけのことを認めると、私の手を差し出してそれを自分の手にとつて見ようとした。併し、「その時計へはそのどんな部分へも決して外の指紋を残すやうなことがあつてはならないから、若しこれを見たいなら私のやうに手袋をはめるがいい」とR・Nは言ふ。私は面倒だから手をひつ込める、と彼はまた不機嫌に「手にとつて見よ」と言ふ。私は彼から手袋を片手づつ借り受けて、そんなことをしてまでその時計の指紋を見つめなければならなかつた。私がしばらくそれを見入つて居ると、彼は言つた。

「よく見給へ。それがウキリアム・ウキルスンの指紋だよ。少くとも女賊ロザリオの手下の運轉手ジョンソンがマホガニイの机の角へ残して行つた指紋だよ。何故つて、それはあのフキルムに表はれる指紋と全く同一なものなのだ」

「それやさうかも知れないね。が、併し」と私は狂氣の友人の妄想を憫みながら、寧ろゆるやうに言つた。「が、併し、私はあの時の大映しの指紋を見覚えては置かなかつた。指紋

秘密にして居ることがあつたのだ。私は長崎でひよつとすると人殺しをしたかも知れんと思つて東京へ逃げて来た。さうして君にかくまつて貰つて居た。が安心して給へ、私は決して殺人者ではなかつたのだよ。殺人者は彼奴だ！ てつきり彼奴だ——ウキリアム・ウキルスンだ。あの活動俳優のジョンソン——ではない、ウキリアム・ウキルスンだ。」彼は小休みなく苛々するやうに歩きまはつて居る。言ふことがひとり言のやうになる。時々、私を思ひ出すと見えて、君とか佐藤君とか呼びかけるが、話し方は全く一人言の調子なのだつた。さうして大體次のやうなことを話しつづけた。「或る晩のことである。私は何時ものどほり阿片に耽つて居た。さうして、つらうつらと魔睡の夢を見つめて居た。その夜私の夢に現れたのは、一面の湖水を前景にして——その湖水は實に度々私の夢に現れたものだが、それは非常に静かで、最も碧く、海よりももつと曠漠として居た。だが私はそれが湖水だといふことをよく知つて居る。といふのは、その海のやうに曠漠とした平靜な水面の對岸にや、はりそれと同じやうに巨大な建築物が見えるからだ。それは自然の風景を十二倍した位の巨大さだ。その晩の風景は今も言ふとほり、湖水を前景にして自然を十二倍した巨大さで或る古城が現れた。その古城の未だ後には回教の殿堂だと見えるドームが、やはり少くとも自然を十二倍した位に、古城の凹凸のぎざぎざや銃眼のある

けのものではない。最も複雑な世界地圖を一度幻に見て、その通りを記憶しては置けないやうなものでね」

彼は大きく頷いた。「君の言ふことは一一尤もだ」と私の少少皮肉な積りの言ひ分を彼は眞正面から正直に同感しながら、ひとり言のやうに、「ふむ、これはやはりここから説明し出してはいけない」彼は立上つた。さうして部屋のなかをくるくる歩きまはつた。さうしてやうやう緒を見出したらしく改めて話し初めた。やはりくるくる歩きながら、自分自身の考へをつけ規つて居るやうな目付をして。

彼は語り出した。「君、君は長崎に阿片窟があること——あつたことは知つて居たね。否、知つて居たどころではない。ついこの間君と一緒にその家のあとへ行つて見たのだつて。私は少し頭がわるくなつて居る。が、決して氣が違つて居るのではない。(自分で氣違ひではないと宣言する氣違ひほど困つたものはない、と私は思つた) 私は外國から歸つてすぐその阿片窟へ行つた。私はどうしても阿片なしでは生きては居られなかつたから。私は君にかくれてそこで半年住んだ。私は外國人らしく振舞つた。阿片窟の支那人へ高い金を出して其處へ住込んで、阿片を喫つた。その時の氣持ではもう一生を棒にふつてもいいから、阿片に惑溺する覺悟だつた。併し私は半年で歸つて来た。それには深い理由があるのである。君、僕を思つてくれるならね、私は未だ君にさへ

城壁や圓錐形をした塔の屋根に半分隠されて重り合つて居る城壁の後に回教の殿堂といふ對照に理智的に考へるといかに飛び離れた組合せではあるが、夢のなかではそれが最も合理的なりズムで調和されて居た。さう。それに明るい月光が照して居た——私は水さへ見ればきつと月を、月さへ見ればきつと水を見た。(別項、附録「月かげ」参照) 海のやうに曠漠な水面の夢なのだ。さうして銀のやうな光が降つて居る。その水面から時時ライラックの芽が出て、ずんずん成長して見て居るうちに大木になつて花が咲いた。白い花だつた。白い花だつたところを見るとライラックではないのかも知れない。梨の花かも知れない。それがその一本の木と同じやうに生育し花を開くところの無數の木によつて、一夜の夢のうちに深い大きい森林になつた。花ざかりの森林である。然もその森林はやはり水面にあるものと見える。水面がどうかした機みでごく静かに大きく揺れる時には、同じやうにこの水の上に浮んで居た花ざかりの大森林も、底氣味悪く、船暈に似たやうな不快を私に感じさせて、ゆらゆらと動揺した。そんな都雅な。又、より以上に莫迦げた。けれども莊嚴な風景だの、或は天に沖するやうな巨大な機械——それには金屬性のさまざまな形が、「整頓の混雜」といひたいやうな、譬へば Albrecht Durer の構圖の或るものやうな趣に、ぎつしりつめこまれて居る巨大な機械——金屬の多様多形の破



片から成り立つて居て、ごく静かに齒車を渡つて、やがてだんだん波及して、大仕掛にのろのろと運行する奇妙な建築物、そんなものが阿片に酔つて居る私のよく見る夢で、それ等のものが或る期間を置いて間歇的に交現れては、私を脅しながら楽しませ、苦しめながら酔はせるのであつた。が、私は今阿片の夢のさまざまに就て君に説明する筈ではなかつたのだつた。若し、君にしてそれを知りたいならば Deafening を讀む方が早道だから……。それでその夜は自然を少くとも十二倍大に擴大したほどのロマンチックな風景だつた。古城とドオムと銀を流した曠茫たる水面とが現れたのだ。そのドオムの面を月の光が圓く滑り落ちて居た。よく見ると前景である一面の湖水の上には長い橋があつて、その橋の上を無数の騎兵が進軍して居るのが遠くに見えるのだつた。この騎兵は後で考へて見ると英國の龍騎兵の盛装したものに似て居たやうに思ふ——英國で戴冠式の時、私はそれを見たのだが。一帶の光景の心持がこの騎兵が現れ出してから急に變つて來た。非常に騒々しい賑やかな感じがし出したのだ。譬へば全世界中をあらゆるもの音だけが一杯に占領したと假定して、然も私は全くの聾なので、その物音を耳では聴くことが出来ない。その代り五官の外のもの或は聴覺ではなく觸覺か何かで空氣の混亂を通して感知するやうな具合なのだ。その時である。私の夢のなかへ不意に武裝をした騎士

……ひよいと眼が覺めた。併し！ 見れば眼を睜つた私の前には、夢のなかで見たと、殆んどそっくりで、ただ形だけは全く縮小されて、一人の人間が呻きながら倒れて居る——夢のなかで見たと殆んどそっくりに——ただ形だけは全く自然大にまで縮小されて、水面の代りに床板の上で。彼の頭のずつと上にぼやけて光つて居る燭臺の、その燭臺の皿が地上へ投射する黒い圓形の大きな投影の下で、一人の男が呻きながら倒れて居た。彼の枕もとには、豆ランプ——それで阿片へ火をつけるのだ——が、この燭臺そのものの投影のなかで僅に方一尺ばかりをほんのり赤くして、彼の男の額と鼻面とを眞ともに光らせて居た。片肘で自分自身の重い體を釣上げるやうに支へ起した私は、私のぼんやりした信用しがたい眼の六尺ほど前の方でこんな状態に居る一人の人間を、別に大した感激はなしに見下して居た。ただ現實と夢幻との切離し難いこの混同を怪しんだ。それも極く微かな私の判斷力である。私は板で出來てその上へ藥布團を置いた寢臺の上に居たし、呻いたり血を出したりして居る男の方はぢかに床の上に居るのだ。私は未だ半信半疑であつた。私は中有にぼやけて光つて居る燭臺をもつと下へおろして、今のやうな燭臺それ自身のもの影ではなく、その光のなかですべてをよく見ようと、その中有にある燭臺へ手を伸ばさうとして、ひよいと瞳を上げると、今までは中有に浮いて居ると思つた燭臺は中

(私はよく古代や中世紀のものを夢に見た) が現れて、それが城壁を、どういふ風にだかはつきりとは解らないが、とにかく、城壁の内部をずんずん透して湖水に面して現れて出た。それと同時に、氣がついて見ると、あの碧い、古畫に描かれた聖母の衣服の色のやうに碧い湖水には、生きて眠つて居るのだからそれとも死んで倒れて居るのだから、何れにせよ、全く身動きもせずに横はつて居る一人の人間が、滯んで水面に、水の表面に、恰も陸に揚げてある船のやうにぼつくりと浮んで居るのである。片一方の壁を透して出て來た騎士は手に長い槍を持つて居た。槍の穂先が月光できらきら煌めいた。騎士も、陸上の船のやうに全部浮上つて居る男も、他の風景と同じく、非常に大きい。その水にぼつくりと浮んだ男と、兜をつけた騎士との、少くとも長さ一間以上もある横顔は、鮮やかな月の光を浴びて、私の眼の中へはつきりと浮び出して居る。突然、騎士の槍が非常に長く突き出された。何か爆發する音がすると一緒に、水の面に浮上つて居た男の脇腹から、血が滾々と溢れ出て、聖母の衣服のやうに碧かつた水の面一面へ滲み渡る、と、湖水は一面に眞赤になつた……人の呻り叫ぶ聲が山彦しながら、私の耳へ遠くひびいて來た。かたかたかたと足早に階段を上るか或は下りるかする足音がする。私は大きな聲で呻りながら、私の外にも呻る人があるのに氣がついて、それと一緒に聲を合せて呻りながら、

有に浮いて居るのではなく、誰か人の手で持たれて居たのだつた。私は手を見て初めて其處に居る人の顔を見上げた。その男は多分、今、物音に驚いてここへ駆け下りて來たであらうこの阿片窟のおやぢなのだつた。更に氣がついて見ると、私の片肘は、私が自分の體を支へて居るのでない方の片肘は、この支那人の力強い手で釣上げられて居る。彼は直ぐ私の顔の前へ肉迫して突立つて居た。私はそれをやつと始めて見出した。部屋がそれ程に暗かつたのではない。私が、私のすべての感覺がぼんやりして、物を知覺する普通の自然的な順序といふものを間違つたらしい。私が彼の顔を見上げた時、彼は冷やかに私を見下した。それから中有に浮いて居るものと私には思へた彼の手にある燭臺を動して、血を床板に滲ませてぐつたりなつて居る男を、燭臺の光線のなかで私に示した。支那人は、その呻き盡してもう何も叫ばない男を、突きながら——足の尖で突きながら、私の顔をにらまへた。いや、ひよつとすると私をにらまへて置いてから、その男を蹴つたのだ。いや、一度倒れて居る男の肩を足の爪先きで突いて見て、それから改めて蹴つたのだ。倒れて居る男は、其の男は汚い身なりの外國人だつたと思ふ。それとも立派なモオニングを着て居たか知ら——私はそれを忘れた。夢の方がよく覺えて居る、夢のなかでは水色の得體の知れない着物だつた。その後の夢でもさうであつた。一體だと、この



阿片窟は何時も十人や六七人は居る筈であつた。その前夜か或は前夜の如きは、その害のなさは魔睡して居る男で一杯だつた。それなのにその夜だけが私とその男と二人きりだつた。何でも船の都合か何かで、船乗りはその晩、皆、殆んどこの港に居なかつたに相違ない。そんなことは滅多にない事なので、私にはそれが今でも奇異でならない。阿片窟のおやぢの支那人は——其奴は四十八九歳位のあばたのある大きな顔を持つた男だつたが——私を殺人者だと言つた。私は、さう言はれて私の夢のことを思ひ出すと、若しや、自分は夢のなかで夢遊病者がするやうに、實際、夢中で彼を刺殺したかとも考へざるを得なかつた。少くとも私には私自身ではないと證據立てる何物をも持たなかつた。私は支那人に對つて言つた——自分は死んで居る男とは全く無關係な男であること。それ故その男を殺すべき理由のないこと。けれども夢中で或は殺さないとも限らないこと、君とても後暗い商賣をして居る以上、この不可解な私の、或は何人かの殺人を公然の事件にするわけには行かないであらうこと、それ故自分はこんな機會でこの場所にかかり合ひになつた關係上、君——その支那人に金を千圓やること。それ等のことを私は彼と相談した。彼は寧ろ喜んで居る様子であつた。私は外國のこんな場所へ出入する宿無しどもがするやうに、靴下と足の裏の土附かすの間に隠して保存して居た現金を、その場で彼に手渡

した。さうして死骸をとり片着けることを承諾させた。さうして置いて、私はこの厭はしいものから、私の顔をそむけて、體を寝返りさせた。顔を壁の方へむけた。私の寢臺は壁に直ぐくつついて居た。壁はほの白く、私の豆ランプの火はそのほの白い壁に對しては赤黒かつた。私はもう一度眠らうと思つて、眠つて今の不愉快な現實の現象を、せめては何かもつと超自然なものにしよう——どんな不愉快なものでも超自然になれば美だから——と、あせつたけれども、流石に私もあまりとび離れた自然そのものを見たこととて阿片も何の力もなく、いかに燻らして見てももう再びは夢に入ることが出来なかつた。若し私が本當に狂人だとすれば、私は言ふが、多分その時に氣が違つたのだらう。私の神経はちやうど黒水晶の結晶の林立のやうな形をして居た。と、不意に私は私の耳にチクタク、チクタク、チクタクといふ音を聞き出した。はて、と、思つてそれに聞き入ると、それは正しく私が偶然耳を當てて居た壁を傳うて聽かれる音である。私はその見當を見定めようと、本能的にその方へ目を向けると、目のとどいたところに一個の時計が見えるのである。それは壁のなかである。私は實際その時壁を透して物を見たのである。ありありと、白晝に眼前二尺のところにある現實よりもつとありありとそれを見た。三十分ばかり見つけた。さうしてそれは遂に見えなくなつた。チクタク、チクタク、チクタク

クは何時までも聽かれた。突然遠くの方から汽笛の音が空間を突裂いてひびいた。それは多分、もう朝なので、夜明けなので、造船所の笛の音だらう。私は起き上つた。最も元氣よく起き上つた。あの支那人を起して、この壁を破らせてその時計を拾はうと、決心したからである。私は立つて歩み出さうとした。危くあの死骸につまづく所であつた。支那人の奴は承諾をして置きながら、直ぐに始末すると承諾しながら、それを未だそのままにして居たのであつた。私はその血に塗れた死骸と一間置きで夜を明したのであつた。今思ふと怖ろしい。けれどもその時はただ支那人の違約だけがひどく腹立しかつた。私はあの支那人が眠つて居る扉をたたいた。蹴つた。さうして「おい又五百圓やるぞ」と吐鳴つた。支那人は直ぐ彼の妻の部屋の方からつそり起きて出て來た。私は言つた——お前が若し私にあの部屋の壁を破らせるなら、今直ぐ破らせるならば五百圓やらうと。彼奴は眼をこすりながら私に睨いて來た。私は響へ下りると、その私の寢臺のある壁を指して言つた——「ここだ。それからもしこのなかから時計が一個出たらば、きつと出るに相違ないが、それは俺が貰ふぞ」支那人はそんな事はどうでもいいやうに、小さく頷いて承知した。我我は、私の眠つて居た寢臺をとり外した。見ると私の寢臺でかくれて居た壁の下の方に、これ位の（彼は拇指と人差指とで輪をつくつて見せて）穴が二十も三十も、

蜂の巢のやうに穿たれて居た。私は驚いた。支那人は一向驚かなかつた。私は其處を破つた。薄つぺらな板で出來て居たから。すると、私は更に驚いた、驚いて叫んだ。併し支那人は決して驚かない。彼は、支那人は私に説明をした——それらの穴は、土のなかの大きなものも壁の上の小さなものも、この部屋に空氣を入れるために、設けられたものである。と。成程、私をそれほど驚かした直径三尺もあるその穴からは私の手にもつて居る豆ランプへも私の顔へも、風が感じられた。もう一足踏み込まうと、ふと足もとを見ると、あつた！ 私が先刻あり／＼と見た通りの時計が！ それがこの時計だ。指紋のある時計だ。今この机の上に我我の目の前にある時計だ。

私は支那人の命ずるとほりに、死骸の足をもつた。さうだ確かに足だつた、支那人は自分で頭の方を持つたのだから。君、人間の體といふものは死んだ方が倍も重くなるものだよ。我我はその死骸を運び込んだ。あの壁を破つた奥へ、時計の出たところへ、風通しの穴のなかへ。支那人はその死骸を足をもつて一間ほど、曳き擦つて來た。その足を穴の入口で待つて居る私に渡した。我我は自分の背中を穴の上部の土に壓へつけられながら、二足の蟻のやうにそれを運び込んだ。兩手で死骸の兩足を持ち上げて、私は後すざりして這つた。支那人は先づ自分の手を放した。死骸の體がどしんと地



に落ちて地響きした。支那人は反響する重苦しい低い聲で「よし」と言った。私は私の手を放した。死骸が土の上へ置かれた時、徑三尺ほどの穴は、大きな死骸で殆んど閉塞されて居るのを私は見出した。私はその死骸の上をのさばり這ふと、死骸と體を重り合せ、死骸の顔と自分自身の顔とを殆んど擦り合さんばかりにして——私は死人と接吻せんばかりにして、やうやうその穴を出て来た。支那人は片手に赤皮の靴をさげて、窶から上つて行くところだつた。その靴は多分あの死骸の靴なのだ。私は死骸の冬の大理石のやうに冷たい素足を握つたことを忘れ得ないから。部屋の床の上には、巨人（私の夢に現はれたほどの）の指で撫でとつたインキの滴のあとやうに羽箒で掃いたやうな血のあとが、死骸のあつた場所から穴の方へかすれて居るのを私の目は見た。私はもう一度、あの穴の入口に立つてなかを覗き窺うて見た。どういふ理由でそんなことをしたのだから私にも解らない。見ると、穴の彼方から仄白い夜明の光が、かすかに一すぢ死骸の胸の上から顔を這ひ傳ひながら、この地下の窶へ忍び寄つて居た。尙も見つめると、その穴の奥底からは曉の空の銀を溶して、堀割の水がほのかに見られた。その夜のさまざまな光景が、實際殆んど全く同じ具合にその後の私の阿片の夢にきつと現はれた。その一夜の記憶は、阿片に依つて作用の鈍つて居る私の頭からも、決して消えない。そればかりか、その夜

れ故私は夢中で懺悔するのではなからうか、私はさうも思つた。さうして懺悔の涙をもつて君にとり纏るやうにもなつた。さう思ひ初めると、私が私の潜在意識と第六感とで發見したと信じて居るあの犯罪者と、證據物件である時計とは、犯罪者は私自身であり、時計は私自身のものではないか、と疑はれた。事實に於て、私もやはり金の時計を持つて居た。それはどうかした機會で無くなつた（それはどうしてであるか忘れた。私はそんな些細な面白くないことは昔から直ぐ忘れる。阿片を用ゐるやうになつてからは殊にひどい。それは人にやつたのか、落したのか、賣つたのか、盗まれたのだからのどれかだ。）私はひところ時計の蓋の裏の指紋と自分自身の指紋とを、一つ一つ較べ合して見るために、私の氣分のいい日を全く殆んど費した。時計の蓋のうらにある指紋はたしかに私のものとは違つて居た。さうして私の眼は時計に印せられた指紋を、その一つ一つの渦の巻き方を、擴大鏡で眺め暮して居るうちに、全く悉く記憶してしまつたほどである。私の眼底へ——視神經そのものへその指紋が印刷されたやうなものである。その時計の指紋と私自身の十の指紋との外に、佐藤君、私は、君達夫婦の指紋も覚えて居た筈だ——それは重に拇指と人差指とだが——君達はよく私のキネママガジンの口繪である光澤紙の表と裏とへ君達の指紋を残して居たから。私はよく物を忘れるが、覚えて置かうとしたこ

はただ一つの奇妙な昂奮であつたものが、後になつて初めて異常な怖ろしさに變つて来た。時が経過すればするだけその怖ろしさは加はつた。然もその後の日の阿片の夢のなかでは、正しく私自身がその殺人者になつて現れて来た。私は穴のなかで、自分の殺した死骸の上をのさばり這うて死骸と私自身の體とを重り合せ、死骸の鼻と自分自身の鼻とを擦り合せ、私の唇は死骸の氷のやうな唇にさはり——どういふわけか、夢のなかでは、私はかうしてこの死骸を自分の花嫁でもあるかのやうにしつかりと抱擁して、わなわなと慄へながら、動物的の恐怖と、人間的の悔恨とで私は何時までも何時までも泣いた。泣き叫んだ。またすすり泣いた。私の叫ぶのを聞いて、支那人が駆け下りて来る。私は捕へられたものの悲しさで一層に泣き叫んだ。と、目を見開くと、それは支那人ではない。私の最も親切な友達だつた。おお、佐藤君だ。君自身だつた。私はあまりに異常な私自身の夢と、この温かな現世の友情との、あまりのかけ離れ方に、さうしてそんな二つがほんの一瞬間の變り目から来るために、私はその變り目に氣がつくと思はずも涙が流れ出たのだ。佐藤君、私は幾度か君にとり纏つて泣いたらう。私は又ただ私の阿片の夢ばかりではなく、長崎の阿片窟でも私自身は無意識ではあつたとは言へ、實際にあの死骸である男を殺した者は私自身ではなかつたかと思ふやうになり出した。私は夢中で殺した。そ

と、或は一たん覺込んだことなら決して忘れるといふことはない。忘れて居るやうでも、必要に應じてありありと最も明確に記憶のなかで咄嗟に再現することが出来る、——重に視方に就いていふのだが。それが私の最も奇異な能力だといふことを、私はあの時に發見した。それは「女賊ロザリオ」といふ活動寫眞を見た時だ。然うさう！ その時は、非常な人ごみのなかに、私の隣席に、右隣りに君が居た。佐藤君、君は物覺えのいい人だ。だからあの時のことをよく思ひ出して見給へ、私があの時どんなに愕いたかを。大映しになつた男の——あの運轉手ジョンソンの顔が、女賊ロザリオの巨きな笑顔の横で、ひよいと我々の方へふり向いた瞬間であつた。私はその男、目の前の畫のなかの逆光線を浴びた男の顔が、あの私の夢のなかの月光を浴びた騎士の顔に寸分違はないことを直覺的に見た。そればかりか、それは上海の阿片窟で度々見た顔だつたことさへ、一時に思ひ出された。併し、私はその時、私のその直覺をすぐ莫迦莫迦しく思つた。私が單にちやうどあの時の夢ほどの大きな人間の顔を見た瞬間、私は私の夢を映畫のなかへ投げ込んだだけだと思ひなほして自分自身を打消した。それから、この様子だと自分は今に何を見ても阿片の夢のやうに怪異に見え出し、若しかすればあの自分自身が殺人者である夢が、何もない空間へでも、阿片を用ゐない時にでも、見え出しほしないかといふ心配さへ閃めい



た。映畫は普通の大ききになつた。併し、それが一たんさう思はれ出してからは、夢のなかの槍を持つた騎士であるといふ氣持は多少減じたけれども、上海の阿片窟で二年半か三年か或は三年半か以前によく見た男に相違ないといふ氣持がしてならなくなつた。さうしてその男が上海のあの阿片窟の戸口へ歩いて來た時の様子が實に明瞭に私の眼に浮び初めたのである。その時であつた——再び大映しになつて指紋が現れたのは。私はそれを一瞥するや、それはフィルムからスクリーンの上へ映寫されたのではなく、私自身の眼底にHごろから豫め刻みつけられて居たあの金時計の蓋の裏にある指紋の印象が、何かの作用でその幕の上に、これだけに擴大して映し出されたのではないかとさへ疑はれたほど、それほど同一なものであつた。ただそれらの相違といふのは、前者は自然物の小ささで且つ金時計の蓋のうらにあることと、後者は貴族のライブラリーのマホガニーの机の上にあつて且つ畫に現はれる世界全體の形が、自然物の十倍或は十五倍大であることだけである！ 指紋そのものの模様に至つては、その最も複雑な自然の *Miniature* (微細畫) の輪廓に至つては、そこそ十分の一分一厘も相違しては居なかつた。私はそれを確信した。その確實な證據は、今、後で直ぐ君にも見せるが、今はまあ僕を信用し給へ。それで、

初めた理由はそれであつた。最も妙なことには、そのうち何時しか、私は三崎の阿片窟に於ける私の見た——といふよりも寧ろ關係した殺人事件といふものは、そもそもその全部が夢ではないかと思はれ出した。事實にあつた通りであることをあまり度度夢で見る。そのために事實そのものまでが夢に感じられ出した、といふ私の心理が君に同感出来るだらうか。いや、そんな事は君の同感するのではないには拘はらない、私の經驗した事實だから。果は、長崎のM・B町に、私の生れ故郷であるところの長崎に阿片窟があつたといふことさへも、唯の夢ではないかと私には思はれて來た。併し、それと同時に一方では、確にそれ等の全部は疑ふべくもない事實だと信じて居た。さうしてそれらのすべてを夢だとする心持は、自分の關與した厭はしい事どもから逃避しようとする淺ましい卑屈な心の所爲だとして、自分のもう一方の心ではそれを責めるのであつた。その事實を事實だと認めようとする方の私が、君を長崎へ連れて行つた。私自身がそれを認めると同時に第三者である君にも、長崎に阿片窟があつたことだけでなく、せめてはその跡でも君に見て貰ひたかつたからだ、私は或は代は變つて居ても、やはり何か其處にはそんな場所があるかとも考へたから。其處は今幽靈屋敷になつて居る——天井から血が滴るのだ。天井から血が滴るのだ。それは實際あることかも知れない。その血が滴つて、聖

指紋ヲ持ツタ指が二本以上アルデアラウカ？

かういふ問題が、それが私にとつての重大な問題になつて來た。そこに十六冊だけ指紋に關する書物がある。それは私がその問題の解答を確實にするために私が讀んだものであるが、それらのどの頁に、「全然相等シイ模様ノ指紋ガアルデアラウ」と書かれた行があるか？ どの書物にも、そんな報告や研究や一つもない！ けれども「自然の神祕は人間の研究や報告で盡きるものではない」といふならば、それほど神祕な自然が、魔睡して居る男の潜在意識を通して殺人の事實を見せ、殺人者を直覺させないといふ理由がどこにあらうか。全然相等しい指紋だつて二つも三つももあるかも知れない、と言ひ張るならば、私もあの活動寫眞に出て來た男が正にあの時の殺人者に相違ないのだ、と言ひ張り得る權利がある。が、問題の要點はそんな漠然たるものではない。私はたしかにあの男——『女賊ロザリオ』の運轉手ジョンソン——即ち俳優ウキリアム・ウキルスンが、その犯罪者に相違ないといふことを、私自身でごく冷靜に客觀的に認め得るやうになつて、若しかするとあの殺人者が自分ではないかといふ怖ろしい自分自身に對する嫌疑を自分自身に晴らして、その上にあの厭はしい悪夢から逃れたい、といふのが私の目的である。私はそれを認め得てもつと輕快な心持を抱くやうになり

母の衣服よりも碧い水面を眞赤にするのだ。私はそれをよく知つて居る……床板へなすりつけられてあつた血だ。それから私たちは、その男を土中の穴へ、害の風穴へ運び込んだのだ。私は、あの時——君と長崎へ行つた時、最も狭い路次から小さい橋へ出る間で私が突立つたところの、×印を畫いたところ、あの下あたりに、その男が——ウキリアム・ウキルスンに殺された男が、埋められて居るのだよ。

「君は先づ以下の事を承認しなければならぬ。それでなければ私は話しつづけるわけには行かない——

(1) 世ノ中ニハ全ク相等シイ形ヲ具ヘタニツ以上ノ指紋ハ絶對ニナイ事。

(2) 上海の阿片窟ニ出入シタコトノアル男ガ、長崎ノ阿片窟ヲ知ツテ居テ、ソレニモ出入スルコトノアリ得ベキコト。例ヘバ私自身ノゴトキガソレダ。

(3) 殺人者ハ映畫ノナカヘ決シテ現ハレ得ナイト云フ原則ハ何モノナイ。從ツテ、長崎テ殺人ヲシタ人間ガ、亞米利加デ活動寫眞ノ俳優ニナルコトノアリ得ベキコト。但シ、ソノ殺人ハ世間ニ知レナイモノデアル。

(3) は少しロマンチック過ぎて君には承認し兼ねるかも知れない。しかしそんなことは絶對にあり得べからざることだとは、果して何人が宣言出來やうぞ。況んや、それは事實なのであるから。兎に角、私は最初にいろいろと研究もし、考



へもした上で以上の三つの事を自分自身で承認した。さうして私は私の直覺や潜在意識といふやうなものをも假りに信用した上で、私は長崎から二通の手紙を出した。一通は佐藤君、君の名と所とを借りた。それはローサンゼルススのグリーン・フラグ會社へ宛てたものだ（私は内心、この狂氣の友人が私の名前などを濫用して無暗なことをしてくれたのでなければよいが、とその時考へた）それからもう一通は、同會社の專屬俳優のウキリアム・ウキルスンに宛てたものだ。私はその男は同會社の專屬ではないかも知れないが、同會社のフィルムに表はれる以上、何か関係があるだらうと思つたからだ。その文句は次のやうなものであつた。

日本長崎に於ける阿片窟は、嚴重なる同地警察署のために發見せらるると同地に、同所に於ての貴君の殺人事件は、貴君の同所土窟附近に遺失しありたる金時計の指紋と、貴君がフィルム『女賊ロザリオ』に於て、世界に示されたる指紋との、全く偶然(?)なる符合により、機敏なる日本警察の注意を喚起したるものゝ如し。貴君にして、若し身に覺あることならば、即座に貴君自身を守るにあらざれば、貴君は非常なる危険を冒すこととなるべし。

昔日の上海阿片窟に於ける  
貴君の親愛なる一友人より

六日頃着いたと思つて差支へない。彼の手には直ぐ入つたかどうかはわからないが十一月二十四日——彼が行方不明になつた日までには、私の手紙はきつと彼の目に這入つたものと見做してよからう。彼は私の手紙を見てから行方不明になつたのだ。それからちよつとそれを貸し給へ。その映畫目錄は、ただ何でもい手紙の着した日を知る方便に送つて貰つたのだつたがその目錄が計らずも又用立つた。ウキリアム・ウキルスンの初めて映畫に現はれるやうになつたのは『X・Y・Z』といふ活動寫眞だつたらう。雑誌の記事にさうあつたからその『X・Y・Z』は一九一四年に出來た寫眞だ——その目錄に依れば、それならウキリアム・ウキルスンは一九一四年以前には活動寫眞の俳優ではなかつたのだ。それはさうでなければならぬ。でも彼は一九一二年の夏に——たしかさうだね、長崎から僕の歸つたのは——一九一二年の夏、彼は長崎で殺人をしたのだから。活動寫眞の俳優が長崎や上海でふるふるしては居ないから。僕はまだウキリアム・ウキルスンが殺人者だとは決定しないと云ふだらう。(彼はしつかりげに微笑を含んで)さうだとも、私だつて、これだけの事實に若し私自身の潜在意識と直覺能力との信用がなかつたなら、次の二つの疑問には必ず逢着する筈だ。それは私だつて考へては居る。

(1) 若シ、ウキリアム・ウキルスンが私ノ手紙ヲ見タコ

「ここまで来て、私は先刻の私の手に今日とどいたキネママガジンの消息欄を見せる筈だつた。私はうれしさのあまりそれを君に早く見せすぎた。一體あの二通の手紙は長崎の停車場で投函したのだ。あ、君はそれを見たね。我が長崎へ行つたのはあれは十月四日である。それは重要なことだ。普通ならばローサンゼルスまで郵便は二十日位でとどく筈だ。けれども戦争以來郵便は甚だ不規則だ——活動寫眞の雑誌が時時非常に延着して私を待遠しがらせる程だ。で私はその私の手紙をウキリアム・ウキルスンが何時見たかは大抵解る。

さう言ひながら、何時の間にか私の傍の板の前に来て腰を下して居たR・Nは机の最も大きな抽斗から、何か寫眞でも這入つてゐるらしい郵便物を取り出した。さうしてそれを私に渡した。

「さあ、それはグリーン・フラグ會社からの郵便物だ。やつと十日ほど前に君の妻君から受けとつた。若しあるならば、映畫の目錄といふやうなものを送つてくれるようにと、私は君の名でその會社へ申し込んだのだ。私はそんなものを欲しいよりも、その會社から來るものの日付けが見たかつたから。それは十一月十六日に出して居る。すると私が出した手紙は少くもそれより以前にその會社へ着いたのだ。それと同時に投函したウキリアム・ウキルスンへのものもさうだ。

トノ爲メニ行方を晦マシタノデナイトシタ場合。  
(2) 『女賊ロザリオ』ノナカニ現ハレタル、マホガニイ机ノ一角ノ上ノ指紋ガ、運轉手ジョンソン——即チウキリアム・ウキルスン自身ノモノデハナク他ノ何人カノモノデアアルカモ知レナイ場合。

以上の二つである。私を信用しない人は、この二つの場合を想像するであらう。或はより以上私を信用しない人に至つては、私があつた指紋のある金時計を壁のなかで拾つたといふ事實をさへ、さうして、私の見たものはことごと私の魔睡の夢で、私の理窟は氣違ひの獨斷だといふかも知れない。實際私だつて時々さう自分自身でも思ふ位なのだ。だがここが肝要なところだ。「世ノ中ニ全ク形ノ相等シイ指紋ヲ持ツタ指ガ二本以上アリ得ルカ?」ここにある十六冊の指紋の書物の——「指紋といふものは必ず一つ一つ相異なるものであるが故に、種種の證據として重大なる理由を持つ」といふ根柢から書かれたこれらのすべての書物の、何の頁何の行にそんなことが書かれてあるか。「世ノ中ニ全ク相等シイ指紋ガドウシテモ二ツ以上ハナイ」限り、どんな懷疑者でも自分自身の眼を疑つて、それを刮り抜かうとも思はない限り、最後に唯一つ次のことだけはどうしても信じなければならぬのだ——

(1) コノ時計ノ蓋ノ指紋ト『女賊ロザリオ』ノフィルムニ現ハレル指紋トハ形ガ全ク相等シイ事。



或は、私を少しは信用しようといふ人には——  
(2) 私ガ殺サレテ居ル人間ノ傍カラ拾ッタコノ時計ノ蓋  
ノ内部ノ指紋ト、『女賊ロザリオ』ノフキルムニ現ハ  
レタ指紋トハ全ク形ガ相等シイ事。  
即ち——

世ノ中ニ全ク形ノ相等シイ指紋ヲ持ツ指ガ二本以上アリ  
得ナイ限リハ、前述ノ最後ノ(1)ノ場合モ(2)ノ場  
合モ、ソレヲ二ツノ指紋ハ同一ノ一本ノ指ニ依ツテ印セ  
ラレタモノナラザル可カラザル事。

さて、今の(2)以上にだんだん私を信する度が多くなれば  
多くなるだけ、最も多くなれば——その頂上では私自身が私  
自身を信用する最大限度の時と同じやうに、遂にはウキリア  
ム・ウキルスンガ長崎ノ阿片窟ノ殺人者ニ相違ナイといふと  
ころまで私に一致するであらう。」

荒唐無稽な話から迷宮を行つたり来りするやうな論理めい  
たことまで長長と語つて私を悩ませた私の友人は、やがて彼  
の机の抽斗を三たび開けながら、太い巻尺のやうなものをと  
り出した。それは活動寫眞のフキルムであつた。「これを私  
は買つて来た」と言ひながら彼は徐ろにそれを展げつつ、昂  
奮して不気味なほど光つて居る瞳で私を電燈の下へ呼び電燈  
の光にそれを翳して見せた。それは正しく『女賊ロザリオ』  
のフキルムの十尺ばかりに相違なかつた。ロココ風に飾られ

ども終りの方になつての話振りに、何となく威嚴のやうなも  
のを感じた。試みに時計の蓋の内部にある指紋と、『女賊ロ  
ザリオ』の畫面がある指紋とを一眼見較べて見た。おお!  
實際! それは互に分厘も違はない!

それ以來、私は擴大鏡でも見た。幻燈に寫して較べても見  
た。私は決してそれを疑ふわけには行かない。それが全然同  
一なものであることを、私は——私の眼はどうしても疑へな  
い。

既に三年間以上さうである。

※ ※ ※ ※ ※

大正六年九月十幾日である。私は郷里へ歸省するため、  
和歌の浦から、夜、汽船に乗つた。私は汽船のなかのつれづ  
れにふと船室にあつた一枚の新聞をとり上げた。それは當日  
の新聞でなく、三四日前の古新聞であつた。三面をあけて見  
ると一葉の圖が挿入されて居るので、それがふと目につい  
た。私は何気なくその圖を見て居るうちに、氣がついた。氣  
がついて少し愕いた——それは曾て、私が見た場所だからと  
ある。それこそあの長崎のM・B町のもと阿片窟があつたと  
いふ附近の平面圖で、併も、曾て、R・Nが×印をしたとこ  
ろには、その圖にも矢張り×印がついて居る。私は思はず、  
この暗合に慄然とした。さうしてその記事に目を走らせた。

た或る貴族の一室へ、探偵が三人這入つて来てその部屋の机  
の上にと何ものかを見出す。一人の探偵がそれを指す——  
畫面が大映しになる。見るとマホガニイの木目のある机の一  
角に一つの指紋が現れて居る。彼はその指紋のところを、殊  
に大切らしく古いネクタイのきれかなにかの濡子で擦れない  
やうに巻いて居た。彼は再びその布をその部分へ巻きフキル  
ム全體をも巻き納めた。さうしてそれを私に手渡ししながら  
ら、自信に満ちた調子で言つた。

「さあ、證據はこれと、それにあの私の手袋の上に君が置い  
て居るあの時計の蓋の裏とだ。君はそれらの二つのものにあ  
る指紋の全く同一である事を今直ちに認めなくもよい。成可  
く丁寧にゆつくり、その代り確實に間違ひなく認めてもらひ  
度い。私のところには擴大鏡もある。私の家根裏にはフキル  
ムを映す目的で私が工夫した幻燈もある。——この目的で賣  
出した機械はどこにもあるが私の工夫したのが、最も手輕  
で、最も明瞭だ。これらのものは皆、君に渡す。ただそのフ  
キルムを失はないやうに、又その時計の蓋のうらから指紋を  
消さないやうに——殊にこれはくれぐれも注意してくれ給  
へ。もう二つとは無いものだ。」

※ ※ ※ ※ ※

私はあの晩のR・Nの熱心と、それに少々くどかつたけれ  
「長崎の幽霊屋敷」といふ題には、「地下室——白骨——純金メ  
タル——愈々出て愈々怪」と小見出しして居た。若し私が何  
も知らなかつたならば、さぞ新聞記者の月並な文句を侮蔑し  
て、そんな記事には多分目をくれなかつたであらう。けれど  
も私はその時は見た。見なければならなかつた。

私は目を走らせた——

長崎M・B町といへば支那人を初め生活程度の極めて低き  
外人等の雜居地なるが同町十九番地に一個の空家あり。煉瓦  
の洋風建物なるが、その家は數年前一人の支那人夫婦が居住  
して以來、住む人なく、偶ま借家するものもあるも大抵五日或  
は十日、永くとも半月とは居つくものなく、居住者の話なり  
とて噂によれば、その家には、宵の八九時より夜半の一二時  
に至る數時間は、天井とも何處ともつかず滴々として血潮の  
滴るが如き音陰氣にひびき、或る者は天井より滴り落ちて床  
一面にひろがる血を見たりなどと物凄き噂専らにて、血氣の  
若者達は試みにその空家に宿泊する者もあり。ここに不思議  
なるはその家ばかりか試膽者達の宿泊に際しては決して何の  
變事もなく、變事なきを見とどけて同借家を借り受けたる者  
と雖もいよいよ居住する場合には必ず、噂の如く滴りの音を  
聞く由にて、三四年來は一切その家に住む人もなき故、家主  
にても持て餘したる末その家を取毀さんものと、兩三日前人  
を雇ひて取毀しを初めしに、不思議なることにはその家の床



の下に廣さ十疊敷ばかりの地下室あり、何物が何の爲めに設  
備せしものなるや知るを得ず、人人氣味悪るきことに思ひ  
つつも、下り行きて見たるに、居住者達が血の滴ると思ひし  
は、多分臺所の流しもとよりこぼれし水が同地下室に滴りて  
ひびくものらしく、それは流しもとの板の裏なる水漏の跡に  
よつて推察されたり幽霊屋敷の正體とはこんなものなり、そ  
れにしても何のための地下室ならんなど語り合ひ居るうち、  
人夫の一人が同地下室の一隅より涼しき風の吹き込むことに  
氣つき、その方に歩みよりたるに、其處には一道の穴あり。  
その穴は何處に通ずるかとその一人は、もぐり行きたるに僅  
か二三歩行くうち叫び聲を上げて這出でたり。人人その理由  
を尋ねれども、件の男は口も利けずただ穴のなかを指さす  
のみ。漸く口を開きて彼處に一個の白骨横たはれりと言ひ出  
したるにぞ、大騒ぎとなり、果は警官の出張を求めて取調べ  
しに、確に一個の髑髏あり、四肢頭蓋等の諸骨も完全に具備  
したるものにして骨格の常人より偉大なる點より見て、多分  
支那人或は歐米人なるべしと推測せらる。尙も残る隈なく同  
地下室を搜索するうち、流し元の下より一個金色燦爛たる新  
鑄一錢銅貨大のメダルを發見したり。同メダルは目方七匁五  
分ほどある純金にして其表面にはラテン語を以て「藝術は長  
し生命は短し」の一句を刻めり。海外某大學文科の記念賞  
牌にして、珍らしきものなること判明したるが、市中にかか

ろいろの光景を、私に暗示した。……だんだんそれを信ずる  
度が多くなれば、最も多くなつた頂上では、彼自身か彼自身  
を信用する最大限度の時と同じやうに、遂には「ウキリア  
ム・ウキルスンガ長崎ノ阿片窟ノ殺人者ニ相違ナイ」といふ  
ところまで彼に一致するであらう?……

私はその新聞を、福岡の新聞を持つて歸つた。さうして  
R・N——前年たうとう死んだR・Nの奇異な遺品、あの不  
可解な蒐集物——赤いアンダーラインをしたあの活動寫眞雜  
誌、グリーンフラグ會社のカタログ、彼が透視して探し出し  
たといふ金の時計、それを手にとつて見る爲めの黒い手袋、  
『女賊ロザリオ』のフェルムの一部、それを擴大して映す幻  
燈——それ等の物を納めた箱のなかへ、その新聞をも納めて  
置いた。

私は未だ今日でも、これを書きつつある今日でも、あのフ  
キルムのなかの指紋と、時計の蓋の裏の指紋と、その二つが  
どこがどう違つて居るか、を、どうしても發見出来ない……  
私は自分の目を疑ふことは尙更出来ない。私にはそれは神を  
信じないより以上の冒瀆だから。

指紋をぢつと見つめて居ると、そこに別に一個の世界があ  
る。その奇珍な微細な世界がいつしか私の目にも親しいもの  
になつた……私の妻は、私があまり指紋のことばかり言ひす  
ぎるので、心配して私自身も狂人になりかかつたものと思つ

る人知れぬ地下窟のあるさへ審しきことなるに、黄金の賞牌  
といひ、更に白骨といひ、然もその白骨は道路の眞下十數尺  
のところ發見されたるに至つては、この幽霊屋敷こそ愈々  
出でて愈々怪といふの外なく、土地柄とは言ひ、何れこれには  
世紀風の物語に見るが如き出来事といふべし、何れこれには  
何か深き仔細があるならんと、同市警察に於ては一切秘密の  
うちに着々探偵の歩を進めつつありと言へば、何れは遠から  
ず一切は暴露せらるるなるべし。大正の今日尙この怪事あ  
り、事實は小説よりも奇とはかかる比のことなり、昔……  
田舎の新聞らしく（それは福岡の新聞であつた）長々と報  
道して居るのであつた。

私は一層愕いた。恐らくこの記事を見た何人のうちでも、  
私こそその最も愕いた人であらう。曾ては狂人の妄想の一部  
分と聞いて居たことが、それがとにかく或る部分まで事實だ  
つたのだ。彼が「私自身でそこへ運んだ」と語つたところか  
らは、外國人だつたと言つたが、それは事實外國人の白骨が  
發見されたのだ。私の目の前には揺れて居る船室の白い天井  
一杯に、あの『女賊ロザリオ』のフェルムのなかの指紋と金  
時計の蓋のうらの指紋とが、二つ全く同じ形に列んで目に浮  
んで來た。R・Nの言つた事を、私はどこまで信じればよい  
のであらう。船室の圓形の窓からは船の揺れるまにまに月夜  
の海がちらちらと見えて、それがR・Nの語つた幻燈的な  
て居るらしい。「氣違ひは傳染するものでせうか」と精神病  
の研究をしてゐる私の友人Kにそんなことをたづねたさう  
だ。しかし私は決して狂人ではない。これは私の妻にも讀者  
にも言ふ。——實を言へば、R・Nだつて狂人ではなかつた  
のだ。と、私は近頃では、然う思ふやうになつて來た。

月 かげ

（「指紋」の附録として R・Nの遺稿からの斷片）

「指紋」を讀んでくれた諸君は、私のごたごたした記録をさ  
ぞ讀みづらく思はれたであらう。さうして私の文章に迷惑さ  
れたことであらう。併し、或はあの主人公である私の友人  
R・Nに對して、多少の好奇心を起されたかも知れない。こ  
の一篇「月かげ」は、然ういふ人人のお目にかけて置きたい。  
R・Nが病死してしまつてから、彼のかたみを整理するつ  
もりで、私は彼のデスクの抽斗をひつくりかへして見たこと



がある。その時偶然に、いろいろな彼の遺稿を發見した。それは殆んど全部が英文で書かれて居て、さうして何れも頭も尻尾もない断片ばかりであつた。ところどころには、Q. of P. *anghnessy* などからの抜き書きもある。私はそれをところどころ拾ひ讀みして居るうちに次のやうな書き出しの一文をよみ出した。私はR・Nが何時か長崎の阿片窟で見た夢を語つた時に、「私は月を見ればきつと水を見た。水を見ればきつと月を見た」といふやうなことを語つたのを思ひ出した。それからまた、R・Nが外國に居たところに繪も描いて居たものらしいといふことを、この文章の一部から推測した。此は私の彼に就て知り得た新しい事實である。それらのいろいろな断片を讀んで見ると、それは皆阿片の夢の日記のやうなものであるらしい。R・Nは多分これらのものを集めて、例の *De Quincy* の *Confession of An English Opium-Eater* の向うを張るつもりであつたのではなからうか。

さてR・Nの追想に耽つてゐればきりがなからうか、先をいそぐとして、——私はそれをここへ譯出する。それは別に、R・Nの書いた断片のなかで最も傑出してゐるといふ理由からではない「指紋」のなかで、ちやうどあの夢のあたりがよほど不十分だから、このR・N自身の文章が、(別の事の描寫であるが)幾分私のあの不十分な個所の効果を補うてくれはしないかと思ふからである。私の譯は、その原文が親友の

どを見て居て、得も言はれぬ美妙な色などが現はれると、妙に感激して思はず涙ぐむことなどさへある。それに、この日脚の短い季節に、しかも他の人の半日にしか當らない晝間の、その長いことは、實にほとほと退屈する。世の中に退屈といふ事ほど悪いものはないといふのは本當である。晝も描けもしなければ描きたいと思はぬ。その代りには、夜が来ると、考へが活き活きしてくる。ただ活き活きと言うたぐらゐよりも、靈活といふ字がよく當る。とにかくうまい考へがあとからあとから浮ぶのだ。考へが追つかけて、こをして居るのである。眠れなくとも少しも苦しくはない。退屈ではない。それにこの頃ではよい月夜が毎夜つづく。月夜といふものを、私はひどく俗なものやうに思つた事もあつた。けれども今では全く反對に思ふ。一體月といふものは飽くことの出来ないものである。見て居れば見て居るほど却つてよくなる。一度、月をしみじみ味はうた事のある人ならば、誰しも月の戀人になるのは當りまへの事である。月は成長したり、老衰したり、再生したりする。それが彼の女の戀人達の心を樂しませ悲しませて、彼等に一層深い愛を要求するのである。私のやうに、一目でも月を見なければ眠れないやうになると、この事は一層よく解る。金環のやうに細く曲つた、さうしてほんの僅かの間しか輝きを見せない三日月や、夜すがら銀の洪水を齎す明鏡のやうな満月に就て、人人は古來酌め

手になつたといふことの理由で、必ずしも逐字的なものではない。しかし多分原の意味を間違へては居なからう。もとは題も何もなかつたが、私は便宜上、勝手な題をつけて置いた。

前がきが案外長くなつたが、R・Nの書いた断片の意味は、次の通りである。

眠れない晩が幾夜もつづいた。やつと寝ついたらと思つても、直ぐに何時の間にか目がさめて居る。夜が更けるにつれて益々目が冴える。丁度お爺さんか何かのやうである。私はまだ若者であるのに。いろいろな眠薬をためして見るけれども一向にききめがない。そのうちでも多少利きさうに思へるのを極量の二倍半までにしてやつて見たけれど、駄目である。それ以上の事をして見るのは、さすがに不氣味でちよつとやれない。それに又、何もそれほどにしてまで眠らなくともよいのである。眠れないのも以前のやうに苦しくはないからだ。但、夜分に眠れないおかげで、午前の日影を見たことはない。それから、午後になつても、心もからだもほんやりして、うつろで、むやみやたらと眠れぬのである。

るだけの感情を酌み盡した筈だ。けれども未だに盡きない。晝間の月にいたつては、蓋し彼の女の戀人にして彼の女のこの美しい死顔を見る時、たとひ喧擾を極めた大都會の市場の中ででも、暫くこれを仰いで、よし一瞬間にしろ、永遠を思つて心は冷たく静かになるものである。私は月を愛する事を忘れた一般の人間を憫れずには居られない……。それ故、この頃では、月のよくさし込む部屋を、私は寢室に擇ぶやうにして居る。この頃の月はその下で時計の針でも見られるほど明るいのである。どうかすると、その光で詩ぐらゐのものは書けるであらう。窓かけを引かずにおくと、窓一ぱいの巾廣な光が水のやうに流れ込む、その優しい光は、床の上に落ちてそこへ凍りついて居る。

そんな夜の或る夜である。私はまた夜なかに目がさめた。時時、岩から水が流れ落ちる時のやうな音を感じた。それが私の眼をさまたげたものと見える。耳をすますと、その涼涼たる水音? の絶え間にも、やはり水音であらうか、それにしては極く微かな、蟲の羽音だとか、糸をくる時の音だとか、ランプの心の燃える音だとか、ものの餘韻ともいふべきほどの音が、びびびびびび……と、夜の静けさを縫ふやうにして、ひびいて来る。私はふとそれが噴水の音ではあるまいかと考へた。けれども、この邊りに噴水などのあるべき筈はないのである。私はちつと耳を傾けた。騒がしい音の方はい



つの間にか消えてしまつたが、微かなひびきはいつまでもつづく。どうも訝しい事である。寢床に這入る時に、夜中に目が醒めて月の光を見るために窓かけは引かずに置いたが、そこからいつもの通り月の光が、私のすぐ枕もとまで差込んで居る。併し、今夜はいつもほど明るくはない。

私は寢床から少し體を乗り出した。月が見たいからである。見ると月は大きな暈をきて居る。世界を一面に霧がこめて居るのではなからうか。私は霧の降つて居る月夜ほど好きなものはない。

私は寢間着の上へ、もう一枚上着を羽織りながら、寢床から起き出た。窓から霧のなかの月夜を見ようと思つてである。果して夜霧である、深い夜霧である。それが今だんだんと晴れて行かうとして居る。……見ると、その霧の中を何か非常に大きなものが、かすかに動くのが見える。つづいて二つ。右手の方から左の方へ押進んで居るやうである。靜かに、靜かにである。それが何であるかちよつと見當がつかぬ垂れた雲のやうである。兎に角よほど大きい。そればかりを凝視して居るとだんだん大きくなつて、そこら一面にひろがるやうにも思へる。灰色である。さう思つて見て居るうちに、霧はだんだん晴れて行く。えたいの知れぬ大きなものは、何かの一群であるらしい。……霧の晴れるに従つて、その奇妙なものも正體が、だんだんと解つて来る。帆卷船である。

抱擁し、無踏して居る二人の裸體像に似て居る……。霧はよほど薄れて行つて、帆の形がもう大分はつきり見られる。けれども霧は全く晴れきらぬ、帆卷船は依然として霧の中を行く。船の進んで居るのは何處であるやらよくわからない。高いところは全く晴れて月かげがびえて居るけれども、地面に近いところは未だ濃く深くたなびいて居るからである。船の行くのは水の上にはきまつては居るやうが、どうも砂の上だとも思へる。空間ではなからうかとも疑はれる。兎に角、私のすぐ鼻の先なので、手をぐつとのぼすと、ときさうだと言つてもよい位である。……けれども、それも間もなく瞭然として来た。風を孕み月の光の中を行く大きな帆の手前には、家が見え出す。重なり合ひ、連り合つた家の屋根が、片側だけ白く光つて、まるで日のあたるところだけ雪が消え残つたとおなじ様子である。手前にばかりではなく、帆の後の方にもやはり同じやうに片側だけ光つた屋根が重つて居る。ちよつと見ると、家家の屋根の中を、街の通りを突き抜けて、帆卷船が過ぎて行くやうなのである……

それにしても何といふこの景色の變り方であらう。月光がすべてのものを美しく見せ、人の心を超越的にする事は、私がかねがね見て知つて居る。——それなればこそ月夜を愛しもある。それにしても月光といふものがこれほどの魔術をかくして居たのであらうか。私は、しかし驚きはしない。非常

る。大きな夢のやうに大きな帆卷船が、すうつと進んで行くのである。成程！ よほど大きい。それにその帆は、何といふ型であるか、この邊ではあまり見かけない帆の張りやうである。前後にやや大きい帆が一つづつあつて、その各の上や横に三角の小さな帆が無數にくつついて居る。それらの帆は、それぞれ思ひ思ひに一ぱい風をふくんで、丸くなつて居る。(そのくせ進み方は非常にのろい) 風を孕んだ大小いろいろの帆の上には、月の光が一つ一つの曲線の丸みを撫でるやうに滑つて居る。そのためにそれぞれの張りつめた帆は、それ自身が光輝を持つたもののやうに見え、銀ねずみ色にどんよりとひかつて、何とも言はず美しい。それに各のふくらんだ帆の重なり合つた具合が、一種リズムミカルで、見た目に非常に快よい。私はこんなに優美な線や落着いた柔らかな色調を持つた綺麗なものをあまり見た事はない。……私はちつと見とれて居たが、不思議にも、ふとそのうちに一種の性的な慾望が起るやうな氣持になつた。ばかばかしいやうだけれども眞實である。私は手の甲をそろへ掌をすこしくぼめて、丁度立派な彫刻や、その他——もつと直接に言へば、女體にふれる時のやうに、體中のパツシオンを掌に集めて、ガラス越しのそれらの帆の形を做ねながら、愛撫の心をもつて遠くから撫でる手つきをせずには居られなくなつた。女體といへば、實際これらの帆のたはれは立體感の豊かに依つて描かれた

にうれしただけである、祈願が聴かれた人のやうに。私はわれ知らず笑顔になつた。本當に愛するもののみその神祕は開かれる。月は私に酬いたのである。

この窓から眺めをひとほり見ると、私はこことは反對の側にある今一つの窓の方を歩いて行つた。殆んど無意識にさうしたのである。さうして、私はその青黒い、手ぎはりのごりごりする窓かけを引きしぼらうと手をかけた。子供らしく胸が躍る。ここの、家の屋根と壁との外には何の風景もないこのつまらぬ窓が、どう變化して居るであらうと思ふと、私の心持は言ふべからざる緊張をおほえる。さうして私はその心持をもう少しの間つづけて居たいといふつもりで、その片隅をつまんだままわざと窓かけを引かずに居る。科學者が稀有の實驗の結果を見ようとする瞬間の熱心な心持である。私は思ひ切つて窓かけをあけた。……見ると、目の下は一面の川である。玻璃板のやうに動かぬ水に、月がそつくり圓い形のままでその上に浮んで居る。やや遠い對岸の家々が、これも同じやうにはつきりと完全な形のままで影を落して居る。鏡のやうなといふよりもこの水一面が鏡そのものでないのが不思議なほどである。昔から飽き飽きするほど誰でも見たことのある風景である。私は少し腹立たしくなつた。あんまり曲のない變りかたであるから。若しこの靜かな水の面へ、ちよつくりと美しい王女が現はれ出で、それにつれて澤山の腰



元が後から後から無数に湧き出し、しとやかに葬列の人のやうに水の表面を行列でもして、この風景全體をお伽話にでもしてしまはない以上は、あまり平凡で我慢しきれたものではない。私はさう思ひながら、それでもさすがに見入つて居るのである。活動寫眞の青フィルムのやうに青い月夜である。私は見た事はないけれども、アムステルダムとか、ヴェニスだとかといふ町はこんなところかも知れぬと思ふ。私の今見て居るのが、その町自身であるかも知れぬ。……さう言へば、寫眞版か、畫か、エッチングか、阿片の夢か、兎に角なにかで一度見たことのある景色である。突然、静かな水の面が、氷のやうに閃きだす。これは美しい王女達の行列ではない、唯忍びやかな風の手のひらのあとなのである。この風のちよつとした効果によつて、今までは水とは思へなかつた水が、やつと水らしい心持を起させた。すると、その關聯から、私はふと、さつき寢ざめに聞いた水音のやうなひびきき事を思ひ出した。私はあの帆卷船に見とれてから、つひ今までは忘れて居たのであつたが、さう思ひ出すと、あの餘韻のやうな微細な音が再び耳につき初めた。それが氣になる。けれども何であるやら、川の上を見渡しても一向わからない。水音は反つてさつきの街に面した方から響いてくるやうな氣がする。

私は再びもとの窓のところへ引きかへした。その水の聲を

れて轉び落ちる水かと耳を傾けたのは、正にこの音であつた。して見ると、さつきからも、誰か幾度も——それとも幾人もの人々が代る代る、水を汲んで居たのに違ひない。今度は、四辻の向うの方から、ひよつくりと人影が見えてくる。少しづつ大きくなつて近づいて見える。やはりまつすぐに噴水の方へ来るのだ。女はその方をふりかへる。さうして見入つて居る、その近づく影をばかり見つめて居る、水が甕から溢れてこぼれ出るのも知らずに、人影は近づく。女は合圖でもあるらしく少し片手を上げる。人影は一層足早に近づいて、大きな影が小さな影を抱きすくめる。第二の人影は男であらう。若者でなければならぬ。女は水甕の中から湧きかへるやうに溢れ出す水に、今やつと氣がついたと見えて、大水盤の横腹から迸り出す水をどうかしてせき止めた。大水盤の中では、水が今更に大きな波紋を描いて、光る。水甕のぐるりは水に濡れ、月光に濡れて、寶玉を鑲めた甕のやうに輝き、その甕を上においた地面は水を吸ひこんで黒ずんで見える。女が甕を兩手で持上げようとして、身を屈めると、男は女を押しつけるやうにして、片手で輕々とそれを持ち上げる。傾いた甕の口から、水が珊瑚と地面へこぼれ落ちる。男はそんな事にはかまはずに、それを女がさつき出て来た家の黒い出口の傍まで運んでやる。女はそれを受けると、重たげによろめいて、黒い入口の中へ消える。男の影は壁にびつ

たづねるためである。月に照された古風な家のうしろを、例の大きな簇つた帆は今、そびえ立つゴチック風の黒い塔の裏側をすぎ居る。靜かに。靜かに。……水音はどうもこの窓の下である。私は窓を押し開いた。そこから首を、上半身をのり出す——と、すぐ目の前に、あ！訝しい音の原因は判つた。やはり噴水なのである。私の窓の筋向う、古風な街の四つ辻になつたところの廣場に、大さうな噴水が見える。古くなつて色の汚れた白天鵞絨にからんだ鮮やかな銀糸のやうに、噴水のか細い水は月夜を通して光りながら、地上のものが空を憧れる心で、縷縷として吹き上げられ、吹き上げられては落ちて居る。幻聽のやうに私の枕邊までひびいたのは、疑ひもなくこれであつた。

この時、この噴水の前の大きな石造の家の小さな眞黒な出口から、ほの白く現はれたものがあつた。家のかげから月光の眞下に出て来たのを見ると、それは一人の人が——よく見ると女のやうである——片手いつばいに水甕を擁へて出て来たのである。さうして、噴水のところまで来たと思ふと、今までの絶え入りさうな水のひびきは、忽ちに劇しい水音になつて、噴水の大水盤の横腹からは、ぎらぎら光り閃めきながら、水が白絹糸の太い束のやうに迸り出て居る。さうしてそれと同時に大水盤の中に湛へられた水は、濺ひつづつ廣場に動揺し出したのである。壁床の中で岩にせか

たりと身を寄せる。甕の口から今こぼれた水の痕が、道を横切つて、地に一條の黒い線を残す。

間もなく女の影、再び黒い出口から現はれる。今度は、女は何か黒いものを頭からすつぽりと被つて居る。男の影は黒い女の影をだきながら連れて行く。默劇の影畫のやうな一組は、この窓から私が見て居る事などには一向氣づかぬらしく、私の窓の前の方へ歩み寄つてくる。私は窓から身をかくした。彼等に私が見られたくないからではない。彼等が私に見られたくないからうと思つたからだ。窓の前を歩きすぎる時、ちらりと偷み視する、と男は大きな若者である。女は小柄で腰の細い、あまり強く抱きすぎるとぼつきりと折れてしまひさうな少女であらう。黒い大きな衣にくるまつて居るけれども、さうに違ひないと思ふ。女は彼方を指す。私までが誘はれてその方を見ると、それは例の帆卷船である。男はうなづいて居る。その時私はこの大きな男は、「海から来た男」ではなからうかと考へて見た。

やがてこの幻のやうな一組が見えなくなると、その時、ふと私も街へ出て見たい、こんな珍らしい清麗な月夜の中を歩いて見たい、といふ心が湧いた。これは自分の窓の前を人影がすぎるまでは、私には思つても見なかつた考へであつた。氣がつくと私の窓のすぐ脇の扉から家の壁に添うて七八段の石級を下りるとすぐそこが町であるらしい。月に感謝す。



私の家の構造までが月の魔術の恩恵ですつかり變つて居るのである。

銀で出来たやうな石級を下りてしまふと、足は自然と噴水の方へ向いた。

噴水は窓から見た時よりも餘程大きい。口から水を噴き出して居る黒い像は、青銅で出来て居るのであらう。併し古代圓柱のやうなその像の臺も、私の胸ほどの高さの大水盤も、みな雪白の大理石で出来て居る。全體が半透明に蒼い。冷たい。私は仰視したままで、この大水盤のぐるりを五六歩、ゆるい歩調であるく。

水を噴いて居るのは少年の裸像である。それはちよつとかはつた形である。兩脚をきちんと揃へて、爪さきで立つて居るやうだ。全體は少し反り身で、背伸びしたやうな形に、右の片手は出来るだけ高く差し伸べて居る。従つてこの姿勢の自然として、もう一つの片手は胸が拗ちけて腰のうしろの方へ突き出されて居る。頭は出来るだけ後さまに反らして、咽の線と顎の線とが直角になるまでに、空を仰いで居るその顔の――口からであらう、水が細く三四尺の高さに噴出されて居る。こんな窮屈な姿勢をして居ながら、見て居てそれほど苦しげでないのは、きつと、この中に充分な自然研究から得た均齊の美が、この青銅の體ぢうに行きわたつて居るからにちがひない。水盤や像の臺は白い石でありながら、少年の像

めに、幾度も描いては消し、描いては消し、空しいしかな

がらしなければならぬ努力を重ねて居る様に似て居る。

あの簇つた大きな帆は、おもむろに進んで、やがて、この噴水のあるところの眞うしろまで來た。それは見上げるばかりに大きい。巨大である………(以下略す)

ばかりが黒いもので出来て居るために、この少年が黒人であるかのやうに感ぜられる。そればかりか、この少年は、體が瘦せこけて頭ばかり大きすぎるやうである。決して所謂古典的な美だとは言ひ難い。どこか怪奇な趣があつて、寧ろ近代風な美を持つて居るのである。高く差し伸べた手は、目には見えぬ高い枝の上に乳房のやうに垂れた葡萄の房をもぎ取らうとしてあせつて居るらしくも見える。蝶のやうにとんで行く自分の夢を追うて居るやうにも見える。今晚のやうな月夜には、中天にかかつた圓かな月に觸らうとしてあせつて居るのであらうか。空を仰視した顔の口からは、白く、微かに、光る絲のやうにか細い水が縷縷として吐き出されて居る。その水の絲は、あるかないかの風にさへしぶきとなつて吹きとばされ、ただ白くなつて何處かへ散つてしまひさうなほど微かなのである。時には高く、時には低く、噴き上げられて、それは噴水の呼吸であり、またこの黒い少年の息であるやうに見える。どうかした拍子で、眞晝のやうな月光がこのしぶきの中をぐる利那に、そこには小さな虹が、ふと浮ぶと見る瞬間に、もう消えて居る。さうしては何時か又、ちやうど前と全く同じ空間へ同じやうに美しく浮んでは、又すぐ消える。現れては消え、現れては消え、それは丁度或る畫家の筆が極くデリケートな暢美な線を、畫面の上へ捉へようとして、しかも製作の熱が足りないために、或は熟練の不足のため



## 賣笑婦マリ

## その一

高木がマリに三百圓出してやらうと言つたのは全くただの氣まぐれだつた。高木といふ人物を知つてゐるならば、このことは誰にもすぐわかる。

マリが高木のところへ相談に來たのも、高木のそんな氣質を三浦から聞いてゐたものだから、ひよつとしたらといふ心頼みと、それにマリにとつてはこの場合、たとひ駄目にしたところで高木にでも泣きついてみるより法がつかかなかつたのである。

マリは思ひがけなく捉まへられたのだ。

期日ではあつた。しかしほんの一度手紙があつて、その手紙に對しては、ちやんと日まできつてこちらから逢ひに行くと、マリのもりでは正直な返事をして置いたのに、不意に來られてしまつた。

はじめ手紙があつた時にもずるぶんびつくりした。今だに、相手がどうしてマリに居どころをつきとめたものやらわからぬ。高木は、高木の前身がわかつてみると、高がチャブ屋の淫賣のぐせに、口を拭つてしをらしい顔つきをして、しかも自分をふつたと思ふと支配人はいま／＼しさが一時に發したと見える。もう一つには、マリは、この店にまだ二月ばかりしかゐなかつたので、前借も何もなしてゐなかつた。

上總やは是が非でもマリを、今夜のうちに港ホテルへつれて行かなければならぬと言ひ張つた。相談する人があるからせめて明日までと言つたのに、上總やはそれさへどうして聞かない。

今も高木の門前へ、上總やは張り番をして待つてゐるとマリは言つた。三浦とぐるだといふ證據は握つてゐるのだから、このうへ逃げてくれるやうなら、金などはもうどうでもいゝ意地になつて密告してやるとおどかされたマリは、又、港ホテルの主人の性質を高木に説明して、歸ればどんなひどい目に逢ふかわからないと言つて蒼ざめた。どうかして歸らないですむ工夫はあるまいかとマリはそればかり言つた。——こんな時に、せめてあんな薄情な男だけども、三浦でもゐてくれたら何とかまた方法もあるだらうのに、と言つてマリはたうとうしく／＼と泣き出した。

三浦にそんな智慧や才覚があると思つてゐるマリの口ぶりが三浦を見抜いてゐる高木にはをかしかつた。

マリが最後に高木に頼んだのは、ともかくも門前に待つて

からぬ。それがマリには一そう怖ろしかつた。どこへ匿れたつて駄目だと思つた。その矢さきへ思ひがけなく人が來たのだ。

使ひになつてマリを捉まへたのは向島の口入屋で、上總やといふのであつた。マリは全く知らない男だ。そのせゐもある、この男のやり口は手ぎびしいものであつた。初め、客のやうな顔をして店へ這入つて來た。ビールを一杯注文すると、ぢろりとマリを見た。こいつに違ひないと見てとると、上總やは支配人に面會して、マリの身の上を何もかもあばいてしまつた。三浦とぐるになつて逃げたほどだから、三浦の犯罪だつてぐるでないとは限らない、どうもさうに違ひないと思へるふしもあるといふやうなことでまて句はした。

支配人はびつくりしてマリを呼び出した。相手が面倒だと思つて、支配人はマリを上總やへ渡してしまつた。支配人の出かた一つでマリは今夜すぐれ出されなくともよかつたのだ。だが、支配人は今までに二度までマリを口説いたことがあつた。マリは應じなかつた。それが支配人には今さらある上總やに逢つて、マリは引受けてこの事件に就ての適當な所置は俺が考へる。それまで待て。と高木の口から上總やに言つて欲しいといふのである。さうすれば今夜、港へ行かなくともすむだらう、——とマリはただもう港ホテルの主人といふのを一途にこはがつてゐる。

マリはその頼みを高木は承諾しなかつた。そんな一時のこのことを言つても、第一、上總やは承知しないだらうし、もしまた承知でもしようならそれこそ、この次には借金を耳をそろへて返した上でなげや解決しないだらう。で、いざ借金を返さなげやならないとなればマリの手で出來るわけがないのだから、うつかかり言つた一ことの爲めに高木が最後までひつかかりにならなげやなるまい。そんな借金ならマリが自分で交渉して踏み倒さないといふ型ばかりに、値切り倒したらよささうなものだ。ともかくも一度は、しかたがない、港へかへつて自分で主人と談合するより手はない。

高木はそんなことをマリに言つた。

マリは黙つて途方にくれてゐた。それを見て高木は借金の額を聞いてみた。マリは泣きやんだ赤い目で高木を見上げて、七百圓になつてゐると言つた。そのうちの半分まではみんな三浦のために使つたのだと言ふ。三浦がこの前、未決監にあつた間に差入れやら、三浦が病氣になつた時の醫者への支拂ひ、それに辯護士への支拂ひ、そんなものが三百圓足



らずと、そのあとは多分、ジョオジの里扶持きよぶちが積つたのだと思ふけれども、それにしても、そんなどつきりになる筈はない。さうは思つたけれども、何しろ事情が事情であつたから、先方の云ふなりに七百圓といふ證文を入れて来た。三浦も知つてゐる、だから三浦がどうにかしてくれらるものと信じてもゐたのが間違ひだつた、とマリは言つた。——屋敷がある話や、伯父さんの噂や、マリも三浦の出任せの言葉を眞にうけたのだ。

三浦の出鱈目には一時はみんなだまされる。根も葉もないことでは無い上に、それを口に出す瞬間には、その嘘をまづ三浦自身が本當だと思ひ込むらしいのだ。高木も今までにずみ分度々三浦にだまされてゐる。現にマリ的事だつてもさうだ。思ひ出すと笑ひたくなるのだが、三浦は或時高木に女中を世話しようと言つた。女といふのは合の子でいゝ女だが、子供がひとりある。ウキトコスキイといふ店にゐたレババといふ男の妾をしてゐたので、レババの子供を産んだのだ。レババはおれの友達だが悪い奴だ、と三浦は言ふ、そいつは店の金を持つて上海へ逃げた。置いてけ堀を食つて女は子供をかかへてその日のことに困つてゐる。可哀さうで見兼ねるから女中に使へといふ話であつた。高木はふと眞にうけて見たが、子供がゐてそいつまで連れ込まれたのぢやうるさいと思つたし、よく注意してみると三浦の口うらにやはりへんなど

との始末のつけようもないやうなことを平氣で——といふよりは無思慮に仕出かしたりするのが三浦だ。さうしてたうと泥棒までした。さうかと思ふと、一方精神的なところがあつた。ふとしたはずみにしよんぼり沈み込んで、こんなことをしてゐて俺は—といふやうにするのだらうなどとしみじみ言ひ出す。青年だからまたふなところもあるからだらうが、或る時に氣が違つたかと思つたほど激しくむせび泣きして、その理由を尋ねても決して言はないことがあつた時には、高木は三浦を面白い奴だと思つた。馬鹿かと思ふと、Richard Mullerといふ燭乙流の名を三浦梨花と當字したり、活動のオケストラに仕事を見つけて来て、どこで習つたこともないヴァイオリンを相當にごまかしてのけたりも出来る。混血兒にはよくある奴ださうだが、三浦はともなく變質者だ。それを面白がつて高木は物好きに三浦などどつき合つてゐた。萬々承知の上でもつうつかりだまされる。

それほどだからマリが三浦にだまされたと言つて高木は笑ひも出来ない。

知りつゝ三浦などどつき合つてゐたおかげで、高木はかう泣いてゐるのを見るとマリに何とか言つてやらなければならなくなつた。高木はマリに逢ふのはたつた三度か四度で、今まではろくに口も利いたこともない。義理や因縁を言つて、高木はマリに錢の五錢もやるわけはなかつた。それを高

ころがあるので取合はなかつたが、それがマリ的事だつた。

三浦はマリを港からつれ出してはみたが置くところがなくて高木のところへでも一時置かうと思つてそんなことを言つたものらしい。その後のことであつたが、三浦は或る晩、或るところですばらしい女を見つけて来たのだが、そいつは宿さへあればうまく買へるのだから行かうと言つて高木を誘ひ出した。それはひとりしか居ないのだが、高木が氣に入れば高木が買ふがよし、でなげや三浦自身で買つてもいゝといふ。そこで三浦は高木をつれ出した。三浦のいふすばらしい女といふのが、その時初めて見たのだがマリのことであつた。高木は氣に入らなかつたし、それに三浦とマリとの様子がどうもをかしかつたので買ふ氣などはなかつたからよかつたものの、高木が氣に入りさへすれば三浦は自分の情婦を高木に買はせるつもりだつたかも知れない。もうマリが飽きて来て、高木に押しつけて置いて逃げるつもりだつたのか。——しかし三浦はそのころまだマリにのぼせてゐたのだから一層わからない。つまり單に、そのころ堅氣のうちを思ふやうに逢へないマリと逢引する待合とその費用とを高木に算段させるために、うまいことを言ひ出して高木をひっぱり出したのだ。……若し高木がマリに氣があつて、それを買ふと言ひ出したら……などといふそんな考などのありさうもない三浦である。直ぐ見え透くやうなその場かぎりの嘘を並べたり、あ

木は、ふと思ひついた事があつたし、それにこの人物に特有なへんな氣まぐれで、三日経つたら三百圓やると言つた。そんな借金なら三百圓で型がつきさうなものだ。型がつかなくともそれ以上の事は出来ないが、その時には何とか自分で考へるがいい。さうして今夜はともかくも港ホテルへ歸らなければならぬ。さうして主人に會つて談じて見ることにだ。怖おそがることは何も無い。たとひどんな手荒な奴だつてまさかいきなり殺しはしない。それどころか金にしようと思つてゐる玉ぢやないか。——高木はマリにさう言つた。

高木の言葉に力を得たのかマリは、ではともかくも港へ行かうと言つた。歸りぎはにマリはくれぐれも高木に頼んだ。

三浦にすてられてこんな抜殻のやうになつた心持で、どうして、今更、あんなつとめが出来ませう?!——マリはさうも言つた。

今から決心をした時に足を洗はなげや、いまにジョオジが大きくなつて、もう二三年もうかうかして居ようものなら、ジョオジは自分のしてゐることがわかるやうになる。それが何よりも怖ろしい。ジョオジは今五つだが、智慧の早いませた子だから。——マリは、さうも言つた。

三浦から聞いた話だと、マリは二十三かそこらださうだから、早く子供を持つたものと見える。

あまりジョオジを可愛がるのが三浦には面白くなかつたら



しい——とマリは言ふが、さうではなからう。飽きつばい三浦がただ飽きたといふだけのことだらう……

上總やが待ちあぐんでゐるぜ。

さう言つて高木はマリを立たせた。

うまい工合に處決した。

高木はマリを歸してからさう思つた。高木のいふのはマリ  
の事ではない。例の始末に迷つてゐた悪銭の事だつた。とい  
ふのは、一口にいふと高木は或る金持をだまして贖作をつか  
ましたのだ。高木はその事自體を決して悪い事だとは思つて  
は居ない。それどころか愉快にさへ思つた程である。美術の  
保護者面をして、買はうといふから見せれば、生わかりの講  
釋をした。高木は相手の喜ばないらしい二三の近作をしまひ  
込みながら、その時ふと目についたのは、或る無名の畫學生  
が見てもらひたいと言つて留守に置いて行つた或る作品だつ  
た。それがそつくり、高木の以前の作品の淺ましいほど器用  
な模倣だつた。相手をからかつてやらうといふいたづら半分  
に、高木はそいつを持ち出して見せたのだ。買ひ手はずつか  
り乗り氣になつた。高木は興に乗じて言つた——舊作のうち  
で氣に入つたの一枚だけ保存してあつたのだから手放した  
くはないのだがと、そこで高木は三百圓で賣らうと言つた。  
約束が出来て高木は痛快な氣持だつた。即座に、ほんとうの  
作者が遠慮がちにつつましく鉛筆で書いた署名の上へ、あく

けだらう。つまり或る距離に立たなげや繪の具ばかり見えて  
繪の効果がはつきり受け取れないやうなものかな。高木はほ  
んやりそんなことを思ひながら、その序に、その可哀さうな  
女が、俺の人をごまかした金でほつと息をつくのだと考へ  
る。高木は恩を賣るといふやうな氣持ではなく、もつと以上  
の不思議な、満足に似た氣持だつた。

## その二

伊那が受取つて來た金を手にすると高木は、さてそれをマ  
リのところへどうとどけてやつたものか、ちよつと迷つた。  
うっかりしてゐて尻のつまないことには、その受渡しのこと  
に就てマリとははつきり打合せては置かなかつたのだ。マリ  
のところへ持つて行つてやればいいのだが、わざわざ横濱ま  
でそれだけの親切もない。地震から後、横濱はどうなつてゐ  
るのか、それを見がてらに行つて見てもいいと、ちよつとそ  
んな考へも浮んだが、直ぐ氣がついた。それは今までまるで  
氣がつかかなかつた事だつたが、もし高木が、マリのところへ  
訪ねて行つたとすると、港では高木をマリの新しい旦那だ  
と思はないとも限らない。さうして高木の身なりでも踏んでみ  
てこれや三百圓よりもつと出さうな奴だと思つたら、そ  
れはマリの爲めに、さうして高木自身の爲めにも厄介なこと  
になる。面倒な、ほつて置かう。マリが工夫をして取りに來

どいヴァミリオンで高木は以前書いたことのある氣取つたサ  
インを書き込んだ。ニスを引いてからとどけるとは言つた  
が、いざ持たせてやるといふ段になるとさすがに躊躇され  
た。相手に渡すのを日一日と延してゐた。わかりもしない奴  
のコレクションに自分の贖作があつたつて當りまへのこと  
だ。集めた奴の恥にはなつても罪は高木にはない。そんなこ  
とぐらゐ高木には何ともなかつた。ざまを見ろだ。高木はそ  
んな氣持のある男だつた。——ただその受取つた金を自分で  
使ふとなると、高木は自ら咎める。

その三百圓をマリにやつてしまふのだ。

金の使ひ道がついて、それが高木には何よりうれしかつ  
た。哄笑したかつた。

手紙を書いて高木はそれを書生の伊那に渡しながら、すつ  
ぽり新聞にくるんでしまつてゐる例の畫をその富豪の家へと  
どけて、金を受取つてくるやうに命ずると、アトリエを出  
て、直ぐ二三町離れたところにある住居の方へ歸つて行つ  
た。

情夫に捨てられつづけの賣笑婦で、しかも合の子で、子持  
で、それが借金で苦しめられて、相談相手もない。當のマリ  
を見た時には別に何ともなかつた、いま抽象的に考へるとそ  
れが可哀さうになる。具體的な現象としては何ともなかつ  
た。それが抽象になつて、始めて俺に訴へる——どういふわ  
るだらう。さういふはらで高木はうつちやらかして置いた。

約束の三日は過ぎて、四日目の朝になつた。「横濱にて、  
マリ」の手紙が來た。——いろ／＼御心配をかけ御禮の申し  
やうもありません。不意にあんなことを申上げたのを御許し  
下さい。外に仕方がなかつたのです。ここへかへつて三百圓  
で許してくれと申しましたが、主人はどうしてもきゝ入れ  
ず、そんなはした金をとるくらゐなら訴へてやると申しま  
す。身に覺えないことですが、その上主人に打たれたり蹴ら  
れたりします。くやしい事ばかりです。仕方がないから皆で  
も拂つて早くここから出てしまひたいと思ひます。どうぞお  
話の三百圓を御用意下さいまし。あとは私の方でどうにか都  
合をします。あなた様のところへ私あてでお金がとどきます  
から御うけ取り置き下さいまし。この手紙はくらがりて書い  
たのです。どうぞお許し下さい。三百圓はどうぞ御願いたし  
ます。——レターペーパーへ鉛筆の走り書きだつた。マリの手  
紙は三浦が一度見せたことがあつたが、相當には書いてあつ  
た。この走り書でも割にうまい。ただ後半があまり簡單すぎ  
るが、誰かマリの爲めに高木のところへ金をとどける人があ  
ることはわかる。いづれその使でもくれば、それからあとを  
どうするかもわかるのだらう。

三時ごろになつて伊那は客をとり次いだ。人相のよくない  
四十男で、名前は言はない。お目にかからなげやわからな



いと言つたさうだ。高木は何の用事だと聞かせた。横濱のマリさんのことで、といふ答だつた。では金でも持つて来たのか、それとも人相のよくない男といふからには、港ホテルからでも来たのぢやないかと高木は思つた。マリの使などと言つて来たつて金は渡せないぞと考へた。ともかくも高木はその男を書室へとほした。

その男は伊那のいふとほりで人相のよくない、體のでつぶりした、そのくせ顔だけは引きしまつた遊人めいた面つきだつた。縞のめいせんのそろひだが、羽織まで襟垢が光つてゐる。大へん慇懃な調子で、初対面の言葉を述べて、高木のことを先生といふ。スーと齒の間から息をひいて、實はですね、先生。とこの男は妙に一段と聲を低くした。港のマリさんの件なのですが——と、この男はマリのことをさんづけにして呼ぶ——マリさんの言ひ分だと、マリさんは先生から三百圓お立替へを願ふのださうですが、それは本當でせうか。その金子はもう御とどけになりましたらうか、と言ふ。

この男が何者で何故そんなことを聞くのか高木にはわからなかつた。この男の言ひ方では、高木がマリに金を出すのがこの男に不服らしいやうな口調でもあつた。

僕はマリに三百圓出さうと言ひましたがね。それは本當だ。金はまだ渡さないが……。——一たい、君はその件でどういふ用事ですか。高木はありのまゝにさう言つた。

文は入れては行つたのだが、そのままどこも知らせねえぢや足抜きも同然だ。ただ體のいいことをしただけが小面憎いくらゐなものだ。あんな女ぢやなかつたのだから、うちを出てからつときり後楯が出来て尻押しをしてゐるに違ひあるまいつて、港はさうかんぐつてゐる始末で……

上總やは、袂をさぐつて今度は何を出すのかと思つたら、ただエーヤシツプの箱だつた。それから一本抜き出して火をつけながら雄辯につづけた。

港の方では、ぐづぐづ言ふならもう金などはどうでもいとつてゐるのです。全く、港では金は欲しがつてはゐないのぢや、いや欲しくないことはありませんまいが、それよりは地震のあげから商賣が馬鹿にいそがしいので女の方がほしいらしいのです。だが、かうなつちやもう意地づくだ。慾も得もない訴へてやると息巻いてゐるのです——マリさんはあれで先生。

上總やはちよつと言葉をくぎつてから、意味ありげに聲の調子を下げて、

窃盜の罪があるらしいのですね。そいつを港がにぎつてゐるのですよ。

へえ！ そんな悪い女かね。

高木はいかにも驚いた者のやうに言つた。高木はやつと上總やの腹が見えて来たので苦笑を禁じ得ないところを、我慢

この男といふのは、この男のいふところに依ると、港の兄弟分で、港にたのまれて、この事件の一切の所理を引受けた者だといふ。それぢや向島の上總やさんかね、と高木が言ふと、さうです。實は先夜もマリさんの御供をして御宅の門まで参りましたと答へて、男は懷中をさぐると天鵝絨の大きな財布のなかから名刺を出しながら、序に港ホテルの主人からの委任状といふのをも出した——高木は別に見むきもしなかつたが。

上總やが言ふには、何しろ、この事件に就ちや、私は出来るだけ穩便にすませたいと思つてゐるのですがね。港は一切私に任して置きながら、今になつてひどく一克なことを言ひ出したので、間に挟つて私は全く困り抜いてゐるのです。港はいふのです。七百圓といふ證文のところをきつぱり五百とでもいふ事か、三百圓とは半分にも足りない。あまり見縊つた言ひ分だ。それや時と場合によつちや七百圓がよしんば千圓でも、きれいに證文を巻いてかへしてやつてもいい。だがわけが違ふ、と港がいふのです。全く港はあんな家業こそはしてゐるものの血もあり涙もある男なのです。で港のいふのを更によく聞いてみると港の言ひ分にも一理はあるんですね。マリさんが今まで居所も知らせねえでゐたのが第一氣に入らない。もとはおとなしい女だつたから、そのつもりで扱つて置いたところが、いつの間にか足抜きをして、それや證をしながらこのうへ上總やが何を言ひ出すかそいつを聞ききたさに、とほけてゐたのだ。

——港の話聞いて私や、おどろきましたね。冗談だらうといふと、港は詳しく話してきかせましたかね。港は三百兩やそこいらの事なら金はいらないと腹を据ゑた様子だから、私や考へがあるからちよつと待つてくれと言ひ置いて、かうしてお宅へ伺つたやうなわけです……

上總やは高木の顔をつくづくと見入つた。それが下手に芝居じみてゐたのが高木にはをかしかつた。上總やは言ひつづけた。

私や先夜、お宅からの歸りがけにマリさんから先生の御身分を伺ひましてね。これやうつかりすると先生のお名前が出るかも知れん。そんなことなら一言その時話があればと、先生があとでおつしやりはしないかと思つたものですから、かうしてお伺ひしたのですがな。

名前だつて？ 僕の名前だつて？ 高木は我慢が出来なくなつて吐き出す様に言つた。

ええ、これやどうしてもお名前が出ますね、このままぢや。

上總やは高木がうろたへたものと誤解してゐる。高木は言つた——

ふん。僕の名が出るかね、面白いな。僕はそんなところへ



名の出るのは好きだぜ。

高木が言ひ放つた奇矯な言葉は、上總やにはどう解いていかわからなかつた。上總やはしばらくぼんやりしてゐたやうだつたが、重ねてさぐりを入れ出した——  
それにしてもマリさんが可哀さうでさね。

何が！ 高木は言つた。何が、可哀さうなものか。構ふものか。泥棒などする女だといふぢやないか。上總やさん、それや訴へて貰ひたいものだね。さうすれや僕も三百圓助かるわけだ。僕は泣きつかれて可哀さうだから、それもあの女が商賣にも似ずしをらしい女だと聞いたればこそ、可哀さうだからたとひ足りなくとも三百圓出さうと言つたまでです。そんな岡太い女だと知つたら、君、僕は只の三百文も出すのはいやだね。あとで因縁が出来ちやたまらないものね。然るか。そんな悪い奴だつたかね——まだ金を渡さなくつていいことをした。

上總やは黙つてしまつた。  
上總やさん高木は笑ひ聲で言つた。失敬だが君は、本職の周旋屋さんですか。

私ですか。上總やはむつとしたやうに言つた。疑ふならお目にかけます。私やこれでも鑑札持ちです。立派なものです。もう十二年もこの商賣はしてゐますが、一度だつて後暗いことをしたことはない證據です。御覧になつていただきませう。

根はさう悪い奴でもないくせに、何しろ馬鹿だから、調子に乗つちや駄法螺を吹く。だものだから、人におだてられる。たうとう同じやうな合の子仲間、それこそもつと腹の据つた奴の手さきになつたのだ。女にのろい、そのくせ飽きつぽい。今も言ふとほり男がいろいろだから女の方で手を出すらしい。で、女道楽は子供の時から覺えたのだ。そんな奴のいふ事だからあてにはならないが、街など一緒に歩いてゐると立派なお屋敷の門の前で、この奥方は古馴染だなんて言ふが、逗子に家があつて鎌倉あたりを根城にしてゐたのだから、それに十六七の時には見かけはきつと上品な坊ちやんらしい上に、毛色が變つてゐるところを面白がつてからかつた令夫人などもあるかも知れない。何しろ、氣の弱いうぶなところもないことはない。どこかが一本抜けてゐる。そこが反つて可愛いかも知れない。マリもつひそいつにぼうとしたりしい。買つたり買はされたりしてゐるだけぢや氣がすまなくなつたものと見えて、男もすぐのぼせるたちなものだから、マリと世帯みたやうなものをほんの二月三月だつたが、持つた——知つてゐるだらうが。それが一昨年のごころだが、それより前に三浦は仲間と一緒に初めはバク、ぐらゐだつたのが段々昂じて空軍視ひか何かしたのがつかまつただ。氣の小さい奴がびつくりして未決でひどい熱を出すといふ騒ぎに、マリは病監へお百度を踏んださうだが、マリこそ

せう。

馬鹿正直に、上總やは例の財布のなかから鑑札を捜し出した。高木は笑つて言つた。

いや、上總屋さん。さうむきになつてはいかんがね。君のやうな商賣だといふからには少しは人を見る目が利いてもよささうなものだと言ひたかつただけのもです。君は、もしやかんちがひをして僕をマリの色男だとも思つてゐるのぢやないか。飛んでもないね。大笑ひだ。早合點をしちやいけないよ。——僕は三浦といふ者、いづれは港でも聞いたらうが、マリを港からつれ出したその三浦といふ合の子の不良少年の知り合ひなのだ。たゞそれだけだ。僕は三浦の顔つきが氣に入つて、以前から時々その顔を使つて畫を描いたものだから、それで三浦を知つてゐるのだ。そいつがつまらない奴で、コソ／＼泥棒をしやがつて今はつかまつてゐるのだ……

なるほど、そんなことはちよつと港の兄貴も話しちやゐましたつた。聞いたことがありますよ。で、何ですかねえ、今はやつぱり入つてゐますかね。

上總やは三浦の話に案外興味を覺えた口調であつた。それとも今のさつきのあんなに連れてゐた折からいといつつきが出来たと思つたのかも知れない。三浦の事を話すやうに高木を促した。  
の時の心づかひがあまりに行届いていぢらしかつたといふので警察の連中がひどく感心して、そこを出る時三浦に、あの女を女房に持つてやれ、お互に身の爲めだからと勧めたものださうだ。——これや、つひこの間になつてから僕も警察の人から聞いたのだがね。

ぢや、先生三浦つてえのは今度で二犯なのですねえ。  
それがさ。年も若いし、大した事ではなかつたし、前は執行猶豫になつてゐたのだ。そいつを三浦が、猶豫中にまたやつたのだ。女の爲めだ。マリに飽きたのがいけなかつた。今度の女といふのは、やはり濱にゐて前からの顔馴染で、三浦はずつと惚れてゐたのださうだが、向ふは且那持ちで、金のある支那人の妾をしてゐた。且那をしくぢるまいといふので三浦を相手にしなかつたらしい。をかしい事には、三浦が前の時に、その女のところへ忍び込んだことがあつたさうだ——いや、泥棒にさ。

へえ！ 寝顔でも見たかつたてえんですかね。  
成程、さうかも知れない。ところでその女の且那といふ支那人が例の地震でつぶされて焼け死んだ。三浦は今度こそといふのでやんやとくどいしたものだ。たうとうその頃からマリを邪魔にし出した。妾をしてゐたといふその女も、どうやら一とほりの者ぢやないと見えて、何でもその且那の一萬圓ばかりの保険金を横取しようといふので三浦を使つたらしい



それが駄目だった。三浦に金はなし今度の女は贅澤に慣れてゐる。たうとう女はもう一ぺん金のある旦那を見つけようといふ考になつた。三浦はその女を思ひ込んでゐる最中なものだから、女が金が好きだと見ると、地震のあとのどさくさをついていい事に、また何か働いたらしいのだ。捉まる時にね、ひよつくりここへとまり込んでみた。ちやうどいま君のゐるところへ坐つてゐるが、僕は前のことをもう一度調べに來たのかと思つた。當人は覚えがあるからだらう名刺を見ると蒼くなつた。それが横濱の山手署の人だつたが、前から知つてゐると見えて、三浦に言つてゐた——今でもマリと一緒にゐるのか。あの女だけは見捨ちや悪からうつて。その刑事が後でまた僕に逢ひに來た時に聞いたのさ、マリを女房にするやうにつて署長がすすめたといふ事はね。上總屋さん、君は僕の名前の出るのを心配してくれるやうだが、何、僕は三浦の時にだつて引合ひに出てゐるのだ。慣れてゐるよ。……で、この間の晩に、マリに聞くと、君の方の借金といふのは大部分は、前の時三浦の爲めの金だといふぢやないか。つまり、三浦がここに居さへすれや、出來ないまでも三浦が何とかしないでは置けない金だ。だが今の話で、三浦はゐない。仕方がないから一時、僕がどうにかして置かうといふまでだ。——それもね、上總やさん、マリがしをらしい女だと聞いてゐたからさ。ところへ持つて來て、そのマリがだね、いま君から

りなどにもいろいろ話す様子では、全くおぼつこいところがあるんだ……

上總やは、半ばひとり言めかして、急にうまくマリの評價を改めたのである。上總やは三浦のことなどはもとより聞きたくもない。承知してゐるたゞ高木の話に嘘がないかどうかを聞きながら、どう扱つたらいいものか高木といふ人物を驗してみてゐたのである。高木は見かけよりは手のやける奴だと上總は思つた。上總屋には、高木といふ男はちよつと義侠的な人物のやうにも見えたし、でもやつぱりいくらかマリに氣があるのぢやあるまいかと思へた。マリは全く上總の目には、毛色の變つただけに珍らしくもありちよつとした女に違ひなかつた。上總やは、そこで高木は義侠的で同時にマリに氣があるものと見做した。上總やは、また高木があまのじやくなにも氣がついた。そこで出なほした——

マリさんもね、先生、すこし贅澤でさね。何も新らしく泥水へ這入るわけぢやなし、今までの稼業だ。ほんのしばらく目をつぶつてゐさへすれや。六百や七百の金なら、今の景氣ぢや——先生、まつたくあの方面は、地震で氣が荒くなつたせみか、珍らしい景氣なんですからね、今の借金なぞあ、心がけ一つで半年の仕事でさ。たとひまあ、あそこを出て見たにしたところで、外にや女の細腕一つで六百の七百のといふ金が、いつ出來るものですか。それに先生、港に聞けばあの

聞くやうなそんな太い女なら、僕はいやだ。金をなんぞ眞平だ。外にかかはりがあるわけぢやなし、金さへ出さなけや、名前の出つこもなし、尤も名前だけならいつどこへ出るのも構はない。

いや！ 成程ね。やつぱりさうでしたか。いやどうもね、腑に落ちないところがあつたのだが、只今の先生のお話でやつと嘸み込めましたよ。成程々々……

何を嘸み込んだのだか上總やはしきりにひとりうなづいてゐる。高木をマリの色男だと見込んでゆすりに來た上總やは、案に相違して戸迷ひしたのをごまかしてゐるのだ。

上總やさん。いかに相手がマリだつて港の方でも根も葉もないことはまさか言ふまい。人を傷けることだ。事實マリに疑はしいところがあるのなら、突き出した方がいい。僕も賛成だ。

高木は相手の面食つてゐるところへ突き入るやうにさう言つた。

先生。いや、それがですよ。——上總やはしどろもどろになつたのを見せまいとしながら言つた。——先生のお話ですつかり合點がいきましたかね。やつぱりどうも港のかん違ひらしいなあ。あいつはどうも氣が早くつていけねえ。實はね、先生。私やどうもあの女が、つまりマリさんがね、そんな悪い女だたあ受取れないでゐたんだ。先夜お宅からのかへ

人には熱心らしい客があるらしいのです。その今の、何とかいつたな——それぞれ三浦、と一緒にあそこを出てしまつてから、當座毎日のやうにあのひとの居どころを捜しに來た男がゐたさうですがね。それが地震からのちまた度々どこにゐるか捜せといつて來るらしいのですよ。私あ、考へるのにそんなこともあるので港はあんなにマリさんをいぢめるに違ひない。實はさつきもかうなんです。私の出がけにね。私やちつと東京まで行つてくるといふと、港はそれぢや序に、マリが子供をあづけてゐるといふさきを見とどけて來てくれといふので、マリさんにその處番地をたづねたのです。ところがマリさんが泣き出してね、あなた方はジョオジの里まで行つて私の身の上を明してやらうといふのでせう、何もそんなことまでしてくれなくともよささうなものだと言つて、どうしても場所を教へないのです。港はまだどうしても聞かうてんで、打つたたくといふ騒ぎに、女はヒステリーをおこしてヒイ／＼わめき立てるもんだから外の女まで慄へてゐるのでさ。なんぼ何でも私も見かねたから止めると、港は、こいつは今にもう一ぺん逃げ出してくれようと思つてゐるに違ひない。逃げた時にがきの居どころさへ知つてゐれば面倒でないと思つて聞くんだ。といふから、そんなことならそんなに折檻しなくともこの間のやうにどこへどう逃げたつて直ぐめつけるぢやないかと言つてね——全くですよ逃げるの遁れるの



と言つたつて、一たい港にや、身内が濱と東京と、どこにだつて大勢あるのですからね。私にしたつてかうは見えたつて三百やそこいらの手下がありませぬ。身内から身内へ人相書でもまはしてごらんさい。どこに何を置いて置かれておようとすぐ足がつかますよ。それにああいふ變つた玉だからなほの事だ。この間だつてもさうだ。私の身内のものがあそこのバアでひよく見つけて来て、これこれの女でないかといふので、私が押へて来たやうなわけなんだ——それや逃げやうの逃がさうのと言つたつても根つかから駄目なことなのだ。唯、めつけるのにちよたあ日數もかかりませんがね。

上總やは自分の言葉が、相手にどんな効果を與へたかを見ようと思つたらと高木の顔を覗き上げて黙つた。

高木はまるで話を聞いてゐないやうな顔つきで煙草を吹かしてゐた。

高木は上總やの話を、どこからどこまで本當で、どこまでが出鱈目だかわからないが、しかし、マリがヂョオジの居どころを知らせないで、あなた方はあれの里まで行つて私の身の上を明さうといふのだらうと言つたいふのは本當に違ひないと思つた。全く上總やは嘘でも本當でも自分で氣がつかず口から放題に述べてゐたのである。——それが商賣だから。凄味に並べてみたりマリを捉へたことなどは全く法螺で、事實はただ港の主人が、現に再び未決にゐる三浦を見舞

どんな目に合はされてゐるのも知らないでさ、すつかり私になつてしまひましたね、思はず一時間も遊んで来ちゃいましたよ、あまりいとしいので。

上總やはどうやらその子が氣に入つたらしい様子だつた。

それが高木には不思議に思へた——

上總やさん、君は見かけによらず、と言つちや失敬だが、ひどく子供がすきらしいね。それがですよ、私しやつひこの間たつたひとりの奴を失くしたので。

上總やは似憎なくしんみりとなつた。それから今までの雄辯とはひきかへて、ぼつり／＼と述べたところによると、やはり六つとかになるのを、あの地震の當日、母親は——上總やの妻が、淺草に遊びにつれて行つたところだつた。活動の小屋にゐたのがやつこの思ひで出て、あづま橋の人ごみを渡つて歸つて見ると、どうしたのだか死んだ兒を背負つてゐた。ものに打たれたのだか、人ごみに押されたのだかわからない……上總やは手短かに話して暗然とした。自分の身にふりかかる不幸を語る時には、上總やも亦一個の眞實な人間だつた。假面のとれた上總やは高木の心に接近した。

それが思ひがけなく用談をはかどらせた。一たんは金を出さないと言はせてしまつた高木をして、上總やは、三百圓なら明日にでも當人が来さへすれや、或はまた確な證據さへあれば使ひにでも渡さない事はないと、約束させることが出来

のやうな顔をして訪問しながら、當の三浦の口から確めたのであつた。三浦はマリの居どころを港に教へたくはなかつたけれど、前の時にうまく包んである罪を港につかまれてゐるのでそれが怖ろしさにマリのみたレストラン、グキナスを教へてしまつたのだ。

上總やは再び語り出した——

私がさう言つてなだめても港は意地になつてやめないものだから、マリさんはたうたう鼻血を出してしまつて、それでも港はまだやめないのです。外の女への見せしめがありますからね。私やたうとうたまりかねて、今度はマリさんをすかしてね、決しておまへさんの事は打明ないから、どうぞ場所をそへてくれ、でないと港はあのとほりだから、お前さんをどんな目に逢はせないとも限らないから、と言つて頼んで、やつと明させましたがね、大崎のしか／＼のところだと云ふから、お宅への道ついででもあり、今のさつきちよいと寄つてみたのですがね、居ましたよ。いいあんばいに里では馬鹿に可愛がつてゐませぬ。十五圓の里扶持だといふが、しやれた洋服なんか着せてね、全く可愛いや、すつかりあつちの種ですぜ。目の青い。まるまる太つてね。カメさんというものもいい人らしいや。金銭づくで置くのじやないつて、自分の子のやうにしてませぬ。あまり可愛いので頭をなでてやりましたかね、子供といふものは、いいもんだ。おふくろが

た。上總やはまた上總やで、三百圓ではどうもおぼつかないかも知れないが、何とか港にこの事情をよく相談して、あまり因劫を言はせないやうに計らはう。大ていは自分の一存どほりになりさうなのだから、と言つた。互に相手をさぐらうとしてゐたこの二人は、三十分以上も無駄をして最後の五分で、ふとしたはずみに話がわかつた。

上總やは、四月末のこの陽氣にどういふ量見だが、毛皮の襟のある厚いインパネスを羽織つてゐた。手には寫眞機のかばんをさげてゐる。

——お、さうだ。マリさんから先生へふみをことづかつてゐたつて。ぼや／＼してすつかり忘れてゐた。

上總やは笑ひながらさう言つて、外套のポケットから手紙をとり出した。

なるべく早く型をつけなげや、先生もよろしくお願ひいたしますよ。女の泣いたり喚いたりするのを見るなあ、私だつて全くあんまり好きではないんです。——港は道樂かも知れねえが。や、ごめん下さいまし。

上總やは下駄をはきながらさう言つて、揉み手をして出て行つた。

マリからの手紙といふのは、一昨晩上げた手紙はもう着いたか。どうぞあの手紙のとほりたのむとだけで何でもなかつたが、その封筒を開けてみた形跡があり／＼とあつた。上



總やは何かの手がかりにもならうかと開いて見て、下手にあげてしまつたので、高木にはわざと歸りしなにそそくさと渡したのであつた。

マリからはそのとほり二つも手紙が来たけれども肝腎のマリの使はたうとう見えない。夜の十時まで心持ちに待つて、高木はたうとう何だか少し不安になつた。——上總やがもしやマリの手紙にいふその使だつたのではなからうか。さう言へば、上總やは來ると早速マリさんから手紙があつた筈ですがねと言つたが、あの時はどうしたはずみだつたか本當が言ひたくなくつて、いゝやと答へてやつたが、それを幸に上總やが何か細工をするのぢやあるまいか。否、さうでもあるまい。上總やはたゞあのことづけの手紙を偷み見たものだからあんな事を尋ねたのだらう……

## その三

杉田とし子といふ婦人が今夜先生を訪ねて來はしなかつたか、といふから來ないと答へると、ちよつと先生にお目にかかりたい——とさう言つて來た人がある。こちらを教へようと思つたけれども、口では教へにくかつたから、家へは錠を下して先へその人を待たせて來た。さう言つて伊那が、高木の住居の方へむかへに來た。  
夜はもう十一時に近かつた

ない紳——はやつと口を開いた。この人の言葉のとほりだと、杉田とし子——マリは今夜の八時か九時頃までのうちには、高木のところまで來てゐなければならぬ筈だつた。上總やが港でマリが折檻されてゐると言つたのは或る程度までは本當であつたと見える。堪へかねてマリはもう一度そこから抜け出すことになつてゐた。一昨日の晩。偶然マリに逢つたこの人は、——マリはどうやら早くも稼業に出されてゐてこの人にあつたらしいのである——目を泣き腫らして沈みきつてゐたマリを見て、事情を聞き知つて相談相手になつてやつたのださうだが、その時の打合せでは、マリは今日の夕方にそこを自動車で神奈川まで逃げ出して、そこから電車で高木のうちまで來るわけであつた。港へはすぐ高木のところへ來いと書き置きをして出る。どうしても一度つとめをする意志のマリにないことをかうしてはつきり知らせて置いて、その上で高木から港へ相談して貰はう。逃げ出しでもしなげや、たとひ金を渡しても、なか／＼素直にはマリの身を解放しさうもない。うつかかり金を渡せば無駄に金だけとられてしまひさうな氣さへする。よほどの悪い奴にかゝつたらしい。それにしてもどうして未だこゝへ來ないだらう。抜け出しをこねてまづい事になつたのぢやなければよいが……。——さう話して、この紳士は案じ込んでゐた。  
植込みのなか／＼洩れる門燈に照し出されたこの人の横顔

杉田とし子といふのは高木には全く聞いた覚えのない名だつた。が一瞬の後に、直ぐそれはマリの事ぢやないかと氣がついた。高木は、さういふ境界の女としてのマリといふ名だけは知つてゐたが、その本名は姓名もまだ一度も聞いたことさへない程だつた。どんな男かといふと先生と同じぐらゐなまだ年とらない洋服の紳士だとのみで、口下手な伊那は要領を得なかつた。直ぐ近所に同じ姓があつて、そちらは醫者で同じやうに先生でよく間違ふのだが、はつきり高木喜久男といふのだから、やつぱりマリからの使に違ひないと、高木は寢間着の上へ羽織をひつけて出かけた。

アトリエの表に、なるほど洋服姿の紳士が物案じげに立つてゐたが、高木たちの足音にふりかへつた。帽子から靴まで黒づくめで手に薄手の雨外套を用意した紳士であつた。高木を見とめて一禮すると彼は、杉田とし子といふ婦人が今夜……、といきなり性急に尋ねた。杉田といふのは、やつぱりマリのことだつた。

高木は伊那の手から家の鍵をとつて自分で開けつゝ、ともかくもと言ふので家に招しようとしたが、彼はもう遅いからと言ひながら胸の時計をちらと覗いて、家に這入らうとはしなかつた。その癖すぐには用談を言ひ出しもしない。見てとつて、高木は鍵を伊那に渡しながら開いた扉を指して伊那に這入るやうに命じた。高木とふたりになつた時、この見知らぬは、身なりばかりではない、品位のあるものであつた。その憂ひに沈んだ表情と言ひ相手を怖れてゐる様子と言ひ、上總や以來用心をしてゐる高木にも眞に受取れた。彼は高木に、マリから手紙が使かゝあつたかどうかを尋ねて、高木が今朝の手紙や、上總やといふ男の事、しかしマリの手紙にあつた使はまだ見えないと言ふまでは、彼は自身がその使だといふことは告げなかつた。彼がその當の使者で三百圓といふ金をマリのために用意して來てゐることを知つた時高木は、この紳士が一體何者で、マリとはどんな關係だらうといふ好奇心を動した。上總やが自分のことをマリの情夫乃至、熱心なお客だと思ふのも當然だと思つた。いま高木にも目の前のこの紳士がそんな者に見えないことはない。さうして、その紳士がまた高木をそんなふうに見つてゐる。一瞬間二人の人間は妙にちぐはぐだつた。

高木は自分がさう思はれてゐると見ると、それが厭だといふ氣持と、相手が氣を揉むのぢやないかといふ察しとから、三浦とマリとの以前の關係、三浦の今の状態、三浦と高木自身との交際を手短かに語つて、自分がマリに立替へるのはやがて三浦に對してあることをあつさり説明した。相手は別にそれを聞きたがりもしなかつた。但、紳士は高木に、お志はあの女も本當に忝く思つてゐる、とそればかり繰返しながら、さて上衣の内ポケットから紙幣入れをとり出した。その



なか、ら百圓が二枚と十圓が五枚、外に十圓がもう一枚と五圓だの一圓の紙幣まで雑つてもかくもすつかりで三百圓。二百五十圓の外の五十圓は明によせ集めた金だつた。その身なりと人がらとに比べては三百圓は三百圓でも苦しうなけちくさい金に見える。高木はふとこの人はこの時間までか、つてこの金をつくるのに無理をしてゐたのぢやないかと空想した。

高木はそれを委ねられるまゝに受取りながら、上總やとの會見の模様をよく述べて、そんなわけだから、金は案外用意ほども入用でないだらうと言つた。それで濟めば何よりだが、しかし寧ろきつぱりと出すだけは出してあとに何のひつかゝりも残らないはうがいといふのが紳士の意見だつた。彼はかういふ點では高木よりもずつと經驗家らしく、その金を港に渡す時でも、マリの入れたその書附なるものを一應當人にしらべさせて、それに相違ない事を確めた上で、その同じのうら或は一隅へ受取をさせ、尙、この事件一切は解決の旨を明記させるやうに、如才もあるまいが、別紙の受取書を受取つても、當人の書附が無い以上、また當人の書附があつてもそれに先方の記入が無い以上、再びどんなことをたくらまれ無いとは限らない。悪い奴はいろ／＼の智慧があるものだから。さうくどいほいふ言葉つきが、どうやら辯護士などのやうな口調だつた。さうだ、ほんとうにそんな職業の男か。

この名を告げない紳士は突然来て、このとほり慌しく消えた。

#### その四

マリが高木のアトリエへ入つて來たのは、次の日ももう夕ぐれ時ごろであつた。

心配のせゐるか、光のせゐるか、蒼ざめて、しかしむくんだやうな顔で、

お金を持つた人が来てくれましたか。

來た、ゆうべおそく。君がまだ來ないかと言つて心配してゐたよ。

………。マリは答へもせず、突立つてゐる。

腰をかけたらどうだね。——港をいま出て來たのかね。

………。マリは問ひには答へないで、言つた——上總やが今來ます。わたし一緒にそこまで來たのです。

表まで來てゐるの？

一緒に入るのはいやだらう。一足あとから行くと言つて、町角のところ立つてゐました。——五百圓渡すことにしました。

五百圓？——君が交渉したのか。もつと少くともよかつたんだが。

マリがまだ返事しないうちに、表のベルが鳴つた

も知れない。もしや三浦の辯護士が、マリに客になつたのではあるまいかと高木は思つた。

高木は金を持つてアトリエのなかへ這入つた。その預り證を書いてから、初めて氣がついてペンを持つたまゝ再び外へ出て來て、その紙ぎれの宛名に書き込むために、紳士に向つて「をたづねたけれども、彼は言はなかつた。そんなものはいらぬと言ひながら、名宛のないその預り證を無雜作にポケットのなかへ押込みながら、彼は言つた——

かうしてゐるうちにもこゝへ逃げて來ないとは限りませぬ。それを追つかけて何れは港からも人が來ませう。御迷惑でせうが、これも何かの因縁だと思ひになつて、いゝやうに計らつてやつて下さいまし。どうかしてあなたの御盡力で、あの女に二度とあんな社會などへ入らせたくはないものです。……それには警察なり救世軍なりその外の社會事業的の團體もあるにはあるでせうけれども……。

高木は伊那を呼んで、もしもマリが夜中にでも來たなら、アトリエへでも通して勝手に寝させるやうに言ひ置いて、高木は、歸らうとしてゐるその紳士と一緒に門を出た。ふたりは同じ方角へ歩きながら、紳士は黙り込んでゐた。ぼつんと思ひ出したやうに、いゝ陽氣になりましたと今更間の抜けた挨拶を一言云つたが、町角まで來ると彼は停車場の方へ消えて行つた。

——あゝ來たのですわ。さう言ひながらマリは玄関まで出て行つた。直ぐ上總やだけ現れて、マリは廊下にもゐるらしい。

ティピカルな長つたらしさうな上總やの挨拶を打ち切るために、高木は言つた——。で、一たい、どういふ話になりましたかね。

まだお聞きになりませんか……。

今、その話になりかかつてゐるところへ君が來たのだ。五百圓だつて？

それが何です。上總やは答へた。マリさんは言ひますまいが、實はあの人がゆうべ逃げ出しをこねましてね。それを私がつかまへて、港の手前はうまく言つて置きましたがな。そんなわけで港は一さうやかましい。きつぱり五百圓、その下なら手もさわるなつて權幕だもの困りましたね。ところが、幸、聞けば、マリさんは先生に拜借出來るほかに、二百圓ぐらゐなら自分の分でも何とか都合がつくやうな様子で、マリさんがさういふことに承知をしたのですかね。ですから、先生から結局、昨日のお話のとほりに願へればいいので。

ふむ。

高木は、上總やの口前にかゝつてマリが正直に何もかも喋つてしまつたらしい、下手をしてしまつたが、仕方がないと思つた。



ふむ。當人がさういふなら、何とか方法があるんだね。それで、君はマリが入れたその書き付けといふのは持つて来てあるでせうね。

言ひながら高木は立つて扉のところへ行つてみた。直ぐ戸口のうしろに、マリはきき耳を立てるやうにしんとして立つてゐた。

朝から袂のなかへ入れてあつた重い紙幣入れを取り出すと高木は例のさまざまの取合せの三百圓を自分で一度數へてみて。——さあ、これがゆうべの人から取つたもの。と言ひながら、さうして別に眞新の二十圓紙幣を十五枚、これは數へずにまた何も言はずに渡した。上總やからは見えない戸のかけである。マリはその金を手にとると、ほんやり、別に數へるでもなく禮を言ふでもなく、ただ眺めてゐるのであつた。

ぢや、それを渡してやつたらいいだらう。

高木がさう注意すると、マリは最初そのうちから百圓紙幣を一枚抜き出した。が、何を思ひ直したのかそれをやめて今度は二十圓を五枚數へて抜き出した。

これだけは多すぎるのでせう。

さう言つてマリは、それを高木に返さうとした。ともかくもみんな持つてゐるがいい。

行つたのだ。例の嚴寒用の厚外套と一緒にそこに掛けてあつた寫眞機入れの黒革袋をとりに行つたのだ。寫眞機と思つたのは手提鞆の代用だつたと見える。そのなかからとり出した萬年筆の鞘を抜くと、上總やはインキのこぼれてゐるのをマリに出させた鼻紙で拭いた。上總やはふと猥褻なことを思ひ浮べたので嚴肅な顔をした。

マリの書附の片隅の一番空いてゐたところへ、上總やは一金五百圓也と書きつづけながら言つた。

ええと……、何と書いたものですか、——右にて皆済と、皆済もをかしいかな。ね、先生、何と書きませう。

然うだね、事件解決候也はどうだね。

それですく——しよつちゆう、書いてゐるくせに忘れてゐやがる。

受取を高木が満足してマリに渡したのを見て、上總やはもう一度金を繰り改めてから懷中へ收めながら、エーヤアジプへマツチでつけると喋り出した。

マリさん。それであんたもひと安心だ。よつと先生にお禮を言ひなさいよ。私からもお禮を申し上げます。餘計なことだが、マリさん今のその心掛を忘れないで、二度とあんたのところへ身を落すんぢやありませんせ、先生に死に金を使はせたいと思はせまいとおもへばね。

マリは何とも言はなかつた。そればかりか妙につんとして

リはその百圓を、二つに折ると假りに帶の間深く押し込んだ。さうして座にかへる高木のあとからついて来た。

君、上總やさん。それぢや何だ——その、ちよつと女の入れてある書附といふのを見せて下さい。

上總やはさつきから取出してゐたらしく、それを三人で圍んでゐる卓の上へひろげて置きながら。ごらん下さい、間違なくマリさんの手形です。といふのは半紙二つ切りの小さな紙ぎれ、それはしかし、成程、金七百圓也の證で杉田と子といふ署名に、朱肉で爪印がしてある。

これだらうね、間違ひはないね。

マリはそれをとり上げて見て、念を押す高木にむかつて鎖いた。それからぞんざいな手つきで、さつきから手に握つてゐた金をそこに置いた。くしゃくしゃと無難作にちらばつて置かれた紙幣を、上總やは大ききの順に重ね上げてしまふと押し頂く眞似をしてから、數へ出した。

確に——

言ひつつ上總やは三度その金を繰つて見た。

それぢや、上總やさん、一つこの書附のどこかへ一筆、君の受取を買つて置かうかね。

書きませう——言ふなり上總やは立ち上つた。あまり威勢

がよかつたので、高木はへんに少し不安だつた。しかし上總やも、金に上つて置かうかね。と、さつきから手に握つてゐた。その態度は、高木の目にさへ、ただ口さきだけにして、ともかくもそんな言葉や上總やに對して、少し氣の毒と思へる程に、てんで上總やなどにとり合はない顔つきであつた。唯その目には涙がぼろ／＼と溢れ出してゐた。

ね、先生。無理ありませんや、うれし涙で言葉も出まさんや。先生、お世話だが、何かマリさんに一つ食べさせてやつて下さいませう。ゆうべも今日も今だに何一つ口に入れない始末でさ。全く心配で飯ものを通りませう。

君。——と高木はマリを顧みた。——お腹が空いてゐるなら、伊那に頼んで何でも食べたがいだらう。

いゝえ。欲しかありません。

さう言つてマリは首をふつた。それから涙を拭うた。

先生。——上總やがいふ。先生、私や全く今までに、おかげで今日ほどきまりの悪い思ひをした事ありません。このお金を頂いて歸るのは情ないやうでさ。——かうしてさほどの縁もゆかりのない先生が義侠的に出して下さる。それをおめ／＼私がかうして頂いて歸るのだ。先生にくらべれば港は、ともかくもマリさんとはかれこれ二年も一つ釜のおまんまを分けてたべた間柄だ。借金と言つても時と場合ぢや受け取れない義理もある。私やたゞの使ひながらも考へると面目ない氣がしてなりませんや。尤もね、先生。あれぐらゐででもないけりや金は出來ますまいよ。何、港はね、今でこそ小



金をこしらへて一とほりにや親分顔も出来てゐますがね、三つ子の魂でさ、あれやもとは辻車を曳いた者でさ、根が剛巧者だから外人を相手にしてゐるうちには、ガイドのやうな事を覚えてね——まだ免状なんてもものゝいらなかつた頃のことです——毛唐の土産の上まへをはねたり、淫賣宿を目つけてやつたり、さうかと思ふとその淫賣宿へあとから自分で出かけて行つちや座りこむ。何でも二度ぐらゐはへえて来てゐる筈です。不法なことばかりしちや小金をためた奴だから、今だにやつぱり汚いものでさ。——兄貴分の悪口を言ふやうだが全く。金力だけのことだ。誰ひとり心からなつてゐる者もありやしない。一たいあれは私の前の兄貴の朋輩で——これや港なんぞとは根つから違ふ。きれいな人間だつた。それが亡くなつたにつけちや、私やかゝりあい港を見貴と呼んではゐますがな。私あかういふしがない稼業こそはしてゐるが、これでもまだ根性まで腐つちやゐないつもりだ。……こんな身の上になつてそんな事を言へや身の恥を曝して歩くも同然だが、先生も御存じでせう、×××つて——ね、末はよくなかつたが、一ころは名を知られた繪師だ。あれや、全くは私の伯父に當るのです。息子がやつぱりやつてゐますがね、先生と同じだ。西洋畫だ。親父ほどにやいゝないと見えるが、それでもやつぱりちやんとした男でさ。私の血すじぢやちやんとした者ばかりだ。ちやんとした男は恥しい話だ

いいよ。——用ぢやない。  
高木は自分で立つた。上總やのお喋りを掻き消すために蓄音機をかけたのだ。だが上總やはそんなことに氣のつかないふりをして、ちらと一隅に鳴り立ててゐる箱の方をふりかへつて、——

やあ、舶來ものですか。

さう言つて置いて、神妙に聞くふりをした。

時に——と上總やは少し小聲でマリに話しかけた——あんたは、あのこの間のジキナスといふうちへ荷物を置いてあるでせう。何があるか知らないがあれをとつて来たらどうですか。何れや手まわりのいるものだ。尤もあのうちでは私がうつかり港の言つたことを眞にうけて、あんたに申譯のない濡衣をきかせてしまつたから、あんたが自分では行きにくからう。なに、私が寄つて上げる。序にあんたのこともよく言つて取り消して来よう。どうだね、表で待つてゐれや、私がかへ入る。——私なら顔馴染だ。荷物を渡すだらう。一緒にいきますか。どうですか。

いつまで言つてもマリは返事をしなかつた。上總やがごく言つた時マリが答へた。

よござんすよ。荷物なんぞ入らないのですから。

荷物が置いてあるつて？——高木が蓄音器の蓋をしながらか遠くから口を挟んだ。何だか知らないが、それや取つて来た

が私ぐらゐのものでせうよ。十三の時に家を飛びだしてしまつて、大阪にもゐた、廣島にもゐた。博多にもゐた。だが有難い事にや、まだ戸籍にやしみはありませんや。——身を持ち崩して、私は廓で育つて来た者で、その揚句がこの稼業です。廓ぢや随分さまざまな義理も人情も見た。だから先生などの氣ごころにしたつて私にや見とほせると思ふ。失禮ながらさすがに世間で名を謳はれるほどの方は違つたものだ。血もあり涙もあるといふのは先生のやうな方のことだ——全くさ。ごまをするやうで恐れ入りますがね。

高木はへんにをかしくなつた。をかしくなりながらも上總やの言葉がさう不愉快でない自分を見出した時、高木はどうやら始めて不愉快になつて来た。自分で廓に育つたといふが、いかにもさう聞けば上總やのその口吻は、争はれないもので、そつくりそのまゝ妓夫太郎だつた。きのふは港が血もあり涙もある男だつた。けうは高木が血もあり涙もある男で、その代り港は朦朧車天あがりの無頼漢になつてしまつた。上總やはまだ何だか喋りつゞけてゐる。なか／＼歸りさうもない。

伊那！ 伊那！

高木は突然、大聲で吐鳴つた。

居ないのか、聞えないのか、返事がない。

方がいいぜ。惜しいぢやないか。  
いいえ。いらなないので。きたない寝間着やら髪の道具だけです。

それだつて捨てて来れや惜しいぢやないか。

いりません。私、欲しけれや自分一人でだつて取りに行きます。

マリは高木に對してまでとげ／＼しい口調であつた。いつもなら、どちらかと言へば氣取つて上品ぶつてゆつくりしかしよく話す女なのに、今日は一たい無口で、口を利けばこれだ。ヒステリーを起してゐるな、と高木は見た。

ハ、ハ、ハハハ。上總やはマリという言葉の意味もなく笑つて置いてから、高木に呼びかけた。ねえ、先生。私が一ッお願があるんだが、はてな、これや私から先生のやうな方にぢやあまり失禮にあたるかな……

上總やはちらと高木を見た。マリは突然注意深く睨み入るやうに上總やを見つめた。

上總やさん。何だね、一たい。

外でもありませんがね、先生、お近づきのしるしにもう時刻でもあり、そこいらで一杯差上げたものですかね。こんな野郎ですが、私からですよ。これほど清いお金をいただかせて下さるのだ。お禮ごころでさ。

上總やさん。清いお金どころかそいつあ悪銭だ、かたりの



金だせ。

へ、へへ。御冗談。ともかくも申し上げたことだ。御つき合ひ下さらねえでは、私や氣が悪くつていけませんや。こいつ一杯飲ませると言ふのだな——高木は腹のなかでさう氣がついた。そこで手もとにあつた五十錢さつを四五枚ほど紙にくるんで、卓の上へのせた。

上總やさん、少しだ、勝手に飲んでくれ給へ。

へ？ 旦那、いや先生。それや情けない。私やそんなつもりで申し上げたのぢや、決して無い。ぢや、先生かうさせて下さい。これや私が忝く頂く。その代りにや私が一杯差上げるといふのを先生どうぞ一つおつき合ひ下さい。實はね、先生、失禮な話だが何だ、私やつかり先生の氣前に惚れてゐるんだ——きのふ伺つた時からね。是非ともこんな野郎の酒だが一つ飲んでやつて下さいまし。

上總やの言葉はひどく熱心だつた。一たい上總やといふ人間がどんな男なのかマリに親切なところなど高木には妙にわからない。うるさく言ふのを斷るより一つ一緒に飲んで見てやらうといふ氣になつた。これが高木の例の氣まぐれと物好きとである。

おい君。高木はマリに言ひかけた——君もお腹が空いてゐるだらう。いやでなげや一緒についておいで。

て、自分だけこつそり高木の畫室へ忍び込まうと考へついで、高木を誘うたのに、そのマリまでがついて来てしまつた。——マリが今夜どこで泊るのだからマリ自身も知らず、高木はもとより知らないものを、上總やはひとりでマリが高木の畫室に當分ゐることを見當をつけてゐたのである。それは高木をマリに氣のあるものと錯覺してしまつた上でのひとりぎめだつた。上總やは、せめてもう一晚だけでいい。マリを高木に渡してしまひ度くないと思ひつめた。上總やはマリに對して思ひがけないほどのパッションを持つてゐる自分氣がついた。きのふ一晚のマリが上總やにはどうも忘れてしまへなかつた。あんな樂しみの多い女を——と上總やは舌なめずりをした——それを惜しげもなく捨てたといふ三浦が、ふと不思議にさへ思へたほどだつた。

それにしては、上總やはホク／＼ものだつた。高木に會つてもう三百圓よりは出ないものと見きはめをつけ港にもあきらめさせて置いたところを、マリが逃げ出すくらみをしてゐるらしいといふのを仲間の女の口うらで察したのは上總やの智慧だつた。上總やはマリをわざと逃がして置いてつかまへたのだ。港へつれ歸つたならば、半殺しの目に逢ふだらうとおどかした上で、七百圓をきつかり五百圓までには計らうと親切げに言つた。もともと參百圓にあきらめてゐるのを五百圓までに

けで、どうするのだから判らなかつた。しかし上總やと高木が外へ出る時に、マリもやつぱりその後から出た。マリは晩春の夜のなかをしよんぼりと、二人の男の後から歩いて行つた。食べたいなどとちつとも思はなかつた。けれども自分がついて行かなかつたら、上總やが何を高木にしやべりだすやら只それがひどく心がかりだつた。それを親切な高木の言葉にあまり逆ひたくもなかつた。

高木のアトリエに近い省線の停車場附近の、ちやちな藝者屋町のなかの或るしやもやへ彼等三人がとほつた時には、上總やと高木との見かけの對照、それによそ目にも萎れかへつてゐる若い合の子の女。それが店の人たちには事實以上に仔細ありげに見えた。

その五

上總やは餉臺をへだてて自分の前にゐるマリを一目見た。それから高木を見た。忌々しいものに思つた。再びマリを見たまへ。せめてもう一晚、この女をどこかへ引つぱり出さないで、は指かかないと上總やは考へつゞけた。ダキナスへ荷物をとりに行つてやらうと言つて誘ひ出した言葉はまんまと失敗した。上總やはもうひとりで高木の家を歸らなげやならいと思つた時、マリをここに殘して去つてしまふことがいかにも心離り上げたうへに、相談に事よせてつれ込んだところを女が一晚儲けたわけであつた。それをもう一夜。ふとしたはずみが上總やの今夜のパッションになつたのである。

上總やは例の辯舌で、ジョオヂの可愛いことを描寫した。三浦の無情を、港の刻薄を罵つた。どうかしてマリの中に取入らうと企てながら、片一方では杯をしきりに勧めながら、高木を讚め上げた。上總やはどうかして高木を酔はせよらと思つてみた。高木が酔つて寝てしまひでもすれば、それは何とでも方法がある。たとへばここの部屋でだつても方法はあはるだらう。時々にはそんなことにも使はれるらしい小座敷を見まはして、酒が進んで來るに従つて上總やの慾情は燃え立つた。

けれども今夜は、上總やは全然失敗だつた。杯を二三杯ですぐ、高木はあかくなつたくせに、それは妙な酒だと思へて、高木は酔ひつづぶれるどころかたゞ眞赤になつただけで、しかも上總やがすすめるだけはいつでもガブ／＼と飲んでける。高木が上總やをわからない人物と思ふ以上に、上總やには高木といふ男がますます見なれないたちの男と感ぜられた。

——全く、先生。私や先生を甘えものに思つてゐた。見そこなつたのだ。この青二才めがと高をくくつて置いたのが、先生昨日は全く私の敗でしたよ。



さう言つた時には、上總やはしんからさう思つたのだ。さうして今夜だつてもこんな酒の飲口ぢや、やつぱり敗けたと思つた。マリはまたマリで、上總がどんな同情を表示していても、木で鼻を括つたやうな態度だつた。上總やの問ひかける事に對してさへも、必要な高木に答へるやうな始末だつた。高木が便所へ行くとマリもついて行つた。マリは上總やの様子をけどつてそれほど用心してゐたのだ。

餉臺の上のや下に並び立つ空徳利を目で數へながら上總やは懐にふくれかへつてゐる財布をちよつと觸つてみてから、畜生、忌々しい酒を飲んだと思つた。

君も飲んだのかい。

高木がマリに話しかけた。

いいえ。わたしいただきませんわ。なぜです。

でも、顔が赤いぢやないか。

頬がほてつてゐるのでせう、ただ。それともお化粧のせいかしら、出がけに頬紅をして來たのですよ——あんまり蒼かつたものですかね。

畜生！ マリが高木に話してゐるのを見て上總やは、ほんとうに腹立しくなつた。上總やはやけになつて手を拍いた。這入つて來た女中に向つても、勘定！ とだけぶつ切ら棒に言つた。再び女中が來た時に、高木は勘定書を取つて自分で支拂つた。

う。それに上總やがあつて来て何をやるかは知れてゐる。今日だつても上總やは夕方まではどうしてもマリを離さうとはしなかつたのだ。高木のうちと言へばまさか上總やもそこまではついては來られまい。その外の場所ならどこへだつて來るだらう。マリは上總やをまいたのだ。

それぢや、私はこれから港まで行つて來よう。へん、まだ宵の口だ。

上總やは恐ろしい目つきでマリの目のなかに窺ひ入りながら言ひつづけた。せいぜいまあ先生のお世話になるがいいね。ところで、今の言葉の様子ぢやどこか落ちつくところがあるさうだが、落ちついたら一つ港へも所を教へて置くがいいね。あんな男だ——悪い奴だけに、あまり急に知らん顔をする、何かにつけてよくないぜ。

をはりの方は何もなく自分のことを指したおどかし文句だつた。マリは何も言はないで高木の歩いて行く方へすたすたとついて行つた。上總やは、それでもやつぱり残り惜しかつたと見える。マリと高木との後姿をしばらく見送つてゐたが、たうとう見えがくれにあとを追うた。

静かな、木の多い郊外の横町だつた。曇り空ではあつたが、うす雲は月で白かつた。突然、高木は途轍もない大きな見かけによらない朗らかな聲を上げて、何だか知らないが外國の唄を歌ひ出した。いづれは蓄音器か何かで覺えたのであ

それやいけねえ。先生、約束が違ふ。

とは言つたものの、上總やは決して自分の金入れを出さうとはしなかつた。

立ち上つた高木は一足よろめいた。

あ。

と言つてマリは高木を抱き支へた。高木は立つて見るとふら／＼としていくらか酔つてゐたのだ。

何、大丈夫。

高木はしかし、いつものとほりの口調だつた。尻目にかけてながら上總やは、喧嘩を吹きかけた氣持をぢつと堪へて階段を下りた。

道に出た時に上總やは黙りこくつてしまつて物を言はなかつた。上總やが言はなけや、この三人はつまり沈黙だつた。停車場の方へ出るべき上總やは右に、さうして高木の家へは左に折れるべき町角へ來た時に、始めてマリが言つた。

先生。わたし今晚、行かうと思つたところがあつたのですけれど、あまり晩くなつたやうですから一晩だけお宅でお世話になりたうございますわ。

あ、いいよ。——高木は無心で答へた。しかし上總やは無心では聞かなかつた。

ふとマリは横濱での生活や、三浦との事などを思ひ出した。——三浦はよくこんな風に唄つたものだ。高木は立小便をし出した。それから心持よろ／＼と歩いてゐる。ただそれだけの事である。マリはその少しうしろから遠慮がちに、うなだれたままでついて行く。今に男と女とが何か、手をつなぐとかもたれかかるとかそんなことでもあつたらうかと思設けてゐた上總やには、飽つけないやうでもあり、吻とするやうでもあつた。二丁ばかり追つたけれども上總やはつまらなくなつて停車場の方へ引返してしまつた。ふと氣がついて上總やは懐の財布を手をやつて見た。大丈夫落しも何もしてゐなかつた。安心して上總やはまた考へつづけた。——本當に、高木の奴のところでは今夜一晩だけ知ら。——それから後はどこへ行くつもりだ。——いやあんな事を言つたつてわかるものぢやない。——どこへでも行くがいいや。マリの居どころが知れたけれやジョオヂの里へ行けやすぐ知れる筈ぢやないか。本當に高木のところにゐるのぢやなくよそへ行くだとしたら。……上總やは思ひ耽つた。

高木とマリとが來た時に、アトリエでは伊那はもう眠つたらしかつた。玄關わきの窓には灯が消えてゐた。足音がした筈なのに灯がともらなかつた。高木はたたき起さうとしたが、晝室の窓に一ヶ所、壊れたところがあつて、そこから工夫すればわけもなく飛び込めさうなことを思ひ出した。うら



へ廻つてそこから室内へ跳り込んだ。高木は歩いてゐるうちにいつの間にか加速度的に酔が發してゐたので。そんな飛躍的な運動がして見なくなつてゐたのだ。伊那を起さなかつたのはこの外に何の意味もない。だから内へ這入ると、高木は手荒にがた／＼と表口をあけた。それからアトリエの一隅にあつた寢椅子を指して高木はマリにそこへでも寢ろと言つた。それから、毛布を持つて来て椅子の上へ投げた。彼は廊下へ出ると水道の栓へ口をあててがぶ／＼飲んだ。さつき自分が跳り込んだ窓のことを急に思ひ出して、手ごろの畫枠をたたき壊すと、そこへしんばり棒をしながら、あすから伊那に言ひつけて毎日かうやらせなげや。高木は自分で自分に言ひかすやうに呟いた。

さあ、寢るんだぞ。

マリに言ひかけた時に高木は全く酔漢の言葉だつた。

おやすみあそばせ。

着物を脱がうとしつつ、ふりかへつてさう言つたマリを見ながら、高木は扉の外へ出た。戶外へ出かかつてやつと氣がついたので、再び扉のそこへ来て、高木は扉の外から呼んだ――

おい、君。杉田マリ子さん。

マリは返事をしなかつた。

いふものは今更には、どうしてかもう淺ましいのだから。自分を人間らしく取扱つてくれた男は今までに誰があるだらう。マリにはすぐにこの三日間の三人の男が先づ思ひ浮んだ。さん／＼に析檻した上で眞裸にして、港の主人が絞め殺すやうな勢でマリにした事は何であつたか。上總やが事件の解決を親切さうに相談して最後にマリに要求した事は何であつたか。あんな奴らはどうでもいい。この人ばかりは自分にも心といふものがあることを知つてゐてくれるものと頼みにして、それならばこそ何もかも打明けて末まで相談をしてもらへると思ひ込んでゐた高木までが、男氣どころか、やつぱりあんな下心があつたかと思ふと、世の中全てがマリにはデイスイリユジョンであつた。さう言へば、もうひとり自分のところへあのやうに不意に救の神さまのやうに現はれたあの黒い服装の紳士は何だらう。港の女たちは、あの人を以前から不思議な客と思つてゐるらしかつた。あんな家へ踏み入つてもたゞビールを一二杯のむきりで、女を買ふではなく、たゞさまざまな彼女たちの生涯のことを聞いては歸る。きつと小説家か、それでなげや社會主義者で、社會のさういふ裏面を見て歩く人だらうと噂をしてゐたものだが、あの男だつてもどうせ何だか知れた者ではない。それにしても自分をあんなに慰め勇氣づけ、いろ／＼の智慧をつけてくれてそのうへには金まで出してくれたのだが、それをさへ安心して有難いと

るんだから、おれが出たあと、表を、君一つしめて置いてくれ給へよ。

高木は言ひながら、扉を開けて何氣なく覗き込んだ――ペティコート一つになつたマリが長椅子の前へ突立つてゐた。彼女は戸の外から呼ばれた時に、起きて出ようとしてためらつて立つたところだつた。

ペティコートのレエスのある裾の方から高木の視線はマリの上を這つた。高木は手を延ばすと扉の脇にあつたスキッチを突然ひねつた。電燈が一時に消えた。高木は半分間ほどちつと突立つてゐたが、窓を透し入る空の明りで、白く浮き上つて幻のやうに突立つたマリの方へ亡靈を見た舞臺のハムレットのやうに高木は進んで行つた……

## その六

マリはいつまでも眠らなかつた。ヅキナスを追はれて上總やの手につかまつてから殆んど一週間といふものは、をちをちと目蓋めがねの合つたことさへないのに、ヒステリカルになつたマリはどうしても眠れなかつた。

マリはこみ上げて来て咽び泣いた。それからしく／＼と泣きつゞけた。泣きながら考へた。來し方も、けふも、あすも、この夜のマリの中には眞暗であつた。

思つてゐるのだ。怖ろしいのだ。かかれない。あんな社會にゐればこそ男たちは自分を牝の獸のやうに思つて、さう取扱ふのだとはつきり氣がついたればこそ、抜け出さうとして、さてのがれるために自分のされたことを思へば、やつぱり自分は、かうして寢てゐる今夜でさへも淫賣婦ではないか。ジヨオヂを手もとに楽しく育て、清らかな世を暮さうなどとそれはやつぱり夢か。かうしていつまで生きる自分かは知らないが、これからの永い月日を、一たい、第一に、自分はさて何によつて生計を立てたらいいのだ。レババのこと。三浦のことに。男にはもう懲々した。しかも女ひとり。この世のなかに突き出されて憂き世の浪がことごとく自分を目じるにして打ち寄せてくるやうな氣がする。思へば、今までに見て來た澤山の女たちと同じやうに捨鉢になり切れぬ自分が一そ腹立たしい……

昂奮し切つて、あれからこれ、それからこれと思ひつづけてゐたマリの考へは、いづれは女ごころの大した深い道理はなかつたけれども、そのやうな境涯に身を曝されながらなまなかなみの心を持つてゐる爲めに切實であつた。マリは一種の情慾のやうに自分の両手をしつかりと組み合せた。ふと、人が祈るといふのはこんな氣持だらうと思つた。さうして何か聲を出して言つてみようかとさへ思つたのに、何だかそれも馬鹿げてゐるやうな氣持になつた。



マリはふと、どこかで水の雫がひきりなしにポタリ、ポタリと落ちてゐるのを聞きつけた。耳ではそれをどこから来る何だらうと怪しみつづけながら、それと別に何の關聯があるでもなく自分の内臓の工合が突然目の底に映じられるやうな氣がして、しかもそれは今までのあらゆる男によつて穢れ汚されて自分でそんな者を自分の體内へ納めてゐることが我慢出来ないやうな氣がしたりして、こんな氣持が嵩じた時人は自分で死んでしまはうと思ふのぢやないか、などとマリには思へた。……それこそ野獸のうめくやうな高野が手のとどきさうなところに聞える。男がどこにどうして横はつてゐるのか、マリはそれを見てみやうとも思はなかつた。かの女はただ自分の腕のなかに自分の顔を埋めて、今はもう靜かに泣いてゐた。……あの不斷のポタリ、ポタリ。水のしたたりだが、雨だれでもない。家の内にこもつてひびく。何だらう關そのもののなかに泌み入るやうにポタリ、ポタリ。そのテンポの早い水滴を耳ざはりにして怪しんでゐるうちに、マリはいつの間にか泣き寢入りに眠りに墜ちて行つた。

……寒けがして高木は目が覺めた。ザラザラする手ざはりに氣がついてみると、高木は床の絨氈のうへに打倒れてゐる自分を見た。長椅子の脚に近、床の上のさばつてゐる自分を、高木はつきり知つた。あの長椅子のすぐ下だ。高木はむづくり起き直つた。今まで倒れてゐた暗紅色の土葺古敷だ。毛布を引きかきついで、マリはしかしつつましく寢てゐた。おい、起きないか。もう夜が明けてゐるんだ。おい、起きろ。

高木は毛布の上からマリの肩あたりを大きな手でつかんだ。起きないか。荒々しい聲であつた。ばつちりと目を睜いてマリはすぐ情なく感じた。マリは高木の要求することを誤解したのだ。高木が夜明けにまた再び昨夜のやうなことを望むのだと思ひ込んでゐた。

しかし高木は叫んだ。こら。起きないか。夜が明けてゐるんだ。起きて出て行つて貰はう。高木は自分の聲があんまり大きいのに氣がついた。貴様、目がさめてゐるんだらう。出て行け。……その前に言つて置くが、おれはゆうべ酔つぱらつた。少しばかり酔ぱらつてゐた。俺は何もかも知つてゐるんだ。貴様はなぜ、おれに手むかひをしなかつたのだ。淺ましい男だ。金をくれたかと思つて女を手ごめにするつもりかとなぜ、お前はさう言はないのだ。おれは今も言ふとほり少しばかりしか酔つちやゐなかつたのだ。何とか言ひさへすれや、いかに酒の

氈のうへへがつくり坐つたまま、大きな窓にしらんと夜明けつつあるがらんとした自分の晝室を高木は見まはした。一たいおれはどれぐらゐ酔つてゐたらう。高木はそれを考へてゐた。おほろげではあるが高木はすべてを順序立てて思ひ出すことが出来た。ただ知らないのは絨氈の下へ寢てしまつたことだけである。——今、あんなにひどく卑してゐるのは、あの時水道の口から水を呑んだあとをしだらに栓をして置いたからである。その程度には酔つてゐたのである。いや、その程度にしか酔つてはゐなかつたのである。毛布を出して来てやつたからこそマリは毛布をかけてゐる。住居の方に歸るにつけて、その出た後を閉るやうにマリに言ひつけようとして部屋へ再び這入つたことも知つてゐる。その時に見たマリ姿。それを見てひよつくり思ひ浮べたしやも屋に居た時のマリ姿の坐りさま。むづちりとはじけたやうにだらしない膝をあけて、それは肉體的にイケイした女にだけ特有な崩れた形。厭はしいものだつた。その厭はしいと見たものが、酔つた時には、しかも思ひ出して、思ひ出して高木には不思議と却つて誘惑的であつた。いや、誘惑といふほどのものではない。ただ目の前に居る女を輕んずる——物の數とも思はないだけの氣持だつた。酔つた高木の眼にはマリはてもなく一個の賣笑婦だつた。

上とは言へ、おれは自分を反省することぐらゐは知つてゐるつもりだ。——自惚れぢやいかなんせ。お前に惚れてゐて、おれが君に金をやつたと思つてゐるのか。おれは欲くもない金を持つてゐただけだ。捨ててしまふ代りにくれてやつたのだ。冗談に人をだまして取つた金だから、せめてはお前が使つたら、その金も清まるだらうと思ひついただけだ。——お前を口説くつもりなら三百圓は高いんだ。お前は、高が十五圓で賣つてゐた女ぢやないか。——おれに金を出させる時、お前は一たい何と言つた。三浦に捨てられてこんな拔穀のやうになつた心持で、どうして今更あんなつとめが出来るものかと言つたのは嘘か。金を貰へば身を任せるものときめてゐるな。淫賣根性だ。——初めからおれをそんなけちな男だと思つてゐたのだな。ふむ。さう思つておれをひつかけたのだな……

無意識に大きな絨氈の外枠の模様に沿うてぐる／＼と歩きながら、高木はそれだけの事を言つたが、頭がしびれたやうに鈍つてゐて、言葉がもつれて、思つてゐることは充分に言へないもどかしさだつた。それでも言つてしまふと氣がすんだ。高木は言ひ足した——

ともかくもおれはもう君とはつき合はない。直ぐ出て行つて貰ひたい。——もう夜は明けてゐるんだ。宣告すると高木は、扉をあけてどこかへ出て行つてしまつた。







重い唇を開いた。

それでは、杉田とし子はもうお宅にはおつしやるのですか。

さうです。行つた先も知らないのです。——僕はまた僕であなたがさうお尋ねにならなければあの女は、あなたのところへでもたよつて行つたものと思ふくらゐです。——失禮ですが、あなたはあの人の何なのですか？

相手は容易に答へようとしなかつた。高木はそこで重ねて言つた。この前の晩に、この人が三浦のことを言つた時にも別だん注意をしなかつた事などを思ひ合したからである。もしやあなたは三浦梨花のことに關係をなすつた辯護士の方で、それ以來あの女とは御知り、ひではないのですか。

三浦梨花？ と申しますと？ ……なるほど杉田が一緒にゐたとかいふ男のことですか。いいえ。私はそんな人は在りません。

さう言つたとき彼はまた永いこと押し黙つてしまつた。高木は彼が自分に對してそれほど慍つてゐるのだと思つた。それを、この温和な男が何も言へないでゐるのではないだらうか。

しかし高木のその考へを裏切るやうに彼は言つた。——  
ともかくも、三百圓、——ではない、二百圓だと仰言るなら二百圓、それだけでもどうぞお受取り下さいませぬ。

ね。また事情によつては或はお受取る方が不當かも知れない……

全く高木はこの相手の人物に對してひどく好奇的になつて來てゐた。高木の氣輕るな調子に對しても、不可解な、物は永いこと沈黙を固守した。高木は、分の面前にゐるその人の廣い色の白い額の上には汗がにじみ出て來たのを見た。此前の夜會つた時には木の間からのうすら明のなかの立ばなしで、何も何もよくは見えなかつたが今つくつくと眺めるとこの人は一たい柔かな女性的な男で、その話ぶりもまた不明瞭ではないがくどかつた。年とてもまだ三十一二にしかなるまい。高木がそんな觀察をしてゐた時であつた。彼はやつと顔を上げて、一應、高木の顔を驗すやうに見てから口をひらいた。

あなたは何もかもそのままに打明けてお話し下さる。だから私も申し上げることに致しますが、これは私の一身上の祕密に屬しますこと、……さういふ前置きをして彼が高木に話し出したといふのは、まづかうなのである。——あれは、杉田とし子は、あれは實は私の妹なので、御察しのとほり父の違ふ妹なので、飾りもなく申し述べますが、私の母は私を生むと間もなく私の父からそむいて私を遺したままで出て行つたのです。その後になつて私の生みの母から生れたのがとし子だといふことです。この事は今から五年前に母が臨終の

私はそのつもりですつかり用意をして參つたのですから。あの節にいたしましたも私は、六百圓なり七百圓なり、全部の金高を私の手からととのへる筈だつたのでございますから。都合でそれが出來ないばかりに、あなたにそんなお金の御心配の外に、今伺へばそんなお氣持のお悪いやうなことでおさせしてしまつたやうなわけ……

高木は思はず苦笑して言つた——氣持の悪い事をしたのは私自身のせいですよ。あなたにそれまであやまられたのぢや僕は挨拶に困つて了ふ。

相手の磊落な調子にこの妙な紳士も引き入れられながら、

——ともかくもお金だけは是非お受取り下されなげや。  
いや、いけません。その金だつても私はわざ／＼あの女のために用意したのではないのです。高木はきつぱりと斷りながら、その三百圓なるものが美術半可通の支拂つた當然の税金で、しかし高木もその外の誰もお受取るに相當した人はない金だといふことを相手にありのままを明してから、高木は言つた——さういふわけです。私としては、何一つあなたからそのお金を受取る理由を發見することは、來ないのです。それよりもですね、私はあの女の爲めにそのお金を私にそんなにお受取られたがつてゐるあなたが、あの女の何なのだか、あなたが金を受取れとおつしやればおつしやるほど、それが

時に母の口から私が聞かされたのを、母が申しますには、とし子はその當時伊太利公使館の書記をしてゐた人との間に生まれたのださうです。その書記は、或る時、本國政府から呼ばれたといふので、半年ほどすればかへると言つて出立したまま、その後二週間ほどすると、留守をしてゐた母の手へ公使館から書きものが來て、人に見て貰ふとそれはとし子の父の轉任辭令のうつしだ。——そんなものがあるかどうかは知りませんが、母はさう言ひました。母はつまりだまされたのです。それから後の母の生涯のことはどうぞ詳しくお聞き下さいませぬ。いや、私も知らないのです。私のそののちのこととは知らないでくれと、母も私にさう申しただけでした。とし子を母はよその家へやつてしまつて、その家では年ごろになつたとし子を望まれるままに外人の妾にした様子です。母が無くなつたのは、丁度そのころの事でした。母はとし子のことを言ひ出して、どうやらあの子はこの生みの母の身の上をこの世のなかでもう一度繰返すやうな氣がして仕方がない——さう言ひながら、母はとし子の行末を、兄としての私に托して死んで行つたのでした。私はその後かげながらとし子の事を見守つてゐたつもりです。あれが最初の男に捨てられて、それからどういふ事情であつたものかたうとう賣笑婦にまで身をおとしたと知つた時、それも前の男との間に子供まで持つてゐると聞いて、私は母の言つた言葉が一々實現され



てくるやうな気がしたのです。その時、あれを自分のそばに引取つて、歳もまだ若いし何とでも出来ると思つたのに、その時私はまだ部屋住みで、しかも父は母のことに就いてはどらやら終生消えないほどの不満があるらしく、私が母の臨終に會つた時にさへ父にかくれて行つた程でしたから、その母のそんな子供などを、父は到底意地にも引き取らうなどとは言ふまいと思つて、私は方法もなしに二年を過したのです。

とし子が新らしく、夫のやうなものを持つてその社會から出たと聞いて、稍安心をしたのも、ほんの一ときでした。その男が窃盜罪の判決まで受けてゐると判つて、一さう心配をしたものです。その時には父はもう亡くなつてゐました。私の思ふとほりにしてよかつたのです。それが、私が或る良家から妻を迎えた丁度その當座で、私は自分の新らしい妻に、自分の本當の母の生涯やそんな妹があることを言ふのはまだ早いやうな気がしたのです。そのうちにいい機がきつとあると思ひながら、さてそれを自分が引取つてどうすることが出来るようかなどと案じたりしてゐるうちに日が経つて、そこへあの地震でした。私はやはり横濱にゐたのです。家族も少なくなつたしみんな無事であるにつけても、怖ろしい目に逢つて肉親の愛が一層強く感じられる最中に、とし子の行方も生き死も、一時は全くわからなくなつてしまつてゐたものです。もし、とし子が死んでゐたならば、私は自分の名譽と幸福とを

やが受取をして返して行つたマリの借用證とがあつた。高木は筒封のうらをかへして見た。それを見ながらあの紳士は氣抜けたやうに言つた——

ところは何も書いてないのです。——その手紙が妻の目に入つて、それがきつかけで私はたうとうとし子のことを妻に打明けたのです。妻は泣いて、なぜ一日も早くその事を私に言つてはくれなかつたと私を咎めてくれたのです。今こそと思つてこちらへとし子を迎へに上つたのでした。あれの居どころはもうちよつとわからないのですねえ。

わけありませんよ、それは、ジョオヂ——といふのは御存知でせう、とし子さんの子供だが、その里へ行けば直ぐ知れるでせう。たしか目黒とは言つたが私は知らない。だが、上總やは知つてゐる。

マリ——杉田とし子の兄は、向島へ今から行くと言つて喜んで出た。

その翌日、高木宛の速達があつて、向島には上總やといふ周旋屋はあつても、事件解決候也のあとに記したやうな所番地もなく、また主人の名も違ふ。やつと捜し當てたその上總やは全然この事件には何の心當りもないらしいとある。——高木はその落膽と絶望とを訴へたつもりらしい手紙を見て、しかし失望しない。三浦がたしかジョオヂの里を知つてゐる筈だ。速達の手紙を巻きながら高木は、在獄中の三浦に明日

護る爲めに妹一人の生涯を見殺にしたといふ氣持が、その時、始めて私に湧いたのです。……

港ホテルへマリを捜しに来る客があると上總やの言つたのは、出まかせかと思つたが形のない事ではなかつたのか。マリの行方をそんなに尋ねたといふのは、この紳士——マリの兄であつたのか——高木は、本でだけ見るものと思つてゐた小説が、身邊三尺のところにあることを感じた。

——さういふわけで私は、この間あなたにお目にかかつた時、妹を一時この方に預けて置きさへすれば大丈夫と安心してゐたのでございました。

お氣の毒でした。一向安心のならないところへお預けになつてゐたのですね。ハ、ハ、ハ。高木の言葉は大儒主義と情愛とが綱ひませになつてひびいた。高木は更に、愁然としてゐる杉田とし子の兄に言つた。——さうして、あの女、とし子さんは上總やとの事件が解決したことに就てはあなたに何かたよりがないのですか。それよりも、あなたはとし子さんとあなたとの間柄をもうとし子さんにお話になつた事があるのですか。

いやそれはまだ何にも言はないのです。事件解決の事に就てはその翌々日の朝、ただこれだけの便りがあつたのです。

彼が洋服のポケットから取り出して見せたのはただ一筆、お話をさました。有難う。といふ文句と同時してあの上總やにでも面會出来るかしらと考へた。高木の驚いたのは寧ろ、名刺まで用意し、鑑札まで示したあの上總やが、跡かたもないもぐりであつたといふその事實である。



### 砧 (田舎のたより)

妻は私のために綿入れを縫つてみます。姉はS町の女學校にゐる自分の子のために茶色のスエーターを編んでやつてみます。母は、このふたりのつき合をして、ごくゆるくと石臼を廻しながら、これはお正月の餅つきの用意を、手廻のいいことに今から米の粉をひいてゐるのです。——煤けた茶の間のうす明るい電燈の一つの光をたよりに、一家の女たちは集つてゐるのです。

私だけがぼんやりとひとり、その長火鉢に手をかざしてゐる。おぼつかない火だけれども、別に手近の炭をさへつがうとは思ひません。十一月に水仙の咲くこの村では、晩秋初冬も名ばかりで、夜寒でも懐手したゞけでしのげるのです。かうして母や姉に雑つて静にある妻を見ることは、私にとつて愉快なことであります。私がつひひよつくり連れて來たのだから大丈夫とは思ひながらも、多少案じないでもなかつたのですが、來た者も迎へた人たちもどうやらうまく折合へるらしいのは有難いことです。わけても妻が姉を好いてゐるらしいのは何よりの事です。といふのは、姉は子供の時に耳

しいものも無い。  
「お母さん」

黙つてゐる人々の間へ、私が言葉を投げ入れたのです。私は子供のころの記憶を呼びおこしたので言つたのです——

「むかしは、うちにも砧があつたのう。——よくみんなが打つたものだが」

「砧？」母は挽く手をちよつと休めた。

「そら、あの槌のやうなものでこつ／＼着物を打つたでせう」

「洗濯ものをのう。——今でもどこぞそこらの隅にあつた」

「今はあんなものを使ふところはないやうだが」

「さあ。氣のつかんうちにすたつたのう」

「一たいどうするのだらう——洗濯ものはやつぱりあるだらうのに」

「それや、むかしのやうに糊を固くせんのであらうかい。——でもあれでうつとよく目がつんで光澤が出るのぢやがのう」

「たき子」私は妻の名を呼んで「お前、知つてるかい、砧を」

「は？」妻は噛んでみた糸くづを指で摘み出しながら「どんなものでせう」

「そんな事をいふやうぢや知らないのだね——あれはえいも

を悪くしてゐる上に縁も不合せでふたりも子供がありながら家に歸つて來た人なのだから、私としては妻が好んでこの人の話相手になることは最も望ましいことなのです。姉はごく單純な人で、見かけも四つも年上でありながら私よりは二つ三つも妹に見えるやうなのですが、妻もごく幼稚なところが双方で却つて氣が合ふらしいのです。……

母が時折りに挽く手を休めると、臼の音がやんだあひ間あひ間に次の部屋から狐戸越しに父の寢息が洩聞えてきます。父の病氣は大したことにはならないで済みさうです。その代り耳の底で出血したのがたうとう片方の耳は全く聴えなくなつたさうです。しかし六十四にもなるのですからそれぐらゐのことならば仕方はありますまい。で、父は未だ日の暮れないうちから寝ます。

おだやかな晩で、ちつと耳をすませなければ濁の音もわからないほどです。漁船の石油發動機のみぎきが、——程近い港から出たのか、歸るのか、あたりを振動させて通り過ぎた後は再びちつそりとして、家のなかの臼の音より外に物音がのちや。靜かな落着いた田舎らしい……  
「もとほわし共の田舎などでもようやりをつたものですががねえ」——かう、不意に話の仲間へ這入つたのは、自分の部屋でもう寝た筈の庭男の源さんです。母が言ふ——

「源さん、まだ起きてゐたのかい」

「へえ。あまりはやく休むと夜なかに目が覚めますで。おさき御免を蒙つてもう横にはなつて居りますのぢやが、お話は伺つて居りますのぢや」

「田舎でほんとうに退屈ぢやのう。構はぬからそつ、から何でも話すがええ。——町ならひやかしにでも行くのにのう」

「へ、へ、へ。——さき程、ちよつとそこらへ出て見ましたが、人つ子ひとり通り居りませんでした」

源さんは、三河の方からS町へ流れて、？)來た者で、何の眞似でもする器用な調法な男です。それでこのごろうちでは用がある度にわざ／＼町からこの男を呼ぶやうにしてゐるのです。木を植ゑさせたりしてみると、この男はなかなか嗜みのある趣味的な性質らしいのです。酒も煙草ものまずよく働くのに貧乏をしてゐるのは女道樂だらうといふのがみんなの鑑定なのです。

「それでもかういふ靜かなところはよろしうございますな」話相手が欲しいと見えて、源さんはみんなの黙つた時に言ひかけたのを母は受けて、



「何のいいことがあるものかの、時たまに来る人はさうも思  
うぢやろが、住むのならやつぱり都ぢや。こんなところで暮  
す人は損ぢや。——今はかうしてみんなが集つてゐるのでさ  
うも思はんが、こんなところでひとり留守番でもしてゐてご  
らん。私はようさう思ふのぢやが、ほんとうに生きてゐると  
いふよりは死ぬのを待つてゐるやうなものぢやと考へること  
があるよ」

「さういふのが本當に氣樂な、仕合せなといふのでございま  
すよ。わしなどのやうに暮しに追はれてゐたんぢや、てんで  
そんなことを思ふひまだつてありやしませんわな。——仕事  
にくたびれりや、そのままぐつすり寝てしまひますし、でな  
い時にや暮しの事やなどばかり考へてゐますものでね。——  
田舎は暮しようございませうい」

「さあ」と私は半ばひとり言のやうに言つたのです。「こんな  
ところで氣樂に住んでゐるのは、まあ磯ものやうなものぢ  
やな」

私の聲は低かつたから、石臼の音に消されてしまつて人の  
耳には入らなかつたかも知れないし、入つても意味が通じな  
かつたかも知れないのです。私は今日の晝間見て來たものを  
思ひ浮べて獨合點なことを言つてゐたのです。

こちらの釜の、水のなかに、ぼつんぼつんとくつ附いてゐる  
貝を、小さな金具でもぐのでした。どんなに南國だと言つて  
ももう冬の海ですから、さすがに水はつめたくない事はない  
のですが、山で生れて都市で育つた私の妻にとつては、實に  
珍らしい遊びであると思へて、子供のやうに喜んではい  
でゐるのです。

「あら、あら。あれは何でせう」

手のとどかないあたりの水の中を覗いては、そこに美しく  
揺れてゐるものを指して、そんなことを言ふと、浦の女房は  
答へるのです——

「あ、あれかのし、あれは、やつぱり磯の草ですのし」

また不思議なものを見つけたと見えて同じことを尋ねる  
と、答へる人はまた同じことを言ふのです——

「あ、あれかのし、あれは、やつぱり磯の蟲ですのし」

彼女たちの問答を聞いて私は思はずほ、笑まれた。磯に生  
えてゐるものは磯の草、磯に生きてゐるものは磯の蟲。浦里  
の人にはそれより外の名は要らないのだ。その代りにはたと  
ひ小さくとも食べられるだけのものならば磯ものうちにも  
名はある。私は草鞋のやうな形の小さな貝を見つけて食べら  
れるのかと尋ねると教へてくれるのです——

「あ、そりやせというて、おいしいぞのし」

空には其の日のやうにのどかで動かない雲が淡く浮んで、

ここから半里はんりたらずのところに靜かな入江があるのです。  
玉の浦といつて西行法師の歌などにも出る名所なので、繪の  
やうなといふより外に仕方のないやうな、この荒海の地方と  
しては珍らしく優しい曲浦なのです。一度そこへ散歩してみ  
たいと言つてゐたのですが折から風もなかつたし、それに汐  
時がいいといふので、私たちは——姉と妻と、それから私の  
昔の友達と四人で、その日、その砂濱へ出かけたのでし  
た。浦の子供たちは蛤を拾つてゐました。鍬を借りて、私も  
あちらこちらと歩いてみました。やつと二つ見つけただけ  
でした。

そのうちにその街道で掛茶屋をしてゐる知り合ひの女房  
が出て來て、ぼつたり（東京で言ふびくです）などを用意し  
て、私たちを磯へつれて行つてくれたのです。蛤はとても拾  
へさうにもないから、せめて磯ものでも採らしてやらうと思  
つたのでせう。磯ものなら誰にだつてとれるのです。

磯はその入江の鼻にあるのです。

磯ものといふのは磯の岩の間などにくつついてゐる小さな  
貝類のことを、さう呼びならはしてゐるのです。それを採つ  
ては、土地の人たちは湯で茹でて、そのごく小さな身を針で  
せせり出してなぐさみに食べるのです。名のあるのが不思議  
なほど小さな、さまざま貝なのです。

この入江の磯の波はただ川瀬ほどに揺れ騒ぐだけなのです。  
汐の引ききつた岩の上には、大小さまざまな凹みが一とき海  
とは全く縁がきれてしまつて、そこは獨立した小さな水溜り  
になり、岩に圍まれてそよ風にさへふれずに、水はぢつと凝  
り靜まつてゐる。その深くもない水の底の岩まで、日かげは  
泌みとほつて、いみじく屈折する光のなかでそれぞれにも  
ろ／＼の影をつくり出して動くともない「磯の草」や「磯の  
蟲」がある。大洋のはげしい深い流れから最も遠いところ  
に、かうして朝夕の潮の満ち干のまにまに小さな生命を守つ  
てゐる磯ものたちを私は不思議に思うたのであつたが、今こ  
の靜かな夜に、妻や母の傍に落附いてゐる自分にふと氣がつ  
いて見ると、自分こそいま磯のものだといふことを考へたの  
です……

「はいさ。それや誰にしたところが何やかやと取紛れて日を  
送つてゐるのさ——心配や苦勞にねえ」

どういふ話題からの結論だか知らないが、母と源さんとの  
會話は、母のかういふ言葉でとぎれました。

「もう何時でございませうか」

しばらくしてまた源さんがいふのです。この間はみんなの  
心持を代表してゐました。といふのは、源さんがかういふ  
と、聞えなかつた姉だけは別にして、外の三人は三人とも一  
緒に顔を上げて時計のかかつてゐる柱の方を見上げたもので



す。

「六時半？」母は自分の目を疑ひながら「七時半かい」  
「六時半ぢやが——止つたかな」さう言へばさつきから時計の音がしてゐないやうなのです。私は自分の顔の近くにあつた電燈を傾けて、影になつてゐた時計を照したので、仕事に熱中してゐた姉は光線が變つたので、びつくりしたやうにきよとんとした顔付で、私を見るのです。私は姉のために聲を高く言つた「駄目だ。止つてゐる」

「さうぢやらうのう、もうおつつけ八時ぢやろか」  
「なんぼ夜長でももう八時にはなりませうて」

黙つて時計を見入つてゐた姉は、つと時計の下へ立つた。時計の止つたのは姉と私のせいだつたからです。毎日十五分ばかりもおくれるので夕方ふたりで振子を直したのでした。時計はその後に直ぐ止まつたらしいのです。

姉は先づ少し歪んでゐたらしいのを眞直になほして、相談をするやうに私の方へふりかへつたものです。

「さう〜。——それでいい。——八時十分前ぐらゐ」

姉は私のいふとほり針を直し、それから振子をもう一ぺんゆすぶつて置いてから、安心して坐にかへつて來た。けれどもその時にはもう振子の音がしなくなつて、見てゐるうちにそれが動かなくなつてしまつたのです「駄目だ。また止つた」

もまだ心残りだと見えて、恨めしさうに時計の方をふり返つて「どうしたのぢやらう」

「二十年も直したことのない時計ぢや止りもしようぞ」

罪は私にあるのです——日に十五分遅れやうが二十分進まうが大して差支へのない田舎の時計を、苦にしたのは私だからです。用もない「磯の蟲」「磯の草」の名を知りたがる妻と一緒に、私もいつの間にか都會人になつてゐるのかも知りません。それはともかくも、止つた時計は一騒ぎでした。私はそれをきつかけに立ち上つたのです。そのついでに私はそつと背伸びをして首をまげて、ちよつとさつきの姉の眞似をしてみました。

「およしなさいよ」——妻は笑つて小聲で、さう私をたしなめたのです。

\*

私は小説家と呼ばれるものの一人で、それから書齋をひどく取り散らす癖のある男です。どんなによく片づけた場所でも、私は三時間でめちやめちやにしてお目にかけます。

私はその夜も、友達がこの間贈つてくれた彼の譯著書をさがすのに骨を折りました。私はそれを通讀した時に、氣に入つた一節があつて、今晚それをもう一度讀んでみたいと思ひついたので。私はこれほど手短かにうまく書かれた田舎生

姉は動かない振子を見出してもう一ぺんそれを揺ぶりに立つたのです。さうして安心して歸らうとする時、もうセコンドの音はやまつてゐるのです。——「また止つた」

姉はふりかへつて「嘘。動いてゐるのに」  
「いや動いてゐても音がしない」

「本當ぢや」と母も言つた。

坐りかけてまた立つた姉は、ちつと振子を見てゐたが、だんだんその振幅が小さくなつて、たうとう止りさうになつたので、もう一ぺんそばへ行つて手で強く振子を動かして置いてから、今度は遠い耳を時計のそばまで持つて行くために背のびをして、肩を聳やかして體をびつたりと柱へすりつけたのです。時計は一分とはつづかないで音がやんでしまふ。姉はもう一度振子を動かして置いてまた耳を澄せる。

「ハ、ハ、ハ——あの様子をごらん」

鼠をねらう猫のやうな眞剣な姉の様子が私にはをかしかつた。みんなも笑つた。姉は同じことを十ぺん以上もくり返して、その間に姉の手で動かされる時計は五分も進行した。姉はすこし肝臓を起したやうに、皆が笑ふときにもつこりともしなかつた。

「あ、もうよし。あした時計屋へ持つて行かうよ」

母が慰めるやうにさう言ふと、姉は口を少し開けて子供のやうな苦笑を裏しながら、やつと離れかへつて來た。それ

活の描寫はないと思ふのです

何といふ幸福なこつたらう！——ポオドレルやエル

レエヌを讀まず、ヌウヴェルアテネにも行かず。向ふのブルジョアのやうにドミノでもやつたり、兎に角、あまりに緊張した生の意識を呼び醒すやうなことをしないでゐたら、——眠つたい田舎に住み、働ける花園を持ち、妻や子供を持ち、毎晩靜かに人生の些事をおしやべりをしてゐたら。明日は躑躅の手入れをしつかりやらなければならぬ。蟲の奴がすつかり食つてしまひをつた。馴れた鴉が逃げて行つた。お母さんが教會の歸り道に御祈りの本を落したのに盗まれたと思つてゐらつしや。善良で正直で、政治のことなどはなんにも御存知ないお百姓はずるぶるかなり幸福でなければならぬ。……

とそんな事が書いてあるのです。全くそのとおり。……早く密柑をいでもしまはねば霜がおりると味がなくなつてしまふ。菊ももうすつかり枯れてしまひをつた。馴れた山鳩が來なくなつた。去年鐵砲を打つたものがあるからだ。お姉さんは耳が聞えないものだから、セコンドの音がしなくなつても振子さへ動いてゐれば時計はかかつたものと思つていらつしやる。——ほんとうにこれが我々の生活なのです。私は田舎へ來て何一つとして仕事らしい事はしないのです。またしよらといふ氣にもならないのです。今もかうして部屋をかたづ



けてみると、東京の雑誌社から新年號への催促が手紙や電報  
でいろいろと言つて來てゐるのが目につくのですが、私はそ  
れでも書かうと思ふこともよく考へもしなければ、題一つ極  
めてゐないのです。さうして、東京にゐる同じ仲間や、また  
その仲間をせつてゐる雑誌の人々を思ひ出すと、ちよつと  
彼等はみんな何のためにあんなに躍氣になるのだらうといふ  
やうな氣持にさへなるのです。たくさんの人が集つてその勢  
で押流されてたどり紛れてゐるのぢやないだらうか。——  
私はもとより田舎のこんな自分の生活を充分によしと思ふこ  
とは出來ないにしても、それでも東京にゐてみんなのやうに  
その日を送つてゐるより無意義だとも思へないのです。

この間から讀みかけてゐる佛蘭西革命史を、棚の上へ積ま  
うと思つてとり上げると、この大きな本のなからひらひら  
と落ちたのは一葉の往復はがきでした。拾ひ上げて見ると、  
忘れてゐたが、それはこの間さる婦人雑誌社からよこした質  
問でした。

「貴方の身邊に見出さるる幸福」

といふ題に答へよといふのです。私はこの偶然のことにち  
よつとした興味を覺えたのです。靜かな田舎にゐて革命の歴  
史を面白がつて讀む。その革命史のなかに葉がはりにかうい  
ふはがきが出て來る。幸福？「何といふ幸福なことだらう……  
……限つたい田舎に住み、働ける花園を持ち……」

ほんやりと中學生のやうな感想に耽りながら、私はこの書  
齋の壁の或る場所へ目を向けたのです。そこに柱かけとして  
彫られてある板の上の文字を、日頃見なれたものを珍らしげ  
に私は改めて見なほしたのです。「緘口勿言天下事放懷且讀  
古人書」——私の祖父の坐石銘なのです。

——私は二三日前に、縁の日向で父が私に聞かせた話を思  
ひ出してゐたのです……

\* \* \*

父の意見によると、祖父の坐石銘といふものは祖父の鏡村  
自身が撰んだものでなく、恐らくは曾祖父椿山が與へたもの  
らしいといふのです。

少しばかり私どもの家のことを記すのを許して下さい。少  
しくどく書くかも知れませんが——忘れてしまはないうちに。  
祖父の鏡村は嘉永年間には京都で書生だったのです。ちや  
うど明治維新の風雲が急な時代に、彼は諸國の志士たちが集  
つて來た新時代の中心的な土地に青年として住んだわけなの  
です。彼が家代々の業である醫學を學んだのは秋吉南豊先生  
だし、儒學を學んだのは城谷中書先生でした。城谷氏は曾祖  
父椿山の友人で、そんな關係でその塾に學ばせたのでせう  
が、この人は當時近衛公の侍講であつたさうです。また醫學  
の師の秋吉先生は有栖川宮家の侍醫であつた。つまり鏡村の

When June is come, then all the day  
I'll sit with my love in the scented hay;  
And watch the sunshet palaces high,  
That the white clouds build in the breezy sky.  
She singeth, and I do make her a song,  
And read sweet poems the whole day long:  
Unseen as we lie in our haybuilt home,  
O life is delight when June is come,

さうにちがひない。しかも、「何といふ幸福なこつたらう」  
といふ時に、彼の言葉のなかには惡意のない輕侮が何となく  
籠つてゐるし、「日なたの窪の磯もの」と考へる時に私も亦、  
自分のなかに自らを輕侮する氣持をかすかに感じるのはどう  
いふわけであらうか。さうしてこの大きな本——革命史のな  
かで死んでゐるたくさんの人々とても亦必ずしも我々と別様  
につくられてゐた人間ばかりでもなかつたらしい。「幸福で  
はないのだ——常に我々の居る可きところは。確に、幸福の  
中ではない。悲壯の中だ。」かういふ言葉を私が今聞いても、  
私は彼に同感しないでもない。たとひ逆押しに流されようと  
も潮のただ中にゐた方が、幸福（もし生甲斐といふ言葉と同  
じものならば）なのかも知れないのです。

師家はともに勤王の人であり、なかでも、秋吉先生は頼山陽  
の高弟で、秋吉家には頼山陽の書畫幅數十幅もあり書翰は百  
を以て數へる程あるさうで——これは私の父が拜見したさう  
である。かういふ秋吉先生であるから、従つてその弟子のう  
ちには、所謂勤王の志を抱いてゐる青年が澤山にゐた事は推  
察できるのです。つまり鏡村の同門はさういふ新思想の一團  
であつたらう。さうして鏡村自身がやつぱりさういふ青年の  
一人であつたかも知れないのである。いや、どうもさうらし  
いのです。今、家に残つてゐる書簡のなかに鏡村がその父の  
椿山に送つたものにその間の消息を語るものがあるのです。

近日、近衛公が勅使になつて江戸へ行く時に、その近衛公  
に扈從し侍講の城谷先生も東上される筈である。その城谷先  
生の隨行として弟子の鏡村に命ぜられさうに思ふ。一度、東  
都を見たいと思つてゐる折からではあり、この上ない好機と  
思ふのだが、それに就ては總髮の頭の額を剃つて士風にしな  
ければならない——それらの事を、鏡村は父の椿山に願つて  
ゐるのです。しかし椿山はそれを許さなかつたのです。ま  
た、當時、新刊の日本外史を讀みたいといふので鏡村はそれ  
を買ふことを椿山に乞ふてゐる。しかも椿山はこれをさへ許  
さずに、師の與へるものだけで満足しなければいけないと小  
言を言つたと見えて、鏡村は閉口して謝辭を書いてゐるので  
す。



これらの事だけを見ると椿山はいかにもわからずやの頑固おやぢに見えるのですが、椿山は子供の教育のためには、鏡村の幼少の頃からあらゆる努力を、むしろ身分以上に奮發してゐたのです。鏡村が椿山にとつてたつたひとりの男の子であつたせいもあるでせう。一たいこの私たちの故郷である大洋と深山とで四方を圍まれた半島の田舎から、當時京都へ修業に出した事さへ近在の人々にとつては驚きであつたのである。それほどに愛惜してゐる自分の子が、自分の友人に連れられて江戸見物が出来るといふ機会を拒み、また嘖々の評判のあつた當時第一の書物を見ることを禁じたのは、椿山は専ら當時の新思想の運動を恐怖したからであつたのです。自分の子の性質を知つて椿山は、鏡村が少しでもその渦に近いところへ泳ぎ出るとを邪魔をしたと言へるでせう。椿山は田舎にゐて時勢に疎かつたからかといふと必ずしもさうではないやうです。椿山は寧ろ先見の明があつた人で、椿山の怖れたのは新思想そのものではなく、たゞ自分のひとり子がそれに投ずることだけであつたらしいのです。

さうしてそれには多少の由來するところがあつたのです。椿山は大鹽平八郎の亂ですつかり懲りてゐたらしいのです。ごく遠いつゞき合せからではあつたが椿山自身がその事によつて取調べられたりして、一層身に沁みてゐたものと見えるのです。

鏡村はその父の命じたとほり醫者になつて、その故郷の八尺鏡野（やたがの）へ歸つて來た。さうして自分で鏡野隱逸と自分を呼んでゐた。故郷の地に牧歌の如き生涯を喜ぶ者と彼は言ひながらも、しかしその志は本當にどうであつたかはわからないのです。故郷へ歸つて三年ほどになつたが、近い港へ黒船が來たと傳へられたのを見に行つて、その歸りに病氣になつてゐたのです。當時のヌウベル・アテネを知つてゐた鏡村にとつては、「何といふ幸福なこつたらう——この日向の窪の磯ものは」といふ歎聲があつたかも知れない。無かつたかも知れない……

そのやうな自分の祖先のゐたところが、この家なのではないか。——私は其のことを思つて何氣なく考へてゐたことどもが、急に身のまはりであつたことに氣がついたのです。さうして、二十七才で無くなつた鏡村より、私は年とつてゐるやうな氣がするし、椿山よりはもとより若いけれども——さうして、かういふ事を言ひながら、私もいつかは椿山のやうに年とるだらう……。私はへんにわびしい——つまりは落着いて悲しいやうに嬉しい氣持になつて來てゐるのです。

私はあまりはつきりと言ひすぎたかも知れませんが、これらのすべての考と氣持とはごくおぼろげに私を柔かくつんだのだとお思ひなさい。何故かといふのに私はこれらの間に

大鹽中齊が亂を起すその當時に、その熟頭をしてゐた魔洞湯川民太郎は、私たちの郷黨の士で、また椿山には姻族に當り、椿山は幼い頃の魔洞に素讀を與へた事もあつたのです。——その魔洞から、後には少年の鏡村が教を受けたのですが、魔洞は中齊が亂を起すすぐ前に、父の寛仲が重患だといふ理由で同門にあつた弟周平と一緒に、大鹽塾を辭して歸省したのです。——事實は別に事情があつたかも知れないのです。さうして中齊が事成らずに自刃した後で、捕吏が來て魔洞の民太郎も弟の周平も一應縛せられた時に、椿山も亦さまざまな關係から多少の疑を免れることが出来ませんでした。取調べられて後には何事もなく、魔洞等と一緒に放免されはしたけれども、それ以來といふものは、椿山は自重してもう天下の事を一切言はなくなつたのです。「善良で正直で、政治のことなどはなんにも御存知ないお百姓はずるぶるふんかなり幸福でなければならぬ」。さうして維新の氣運を見ても佐幕の思想を抱いてゐるかのやうに見えたのです。さうしてたつたひとりの愛兒鏡村をも戒めて、天下の事を言はず、ただ古人の書に親しむことばかりを勧めたやうに見えるのです。年とつた椿山は自分の幸福の爲めにも、また鏡村の幸福のためにも、鏡村の血氣と壯志とを案じて、鏡村が田舎の生涯を樂しむことを欲したのであらうか……。——それにしても、日本

機のみはりを珍らしくも自分の手でほほきれいに片づけてしまひ、それから机に對して別に用もないのに硯を磨つてゐたのでした。それから巻紙をひろげると、「碇」と一字、書いたのです。

不思議なことに、私は今までにおぼえない俳句といふものを書きちらしてゐたものです。

ありながら碇うたぬ里となりにも  
この者に碇うたせて給へかし  
嫁姑こもごもに打つきぬた哉  
碇うつおのが女房にちよと惚れた  
浦里は浪なき夜をきぬた打つ  
ひびききて遊子の胸を打つ碇  
一村は落うどにしてきぬた哉  
義盛の裔が打つなる碇かな  
御一家の打ちこそ侍れおん碇

第一の句は即事です。第二の句「父母の知らぬ婦を従へて郷にかへりて」といふやうな前書きが私の心にあるのです。それから私は打たない碇を聞いてみたくなつたのでせう。終りの三句は太地村といふこの隣の漁村のことを思ふ浮べたのです。和田義盛の一族が落ちて來たといふのです。私は書きつづけてゐたが種切れになつて、讀みかへすとみんなつまらなかつたので、みんな消してしまつたのです。さうし



て、ふと気がついて私は無用な事をしながら二十分ほど別に何も考へてゐなかつた自分を知つたのです。——幸福？ 私にはもしかや自分がうつろになつてゐたその間に幸福があつたのではなかつたらうか。

階段を昇つて来る足音がして、ふりかへつてみると、そこに妻が來つた。

「もう九時よ。お隣りの時計が打つたのがさうらしいから、みんなおしまひにしたの。お姉さんやつぱり苦になると見えて、時計を動かしてみてみたわ」

「うん」私はさう答へて「——どうも小説は駄目だぜ」

私が机の前にあると、彼女がきつと小説を書き出したかと聞くので、私は豫防したのです。

「どうして？ 困るわね」

「……………」

發句などをよむやうな氣持ちや、小説は成立たないといふことを説明しようと思つたが私は面倒だからやめにしたのです。

おやすみなさい。

私たちももう休みます — Unseen as we lie in our hay-bulk home.

### 秋立の

そこでつかまつた頬白はだん／＼籠に慣れて、しかしすつかりトヤにかかつてもう鳴かなくなつてしまつたのです。それもさうでせう。夏も今はをほりて、朝夕は秋でした。わたしはうか／＼とその宿で三月ほど暮してしまつたのです。

そこと言ふのは、利根川べりの小さな町で、手賀沼の水路が利根川と合する水門のあるところ。汽車もあります。汽車が出來てから反つて町はさびれたと言ひます。もと水だけがこの邊の路だつた頃には、この町もいくらか活氣があつたものさうです。何といふのでせう、水驛とでもいふのですかね。でもその頃の名残りも、今でもその邊ではやつぱりちよつとした町なのです。

わたしのゐた宿屋といふのはうらが直ぐ、その手賀沼の水路になつてゐて、その向ふに利根川の土堤が見えるのです。

川は見えませんが、土堤のかげになつてゐるので。しかし水路の水が宿のうらのあたりで入江のやうになり、あたりの低い土地も水でも出れば一面につかるのでせう。沼地のやう

に濕つぽい草なども生えて、水の趣はあるのです。そこへ、宿の隣りの家では、家鴨を飼つて置くのです。そいつが、晝間はいつも浮いてゐました。

隣と言つても田舎ですから、ちよつとした廣さの草原をへだてて、その向ふに桑などの畑があつて、そこに家があるんです。

この隣家は若い夫婦の家で、百姓家でもなく、亭主は何か外の仕事でもしてゐるらしいので、別に有福でもなさうだが、と言つて貧乏でもない程度に暮らしてゐるらしく、暢氣さうな家でした。さう亭主は二十三四、女房はまだ十八かそこらでせうな。それが夕方になると、裏の畑へ出て來ては、夫婦してそれはすばらしく仲よく、副業的に畑仕事をするんです。このうちでは三日上げず畑の隅へふとんをほすんですが、どういふわけか、それが眞赤な奴なのです。いや赤ん坊のぢやない。大きなふとんですよ。それがどうも夏中目に立つたものです。



家鴨を飼つてゐるのもこの家なのです。

若夫婦の外にお婆さんがひとりであつて亭主のお母さんでせうか。よくある奴で、長男より末子が可愛くつて分家へ来てゐるのぢやないか、とわたしはそんなことを考へながらよくこのお婆さんを見てゐましたが、もう七十に近いでせう。すつかり白髪で、しかし丈夫なもので、家鴨はそのお婆さんが飼つてゐるのです。

多分家の床下にも、夜は入れて置くのでせう。さうして朝になると、例の入江になつた水路の方へ放してやるらしいのです。朝は、何しろ、早いのであまり見たことはありませんが、夕方になるとお婆さんは毎日、夕焼雲の下で、  
「あひくくくく」

と言つて、家鴨を呼んでゐました。呼ばれると、家鴨はぞろ／＼と水の中から出て来て、桑畑の上の方へさつさと歩いて来るんです。

十五六羽もゐたでせう。

庭さきの木へ頼白を掛けて置くときよく鳴きました。退屈すると土堤の方へ出て見るのです。

宿に犬が一匹ゐましてね、それがいつともなく次第にわたしに懐いて来て、わたしが出ると従いて来るのです。

そんな事をしながらそこで遊んでゐるうちに、わたしはひに濟まんといふので注進をするのです。一種のやきもちなの  
でせう。さうわかつて見てゐると、酒屋のおやぢは、よく太つた赤ら顔の男だつたが、我々が妾の家へ這入るのをぢつと見てゐて、その後姿が見えなくなると、すぐ電話をかけたのです。店さきにある電話だから、こつちでのぞいてゐると町を越えてそれが見通しなのです。そら、今に來るぞと思つてゐると、案の定、頭の禿げた旦那が自轉車でやつて來るんです。リリンと表で一つベルを鳴らしてからね。それから我々の顔を見ても別に慍るわけにも行かず、愛想笑ひだけにして別の部屋へ行くのです。さうして妾を呼ぶと女はそつちの部屋へ行きはするが、こちらではまた旦那が歸れがしにするものだからわざと氣がつかぬふりをしてゐる。女は女で、我我を放つて置くわけにも行かないので、またぢきに我々の部屋へ來るのです。

氣の柔かな、なか／＼浮氣らしい女でした。

二十二だと言つてゐました。

欲しがるものだから、わたしは頼白もその女のところへ持つて行つてやりましたよ。

そんなことを面白がつて一月ほどするうちに、さあ、みんなの氣持が妙にこぢれて來たのです。

わたしと同宿の仲間とは、旦那に對しては同盟してゐるけ

とりの女と知り合ひになりました。女は時をり宿へ、私のところへではない、宿の家へ來たのですね、初めは。

以前そこで女中か何かしてゐた女で、女中と言つても、何と言ひますか、まあ商賣人なんですね。美人でしたよ。郡長から警察署長から、何でもそこら中の連中がみんな來てはこの女のところへ宿つたさうですがね。それが今は、この町の米屋の妾になつてゐるんです。それでもその關係があるんで時をり宿屋へは立寄るのです。そんなことで自然と私も口ぐらゐは利き合ふやうになつたのです。遊びに來いと言つてすすめるから、え、出かけて行きましたよ。退屈な折からではあるし。尤もわたしひとりではありませんよ、同じ宿に同じやうな連中がもうひとりゐたのだから、こつちはいつもふたり連れでした。

妾の旦那といふのは町の穀間屋でした。頭の禿げた男で見ると四十ぐらいだが、實際は三十四五ださうで、頭こそ禿げてゐたがよい男ぶりでした。それがどうも我々若い男が妾のところへ出かけるのが氣に入らないらしいのです。で、我々が行きさへすればどこかで見張りでもしてゐたやうに大てい十分とは經たないうちに番をしに來るのです。聞けば、妾の家の向側の酒屋といふのが、女にこの旦那を世話した男ださうで、我々が出入りするのを見ると間違ひでもあつては旦那

れども、ふたりではどうも仲間われの形にもなつてしまつたのです。互に牽制し合つてゐる形になつて來たのです。  
旦那はまた旦那で、ただ若い男たちが出入りをするぐらゐをとやかくいふのは野暮だと思ひながらも、氣に入らないものだから何か言ひがかりをしては妾を怒りちらすんです。すると女は泣いて來ては我々に訴へるといふやうなわけで、そいつが正直なところ我々には面白いのです。楽しいのです。女もわけを言つて我々の訪問をことわらないところを見る

とやつぱり泣きながら何か面白かつたのでせう。

「歸つて貰へばいぢやないか」

「きげんよく遊びに來てくれるものをわたしそんなすげないことは言へませんわよ」

そんなことを言つてゐるのが聞えたこともありました。その晩もやつぱりちよつとしたさういふ場面があつたのです。我々は次の間で聞いてゐると女は旦那に叱り飛ばされてゐる。女は泣きながら我々のゐるところへ來て、もうそれからは旦那がいくら呼んでも次の部屋へは行かない。旦那も敢て我々のゐる部屋まで來ようともしない。——あんまり氣まづくなつて我々もたうとう歸つては來たが、我々もそれ／＼に悒鬱な顔つきになつてゐました。

「わけがあるんですわ。ゆつくり聞いて下さいね、きつと……」



別れぎわに女は小聲でそんなことを言つて我々を送り出した。彼女の聲がわたしの耳に近かつたので、わたしにはそれをわたしにだけ言つたものゝやうに聞えた。

その晩の旦那の劍幕といふものは襖越しながらどうも一とほりのものぢやなかつた。今ごろはまだ何かもう一もめやつてゐるだらう……。

そんなことを考へつづけながら、わたしは自分の部屋で寝てゐました。

痴話喧嘩がひどくなつて、女は今にも我々のところへ逃げて来るのぢやないか、とそんなふうにも思へた。もし我々のところへ来るとなれば同じこの宿でも、もうひとり男ではなく自分のところへ来るに違ひないと、わたしは思ひました。いろ／＼外の點でさう思へることはさておいても、第一わたしのこの部屋は、夜更けてたづねて来るのに都合がよかつたのです。離れ座敷ではあり、裏木戸はすぐだし……

そんなことを思ひつづけながら、わたしは枕元の時計を見ると、まだ十時にもなつてはゐませんでした。田舎のことで夜は早くからひつそりする上に、もうよほど夜が長くなりかかつてゐたころです。

きのふまではあまり氣にもとめなかつたが、隣の彗畑やそこらの草原や、さては宿の庭などで、蟲がいろ／＼に鳴いてゐるのです。

犬はかたごとと起きて出て行つたらしいのです。しかもやつぱり吠えようとはしないのです。さうして草を踏み折つて近づく足音は、すぐ近くにまとまつたのです。

私の胸はへんに鳴りました。

「もし／＼」

わたしの部屋を呼ぶのです。忍んでゐるせいか、聲がいつもとは少し違ふ。

「もし／＼」

もう一度、彼女は呼んだ。

「あ」

わたしはそれだけ答へると元氣よく起きました。わたしは今度はなるべく音のないやうに戸をあけ出した。

一面の月あかりでした。水にも白々と反射して、そのなかに立つてゐるのは？ 何と。思ひがけない隣のお婆さんでした。束ねた白髪が第一に目に立つて、月の出をまともに見えなかつた顔は、はつきりと生眞面目なものに見えました。

「……………」

何か言つたけれども、わたしにはわかりませんでした。

「は？」

「もしや、おうちの方へおらがあひが来ちや居りませんでしたかね」

「あひ？ 家鴨ですか？」

そんなことを書いた人があつたのが思ひ浮びました。灯を消すとさつき泣いてゐた女の顔などがくつきりと目にうかぶのでした。

その時、今まで鳴いてゐた蟲の聲が急にやまつて、短く二言ほど、犬が吠えたのです。犬はいつものとほり、わたしの部屋の縁の下に寝てゐました。

わたしは、

「おや、来たな」

と思ひました。

耳をすますと、茂つた草のなかを人の足音がする。静かなけはひです。足もとが露に濡れてゐるお鶴（その女の名です）の様子が見えるやうな氣がしました。またわたしは考へたのです、これももし外の誰かだつたら、よく吠えるこの犬はもつと猛らないではゐない筈だ。さう犬に注意すると、犬はその房々とした尻尾で縁のうら板と同時に地面を掃いてゐる音がするのです。尾をふつてゐるのです。

「やつぱりさうだ。来た」

わたしは心のなかで呼びながら、直ぐにも戸を開けようかと思つたが、わざと黙つてゐる。

間の抜けたわたしを、お婆さんは、深い眠りから今さめて寢呆けてゐると思つたのかも知れません。

「はい。おらが家鴨ですがねえ。夜中ですみませんが。夕方から一羽足りましねえでね。捜してゐるうちに暗くなつたし、夜ぢやわからんからまた明日の朝と思ひましたが、寢て見るとどうも氣になるので、また起きて来てみたのですがね。——もしやここらへ来ちや居りましねえかね」

さういふお婆さんの足元に立つて、わたしとお婆さんともども見ながら、白い犬が月の光のなかでちぎれるほど尾をふつてゐました。

さう言へば、何だかその夕方、お婆さんはいつもよりも長い間、

「あひ／＼／＼／＼／＼」

さう呼びつづけつてゐたやうでしたつけ。

女ですか。

お鶴がまた面白いのです、みんなをそんなに騒がせて置いて、その最中にひよつくりひとりどこかへ突走つてしまつたのです。

……………

犬はかたごとと起きて出て行つたらしいのです。しかもやつぱり吠えようとはしないのです。さうして草を踏み折つて近づく足音は、すぐ近くにまとまつたのです。

私の胸はへんに鳴りました。

「もし／＼」

わたしの部屋を呼ぶのです。忍んでゐるせいか、聲がいつもとは少し違ふ。

「もし／＼」

もう一度、彼女は呼んだ。

「あ」

わたしはそれだけ答へると元氣よく起きました。わたしは今度はなるべく音のないやうに戸をあけ出した。

一面の月あかりでした。水にも白々と反射して、そのなかに立つてゐるのは？ 何と。思ひがけない隣のお婆さんでした。束ねた白髪が第一に目に立つて、月の出をまともに見えなかつた顔は、はつきりと生眞面目なものに見えました。

「……………」

何か言つたけれども、わたしにはわかりませんでした。

「は？」

「もしや、おうちの方へおらがあひが来ちや居りませんでしたかね」

「あひ？ 家鴨ですか？」



# 旅 び と

「いらつしやいまし、さぞお暑うございましたせう。——さきほどからお待ち申し上げて居りました。それでも大へんお早くお着きで……」

——と、かうその女が言つたと云へば、君たちは愛想のいい宿屋の女中がお世辭を言つたと思ふでせう。それに違ひないので。ただ、それだけの言葉がしんみりとした味に受け取れたと思ひたまへ。

いい女かいつて？

いづれ殖民地の宿屋の女中だらうつて？

さう何もかも、一ぺんぢや返答に困る。一つ、ゆつくりと話す。——だが、斷つておきますがね、何でもない事なので

## 二

景色を言はねと風情が深い。なに、もつたたいぶるのぢやな

れ、しかも各地のことは一つもしつかりとは書いてゐない。その筈、通信機關は全部駄目になつてしまつた。何でも新聞のいふことを眞にうけると本島三十年來とかで、いかにもこは本家の石垣島とは隣つき合ひをしてゐるのだから、土人の家などは、根が土をかためて乾し固めたのをつみ重ねてあつただけの事だつたものだから、その日の雨と風とで家は溶けて流れて、残つた部分は飛んでしまつたといふ始末だつた。無理もない、あの風では、家どころか、島全體だつて一尺や三尺ぐらゐなら東の方——西風だつたが——東の方へにじり寄つたらうとも思へる。いつも威張り返つてゐる人間といふ奴が、穴ごもりした蟲ほどにも元氣がなくなつて、その日はうす暗い家々のなかで、ろくに口を利かずに怯えてゐた。——私は放れ島にゐる意識で郷愁をつのらせながらすくみ込んでゐた。

阿里山へ私が登りそこねたのもその大風のおかげだつたが、といふのは、雲棧も唯ならずとか何とか言つてゐるその登山鐵道が木の葉のやうにこなごなに飛んでしまつたのだ。だから二八水を下りた時にも案じたのだが、果してこの鐵路も駄目だつた——ほんの一時間かそこらの道のりを走るだけの道はあるさうだが、あとは水嵩の増した濁水溪の濁水が、山くづれをさせて、おもちゃの鐵道などは、ところどころにだけあるとの話だつた。——汽車の動くところだけ、

## い。

二八水といふ——化粧品にまがひさうな名の驛で本線を下りた。朝の九時すぎだつた。支線といふのが例のおもちやのやうな箱の汽車なのだが、それが通じてゐさへすれや、それでも有難いことには、その日の夕刻には、思ふところへ着けるものを、それが駄目だつた。——あの太風で、——君たちは石垣島といふ名を御承知か知ら。もし御承知なら、それやきつといつても颱風の中心地として覺えてゐられるに違ひないのだが、まつたく石垣島といふのは風の寄合場所として出来てゐる島ぢやないかと思へる位、その石垣島を目がけて、二十四時といふものひつきりなしに押寄せた太風があつたのはすこし吹きすぎるだらうが、全くは日本中の風が、ありつたけ、いくら風だつてよくもかうあつたものだと思へるほど、それがまたありつたけの雲を背負ひ込んで飛んで來た。でも、次の日にはけろりと晴れ渡つてくれたらよかつたもの。次の日の新聞は風情を傳へるために三篇一頁もあつたもの

それも途中で一個所徒歩連絡をして……道中記を言つてゐると永くなる。ともかくも、普通なら日のうちに行けるところを、なか一日泊らなけやならない事になつた。

泊つたところは集々街と言つた。——話題の女は、まだ出て來ない。それは集々街の宿ではない。日月潭のほとりである。

## 三

その道中のすがたを、私は君たちに見せたい。集々街から日月潭のあるところまでの私の道中、いや、何とかいふところまで二八水からの小さな汽車を捨ててから、集々街までの姿でもいい。あの時の私の姿を見れば君たちはきつと私に對する態度が改まるだらうよ。

名も知らない寒驛に私は下車した。下りたくはないのだが、もうこれより先へは連れて行つてくれないからである。私は少し途方にくれて、それでも、今のさつき汽車のなかで、私を日月潭へ見物にゆく内地からの旅人だと認めて親切にいろいろの注意を與へてくれた人があつたから、その人の言葉どほりに行けば、どうやら迎り着きはするだらうとは思つてゐた。行き着きさへすればあとは心當にしてゐる案内もある筈なのである。それにしても見も知らない山坂を私はどうして越えるだらう——。ともかくもと、寒驛のプラットフォーム



ムを出る。と、——私が君たちに見せたいといふのはここから先のことなのだ、改札口のところ、ひとり若い紳士がゐた。——思ひがけなくも私を出迎へに來てゐてくれたのである。

これを手始めにして、私は、この王土の果の山の中で、三日間ほどといふものは貴賓のやうなもてなしを受けることになつた。

寛大で好奇的な要路の顯官が、公文で命令を出したのだ。

——私をせいぜい歡待してやれ！と言つて。思ひ屈してこの南方の岸までうろつきに來た私は、文學者といふ資格で待遇されてゐる。半ばは氣紛れのやうに發せられた長官の命令を受取つて、人々は、文學者といふものはどんなものか知らないが、何しろ長官の命令だとあつて見れば、氣の毒に、私がどんな小僧でも私を篤くもてなさなければならぬものと決めてゐるらしい。

先づ人は、私にはとつて、置きの上等の言葉を使つてくれる。臺車とはいふと、特別に椅子のついた日覆のあるのが用意してある。——いかに貴賓でもここは山の中だから、内地では、土を運ぶのと同じトロッコへ、しかし今もいふとほり椅子が特別に作りつけになつて、乳母車のものやうに飾のある日覆のついたトロッコへ私を乗せてくれる。その臺車が熱い風を切つて滑走してゐると、行く手の方から、もう

のだが私は折角の事をもう一つも覺えてはゐない。——たつた一つ、一年もかかつたやうな工事が、この間のやうな大風雨にでも會はるものなら一晩でめちやになるのだから十年の計畫が年期が過ぎた今日でも思はしい成績を上げられないのは無理ではないとこぼしてゐたことである。

寝る仕度をしてゐると、

「どうぞ御ゆつくりお休み下さいませ。明朝は適當なころに私がお目をおさましに参ります」

そんなことを言つて、さつきから時々この部屋へ出入りする或る人が、障子のそばへ坐つて鄭重に御辭儀をしてくれる。そんな人々といふのがみんな、私よりは十も十五も年長の人なのだから、かう見えたつて根は正直に出來てゐる私だから、甚だ參る。

朝、目があいて見ると、廊下の外から聲がする。

「お目ざめでございますか。まだ早う御座います。どうぞこゆるりと御仕度下さいませ」

私が起きるにはひのするのを、そこで今まで番をしてゐてくれたのかと疑はれる程である。

駕籠の用意がしてくれてあるといふ。——いつもなら臺車が通るのだが、例の風で鐵路はこれからさき碎けてしまつてゐるのだ。駕籠の話は昨夜、たかが四里か五里ぐらゐならたとひどんな山道でも歩けるといふと、そんなことを仰言つて

一臺別のこれは日覆も何もない平民の臺車がすれ違ふ。向うの臺車から聲をかけて、二つの臺車は互に半町も行き過ぎたところで止つた。止つたところで氣がついてみると、向うから來たこの臺車といふのがやつぱり私を出迎へに來たのである。私を迎へるのにはひとりでは足りないものと見える。しかも今度の「お出迎」はお出迎自身が家來をつれてゐるほどの人である。

かうして私は、特別仕立の臺車で、別に一臺分のお出迎へを従へて、悠々と集々街へ着いたのである。集々街へ着いて見ると、ちやんと宿屋を用意してくれてある。お出迎の人々は改めてもう一度慇懃に挨拶をして、小さい村だからこれよりいい宿屋のないことやら、まだ三時だがこれから先へ行つてみてももう泊るところのないことやら、その外は忘れてしまつたやうな言葉をどつさり、それも代り代りに立ち代り入れ代り言ひに來てくれる。何でも私は、ここで名刺を半ダースは貰つただらうと思ふ。——これはみんな日月潭を水源地にする大仕掛な電力會社の創立事務に従事してゐる人々である。この會社は半官半民の事業なので、顯官の命令はこの會社へ發せられたものと思はれる。夜になると若い工夫に大きな地圖を持たせて、ひとりの紳士が、これはまた晝間とは別の人だつたと見えて、その證據にはまた名刺を一枚くれてから、さて會社の事業といふのを詳しく説明をしてくれた。

私は私どもが困るといつた。何が困るのだから、ともかくも私を是非とも駕籠へ乗せるつもりにしてゐるらしい。その駕籠は、今朝になつての話では、普通の輿といふのは無いから、——あるにはあるのだが、それでは山道が自由に通れないから、椅子駕籠といふので我慢をしてくれないか。日覆も何もないのだが、その代りに風は通る。どんな山道でもこれなら自由に行けるといふ。私はもとより我慢するもしないもないが、どんな駕籠だか物好きに尋ねてみようと思つたが、乗ればわかることだから問はなかつた。さてその駕籠が來たといふ知らせと一緒に、今度は通る道のこと就て「お願ひ」に來る。一たい道は二筋ある。一つは新道でいい道だけれども二里からまはりになる。一つは舊道で山坂だけれども近い。それに朝のうちには西の坂を登つて、午後からは東西の坂を下ることになる。それで道はいつも日かげで涼しい。駕籠かきどもは舊道を行きたがつてゐるけれども急な坂道だけにきつと少しは「お乗心地」が悪いに違ひない。尤もどんな坂だつて決して下りてお運を願ふなどといふことは決してない。駕籠かきどもの勝手をお許し下さるだらうかといふのである。で私は「許し」てやつたね。その宿料はいくらだつたか知らない。私の氣づかないうちに誰かが拂つてあつたからだ。



宿を出たのは七時だった。だが山かげの集々の街は朝霧のなかだった。街の人々はみんな私を見た。立ち留つて見た。ふりかへつて見た。

四

どんなえらい御役人が通るかと思つたに違ひない。——實際、どなたが風水害の視察をなさるのだ、と尋ねた人があつたといふことである。

あたりまへだ。私はふたりの輿丁の外に五人以上のお供を、私の駕籠のあとさきへ従へてゐる。私ひとり駕籠の上に乗せてゐる。唯、えらいお役人にしては、貧弱なのは私のお人柄と風態だった。瘦せ細つた青二才だ。白いヘルメットは安ものの、ボール紙が心だから廟のところぐにやぐやになつてしまつてゐる。ボンジイの上衣は長旅でへたばつて、汗染みだ。形容ではない、事實、背中のあたりは汗が染み込んで色が變つてゐる。それだからこそ人々は一さう私を見るのだらう。さういふ男が何だつてあんな物々しい行列をつつてゐるのだらうと。

そんなことより、この椅子駕籠とやらの乗り心地が甚だ不安である。尤も道の十町も往くうちには自づと慣れては来た。つまり體を投げ出して、あなた任せ、揺られてゐさへすればよかつたのだ。で、その椅子駕籠といふのは、つまりはつてゐる。目にふれる山の峯でも草でも樹でも、問ひさへすれば答へてくれる。聞けばもう二十年もこの島に住んださうである。——四十八だとか言つたが、話の好きな人だった。私はこの日にもまたこの次の日にもこの人の道案内を受けた。そのうちにすつかり心やすくなつた。息子が今年中學を出て、入學試験を受けに東京へ出てゐる。月に五十圓の學費で不足を言つてくる。我我のやうな暮し向きではなかなか樂ぢやない、とそんな打解けた話までする。——いつの間にか、この人は私をえらい人あつかひせず、たゞの道づれのやうな氣持になつてくれたのだ。この人には、私は更に因縁があつてめぐり合つた。といふのはこの後一ヶ月も経つてから、私はこの島から内地へ歸らうと港で、船の上にその出帆を待つてゐた時である。私はデッキの上で、別れようとする街の方を眺めたり、慌しく船の上をあちこちする人々を見たりして、ぼんやりしてゐると、そのデッキの上の群集のなかに見覚えのあるやうな人だと思つて注目したのがこの人だった。向うでも覚えてゐた。日月潭の案内の御禮を述べてから、どうして船にゐるのだと尋ねたら、「家内の母親が亡くなつたものですから、内地へ行く家内を送つて來たのです」と言つてゐた。

五

さてその舊道の山道だが、道は益々險しくなつて來た。こ

藤椅子の足のない奴だった。兩脇の肘かけの下を各一本づつ棒が前後に貫いてゐる。そいつをふたりの輿丁がかつぐのだ。頭は、椅子の背の上に枕の用意がある。足は、緒でつるした一枚の板つびれの上に委ねて置く。

山崩れの上を通る。川原へ出た。新高山が川の向うに、琴柱のやうに並んだ峯々のなかに見えるさうだ。あそこに——と指さして——二つ並んでゐるのがさうだ。低く見える方が本當は主峯だといふ。目に見えて晴れて行く雲烟のなかにあつた。ごく近い峯には、見ただけで汗の出るやうな朝日がかつと照りつけてゐる。

山小屋があつて、電力會社の第×區とかの事務所だ。

そこで私のお供は變つた。次の工區の監督だと名告つて、また例の名刺を捧げてくれた。それから、だんだん坂道になつて來た。

道はどんどん、どんどん高いところへ登つて行く。迂迴してまた高いところを擇つて登る。

「むかしの道だからでございます」

と、新らしい案内役が説明してくれた。むかしの道だから

無理に高いところへ登るのはへんだと思つてゐるうちに、更に説明してくれた。むかしまだここらが蕃地であつたころ、蕃人の襲撃に備へるために展望の利く場所ばかり擇んで歩いたのだといふ。この今度の案内役は、いふに、この用意にもう一人別について來た輿丁が、疲れた相手と代る。二三五度五に代つた。といつて、これほどの坂道ならば、私にだつて歩けない事はない。現に私は四五ヶ月前に、自分の故郷のこれ以上の山道を或る花嫁について越えたくらんだ。——人の花嫁だが……あれが自分のだつたらどうだらう。父の親友の娘で、世間ぢや私の婚約者だと思つてゐたらしい。私が父母の思ひどほりに何もかも運んでゐたらひよつとしてあの花嫁が自分の花嫁であつたかも知れない。それが、これよりもひどい山道を越えて脚絆がけでお嫁入りをした。私は父の代理をして親戚の格でついで行つた。

——悪くない花嫁だつたが……

私は途方もない山の中で、道のことから聯想して、あらぬ女のことを、駕籠に揺られながら、激しく揺られながら、思ひ出した。

誤解してはいけない。その女を私は別に好いてゐるわけではないのだ。——私には別に大へん好いてゐるひとがゐる。それから大へん好かない女房がゐた。今だから言ふが、さういふことで思ひ屈して私は臺灣三界へ放浪しに出たのである。

考へるほどなら、もつと考へてよい女が好きと嫌ひとからも二人まであるのに、何だつてあらぬ人の花嫁などを考へてみたかといふと、今の自分の立場に困惑したあまり、私はふ



と世間の人が豫想したとほり、あの女が私の花嫁になつてゐたとしたら、私の世界は今どう變つてゐたらうかと、當面の人生を曲避するやうなたはけた空想をしてゐたまでのことであつた。——ここでも憂き世のなかと思へるやうなこんな深山の頂が近づくあたりで。

六

絶頂が土地公鞍嶺であつた。——物知りの道案内が教へてくれた。海拔二千五百尺だといふ。

道案内が指をさして言ふ

「あちらからののが、陳有蘭溪。こちらからののが、濁水溪。それからふりかへつて、梢にかくれて見えないがあのあたりが目ざす日月潭。ここにある小さな社が土地公廟——むかし、蠻人を追つばらつて通行が自由になつた記念に建てたものであらうといふ。——私たちが来たのは乾隆の初年に初めて開けた小徑を辿つたわけである。流石の物知りも教へてくれなかつたが、私は後に書物で見た。乾隆初年と言へば今からどれくらゐ前だかは知らないが、トロッコで一氣に行くよりは、名所を見るためには古徑を駕籠で越えた方が、今思ひ出して好かつたと思ふ。——その廟のそばで辨當を開いた。「お供」のうちのひとり背負つてゐた。別のひとりは一升瓶にお茶を用意してゐる。

七

それほど骨を折つて登りながら、下る坂といつては殆んどなかつた。さびれたセピア色をした土民の部落が一つ。ひっそりとして、通り過ぎる時たつた一軒の家のなかから、それもその前に私の駕籠が一休みしたのだから、その家の狭い戸口から嬰兒を抱いた支那服の女と、同じ身なりの婆さんとそれから猫とがものも言はずに、ちつと鈍さうな目つきで見送つたきり、雞犬の聲一つしなかつた。急な坂とてはないけれども、目に見えぬほどの傾斜で下りて行つてゐると見える。坦々とした赤土の、曲折もあまりない道に、輿丁の足もとから、塵が立つ。ゆうべは遅く眠つたし、今朝は早かつたから、かうして揺られてゐると、うつらうつらして来る。いつの間にか、目あての湖水が近くなつたしるしに、道のまはりにもところどころに泥つぽい水たまりが、饅えたやうなほりがする——草いきれと一緒に。その水たまりが段々、大きなものになつて来て、やがて代色をした水が現れた。——水のなかに、何かそんな色をしたバクテリアが住んでゐるからさうである。この赤い色の水が日潭であつた。汀に沿うて思切つて大きく迂廻して道は、木かげになつた日潭のつづきに、蘆荻の間から、月潭の水はいぶし銀だ。——山上の湖水を聞いて、碧くつて鏡のやうなと思つたのはう

た。監督が腰をさぐつて持つて来た水呑みを、きれいに濯いで先づ私にすゝめてくれた。輿丁どもは流れる玉の汗を拭ひながら、それでも胸一つはだけずに木かげの隅に小さくなつてゐる。——これは土着の人——支那人である。むかし孔子を産んだ國民のわかれだけあつて、雪助とは思へないほど禮儀が正しい。巻煙草を取り出したかと思ふと、つかつかと私のそばへ歩み寄つた。

「大人」

さう呼びかけて、敷島の袋を私に捧げる。自分で吸ひたいと思へば先づ長者にすすめて見るのが彼等のならひなのである。

「多謝。我有了」

そこで彼は再び恭しく一揖して、隅の方へ行つて自分で吸ふ。

その様子は、しんから大人を尊敬してゐるのか型だけかは知らないが、卑屈に見えるほどにまで汲々如としてゐる。私が假りにぐつと胸をつき出して胸のポケットを示し、それから私の額を差し出して、

「拭け！」

といふ手眞似にしても、彼等はてんで不思議とも不合理とも思はずに、私のハンケチを出して私の額の汗を拭ふかも知れたものぢやない。

そだつた。

ただ見る、沼。大沼——水の荒野ではないか。この間の嵐に、連銭の荷葉はもぢやもぢやに掻き亂された。が、佗びしさはそんなふとしたことの爲めではない。水そのものが重たく沈澱して、色さへも、明るい空を反映してさへもどんよりと物憂い。その投げやりな物憂さが、しかし明澄な水よりもなかなか哀れである。好しと思ふ。卓抜な文人畫風の繪卷は氣韻を帯びてぢぢむさい。心細さが、しかし人の心を救ふ心細さだ。

岸べに近い水の上に、結び浮べた竹筏に草屋を構へた漁夫は、のつそりと小屋のなかから出て来て静に大きな罾を上げたが何もなかつたと見えてそのまま静に網を下した。神祕めいた悠長で空を一目仰いだが漁夫は黙々としてまた再び小屋へかくれた。稍遠くのことだから小さな姿ばかりで物音もひびかない。——水の面がけだる。さらに動いただけだ。

湖齡はもう一萬五千年以上だ。あと二千年もすれば自づと死滅するだらう——さう地理學者はこの湖水を相したとい

日月潭は、確に、老病孤愁の相貌を持つてゐる。この水を、一たい人間がどうしようといふのだ。